

P3土層解説

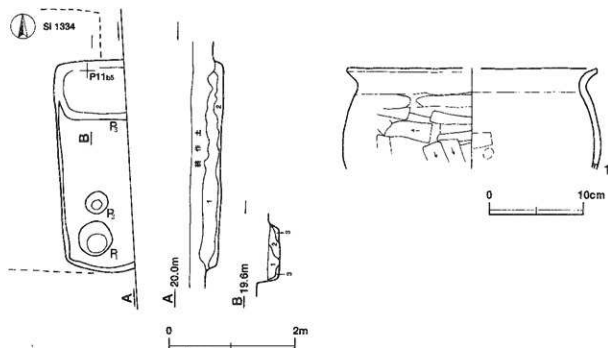
- 1 暗褐色 コームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量  
 2 暗褐色 コームブロック中量、炭化粒子少量

覆土 2層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 コーム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量  
 2 暗褐色 コーム粒子・焼土ブロック少量

遺物出土状況 土師器片3点(埴1, 埴2)が出土している。第142図1はP1の覆土中から出土している。所見 本跡は出土土器が少ないため埴居時期を明確にし得ないが、須恵器の出土が見られないことや出土した埴の形状から10世紀代と考えられる。



第142図 第1339号住居跡・出土遺物実測図

第1339号住居跡出土遺物観察表(第142図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	埴	[264]	(105)	-	玄母・灰石・石英	灰黄褐色	普通	細頸・口縁・底縁・ヘリ・内底	P1覆土中	P10421, 10%

第1341号住居跡(第143図)

位置 調査区西部のP11a4区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 北西コーナー一部を第1289号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東側部分が調査区域外に延びているため、南北軸は2.87mで、東西軸は2.55mだけが確認され、平面形は方形または長方形と推定される。主軸方向は東嚙を想定するとN-84°-Eであり、壁高は15cmで、壁は外方向に開き気味に立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められており、壁溝が周囲している。

竈 北壁際の床面から竈材の流出が見られないことから、東壁側に竈が構築されていたと推定される。

覆土 4層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

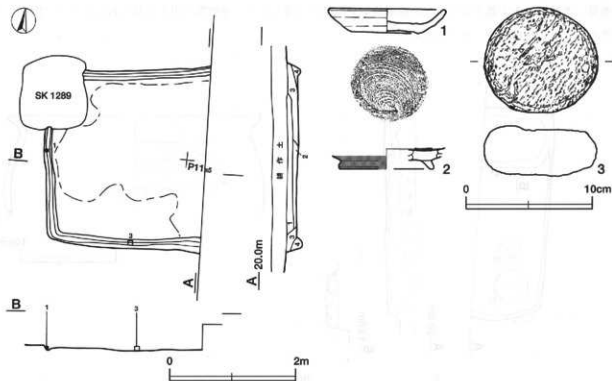
土層解説

- 1 雑褐色 コーム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量  
 2 黒褐色 コーム粒子・焼土粒子少量

- 3 暗褐色 コーム粒子中量、炭化粒子少量  
 4 暗褐色 コーム粒子中量、炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片6点(碗4, 小皿1, 壺1), 軽石1点が出土している。第143図1・3はいずれも完形で, 1は西壁際の壁溝内, 3は南壁際の壁溝内からそれぞれ出土している。

所見 本跡は東側部分が調査区域外に延びているため, 全体の形状を把握することはできなかったが, 壁溝内から良好な資料が出土している。本跡の時期はそれらの土器の形状から10世紀後半と考えられる。



第143図 第1341号住居跡・出土遺物実測図

第1341号住居跡出土遺物観察表(第143図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	小皿	9.0	2.9	5.7	灰石・赤色粒子	浅黄橙	普通	体部ロケ成形, 底面刷毛付	西壁際壁溝内	P10422, 100%, PL55
2	土師器	高台付碗	-	(1.6)	[7.2]	赤色粒子	にぶい褐	普通	底面滑り付, 胎土中にナ	覆土中	P10423, 5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3	磨石	8.4	9.0	3.9	185.7	軽石	表面摩滅, 中央部がわずかにくぼむ。	南壁際壁溝内	Q10015, 100%

第1344号住居跡(第144図)

位置 調査区西部のO11j3区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 南側部分を第1345号住居跡, 南東コーナー部を第1238号土坑, 東側部分を1248号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 床面が露出した状態で検出されたため, 壁の立ち上がりは不明であり, 平面形状は長軸3.24m, 短軸2.80mの長方形で, 主軸方向はN-102°-Eである。

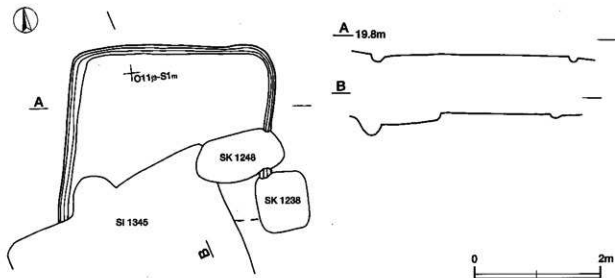
床 ほぼ平坦で, 壁溝が周回している。硬化面は確認されなかった。

竈 検出されていない。

覆土 検出されていない。

遺物出土状況 土師器片5点(壺5), 須恵器片2点(壺2)が出土しており, いずれも胴部片である。

所見 本跡から出土した土器はいずれも平安時代の所産と考えられ, 時期は重複関係と併せて9世紀代と考えられる。



第144図 第1344号住居跡実測図

#### 第1345号住居跡 (第145~147図)

位置 調査区西部のP11a2区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 北側部分で第1344号住居跡を掘り込み, 南側部分を第1338号住居跡, 北東コーナー部を第1248号土坑, 南西コーナー部を第1237号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.62m, 短軸3.08mの東西に長い長方形で, 主軸方向はN-16°-Wである。壁高は2~10cmで, 各壁ともわずかに外傾している。

床 中央部がよく踏み固められており, 壁際に比して中央部が若干低くなっている。また, 壁溝は西壁際から南壁際にかけて認められる。

竈 北壁の中央部に付設されており, 焚口部から煙道部まで85cm, 両袖部幅105cmで, 壁外への掘り込みは40cmである。袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されており, 火床面は浅い皿状に掘り窪められ, 火熱を受けて赤変硬化している。また, 煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

#### 竈土層解説

- |                               |                                  |
|-------------------------------|----------------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量 | 4 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量        |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量 | 5 にぶい赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化物少量  | 6 極暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量      |

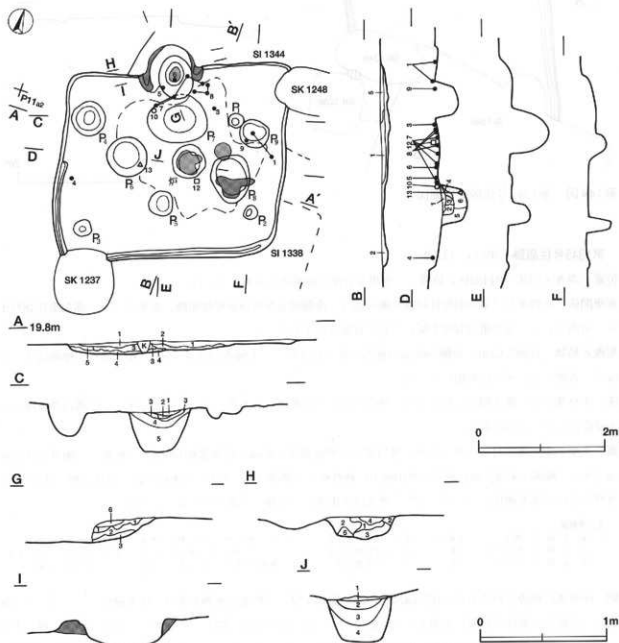
炉 中央部に付設されており, 径50cmほどの浅い皿状を呈し, 炉床は火熱を受けて赤変硬化している。この施設は, 付近から銅滓や坩堝片が出土していることから見て銅の鑄造に関わる炉と考えられる。炉床の掘り方調査では, 床面から40cmほど円筒状に掘り込まれた部分にローム土を主体とした暗褐色土や黒褐色土を埋め戻して炉床を構築していることが確認された。土層断面図中の第2~4層が埋め戻した部分の土層であり, 第2層の上面が赤変硬化している。また, 炉の東側の床面からも赤変した部分が検出されており, 補助的な炉と考え

られる。

炉土層解説

- |                                |                            |
|--------------------------------|----------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量   | 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物少量 |
| 2 暗赤褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量 | 4 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量     |

ピット 9か所。主柱穴はP1~4が相当し、深さは25~43cmである。P5は竈と対峙しており、出入り口施設に伴うピットと考えられ、深さは34cmである。また、P6は炉の西側に位置し、径65cmの円形、深さ48cmで、底面は皿状を呈しており、作業に関わるピットと思われる。さらに、P7は深さが62cm、P8は深さが38cm、P9は深さが26cmで、いずれも硬化面の下から検出されており、性格については断定できないが、覆土に焼土や灰を含むことから見て炉あるいは作業用ピットの作り替えが行われた可能性が示唆される。



第145図 第1345号住居跡実測図

P 6土層解説

- |       |                       |        |                         |
|-------|-----------------------|--------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量      | 4 暗褐色  | ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 5 赤褐色  | 焼土粒子多量                  |
| 3 暗褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土粒子中量          |

P 7土層解説

- |        |                           |       |                       |
|--------|---------------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色  | 焼土ブロック・炭化物中量、ロームブロック・灰少量  | 4 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量                  | 5 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量      |
| 3 暗赤褐色 | ロームブロック・灰中量、焼土ブロック・炭化粒子少量 |       |                       |

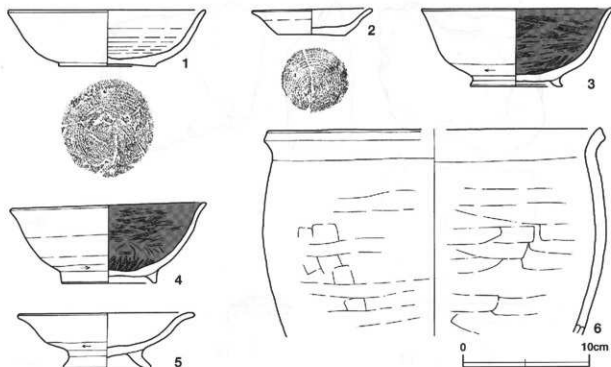
覆土 5層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

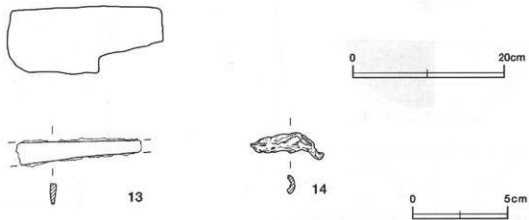
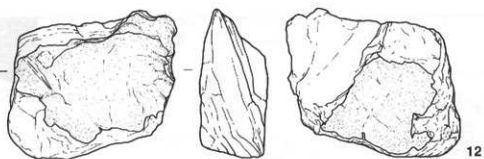
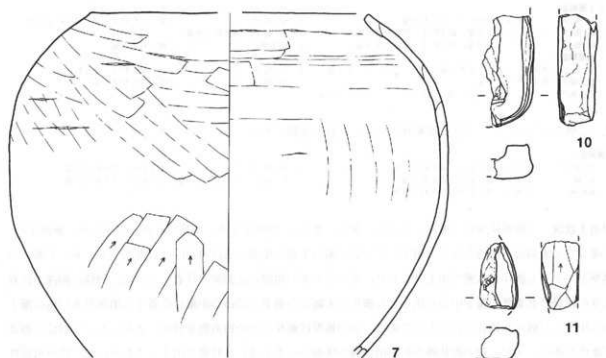
- |       |                   |       |                     |
|-------|-------------------|-------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量  | 5 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |       |                     |

遺物出土状況 土師器片38点(碗28, 小皿1, 鉢3, 甕6), 埴塼片2点, 銚型片2点, 刀子1点, 銅滴1点, 板状鏝5点が竈周辺の床面を中心に出土している。竈の手前の床面からは第146・147図3・6～8の土器と10の銚型がいずれも破片の状態で出土しており, そのうち8の埴塼には銅滓が付着している。同様に銅滓が付着した9の埴塼は北東部の覆土中から出土した破片と本跡から南東へ35mの距離に位置する第36号井戸跡の覆土中から出土した破片が接合されたものである。10の銚型は細片のため銚造物を特定できないが, 小形仏の脚部の可能性がある。また, 12の板状鏝が炉の南西側の床面から若干浮いた状態で出土しており, 炉に伴う可能性がある。さらに, 13の刀子はP 2の覆土中, 14の銅滴は竈内からそれぞれ出土している。

所見 本跡は, 炉を有していることや銅滓や埴塼, 銚型が出土していることから見て銅の铸造に関わる工房跡と考えられる。炉は40cmほど掘り窪められた部分を埋め戻して使用されており, この構造はたたら構造を参考にすると炉内の湿気を防ぎ, 炉の温度を高く維持するための施設と想定される。時期は, 出土土器から10世紀後半と考えられる。



第146図 第1345号住居跡出土遺物実測図(1)



第147图 第1345号住居跡出土遺物実測图(2)

第1345号住居跡出土遺物観察表(第146・147図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	環	15.5	4.5	7.7	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	外部ロクロ整形, 底部回転糸切り	東壁際床面	P10425, 60%, PL55
2	土師器	小皿	9.4	2.1	5.2	雲母・赤色粒子	橙	普通	外部ロクロ整形, 底部回転糸切り	覆土中	P10426, 60%, PL56
3	土師器	高台付碗	14.9	6.3	7.1	雲母・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	外部内へ張り, 底部回転糸切り, 高台張り付, 内面赤色化粧	甕手前床面	P10427, 70%, PL56
4	土師器	高台付碗	15.3	6.4	7.3	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り, 高台張り付	西壁際下層	P10428, 60%, PL55
5	土師器	高台付碗	13.8	4.5	6.6	石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り, 高台張り付	竈火床部	P10429, 90%, PL55
6	土師器	壺	[26.3]	(16.4)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	体部内・外面ヘラナデ	竈火床部	P10430, 20%
7	土師器	壺	[22.0]	(27.5)	-	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部欠損, 外部ヘラナデ, 下部へ張り付, 内部ヘラナデ	P10431, 20%, 甕手前床面	P10431, 20%, 体部外周欠損付着
8	土師器	埴輪	[11.3]	3.4	9.6	長石	灰白	普通	体部内・外面ナデ・指面痕, 注口はつまみ出し	甕手前床面	P10432, 50%, 口縁部欠損付着, PL55
9	土師器	埴輪	[13.0]	3.5	[11.6]	長石	灰白	普通	体部内・外面ナデ・指面痕, 注口はつまみ出し	中央部床面・SE30量土中	P10691, 50%, 口縁部欠損付着, PL55

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
10	銅型	(8.8)	(4.1)	(2.7)	(97.7)	土製	外面ナデ, にぶい黄褐色を呈する。小形弘を鑄造。	甕手前床面	DP10017, PL66
11	銅型	(5.4)	(3.0)	(2.5)	(42.3)	土製	外面へ張り, 褐色を呈する。鑄造物不明。	覆土中	DP10018

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
12	不明	22.4	19.7	9.3	5260	雲母片岩	板状, 平坦面に放射状有り。	伊南西層下層	Q10016, 100%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
13	刀子	(6.6)	(1.2)	0.3	(7.0)	鉄	刃部欠損, 基部の破片, 茎尻側が磨る。	P 6 底面	M10087, PL68
14	洋	3.8	1.0	0.2	3.7	銅	渦状, 緑青付着	甕覆土中	M10088, 100%

### 第1346号住居跡(第148図)

位置 調査区西部のP10e7区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。

規模と形状 長軸2.72m, 短軸2.55mの方形で, 主軸方向はN-6°-Wである。壁高は最も残りの良い東壁で5cmほどであり, 壁の立ち上がりの様子は判然としない。

床 はほぼ平坦で, 甕の手前から出入り口施設にかけてよく踏み固められており, 壁溝は北壁際を除いて巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されており, 焚口から煙道部まで70cm, 燃焼部幅55cmで, 壁外への掘り込みは60cmである。天井部, 袖部は遺存しておらず, 付近の床面から竈材の一部と考えられる粘土粒子や砂粒が検出されている。火床面は若干掘り窪められて赤変硬化しており, 煙道部の形状は不明である。

#### 竈土層解説

- |        |                       |        |                                  |
|--------|-----------------------|--------|----------------------------------|
| 1 黒褐色  | 炭化物中量, ロームブロック・焼土粒子少量 | 4 暗赤褐色 | ロームブロック多量, 焼土ブロック中量, 炭化粒子少量      |
| 2 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量  | 5 暗赤褐色 | 炭化粒子中量, ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量 |
| 3 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量  |        |                                  |

ピット 1か所。P1は出入り口施設に伴うピットで, 深さは17cmである。

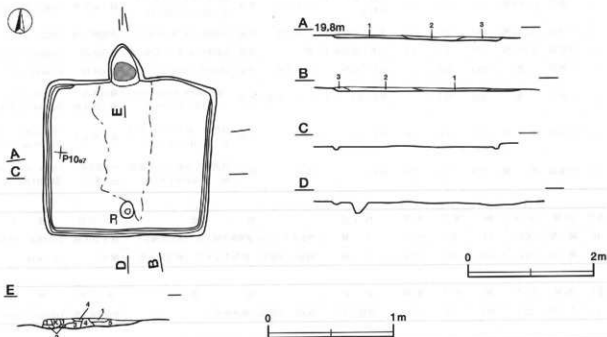
覆土 4層からなり, レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

#### 土層解説

- |       |                   |       |                      |
|-------|-------------------|-------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 3 暗褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子少量      |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 4 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 |

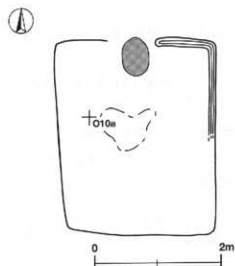
遺物出土状況 土師器片2点(甕2), 須恵器片7点(杯3, 盤2, 甕2)が出土している。いずれも細片であり, 須恵器片は焼きが悪く, 赤褐色を呈したものが多い。

所見 本跡は主柱穴を持たず, 1辺が3m未満の最も小形の住居跡である。時期は須恵器片の形状から見て9世紀代と考えられる。



第148図 第1346号住居跡実測図

#### 第1348号住居跡 (第149図)



第149図 第1348号住居跡実測図

位置 調査区西部のO10i8区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。

規模と形状 壁の立ち上がりが確認できなかったため, 壁溝や暗褐色を呈した床面の広がりから, 北方向を主軸とする長軸3.10m, 短軸2.60mほどの南北に長い長方形と推定される。

床 中央部に硬化面が一部認められ, 壁溝も北東コーナー部にその一部が認められるだけである。

竈 北壁の中央部に火床面が確認されており, 付近の床面に粘土粒子や砂粒が散在している。

覆土 検出されなかった。

遺物出土状況 土師器片1点(甕)が火床面から出土している。

所見 本跡の時期は, 住居の規模や形態から平安時代と考えられる。



第1349号住居跡 (第150・151図)

位置 調査区西部のP10c3区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

規模と形状 長軸4.14m、短軸3.84mの方形で、主軸方向はN-5°-Eである。壁の立ち上がりは北壁で確認され、高さが12cmで、壁はほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝が周囲している。

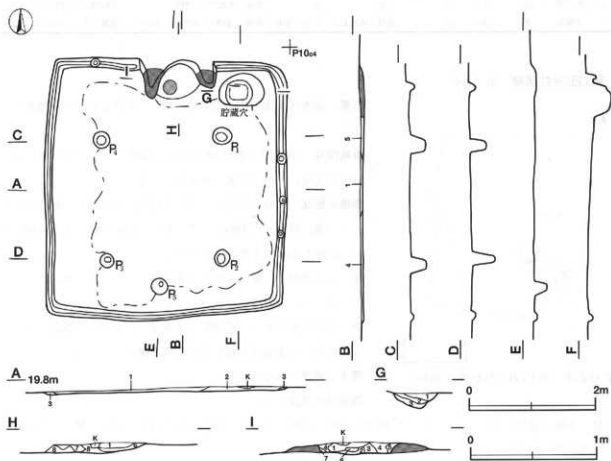
竈 北壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで60cm、両袖部幅110cmである。壁外への掘り込みはほとんどなく、袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床面は浅い皿状に掘り窪められて赤変硬化しており、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

- |          |                               |          |                              |
|----------|-------------------------------|----------|------------------------------|
| 1 暗赤褐色   | 黄土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量        | 6 にぶい赤褐色 | ロームブロック・黄土ブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒中量 |
| 2 暗赤褐色   | 黄土ブロック多量、ロームブロック・炭化物中量        | 7 黒褐色    | 黄土ブロック中量、炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量      |
| 3 暗赤褐色   | 黄土ブロック・炭化物中量、ローム粒子少量          | 8 にぶい赤褐色 | ロームブロック中量、黄土ブロック・炭化粒子少量      |
| 4 暗赤褐色   | 黄土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量         |          |                              |
| 5 にぶい赤褐色 | 黄土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |          |                              |

ピット 5か所。主柱穴はP1~P4で、深さは24~39cmである。P5は深さ21cmで、竈と対峙しており、入り口施設に伴うピットと考えられる。また、壁溝内から深さ12~22cmの小ピットが4か所検出され、壁柱穴と考えられる。

貯蔵穴 竈の東側に付設されており、長径70cm、短径52cmの楕円形で、深さは28cmを測り、底面は皿状を呈している。また、覆土は西側から流れ込んだ堆積状況を示し、第2・3層は竈材と考えられる粘土粒子や砂粒を含んでいる。



第150図 第1349号住居跡実測図

貯蔵穴土層解説

- 1 にぶい赤褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック中量  
 2 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量、炭化粒子少量  
 3 にぶい赤褐色 ローム粒子多量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量

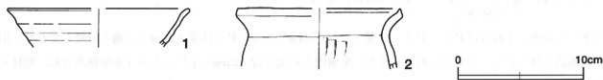
覆土 5層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量  
 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量  
 3 褐色 ローム粒子中量  
 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量  
 5 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子少量

遺物出土状況 土師器片10点(坏4, 甕6), 須恵器片3点(坏1, 甕2)がほぼ全域に散在して出土している。第151図2は竈の火床部から出土している。

所見 本跡は当遺跡における8世紀代の住居形態の典型を示しており、時期は出土土器から8世紀後半と考えられる。

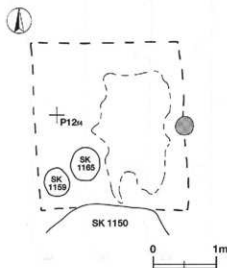


第151図 第1349号住居跡出土遺物実測図

第1349号住居跡出土遺物観察表(第151図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[144]	(30)	-	長石	灰	普通	体部口口整形	北東部甕土中	P10433, 5%
2	土師器	甕	[130]	(48)	-	雲母・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	口縁部ナマ、胴縁ナマ、内面ナマ	竈土中	P10434, 5%

第1350号住居跡(第152図)



第152図 第1350号住居跡実測図

位置 調査区東部のP12f4区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 南壁際を第1150号土坑、南西コーナー部を第1159・1165号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 床面が露出した状態で検出されたため、硬化面の広がりや竈の位置から判断してN-88°-Eを主軸とする長軸2.60m、短軸2.40mの方形と推定される。

床 ほぼ平坦で、竈の手前から中央部にかけてよく踏み固められている。また、壁溝は認められない。

竈 遺存状態が悪く、東壁際の中央部から火床部が確認されただけであり、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。

覆土 確認されなかった。

遺物出土状況 出土していない。

所見 本跡は遺物が出土していないため時期の判断が困難であるが、東壁に竈を有する住居形態と10世紀後半の土坑に掘り込まれていることから見て10世紀前半と考えられる。

### 第1351号住居跡 (第153・154図)

位置 調査区東部のP12g1区に位置し、南に緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 竈付近で第1352号住居跡、北半部分で第1356号住居跡を掘り込み、北壁際の中央部を第1154号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南部の床面が露出した状態で検出され、南壁の立ち上りを確認できなかったため、床面の広がりやピットの位置から判断して、N-4°-Wを主軸とする長軸3.62m、短軸2.80mの長方形と推定される。壁の立ち上がりは北壁で確認され、壁高が6cmで、壁は外傾して立ち上がる。

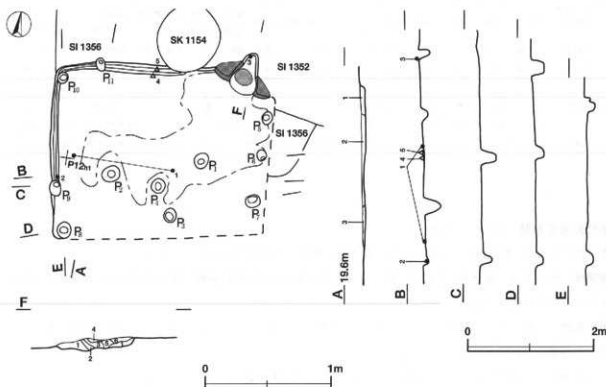
床 はほぼ平坦で、竈の手前から中央部にかけてよく踏み固められている。壁溝は北壁際から西壁際にかけて巡っている。

竈 北東コーナー部に付設されており、焚口部から煙道部まで65cm、両袖幅105cmで、壁外への掘り込みは30cmほどである。天井部は崩落しており、土層断面図中の第4層が天井部の崩落土に相当し、粘土粒子や砂粒を多く含んでいる。袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されており、内側が赤変している。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、赤変硬化している。また、煙道は火床部から急な傾斜で立ち上がる。

#### 竈土層解説

- |                         |                                   |
|-------------------------|-----------------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量           | 4 灰褐色 焼土粒子・粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 2 褐色 ローム粒子多量            | 5 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量         |
| 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量        |

ピット 11か所。主柱穴はP1・2が相当し、深さはそれぞれ11cmと26cmである。P3は深さ15cmで、南壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P4は深さ25cmで、P3とともに出入り口施設に伴うピットの可能性があるが、位置がやや住居内に入り過ぎており、断定できない。P5～P11は深さ14～26cmで、いずれも壁際に位置しており、壁柱穴と考えられる。



第153図 第1351号住居跡実測図

覆土 3層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

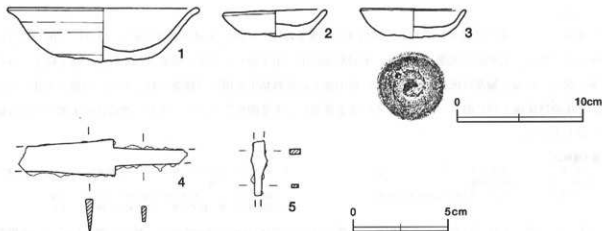
土層解説

- 1 雑褐色 ローム粒子・黄土粒子少量  
2 黒褐色 ローム粒子微量

- 3 雑褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片37点(碗27, 小皿3, 甕7), 刀子1点, 鉄鏝1点が竈周辺の床面や覆土下層を中心に出土している。竈内からは第154図3が出土している。2はほぼ完形で、西壁際の床面から正位で出土しており, 4の刀子と5の鉄鏝は北壁際中央部の床面から重なって出土している。

所見 本跡はコーナー竈を有する住居跡であり, 時期は小皿が小形化していることから見て10世紀後半以降と考えられる。



第154図 第1351号住居跡出土遺物実測図

第1351号住居跡出土遺物観察表(第154図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	碗	15.0	4.2	8.0	長石	にぶい黄橙	普通	体部クロコ整形, 底部雑な回転ヘラ切り	西壁際・中央部床面	P10435, 80%, PL55
2	土師器	小皿	8.1	2.1	5.4	石英・長石	橙	普通	体部クロコ成形, 底部回転ヘラ切り	西壁際床溝内	P10436, 100%, PL53
3	土師器	小皿	8.4	2.3	5.6	長石・石英	浅黄橙	普通	体部クロコ成形, 底部回転ヘラ切り	竈煙道部	P10437, 70%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4	刀子	(9.0)	1.9	0.4	(17.0)	鉄	切先・茎尻欠損, 両面有り。	北壁際床面	M10091, PL68
5	鏝	(2.9)	(0.9)	0.3	(1.4)	鉄	尻部から茎部にかけての破片, 両面有り。	北壁際床面	M10092

第1352号住居跡(第155・156図)

位置 調査区東部のP12g1区に位置し, 南に緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 西側部分で第1356号住居跡を掘り込み, 南西部を第1351号住居跡・第1154号土坑, 東壁際を第1166号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.96m, 短軸3.76mの方形で, 主軸方向はN-9°-Eである。また, 壁高は10~12cmで, 各壁とも外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で, 壁際を除いてよく踏み固められており, 壁溝が周回している。

竈 北壁中央部に付設されており, 焚口部から煙道部まで90cm, 両袖部幅115cmで, 壁外への掘り込みは60cm

である。袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されており、火床面は地山面をそのまま使用し、火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道の立ち上がり部には土製支脚が据えられており、煙道は外傾して緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

- |          |                     |        |                     |
|----------|---------------------|--------|---------------------|
| 1 黒褐色    | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量   | 4 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子少量       |
| 2 にぶい赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量 | 5 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 3 褐灰色    | 灰多量、焼土粒子・炭化粒子中量     |        |                     |

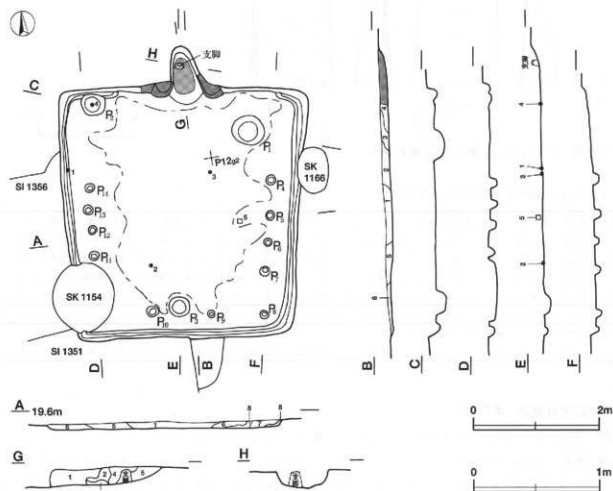
ピット 14か所。P1・2は深さが15cmと17cmで、支柱穴の可能性はあるが、位置が不揃いであり、また対応する柱穴も確認されていない。P3は深さ13cmで竈と対峙しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。また、深さ11~17cmの小ピット11か所が楹溝に沿って検出されており、楹を支える柱穴の可能性はある。

覆土 8層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

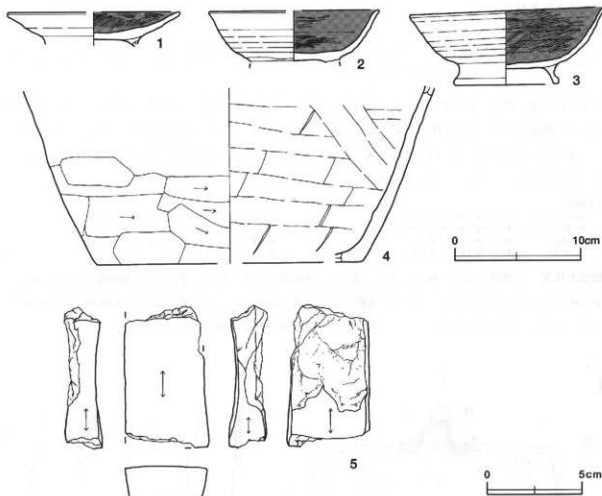
- |        |                        |        |                |
|--------|------------------------|--------|----------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量      | 5 暗褐色  | ローム粒子中量、焼土粒子少量 |
| 2 暗褐色  | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量    | 6 暗褐色  | ローム粒子中量        |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量           | 7 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量   |
| 4 暗褐色  | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 | 8 褐色   | ローム粒子多量        |

遺物出土状況 土師器片72点(碗55, 皿4, 甕13), 須恵器片12点(杯9, 甕3), 灰陶陶器片2点(瓶2), 土製支脚1点, 砥石1点が出土しており、遺物はほぼ全域に散在している。第156図1は西壁際, 4は北西コーナー一部のいずれも床面から出土している。また、須恵器大甕の破片が覆土中から出土している。



第155図 第1352号住居跡実測図

所見 本跡からは小ビット11か所が壁と平行に確認されており、当遺跡では他に類例がない。時期は、供膳具に占める土師器の割合が須恵器を上回っており、9世紀後葉と考えられる。



第156図 第1352号住居跡出土遺物実測図

第1352号住居跡出土遺物観察表 (第156図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	高台付皿	[13.6]	(2.7)	-	雲母・長石・石英	にぶい澄	普通	裏面同軸へう刷り見、高台粘り付け	西壁礎床面	P10439, 60%
2	土師器	高台付碗	[13.5]	(4.1)	-	雲母	鴨灰	普通	裏面同軸へう刷り見、高台粘り付け	南西部床面	P10438, 50%
3	土師器	高台付碗	15.5	6.1	8.4	赤色粒子	澄	普通	裏面同軸へう刷り見、高台粘り付け	中央部床面	P1040, 70%, PL36
4	須恵器	羹	-	(13.9)	[21.0]	雲母・長石・石英	鴨灰	普通	外縁割ナゲ、下唇へう刷り、内縁へナゲ	北西部床面	P10441, 10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5	砥石	(7.5)	4.5	(2.0)	(73.4)	凝灰岩	両側欠損、砥面4面、中央部が薄くなっている。	東壁寄り下層	Q10021, PL68

### 第1353号住居跡 (第157図)

位置 調査区東部のP12e1区に位置し、南に緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

規模と形状 北側部分が調査区域外に延びているため、東西軸は4.94mで、南北軸は1.88mだけが確認され、N-2°-Eを主軸とする方形または長方形と推定される。壁高は4~13cmであり、壁は外方向に若干開き気味に立ち上がる。

床 はほぼ平坦で、ピットの内側がよく踏み固められており、壁溝は確認された壁際を巡っている。  
 ピット 5か所。主柱穴はP1・2で、深さは72cmと49cmであり、いずれも中位に段を有している。土層断面の観察から、この段は柱を抜き取る際に掘り込まれたものと想定され、また、柱の径は約15cmと推定される。P3は深さ27cmで、南壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P4・5は不明である。

ピット土層解説

- |                           |               |
|---------------------------|---------------|
| 1 暗褐色 コーム粒子中量、炭土粒子・炭化粒子少量 | 3 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 ローム粒子多量  |

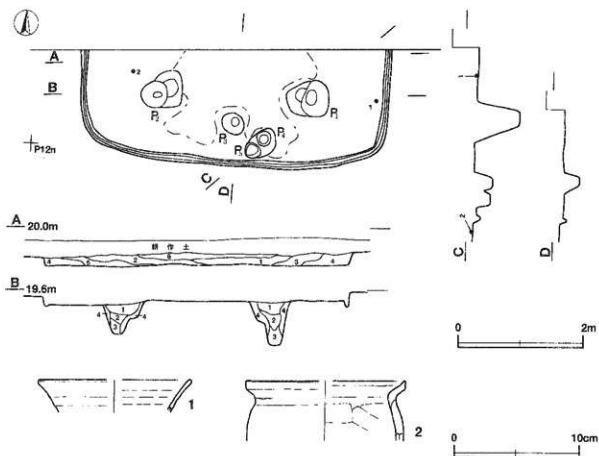
覆土 6層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- |                           |                            |
|---------------------------|----------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量  |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量             | 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量    |
| 3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量      | 6 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片31点(坏4, 甕27), 須恵器片6点(坏3, 蓋2, 甕1)が床面や覆土下層を中心に散在した状態で出土している。図示した土器はいずれも床面からの出土であり、第157図1は東壁際、2は西壁際からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器の形状と組成割合から9世紀前半と考えられる。本跡の北側部分は調査区域外に延びており、また、この時期の他の住居跡も調査区域外との境界付近に分布していることから見て、当該期の集落は調査区域外に広がる可能性がある。



第157図 第1353号住居跡・出土遺物実測図

第1353号住居跡出土遺物観察表（第157図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[120]	(25)	-	雲母・長石	黄灰	普通	体部ロクロ整形	東壁部床面	P1042, 5%
2	土師器	甕	[128]	(48)	-	雲母・長石・石英	橙	普通	口縁ナデ, 胴部ナデ, 内面ナデ	西壁部床面	P1043, 5%

第1354号住居跡（第158図）

位置 調査区東部のP12g2区に位置し、南に緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 南壁際を第70号溝跡に東西に掘り込まれている。

規模と形状 壁の立ち上がりが確認されなかったため、ピットの位置や硬化面の広がりから判断して東西軸は3.55mと推定される。また、南北軸は3.50mを超えるものと考えられ、N-10°-Wを主軸とする方形または長方形と推定される。

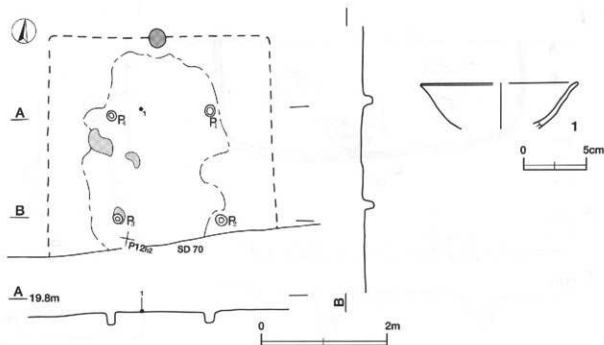
床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は認められない。

ピット 4か所。支柱穴はP1～P4が相当し、深さ17～20cmである。

覆土 検出されなかった。

遺物出土状況 土師器片7点（碗7）が床面から散在した状態で出土している。第158図1は中央部北寄りの床面から出土している。また、西側部分の床面からは、焼土の広がりが確認されている。

所見 本跡の西側部分の床面には焼土が広がっており、焼失住居と考えられるが、焼失の時期については覆土の様相が不明のため断定できない。時期は出土土器から10世紀代と考えられる。



第158図 第1354号住居跡・出土遺物実測図

第1354号住居跡出土遺物観察表（第158図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[127]	(37)	-	雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部ロクロ整形	中央部床面	P1044, 5%



第1355号住居跡 (第159～161図)

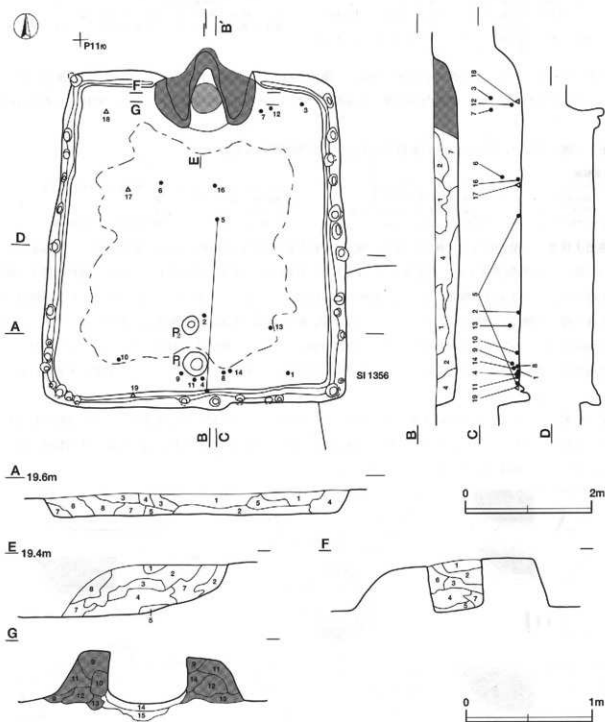
位置 調査区東部のP11f0区に位置し、南に緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 南西コーナー部で第1356号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.40m、短軸4.86mの南北に長い長方形であり、主軸方向はN-6°-Wである。壁高は北壁で45cm、南壁で16cmを測り、各壁とも外方向に開き気味に立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められており、壁溝が周囲している。

竈 北壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで125cm、両袖部幅160cmで、壁外への掘り込みは30



第159図 第1355号住居跡実測図

cmである。袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されており、土層断面図中の第9～13層が袖部に相当する。火床面は床面とはほぼ同じ高さで、赤変硬化した部分の厚さが5cmを測り、使用頻度の高さが示唆される。また、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

#### 竈土層解説

1 灰 褐色	砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量	8 黒 褐色	ローム粒子・粘土粒子少量
2 暗 褐色	砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	9 灰 褐色	粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子少量
3 極 暗 褐色	砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化物・粘土粒子少量	10 にぶい赤褐色	粘土粒子・砂粒中量、焼土ブロック少量
4 暗 赤 褐色	粘土粒子・炭化粒子・粘土粒子中量、ローム粒子・砂粒少量	11 暗 褐色	粘土粒子・砂粒中量
5 にぶい赤褐色	焼土粒子多量、ローム粒子少量	12 にぶい黄褐色	粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
6 にぶい赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量	13 灰 褐色	粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
7 極 暗 赤褐色	焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子中量、ローム粒子少量	14 暗 赤 褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子少量
		15 極 暗 赤褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 2か所。P1・2は深さが23cmと30cmで、竈に対峙して一直線上に並んでおり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。また、壁溝内から深さ5cm程度の小ピットが31か所検出されており、壁柱穴と考えられる。

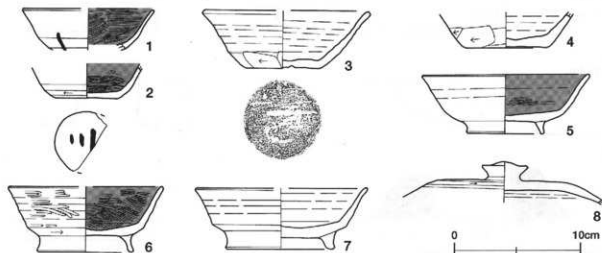
覆土 8層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

#### 土層解説

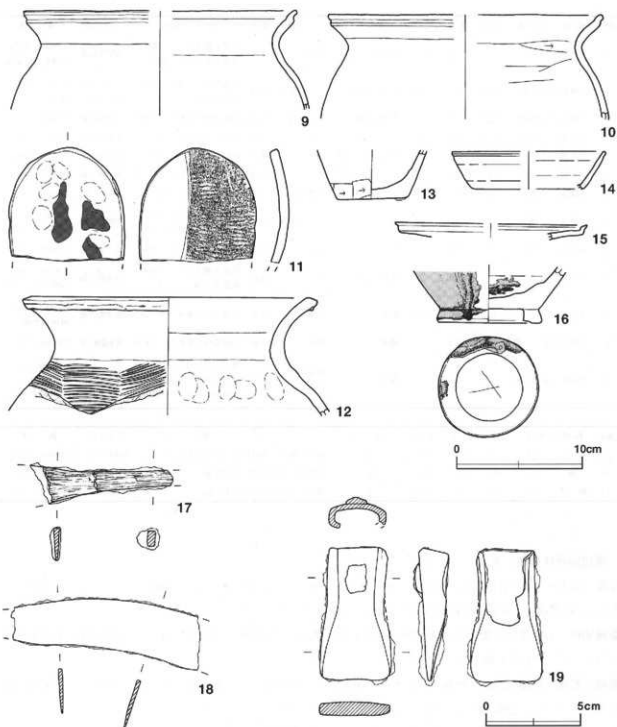
1 暗 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量	5 褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量
2 極 暗 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	6 極 暗 褐色	ロームブロック少量
3 暗 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量	7 暗 褐色	ロームブロック中量
4 黒 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	8 暗 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片76点(碗37, 皿2, 甕37), 須恵器片214点(坏169, 皿3, 蓋16, 盤2, 短頸壺1, 甕19, 瓶4), 灰釉陶器片1点(長頸瓶1), 刀子1点, 鉄鎌1点, 鉄斧1点が出土しており, 遺物は覆土下層や床面を中心にはほぼ全域に散在している。第160・161図1・2・4・5・8～11・14・19はいずれも南壁寄りの床面や覆土下層から出土しており, そのうち11は硯に転用され, 体部内部が摩耗し, 墨が付着している。16の灰釉陶器は井ヶ谷78号窯式期のものであり, 底部外面には「×」と焼成後に刻書されている。また, 14・15も東海地方の製品と考えられる。17の刀子は中央部やや西寄りの床面から出土しており, 茎部に木質が付着している。

所見 時期は出土土器から9世紀中葉と考えられ, この時期としては大形の住居跡であり, 出土遺物も質量共に他の住居跡を優越している。また, 1軒の食膳を附うには十分すぎる供膳具類の出土や竈の使用頻度の高さから, 厨としての機能が示唆される。



第160図 第1355号住居跡出土遺物実測図(1)



第161図 第1355号住居跡出土遺物実測図(2)

第1355号住居跡出土遺物観察表(第160・161図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	杯	[10.4]	(3.3)	-	雲母	橙	普通	体部ロクロ整形、内面ヘラ磨き	南塚跡床面	P10445, 30%, 外部黒漆(□), P166
2	土師器	杯	-	(2.8)	[5.0]	雲母	にぶい橙	普通	体部下縁・底部回転ヘラ磨り、内面ヘラ磨き	南塚寄り床面	P10446, 30%, 底部黒漆「川」
3	須恵器	杯	[13.1]	4.6	5.9	雲母・長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ磨り、方向ヘラ磨り	北東部上層	P10447, 60%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4	須恵器	坏	-	(28)	6.4	雲母・長石・石英	褐灰	普通	体部下端手持ちへつ削り、底部多方向のへつ削り	南壁部床面	P10448, 30%, 内面磨滅・曇見、転用
5	土師器	高台付坏	13.2	4.8	5.9	石英・赤色粘土	にぶい黄褐色	普通	体部内面へつ磨き、高台貼り付け後クロコナデ	中央部・南壁部床面	P10449, 80%, PL56
6	土師器	高台付坏	[12.2]	5.2	7.4	雲母・石英	にぶい黄褐色	普通	体部内・外面クロコナデ整形、へつ磨き	中央部中層	P10450, 50%
7	須恵器	高台付坏	[13.6]	4.8	8.2	長石・石英	灰黄	普通	底部細へつ磨き後、高台貼り付け	南壁部上層	P10451, 60%
8	須恵器	壺	-	(31)	-	雲母・長石・石英	黄灰	普通	大井縁左廻りの縁部へつ削り	南壁部床面	P10452, 40%
9	土師器	壺	[21.6]	(7.8)	-	雲母・長石・石英	黄	普通	口縁部削ナデ、体部内・外面ナデ	南壁部下層	P10453, 10%
10	土師器	壺	[21.8]	(8.3)	-	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	口縁削ナデ、縁部削ナデ、外面削ナデ	南壁部床面	P10454, 5%
11	須恵器	壺	-	(9.3)	-	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	不良	体部外面縁位の平行引き、内面ナデ・指痕	南壁部床面	P10455, 5%, 内面磨滅・曇見、転用
12	須恵器	壺	22.3	(8.4)	-	雲母・長石	黄灰	普通	縁部削ナデ、縁部削ナデ、内面削ナデ	南壁部下層	P10460, 30%
13	須恵器	短頸壺	-	(4.0)	5.5	長石・石英	灰	良好	体部下端手持ちへつ削り、底部多方向のへつ削り	南壁部下層	P10456, 30%, 内面磨滅による自然輪
14	須恵器	坏	[12.3]	3.0	[9.0]	緻密	灰黄	良好	体部クロコナデ整形	南壁部下層	P10457, 5%, 外面自然輪
15	須恵器	高盤	[15.3]	(1.2)	-	緻密	褐灰	良好	口縁部内・外面クロコナデ	南壁部遺土中	P10458, 5%
16	須恵器	長頸壺	-	(4.6)	7.8	緻密	灰褐・オリーブ灰	良好	体部クロコナデ、底部回転系より後高台貼り付け、内面陶灰による自然輪	甕手前床面	P10459, 10%, 底部磨滅「×」、弁ヶ谷式変式 PL55

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
17	刀子	(7.6)	(2.2)	0.4	(13.0)	鉄	基部の破片、木質付着、変形は概る。	西壁部床面	M10093, PL68
18	鎌	(10.1)	(3.0)	0.2	(20.0)	鉄	刃先部・基部欠損、刃部彎曲。	北西部床面	M10094, PL69
19	鉄斧	6.9	3.8	1.6	(60.0)	鉄	袋部一部欠損、刃部はやや幅広。	南壁部床面	M1008, 90%, PL69

### 第1356号住居跡 (第162・163図)

位置 調査区東部のP12g1区に位置し、南に緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。また、本跡から北へ6mの距離には同時期の第1353号住居跡が位置している。

重複関係 南側部分を第1351号住居跡、東半部分を第1352号住居跡、西壁跡を第1355号住居跡、中央部を第1154号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.26m、短軸3.76mの若干東西に長い長方形で、主軸方向はN-2°-Eである。壁高は重複を受けていない北壁で20cmを測り、壁は外方向に開き気味に立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで80cm、両袖部幅120cmである。壁外への掘り込みは25cmほどで、袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されている。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

ピット 8か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは15～29cmである。P5は深さ28cmで、竈と対峙する位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6～P8はいずれも深さ15cmほどで、各コーナー部の壁溝内に位置しており、壁柱穴と考えられる。

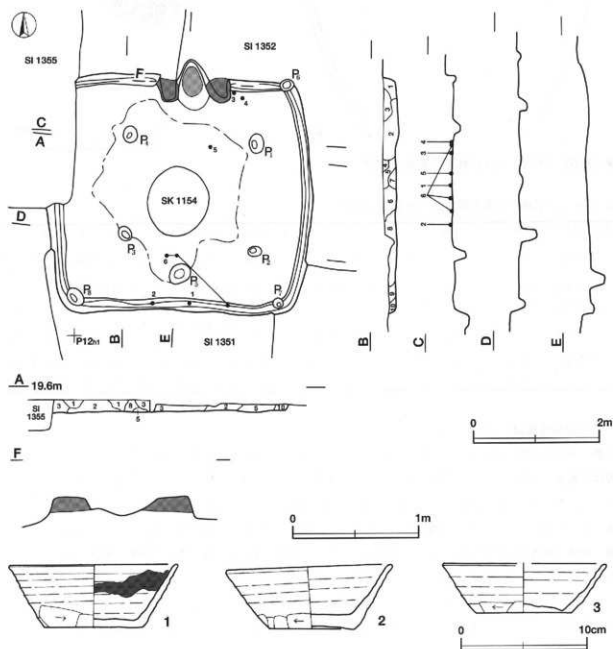
覆土 10層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

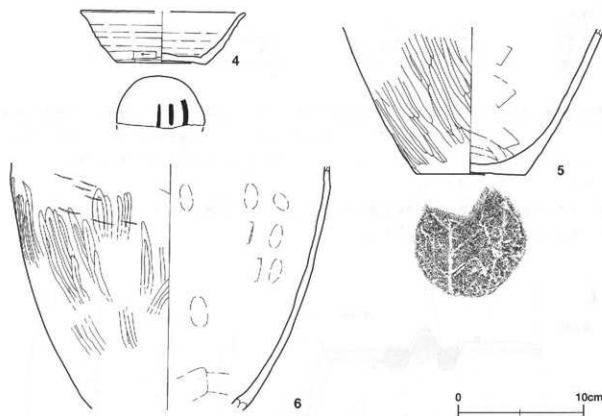
- |        |                       |       |                  |
|--------|-----------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色  | ロームブロック多量             | 6 暗褐色 | ロームブロック多量、炭化物微量  |
| 2 暗褐色  | ロームブロック多量、炭化粒子少量      | 7 黒褐色 | ロームブロック中量、粘土粒子少量 |
| 3 暗褐色  | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子少量 |
| 4 極暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量   | 9 暗褐色 | ロームブロック多量        |
| 5 暗褐色  | ロームブロック多量、炭化粒子微量      | 10 褐色 | ロームブロック多量        |

遺物出土状況 土師器片9点(甕9), 須恵器片30点(杯23, 蓋2, 高盤3, 甕2)が竈周辺と南壁際の床面を中心に出土している。第162・163図1・2・6は南壁際の床面, 3~5は竈手前の床面からの出土であり, そのうち4の底部には「川」と墨書されている。また, 5は出土付近に粘土粒子や炭化粒子が散在しており, 竈で使用されていたものと考えられる。

所見 本跡の時期は出土土器から9世紀前葉と考えられ, 北へ6mの距離に位置する第1353号住居跡とともに同一の集落を構成していたことが想定される。



第162図 第1355号住居跡・出土遺物実測図



第163図 第1356号住居跡出土遺物実測図

第1356号住居跡出土遺物観察表 (第162・163図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	杯	13.3	5.0	7.9	雲母・長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちへつ削り、裏面回転へつ削り。一方のへつ削り	南壁際床面	P1045, 50%, 内面及北壁付着, PL55
2	須恵器	杯	13.2	5.1	6.7	雲母・長石・石英	黄灰	普通	底面(体へつ削り)丸。一方のへつ削り	南壁際床面	P1042, 80%, PL56
3	須恵器	杯	[12.9]	3.9	7.6	雲母・長石・石英	灰	普通	縁部(体へつ削り)丸。底面(体へつ削り)	電子前床面	P1043, 50%
4	須恵器	杯	[12.8]	4.1	7.0	雲母・長石・石英	黄灰	普通	体部下端手持ちへつ削り、底面一方のへつ削り	電子前床面	P1044, 50%, 墨書「川」, PL65
5	土師器	甕	-	(11.6)	8.7	雲母・長石・石英	灰褐	普通	体部外面へつ削り、内面へつ削り	電子前床面	P1045, 30%
6	土師器	甕	-	(19.5)	-	雲母・長石・石英	橙	普通	体部外面へつ削り、内面へつ削り	南壁際床面	P1046, 20%

### 第1357号住居跡 (第164・165図)

位置 調査区東部のP110区に位置し、南に緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

規模と形状 床面が露出した状態で検出され、壁の立ち上がりは確認できなかったが、硬化面の広がりから判断して、N-98°-Eを主軸とする長軸3.20m、短軸2.36mの長方形と推定される。

床 はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝は北壁際から東壁際にかけて巡っている。

竈 東壁の南寄りに付設されており、火床面およびその周囲の床面から粘土粒子や砂粒が検出されている。火床面は床面と同じ高さで、火熱を受けて赤変している。

ピット 3か所。P1・2は深さがそれぞれ18cmと11cmで、形状から見て柱穴の可能性があるが、対応する柱穴は検出されていない。P3は深さ12cmで、西壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

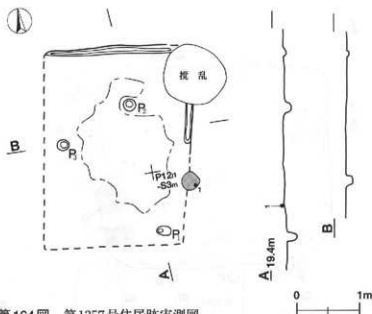
覆土 検出されなかった。

遺物出土状況 土師器片4点(小皿1, 甕3)が火床部から出土している。

所見 本跡の時期は, 東竈を有していることや小皿の形状から見て10世紀後半と考えられる。



第165図 第1357号住居跡出土遺物実測図



第164図 第1357号住居跡実測図

第1357号住居跡出土遺物観察表 (第165図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴	出土位置	備考
1	土師器	小皿	[9.0]	(1.8)	-	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	作部内・外周クロコナデ	竈火床部	PI0467, 5%

### 第1358号住居跡 (第166図)

位置 調査区東部のP11g9区に位置し, 南西に緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 南壁際で第1359号住居跡を掘り込み, 北壁際中央部を第1156号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.82m, 短軸3.20mの東西に長い長方形で, 主軸方向はN-80°-Eである。壁高は10~20cmで, 各壁とも外傾して立ち上がる。

床 はほぼ平坦で, 全体的によく踏み固められており, 壁溝が西壁際を除いて巡っている。

竈 東壁の南寄りに付設されており, 焚口部から煙道部まで95cm, 両袖部幅90cmである。袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されており, 煙道部は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

#### 竈土層解説

1 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化物・砂粒少量	5 暗褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
2 にぶい赤褐色	焼土粒子・砂粒中量, ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	6 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
3 暗赤褐色	焼土粒子中量, ローム粒子・炭化物・粘土粒子・砂粒少量	7 暗赤褐色	焼土粒子・粘土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子少量
4 暗褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量	8 極暗褐色	ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量

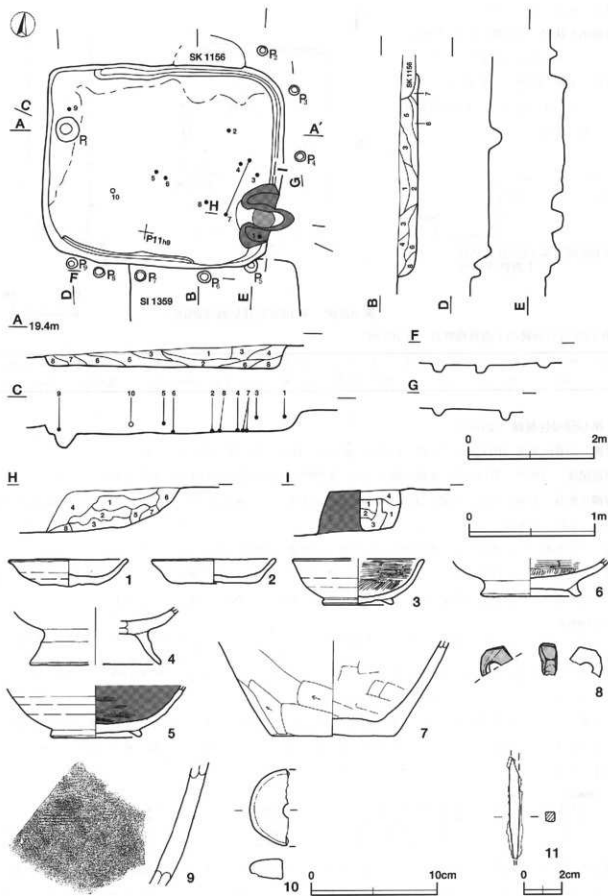
ピット 9か所。P1は深さ22cmで, 竈と対角の位置にあり, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。P2~P9は深さ14~19cmで, いずれも壁の外側に等間隔に並んでおり, 壁柱穴の一種と考えられる。

覆土 8層からなり, ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

#### 土層解説

1 極暗褐色	ローム粒子・炭化物少量, 焼土粒子微量	5 極暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
2 極暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	6 暗褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
3 黒褐色	ロームブロック・炭化物少量, 焼土粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子微量	8 暗褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片65点(碗53, 小皿2, 甕10), 須恵器片1点(甕1), 灰軸陶器片1点(瓶), 土製紡錘車1点, 鉄釘1点がほぼ全域に散在した状態で出土している。竈付近からは, 第166図1・3・4・7・8が出土している。9の須恵器大甕片は, 混入したものである。



第166图 第1358号住居跡・出土遺物実測図



所見 本跡の時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。

第1358号住居跡出土遺物観察表(第166図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	小 皿	9.4	2.1	4.6	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部ロク口整形, 底部回転ヘラ切り	龍南地区上層	P10468, 70%
2	土師器	小 皿	9.8	1.9	6.4	長石・赤色粒子	橙	普通	体部ロク口整形, 底部回転ヘラ切り	北東部床面	P10469, 70%
3	土師器	高台付碗 [102]	3.6	5.4	赤色粒子		浅黄橙	普通	底部回転ヘラ切り後, 高台貼り付け	龍北側中層	P10470, 40%
4	土師器	高台付碗	-	(4.5)	[10.4]	雲母・赤色粒子	橙	普通	高台貼り付け後, ロクロナデ	龍北側床面	P10471, 40%
5	土師器	高台付碗	-	(4.2)	6.9	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後, 高台貼り付け	中央部中層	P10472, 40%
6	土師器	高台付碗	-	(3.0)	7.3	雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	底部回転ヘラ切り後, 高台貼り付け	中央部床面	P10473, 40%
7	土師器	壺	-	(7.6)	10.0	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部外側ヘラ削り, 内面ヘラナデ, 底部ナデ	龍手前・北側床面	P10474, 20%
8	灰釉陶器	双耳瓶 <sup>※</sup>	-	(2.0)	-	麻布	灰白・オリーブ灰	良好	外面ヘラ削り, 孔は棒状工具による刺突	龍手前床面	P10475, 5%
9	須恵器	大 壺	-	(9.7)	-	長石	灰	良好	体部外側縁の平行明り, 内面ナデ	北東部下層	TP10014, 5%

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
10	紡錘車	6.1	1.6	1.0	(27.6)	土 製	無文, ナデ, にぶい橙色を呈する。	中央部中層	DF0019, 30%, PL67

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
11	釘 <sup>※</sup>	(5.3)	0.5	0.5	(4.3)	鉄	断面方形の棒状, 一端が尖る。	北西部履土中	M10096

### 第1359号住居跡(第167図)

位置 調査区東部のP11h9区に位置し, 南西に緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 北壁際を第1358号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 1辺が2.70mほどの方形で, 主軸方向はN-83°-Eである。壁高は6~8cmで, 壁は外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で, 中央部がよく踏み固められており, 壁溝は認められない。

竈 東壁中央部の若干南に寄った位置に付設されており, 焚口部から煙道部まで70cm, 両袖部幅60cmで, 壁外への掘り込みは50cmである。天井部は崩落しており, 袖部は東壁に砂質粘土を貼り付けた痕跡がわずかに確認される程度である。火床面は東壁ラインよりも外側に位置し, 火熱を受けて赤変硬化している。また, 煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

#### 竈土層解説

- |        |                             |         |                      |
|--------|-----------------------------|---------|----------------------|
| 1 黒褐色  | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量           | 4 極暗赤褐色 | 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色  | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量         | 5 極暗赤褐色 | 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化物少量  |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子中量, ローム粒子・粘土粒子少量 | 6 極暗赤褐色 | 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子少量 |

ピット 5か所。主柱穴はP1~P4で, 深さは18~21cmである。P5は深さ13cmで, 竈と対峙する位置にあり, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 3層からなり, レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

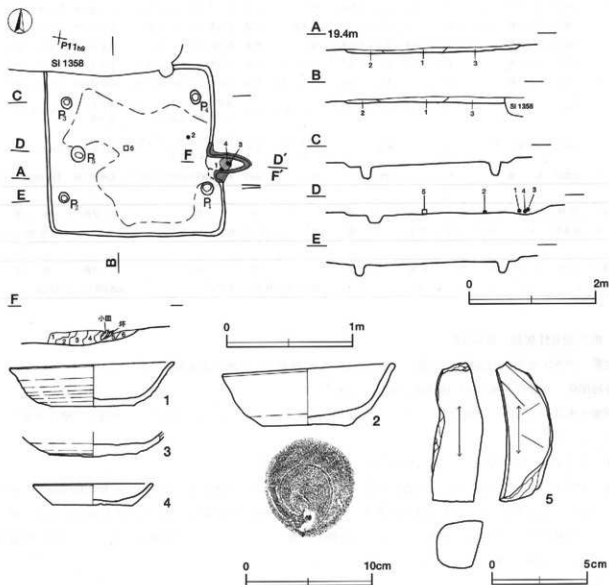
#### 土層解説

- |       |                 |        |         |
|-------|-----------------|--------|---------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子少量 | 3 極暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量         |        |         |

遺物出土状況 土師器片14点(碗11, 小皿1, 壺2), 磁石1点が竈付近を中心に出土している。第167図1・3・4はいずれも火床部からの出土であり, 2は竈手前の床面からの出土である。特に3・4は逆位の状態で

重なって出土し、被熱を受けた痕跡も見られないことから、廃絶時に意図して遺棄されたと考えられる。また、5の砥石は中央部の床面から出土している。

所見 本跡の時期は出土土器から10世紀後半と考えられ、本跡及び本跡と重複関係にある第1358号住居跡の出土土器に時期差はほとんど見られない。



第167図 第1359号住居跡・出土遺物実測図

第1359号住居跡出土遺物観察表(第167図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	13.0	3.3	6.6	石英・赤色粒子	橙	普通	体部クロロ型形、底面回転ヘラ作り	竈火床部	P10476、60%
2	土師器	坏	13.7	4.8	7.0	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部クロロ型形、底面回転ヘラ作り	竈手前床面	F1067、90%、F156
3	土師器	坏	-	(2.0)	7.0	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部クロロ型形、底面回転ヘラ作り	竈火床部	P10478、40%
4	土師器	小 甕	9.4	1.7	6.4	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部クロロ型形、底面回転ヘラ作り	竈火床部	F1065、100%、F156

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5	砥石	7.8	2.8	3.0	61.1	凝灰岩	砥面2面、その他の面は自然面。	中央部床面	Q1002、100%、F158

### 第1360号住居跡 (第168図)

**位置** 調査区東部のP11j9区に位置し、南西に緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

**規模と形状** 床面が露出した状態で検出され、壁の立ち上がりは確認されなかったが、竈の位置や暗褐色を呈した床面の広がりから判断して、 $N-83^{\circ}-E$ を主軸とする長軸3.70m、短軸3.00mの長方形と推定される。

**床** 竈の手前がよく踏み固められており、壁溝は認められない。

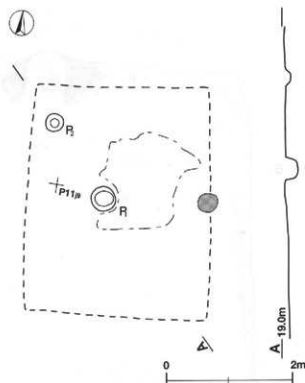
**竈** 遺存状態が悪く、東壁の中央部から火床面が検出されただけである。付近の床面には粘土粒子や砂粒が散在しており、竈材の一部が流出したものと考えられる。

**ピット** 2か所。P1・2は深さ25cmと10cmであり、形状から柱穴と考えられるが、配置が不揃いであり断定できない。

**覆土** 確認されなかった。

**遺物出土状況** 土器片2点(碗1, 甕1)が出土している。

**所見** 本跡の時期は、東竈を有する住居形態から見て10世紀代と考えられる。



第168図 第1360号住居跡実測図

### 第1361号住居跡 (第169・170図)

**位置** 調査区東部のP12g9区に位置し、南東に緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

**規模と形状** 南東に傾斜した地形のため、南壁と東壁の立ち上がりが確認されなかったことから、ピットの位置や暗褐色を呈した床面の広がりから判断して、 $N-10^{\circ}-W$ を主軸とする長軸6.60m、短軸6.25mの方形と推定される。北壁や西壁の高さは10cmほどで、いずれも外傾して立ち上がる。

**床** 耕作等により硬化面のはほとんどが削平され、竈の手前にその一部が認められるだけである。また、壁溝は北西部で認められる。

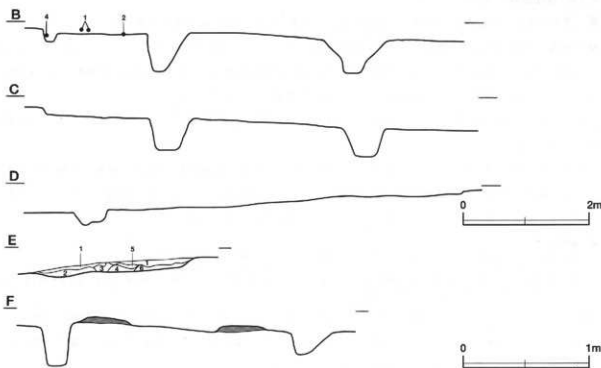
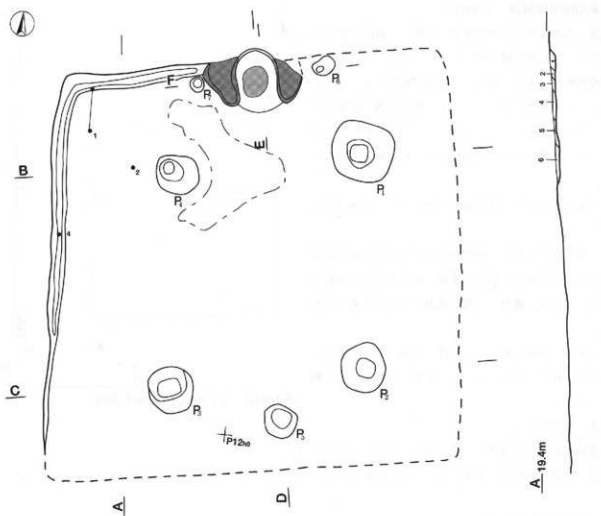
**竈** 北壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで100cm、両袖幅150cmで、壁外への掘り込みは15cmである。袖部は基部だけが遺存しており、床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用しており、火熱を受けて赤変硬化している。

#### 覆土層解説

- |                                  |                                |
|----------------------------------|--------------------------------|
| 1 極暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 | 4 赤褐色 焼土粒子中量                   |
| 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物・粘土粒子少量      | 5 灰褐色 灰多量、焼土粒子少量               |
| 3 におい赤褐色 焼土粒子・灰中量、ローム粒子少量        | 6 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、炭化物・粘土粒子少量 |

**ピット** 7か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは46～63cmである。P5は深さ19cmで、竈と対峙する位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・7はそれぞれ深さ21cmと36cmで、竈の袖部を挟むように位置しており、竈上の棚などの施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 6層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。



第169图 第1361号住居跡実測図

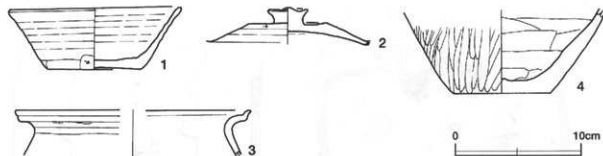
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量  
 2 褐色 ローム粒子多量  
 3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量

- 4 暗褐色 焼土粒子中量、ロームブロック少量  
 5 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量  
 6 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片7点(甕7)、須恵器片17点(坏12, 蓋1, 甕4)が北西部の床面を中心に出土している。第170図1・4はいずれも壁溝内、2は北西部の床面から出土している。

所見 本跡の時期は出土土器から9世紀前葉と考えられ、当該期における最も大形の住居跡である。



第170図 第1361号住居跡出土遺物実測図

第1361号住居跡出土遺物観察表(第170図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	13.6	5.0	7.4	長石・石英	灰	普通	胴部打割り、口縁部打割り	北西部下層	F10481, 90%, P156
2	須恵器	蓋	-	(30)	-	長石・石英	灰	普通	天井部右側りの削れヘラ削り	北西部床面	P10482, 30%
3	土師器	甕	[18.7]	(37)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部打割り、内面ヘラ削り	南東部壁土中	P10483, 5%
4	土師器	甕	-	(66)	7.8	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	胴部打割り、口縁部打割り	西壁際床面	P10484, 10%

第1362号住居跡(第171図)

位置 調査区東部のP12e8区に位置し、南東に緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

規模と形状 長軸4.52m, 短軸4.00mの南北に長い長方形で、主軸方向はN-4°-Eである。竈の東側に棚状施設が付設されており、規模は幅140cm, 奥行き40cmで、床面からの高さは10cmである。棚状の部分の壁高は8cmほどで、それ以外の壁高は4~14cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。

床 はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は全周しており、北東コーナー部では棚状施設の手前を巡っている。

竈 北壁中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで90cm, 両袖部幅140cmである。壁外への捌り込みは10cmほどで、袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床面は浅い皿状に掘り窪められ、火熱を受けて赤変硬化しており、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量  
 2 黒褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量  
 3 にぶい赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子少量

- 4 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量  
 5 極暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量  
 6 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量

ピット 7か所。主柱穴はP1~P4で、深さは16~24cmである。P5は深さ20cmで、南壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・7はそれぞれ深さ8cmと13cmで、竈の西袖脇と棚状施設の竈寄りに位置しており、竈上の棚などの施設に伴うピットの可能性がある。

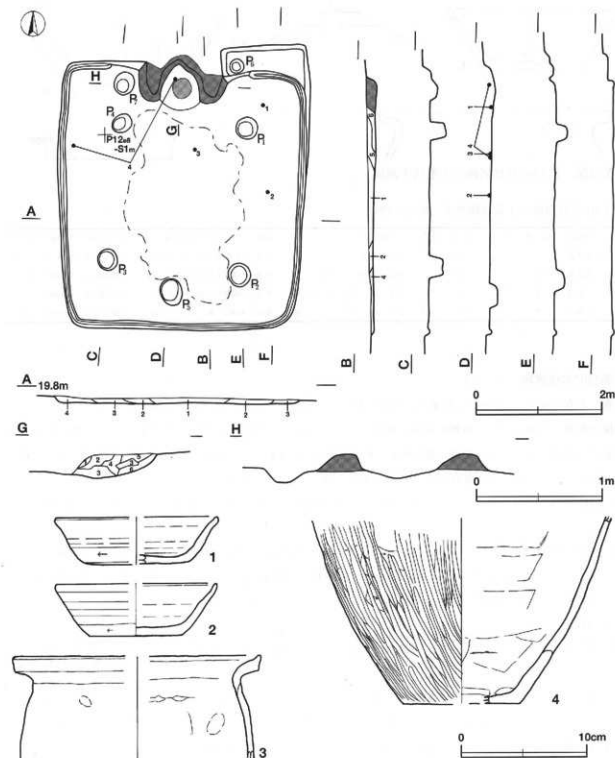
覆土 6層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- |       |                      |       |                   |
|-------|----------------------|-------|-------------------|
| 1 雑褐色 | ローム粒子少量              | 4 雑褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量    |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量           |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量         | 6 雑褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片5点(壺5), 須恵器片18点(坏13, 蓋2, 甕3), 鉄滓4点がほぼ全城から散在して出土している。第171図1は北東部の床面から出土している。また, 鉄滓4点は混入したものである。

所見 本跡は棚状施設を有する住居跡であり, 時期は出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第171図 第1362号住居跡・出土遺物実測図

ム土を主体とする暗褐色土や黒褐色土を埋め戻して使用され、肌状を呈している。また、竈材が検出されていないことから、炉の可能性も考えられる。

竈土層解説

- |        |                       |        |                   |
|--------|-----------------------|--------|-------------------|
| 1 暗赤褐色 | 灰土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量 | 4 黒褐色  | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色  | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量   | 5 暗褐色  | ローム粒子中量           |
| 3 灰暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量          | 6 極暗褐色 | ローム粒子少量           |

ピット 13か所。P1～P10は深さ12～26cmで、壁際に規則的に並んで位置しており、壁柱穴と考えられる。P11～P13は不明である。

覆土 検出されなかった。

遺物出土状況 土師器片12点(碗3, 壺9), 須恵器片1点(壺), 鉄滓2点がピット内から出土している。第173図1はP1・3・9の覆土中から出土した破片が接合されたものであり, 2はP11, 3はP3, 鉄滓はP8・9の覆土中から出土したものである。

所見 本跡は長軸が短軸の2倍の長方形を呈しており, 他の住居跡とは様相を異にしている。時期は出土土器から10世紀前半と考えられ, 北側に隣接する第131号掘立柱建物跡の桁行と長軸方向を同じくし, 時期も同じと考えられることから, 本跡は同建物跡に付属する工房的な施設の一部として機能していたと推定される。



第173図 第1363号住居跡出土遺物実測図

第1363号住居跡出土遺物観察表 (第173図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	環	13.0	4.5	4.7	雲母・長石・石英	にぶい黄褐	普通	局部内へり過ぎ, 局部外側へり過ぎ	P1, P3, P9埋土中	P10489, 60%
2	土師器	環	[13.9]	3.9	[6.5]	長石・石英	橙	普通	局部内へり過ぎ, 局部外側へり過ぎ	P11 覆土中	P10490, 40%
3	土師器	高台付碗	-	(1.2)	[3.9]	雲母	灰黄褐	普通	高台部ロクロナデ	P3 覆土中	P10491, 5%

第1364号住居跡 (第174図)

位置 調査区東部のP12d6区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。また, 本跡から東へ8mの距離には, 同時期と考えられる第1372号住居跡が位置している。

重複関係 中央部の南寄りを東西に第70号溝跡に掘り込まれている。

規模と形状 1辺が3.30mほどの方形で, 主軸方向はN-3°-Eである。壁高は10～20cmで, 壁は外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で, 中央部がよく踏み固められており, 壁溝が周囲している。

竈 北壁の中央部に付設されており, 焚口部から煙道部まで85cm, 両袖部幅140cmである。壁外への掘り込みは50cmほどで, 袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し, 赤変硬化している。また, 煙道は火床部から急な傾斜で立ち上がる。

竈土層解説

- |        |                           |        |                            |
|--------|---------------------------|--------|----------------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 | 5 暗褐色  | 砂粒中量, ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 灰褐色  | ローム粒子・砂粒中量, 粘土粒子少量        | 6 灰褐色  | ローム粒子・砂粒中量, 焼土粒子・炭化粒子少量    |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, 砂粒少量              | 7 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, ローム粒子少量            |
| 4 暗褐色  | 砂粒中量, ローム粒子少量             | 8 暗赤褐色 | 灰土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子少量   |

第 1362 号住居跡出土遺物観察表 (第 171 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[12.8]	3.7	[8.6]	長石・石英	灰	普通	体部下端・底部回転ヘラ削り	北東部床面	P10485, 40%
2	須恵器	坏	[12.8]	4.1	[7.5]	長石・石英	灰	普通	体部下端・底部回転ヘラ削り	東壁際床面	P10486, 20%
3	土師器	壺	[19.6]	(8.2)	-	炭埴・長石・石英	にぶい橙	普通	体部内・肩ヘラナデ・数回・輪彫み	中央部床面	P10487, 5%
4	土師器	壺	-	(14.8)	[9.4]	長石・石英	橙	普通	体部外側ヘラ削り後、ヘラ磨き、内面ヘラナデ・輪彫み、蓋部木炭灰	竈火床部・北西部床面	P10488, 20%

第1363号住居跡 (第172・173図)

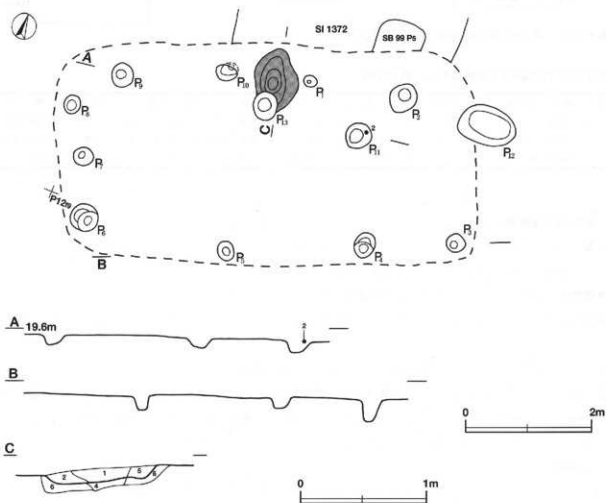
位置 調査区東部のP12e9区に位置し、南東に緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 北壁部分で第1372号住居跡と第99号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 床面が露出した状態で検出され、壁の立ち上がりが確認されなかったため、暗褐色を呈した床面の広がりやピットの位置から判断して、N-23°-Wを主軸とする長軸6.66m、短軸3.48mの東西に長い長方形と推定される。

床 耕作によって硬化面が削平されたため、硬化面は確認されず、また壁溝も認められない。

竈 北壁際の中央部に付設されており、火床部だけが遺存している。火床面は16cmほど掘り窪めた部分にロー



第 172 図 第 1363 号住居跡実測図



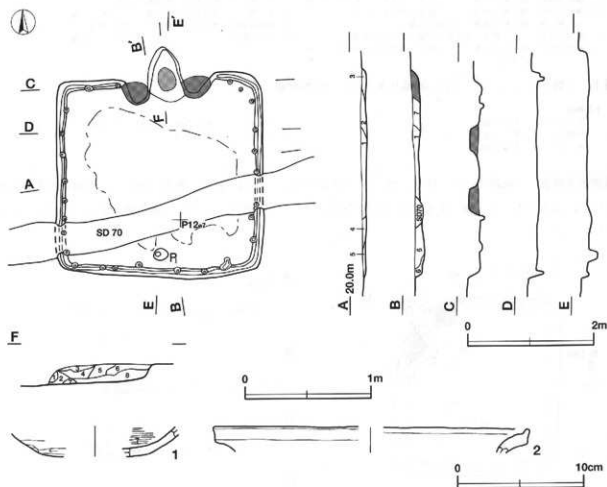
ピット 1か所。P1は深さ17cmで、南壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。また、壁溝内からはほぼ等間隔に深さ10cmほどの小ピット26か所が確認されており、壁柱穴と考えられる。  
覆土 7層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量	5 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子・砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子少量	6 褐色	ローム粒子多量
3 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物少量	7 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
4 暗褐色	ローム粒子中量		

遺物出土状況 土師器片6点(坏3, 甕3), 須恵器片3点(坏3)がほぼ全域から散在した状態で出土している。第174図1は南西部, 2は北西部の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は出土土器から8世紀前半と考えられ、本跡から東へ8mの距離に位置する第1372号住居跡と住居の主軸方向や規模が近似しており、両跡は同時期に存在したことが想定される。



第174図 第1364号住居跡・出土遺物実測図

第1364号住居跡出土遺物観察表(第174図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	-	(25)	[7.8]	雲母・長石・石英	にぶい黄褐色	普通	胴部内へ手摺り, 底縁部外側へ手摺り	南西部覆土中	P10492, 5%
2	土師器	甕	[25.0]	(20)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	北西部覆土中	P10493, 3%

第1365号住居跡 (第175・176図)

位置 調査区東部のP12c5区に位置し、平坦な台地の縁辺部に立地している。

重複関係 北側部分で第1366号住居跡を掘り込み、南壁寄りの中央部を第115号掘立柱建物跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.82m、短軸2.68mの方形で、主軸方向はN-6°-Eである。壁高は8~20cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

床 ほば平坦で、壁際を除きよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北東コーナー部に付設されており、焚口部から煙道部まで100cm、両袖部幅115cmである。袖部は、コーナー部の壁面に砂質粘土を貼り付けて構築されている。火床面は浅い皿状を呈し、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

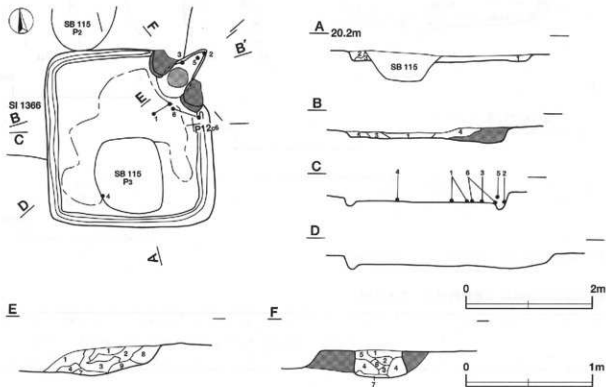
- |                                     |                         |
|-------------------------------------|-------------------------|
| 1 赤暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量    | 6 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量       |
| 2 赤暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量         | 7 赤褐色 焼土粒子・炭中量、ローム粒子少量  |
| 3 赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子少量                 | 8 赤暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量  |
| 4 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量          | 9 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 5 強暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |                         |

覆土 5層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

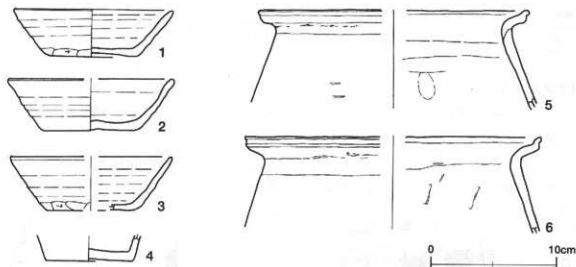
- |               |                              |
|---------------|------------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量 | 4 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量 | 5 褐色 ローム粒子中量                 |
| 3 褐色 ローム粒子中量  |                              |

遺物出土状況 土師器片14点(坏9, 甕5), 須恵器片22点(坏14, 蓋3, 甕4, 壺1)が竈周辺の覆土下層を中心に出土している。竈の火床部からは第176図2・3・5が出土しており、竈手前の床面からは1・6が出土している。



第175図 第1365号住居跡実測図

所見 本跡は、コーナー部に竈が構築された小形の住居跡である。時期は出土土器から8世紀後半と考えられ、コーナー竈をもつ初現的な住居跡といえる。



第176図 第1365号住居跡出土遺物実測図

第1365号住居跡出土遺物観察表(第176図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴	出土位置	備考
1	須恵器	環	12.5	3.7	7.1	長石・石英	灰	普通	裾下唇折れ内傾し、裾部深め内傾	竈手前床面	7904A, 100%, PL55
2	須恵器	環	[12.8]	4.1	7.4	雲母・長石・石英	灰黄	普通	裾部深め内傾し、一方角の内傾	竈火床部	P10495, 50%
3	須恵器	環	[12.6]	4.3	[6.9]	長石・石英	灰	普通	裾下唇折れ内傾し、裾部深め内傾	竈火床部	P10496, 30%
4	須恵器	壺	-	(2.0)	[6.9]	長石	黄灰	普通	唇部クロナサ、東部凹陥内傾	南西部床面	P10497, 10%
5	土師器	甕	[21.2]	(7.9)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口縁折れナシ、唇折れ折れナシ・凹陥	竈火床部	P10498, 5%
6	土師器	甕	[23.3]	(7.5)	-	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁折れナシ、唇折れ折れナシ・凹陥	竈手前床面	P10499, 5%

### 第1367号住居跡(第177図)

位置 調査区東部のP12c7区に位置し、南に傾斜した台地の南端部に立地している。

重複関係 西側部分を第1368号住居跡、竈手前と南壁中央部を第131号掘立柱建物跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.68m, 短軸3.34mの方形で、主軸方向はN-4°-Wである。壁高は12~15cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

床 はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝は北東コーナー部の壁際と南壁際で認められる。

竈 北壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで70cm, 両袖部幅110cmである。壁外への掘り込みはほとんどなく、袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

#### 土層解説

1 棕褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	7 暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子少量
2 暗赤褐色	焼土粒子多量、炭化粒子少量	8 暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量
3 暗褐色	ローム粒子中量	9 極暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子少量
4 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	10 極暗赤褐色	ローム粒子・焼土ブロック少量
5 暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子少量	11 暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量
6 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量		

ピット 3か所。主柱穴はP1~P3で、深さは14~25cmである。南東コーナー部に想定される主柱穴は攪乱

により遺存していない。

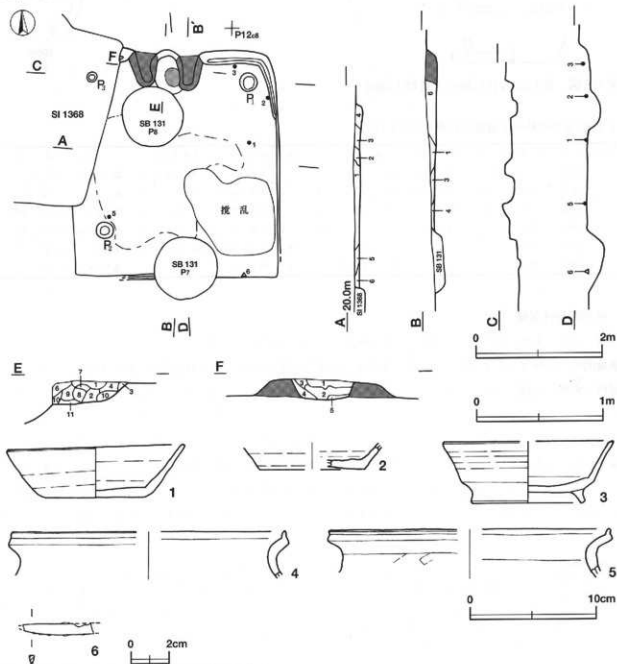
**覆土** 6層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

**土層解説**

1 雑褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	4 暗褐色	ローム粒子中量
2 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	5 暗褐色	ローム粒子中量
3 雑褐色	ローム粒子少量	6 暗褐色	ローム粒子中量

**遺物出土状況** 土師器片5点(甕5), 須恵器片14点(杯6, 蓋4, 甕4), 刀子1点が壁際の覆土下層を中心に出土している。第177図1・2・5・6はいずれも床面からの出土で、とくに1は中央部の東寄りからはほぼ完形の状態ですべて出土しており、住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

**所見** 本跡の時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられ、本跡の南5mの距離に位置する第1362号住居跡と住居の規模や主軸方向などが近似しており、両跡は同一の集落を構成していたと想定される。



第177図 第1367号住居跡・出土遺物実測図

第1367号住居跡出土遺物観察表(第177図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	13.9	4.1	7.8	雲母・長石・石英	灰褐色	普通	底部一方のヘラ削り	東側寄り床面	P1053, 80%, P157
2	須恵器	坏	-	(2.1)	[8.4]	雲母	灰	普通	底部多方向のヘラ削り	北東部床面	P10504, 10%
3	須恵器	高台付坏	[13.4]	4.9	9.0	雲母・長石・石英	灰黄	普通	底部側面ヘラ削り兼、高台削り付	北東部下層	P10505, 50%
4	土師器	甕	[21.6]	(3.8)	-	雲母・長石	にぶい橙	普通	口縁部内・外面クロコナテ	覆土中	P10506, 5%
5	土師器	甕	[22.0]	(3.9)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内・外面クロコナテ	南西部床面	P10507, 5%

番号	器種	長さ	幅	重ね	重量	材質	特徴	出土位置	備考
6	刀子	(3.8)	(0.6)	0.3	(1.6)	鉄	刃部の破片、切先・基部欠損。	南東部床面	M10103

第1368号住居跡(第178図)

位置 調査区東部のP12c7区に位置し、わずかに南に傾斜した台地の南端部に立地している。

重複関係 東側部分で第1367号住居跡を掘り込み、北西コーナー部と南西コーナー部を第97号掘立柱建物跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.00m、短軸2.90mの方形で、主軸方向はN-14°-Eである。壁高は12~16cmで、壁は外方向に閉き気味に立ち上がる。

床 はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部までの長さ85cm、両袖幅95cmである。壁外への掘り込みはほとんどなく、袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道は火床部から急な傾斜で立ち上がる。

覆土層解説

1	灰褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量	11	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
2	暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量	12	暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子中量
3	暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子少量	13	暗褐色	粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
4	暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量	14	暗褐色	粘土粒子中量、砂粒・ローム粒子少量
5	にぶい赤褐色	粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子少量	15	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒中量
6	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	16	暗赤褐色	ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
7	灰黄褐色	粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子少量	17	灰褐色	炭化粒子・砂粒中量、ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子少量
8	暗赤褐色	焼土粒子多量、炭化粒子少量	18	暗赤褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
9	褐色	ローム粒子多量	19	暗赤褐色	焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子少量
10	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量			

ピット 1か所。P1は深さ16cmで、竈と対峙する位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。また、壁溝内から深さ10~15cmの小ピット20か所が検出されており、壁柱穴と考えられる。

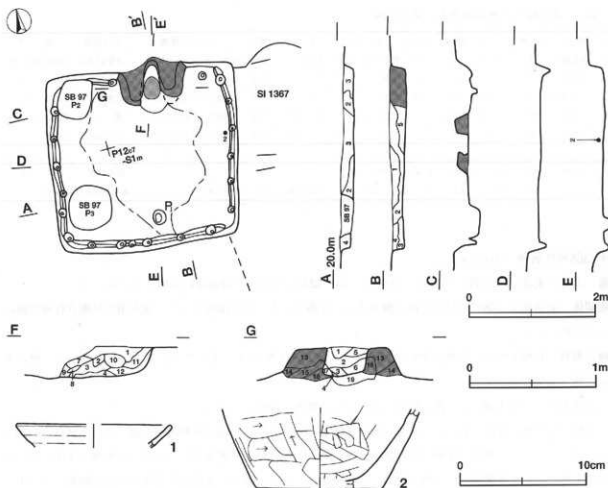
覆土 5層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	4	暗褐色	ロームブロック中量
2	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	5	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
3	褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量			

遺物出土状況 土師器片3点(甕3)、須恵器片8点(坏7、蓋1)が散在した状態で出土している。第178図1は貼床下の覆土中、2は東壁際中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、重複関係及び出土土器の形状から見て9世紀代と考えられる。



第178図 第1368号住居跡・出土遺物実測図

第1368号住居跡出土遺物観察表(第178図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[122]	(19)	-	長石・石英	灰	普通	体部口ケロ成形	貼床覆土中	P10508, 5%
2	土師器	甕	-	(6.5)	[100]	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ、底部多方向のヘラ削り	東壁際下層	P10509, 10%、 外面磁材付着

### 第1369号住居跡(第179・180図)

**位置** 調査区東部のO12i5区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。また、西側部分は調査区域外に延びている。

**重複関係** 南東壁部分で第1370号住居跡、北コーナー部で第91号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 西側部分が調査区域外に延びているため、全容は不明である。南東-北西軸は3.40mであり、南西-北東軸は2.50mだけが確認された。主軸方向はN-63°-Eで、平面形は方形または長方形と推定される。また、壁高は8cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で、全体的にやや軟弱であり、甕の手前に一部硬化面が認められる。また、壁溝は認められない。

**竈** 北東壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで85cm、両袖部幅110cmである。壁外への掘り込みは25cmほどで、袖部は基部だけが遺存し、床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床面

は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道の立ち上がり部には土師器甕や椀が支脚として据えられており、煙道は火床部から急な傾斜で立ち上がっている。

甕土層解説

- |         |                       |          |                       |
|---------|-----------------------|----------|-----------------------|
| 1 黒褐色   | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量     | 6 暗赤褐色   | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 2 暗赤褐色  | ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量   | 7 極暗赤褐色  | 焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子少量   |
| 3 暗赤褐色  | 焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子少量 | 8 暗赤褐色   | 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 4 極暗赤褐色 | 炭化物中量、ローム粒子・焼土粒子少量    | 9 暗赤褐色   | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量   |
| 5 暗赤褐色  | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量   | 10 極暗赤褐色 | 炭化粒子中量、焼土粒子少量         |

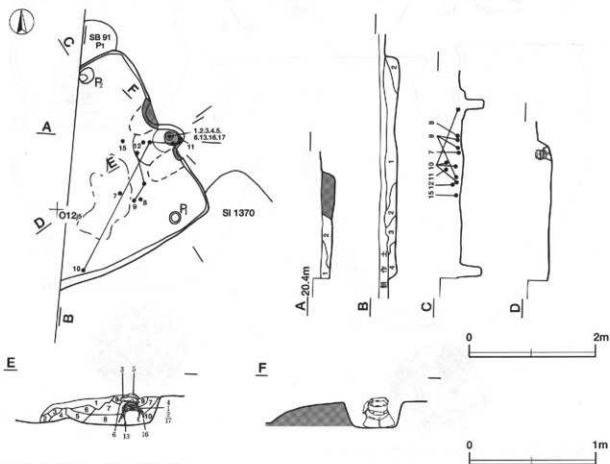
ピット 2か所。主柱穴はP1・2で、深さはいずれも36cmである。

覆土 4層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

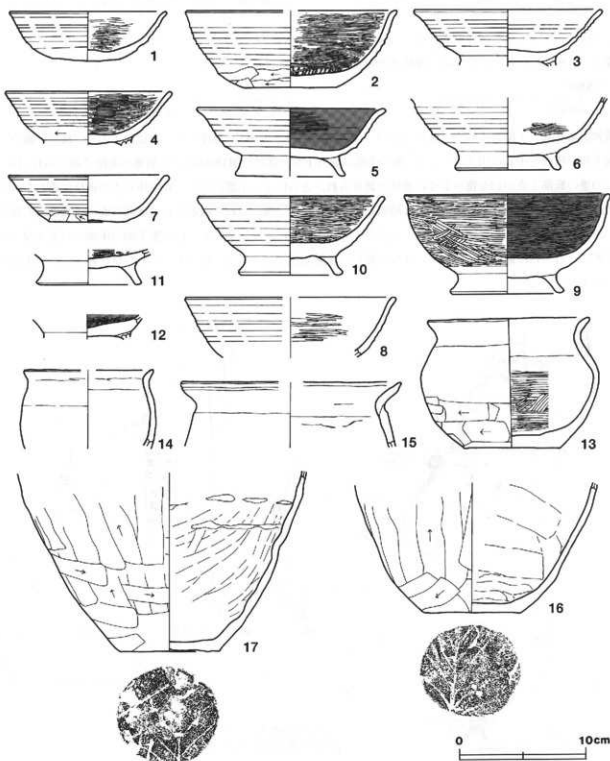
- |        |             |       |                     |
|--------|-------------|-------|---------------------|
| 1 黒褐色  | 焼土粒子・炭化粒子少量 | 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量   |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子少量     | 4 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片57点(椀42, 甕15), 灰釉陶器片1点(瓶), 鉄滓1点, 炭化種子1点(桃)が竈内や竈手前の床面を中心に出土している。竈の煙道の立ち上がり部には第180図13の小形甕が逆位で据えられ、16・17の甕の底部2点が13を覆うように逆位で被せられ、さらにその上部には1~6の坏6点が逆位で重ねられた状態で出土している。これらの土器は隙間を焼土化した土で埋められて固定され、体部外面には被熱痕も認められており、支脚として使用されていたものと考えられる。また、7~9・15は竈手前の床面から若干浮いた位置で、11・12は竈の火床部からいずれも破片の状態出土している。桃と考えられる炭化種子は、火床部から出土している。



第179図 第1369号住居跡実測図

所見 支脚として使用された土器の総数は9点にもおぼり、この数は第180図13の小形甕だけでは不足する高さを補い、さらに適正な高さにするための微調整を行った結果と推定される。また、本跡の竈から出土した桃の炭化種子は当遺跡において最も多く出土する果実種であり、これまでの分析結果から、栽培種の可能性が指摘されている。本跡の時期は、出土土器から10世紀前半と考えられる。



第180図 第1369号住居跡出土遺物実測図



第1369号住居跡出土遺物観察表(第180図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	12.3	4.1	5.4	長石・赤色粒子	橙	普通	体部内面へラ磨き, 底部面へラ切り後, 一方のへラ磨り	竈火床部	P10512, 60%, 支脚転用, PL57
2	土師器	坏	[16.6]	6.1	7.2	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下縁手持ちへラ磨り, 内面へラ磨き, 底部一方のへラ磨り	竈火床部	P10513, 60%, 支脚転用, PL57
3	土師器	高台付碗	14.6	(4.5)	-	長石・赤色粒子	橙	普通	体部口縁口整形, 高台磨り付け後, ロクロナデ	竈火床部	P10515, 80%, 支脚転用, PL57
4	土師器	高台付碗	13.0	(4.3)	-	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面へラ磨き, 高台磨り付け後, ロクロナデ	竈火床部	P10516, 70%, 支脚転用, PL57
5	土師器	高台付碗	14.5	5.4	[8.2]	長石・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	体部内面へラ磨き, 底部斜縁へラ磨り後, 高台磨り付け	竈火床部	P10518, 60%, 支脚転用, PL57
6	土師器	高台付碗	-	(5.8)	7.8	石英・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	体部内面へラ磨き, 高台磨り付け後, ロクロナデ	竈火床部	P10519, 60%, 支脚転用
7	土師器	坏	12.6	3.8	3.0	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部下縁へラ磨り, 底部一方のへラ磨り	竈手前下層	P10511, 60%
8	土師器	坏	[16.6]	(4.8)	-	赤色粒子	橙	普通	体部口縁整形, 内面へラ磨き	竈手前下層	P10514, 20%
9	土師器	高台付碗	16.0	7.9	8.4	石英・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面口縁整形, へラ磨き	竈手前下層	P0517, 60%, PL56
10	土師器	高台付碗	14.6	6.3	7.8	石英	橙	普通	体部内面へラ磨き, 底部斜縁へラ切り後, 高台磨り付け	竈火床部・南東壁下層	P10520, 60%, PL57
11	土師器	高台付碗	-	(2.8)	7.6	石英・赤色粒子	橙	普通	底部面へラ磨り後, 高台磨り付け	竈火床部	P10521, 20%
12	土師器	高台付碗	-	(2.0)	-	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	斜縁へラ磨り, 高台磨り付け	竈火床部	P10522, 10%
13	土師器	小形壺	12.6	10.4	7.4	長石	にぶい橙	普通	体部外面上縁ナデ・下位へラ磨り, 内面へラ磨き, 底部二方向のへラ磨り	竈火床部	P10523, 90%, 支脚転用, PL56
14	土師器	壺	[10.2]	(6.3)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部整形, 体部内・外面ナデ	竈土中	P10524, 30%
15	土師器	壺	[17.4]	(5.2)	-	雲母・長石・石英	にぶい黄褐	普通	口縁部整形, 体部内・外面ナデ・斜縁部	竈手前下層	P10525, 10%
16	土師器	壺	-	(10.4)	7.8	長石・石英	橙	普通	体部外面へラ磨り, 内面へラナデ, 底部木蓋痕	竈火床部	P10526, 40%, 支脚転用
17	土師器	壺	-	(14.3)	7.8	長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部外面へラ磨り, 内面へラナデ・輪痕み痕, 底部木蓋痕	竈火床部	P10527, 40%, 支脚転用

## 第1370号住居跡(第181・182図)

位置 調査区東部のO12j5区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。

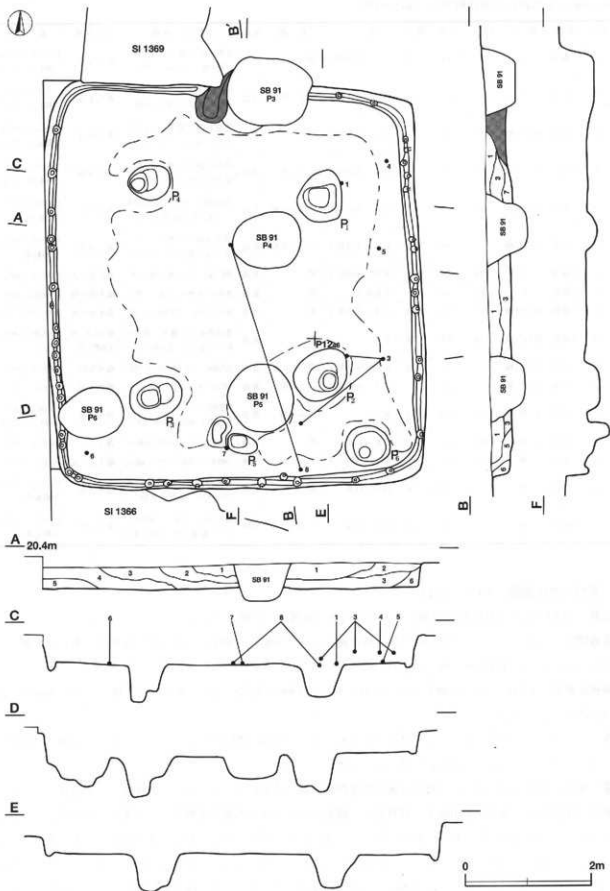
重複関係 南西コーナー部で第1366号住居跡を掘り込み, 北壁の西側部分を第1369号住居跡, 竈や中央部, 南壁際を第91号掘立柱建物跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.38m, 短軸5.96mの方形であり, 主軸方向はN-1°-Wである。壁高は35~50cmで, 壁はほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で, 壁際を除いてよく踏み固められており, 壁溝が周回している。また, P5の西側には弧状の高まりが認められ, 出入り口施設に伴うものと考えられる。

竈 北壁の中央部に付設され, 第91号掘立柱建物跡に掘り込まれているために, 西袖部だけが遺存している。袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されており, 内側が火熱を受けて赤変している。

ピット 6か所。主柱穴はP1~P4が相当し, 深さは50~65cmである。P5は深さ40cmで, 竈と対峙する位置にあり, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ35cmで, 形状から柱穴と考えられるが, 本跡に伴うものか不明である。また, 壁溝内から深さ10cmほどの小ピット41か所が検出されており, 壁柱穴と考えられる。



第181图 第1370号住居跡実測图

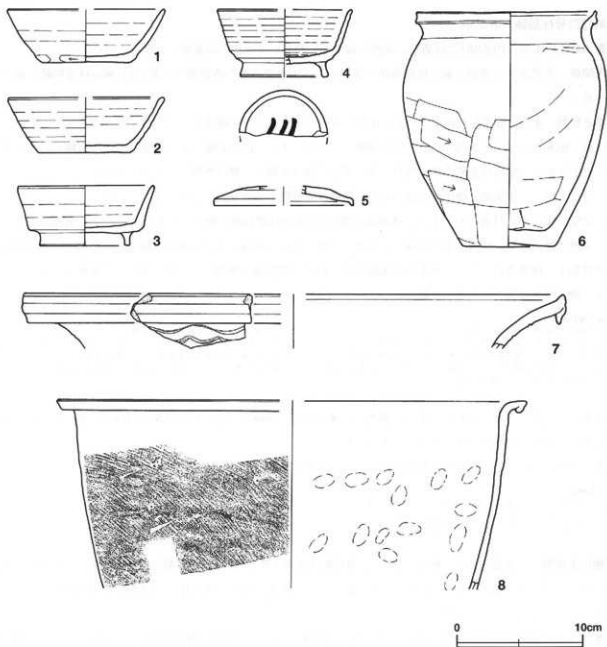
覆土 7層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- |        |                     |        |                          |
|--------|---------------------|--------|--------------------------|
| 1 底暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量   | 5 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量        |
| 2 暗褐色  | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 暗褐色  | ローム粒子中量                  |
| 3 暗褐色  | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 極暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量 |
| 4 暗褐色  | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |        |                          |

遺物出土状況 土師器片19点(甕18, 鉢1), 須恵器片66点(杯38, 蓋10, 甕17, 甕1), 灰釉陶器片2点(瓶2)がほぼ全域から散在した状態で出土している。第182図1・6～8はいずれも床面からの出土であり、とくに6は南西コーナー部の床面から破砕された状態でまともに出て出土し、本跡廃絶時に投棄されたものと考えられる。また、4は北東コーナー部の覆土下層から出土しており、底部外面に「川」と墨書されている。

所見 本跡の時期は出土土器から8世紀後葉と考えられ、本跡は当調査区におけるこの時期の最大の住居跡である。本跡の西壁際は調査区域外と接しており、この時期の集落はさらに西方に広がる可能性がある。



第182図 第1370号住居跡出土遺物実測図

第1370号住居跡出土遺物観察表(第182図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[124]	4.3	7.0	長石	灰	普通	輪削(肩付)あり、膝部へう割り	北東部床面	P10528, 50%
2	須恵器	坏	[122]	4.4	7.4	雲母・長石・石英	灰	普通	底面へう割りあり、多分へう割り	覆土中	P10529, 40%
3	須恵器	高台付坏	10.7	4.7	7.0	長石・石英	灰	普通	底面へう割りあり、高台付付	南東部下層	PH50, 70%, PL58
4	須恵器	高台付坏	[106]	5.4	[68]	雲母	灰	普通	底部回転へう割り後、高台付付	南東部下層	P10785, 30%, 墨書「川」, PL65
5	須恵器	甕	[110]	(15)	-	長石・石英	灰	普通	天井部左側の回転へう割り	東壁際床面	P10531, 20%
6	土師器	甕	14.1	18.7	7.2	石英・赤色粒子	黒褐	普通	胴部不明り、内面ナデ、底部ナデ	南西部床面	PH52, 70%, PL57
7	須恵器	甕	[428]	(43)	-	長石・針状鉱物	灰	良好	口縁部ナデ、脚状工具による成形	南壁際床面	P10533, 5%
8	須恵器	鉢	[370]	(15.0)	-	長石	灰	普通	口縁部ナデ、底部ナデ、外周部ナデ	中央部・南壁際床面	P10534, 10%

第1371号住居跡(第183図)

位置 調査区東部のP1249区に位置し、南西に緩やかに傾斜した台地の南端部に立地している。

重複関係 東壁部分で第99号掘立柱建物跡を掘り込み、中央部と竈の西側部分を第131号掘立柱建物跡に掘り込まれている。

規模と形状 南西に傾斜した地形のため、南壁と東壁の立ち上がりを確認することはできなかったが、ピットの位置や暗褐色を呈した床面の広がりから判断して、N-13°-Eを主軸とする長軸3.26m、短軸3.12mの方形と推定される。壁高は北壁の最も残りのよい部分で10cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部に硬化面が認められ、壁溝は北壁際から西壁際にかけて巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されており、西袖部は第131号掘立柱建物跡に掘り込まれたことにより遺存していない。規模は焚口部から煙道部まで75cmで、壁外への掘り込みは40cmである。袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されており、火床面は床面と同じ高さの平坦面を使用し、火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

- |                                |                           |
|--------------------------------|---------------------------|
| 1 灰暗赤褐色 焼土粒子中量                 | 6 灰黄褐色 粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子少量  |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量     | 7 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量     | 8 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量     |
| 4 だいぶ赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量 | 9 灰暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 5 暗褐色 ローム粒子少量                  |                           |

ピット 5か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは15~18cmである。P5は深さ17cmで、竈と対峙する位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

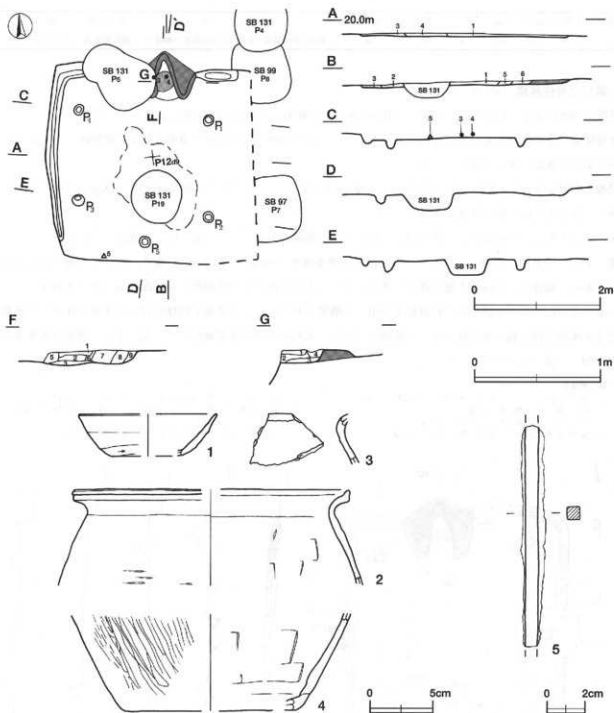
覆土 6層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- |                           |                             |
|---------------------------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量     |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量             | 5 褐色 ローム粒子少量                |
| 3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量      | 6 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物・砂粒少量 |

遺物出土状況 土師器片5点(碗2, 甕3), 須恵器片2点(坏2), 棒状の鉄製品(釘カ)1点が散在した状態で出土している。第183図3・4はいずれも竈内からの出土であり、5の棒状の鉄製品は南壁際の床面から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物が細片のため特定が困難であるが、小形の須恵器坏がみられることや土師器甕の作りが丁寧であることなどから8世紀後半と考えられる。



第183図 第1371号住居跡・出土遺物実測図

第1371号住居跡出土遺物観察表 (第183図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[11.2]	(3.3)	[5.6]	長石	灰	普通	体部下縁斜めヘラ目付リ、ワカ目付内ハ	覆土中	P10786, 5%
2	土師器	甕	[21.8]	(7.6)	-	雲母・長石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ、体部内・外縁ヘラナデ	覆土中	P10787, 5%
3	土師器	甕	-	(5.2)	-	雲母・長石・石英	橙	普通	体部内・外面ナデ	竈火床部	P10535, 3%
4	土師器	甕	-	(7.7)	[13.4]	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部内縁ヘラ目付、口縁ヘラナデ・輪脚ナデ	竈火床部	P10536, 5%

番号	部種	高さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5	不明	(11.8)	0.7	0.7	(52.0)	鉄	断面方形の棒状。釘、或いは結締車の軸部。	南壁際床面	M10194

### 第1372号住居跡 (第184・185図)

**位置** 調査区東部のP1249区に位置し、南西に緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

**重複関係** 南側部分を第1363号住居跡、南東コーナー部と西壁の中央部分を第99号掘立柱建物跡、中央部を東西に第70号溝跡に掘り込まれている。

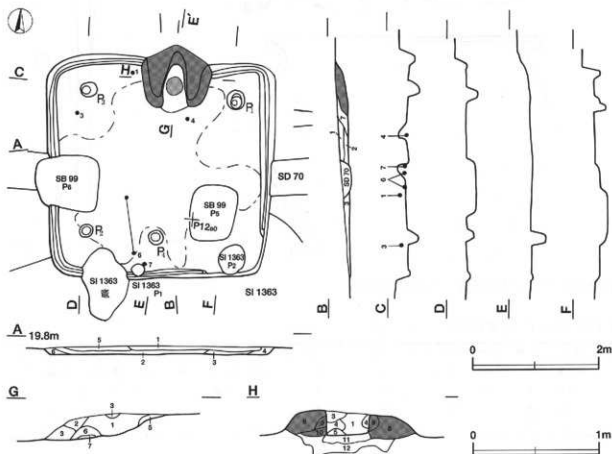
**規模と形状** 1辺が3.60mほどの方形で、主軸方向はN-3°-Wである。壁高は北壁で18cm、南壁で2cmを測り、壁は外方向に開き気味に立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝は南東コーナー部を除いて周回している。

**竈** 北壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで95cm、両袖部幅105cmで、壁外への掘り込みは20cmである。袖部は、15cmほど掘り窪めた部分にローム土を主体とした暗褐色土を床面の高さまで埋め戻し、その上にさらにローム土混じりの砂質粘土を用いて構築されている。火床面も同様にローム土を主体とした暗褐色土を床面と同じ高さまで埋め戻して使用しており、火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

#### 竈土層解説

- |         |                   |        |                          |
|---------|-------------------|--------|--------------------------|
| 1 灰暗褐色  | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 5 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子少量    |
| 2 黒褐色   | 焼土粒子少量            | 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量 |
| 3 黒褐色   | 焼土粒子・炭化粒子少量       | 7 赤褐色  | 焼土粒子中量、ローム粒子・灰少量         |
| 4 灰暗赤褐色 | ローム粒子・焼土ブロック少量    |        |                          |



第184図 第1372号住居跡実測図

- |                                 |                                  |
|---------------------------------|----------------------------------|
| 8 灰褐色 粘土粒子・砂粒中量, ローム粒子少量        | 11 暗赤褐色 焼土粒子多量, 炭化粒子・灰少量         |
| 9 にぶい赤褐色 焼土粒子中量, 粘土粒子・砂粒少量      | 12 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量 |
| 10 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子中量, 炭化粒子・砂粒少量 |                                  |

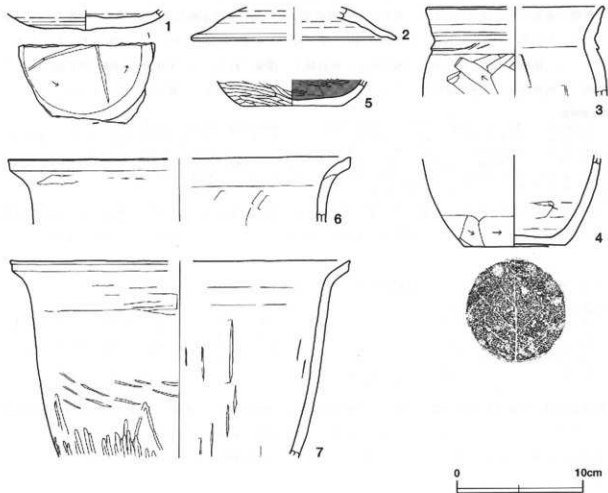
ピット 4か所。主柱穴はP1～P3が相当し、深さは15～20cmである。南東コーナー部に想定される主柱穴は、第99号掘立柱建物跡に掘り込まれたことにより遺存していない。P4は深さ24cmで、竈と対峙する位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 7層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

- |                            |                           |
|----------------------------|---------------------------|
| 土層解説                       |                           |
| 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量    | 5 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量     |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 褐色 ローム粒子多量              |
| 3 暗褐色 ローム粒子中量              | 7 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 4 褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子少量  |                           |

遺物出土状況 土師器片11点(杯2, 甕8, 瓶1), 須恵器片6点(杯3, 蓋2, 甕1)がほぼ全域から散在した状態で出土している。第185図4は竈手前の床面, 6は南壁寄りの床面からいずれもつぶれた状態でまともな状態で出土しており, 住居廃絶時に投棄されたものと考えられる。また, 2は竈内から出土している。南西部の覆土中から出土した5の甕の底部片は破断面が研磨されており, 上部を欠損した後も甕あるいは鉢の代用として使用されたと考えられる。

所見 本跡の時期は出土土器から8世紀前葉と考えられ, 住居の規模, 形状共に当該期の住居形態の典型である。



第185図 第1372号住居跡出土遺物実測図

第1372号住居跡出土遺物観察表（第185図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	-	(1.6)	7.0	雲母・長石	灰黄	普通	体部ロクロ整形、底部回転ヘラ削り	甕西側中層	P10537, 20%, 底部ヘラ磨き「x」
2	須恵器	蓋	[1.6]	(2.6)	-	雲母	灰灰	普通	外周部・口縁部ロクロナデ	甕火床部	P10541, 10%
3	土師器	甕	[1.40]	(7.1)	-	雲母	にぶい赤褐	普通	体部外周へラ削り、内面ヘラナデ	北西部中層	P10539, 5%
4	土師器	甕	-	(7.8)	8.0	長石・石英	にぶい橙	普通	体部ヘラ削り、内面・口縁部	甕手前床面	P10540, 30%
5	土師器	甕	-	(2.1)	[8.0]	赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部内・外面及び底部ヘラ磨き	甕南側土中	P10542, 10%, 坏に転用
6	土師器	甕	[25.4]	(5.2)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部ナデ、体部内・外面ヘラナデ	甕南側土中	P10338, 5%
7	土師器	甕	[26.9]	(15.7)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部ナデ、体部外面上位ヘラナデ・下位ヘラ磨き、内面ヘラナデ	甕南側土中 P4覆土中	P10543, 30%

第1373号住居跡（第186図）

位置 調査区東部のO12h7区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 中央部西寄り第116号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.44m、短軸3.20mの方形で、主軸方向はN-1°-Eである。壁高は14~20cmで、壁は外方向に開き気味に立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は認められない。

竈 北壁の東寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで95cm、両袖部幅125cmで、壁外への掘り込みは40cmである。天井部は崩落しており、土層断面図中の第8層が天井部の崩落土に相当し、砂粒や粘土粒子を多く含んでいる。袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されており、火床面も同様に地山面をそのまま使用し、火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

甕土層解説

- |                              |                                |
|------------------------------|--------------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量 | 7 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子中量             |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化物少量    | 8 灰褐色 砂粒少量、粘土粒中量、ローム粒子・焼土粒子少量  |
| 3 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子少量   | 9 にぶい赤褐色 焼土粒子・砂粒中量、ローム粒子・粘土粒少量 |
| 4 黒褐色 炭化物中量、ローム粒子・焼土粒子少量     | 10 黒褐色 焼土粒子少量                  |
| 5 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量   |                                |
| 6 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量      |                                |

ピット 3か所。主柱穴はP1~P3で、深さは24~36cmであり、北東コーナー寄りに想定される主柱穴は精査したが検出されなかった。また、壁際から深さ5~10cmの小ピット37か所が検出されており、壁柱穴と考えられる。

覆土 7層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

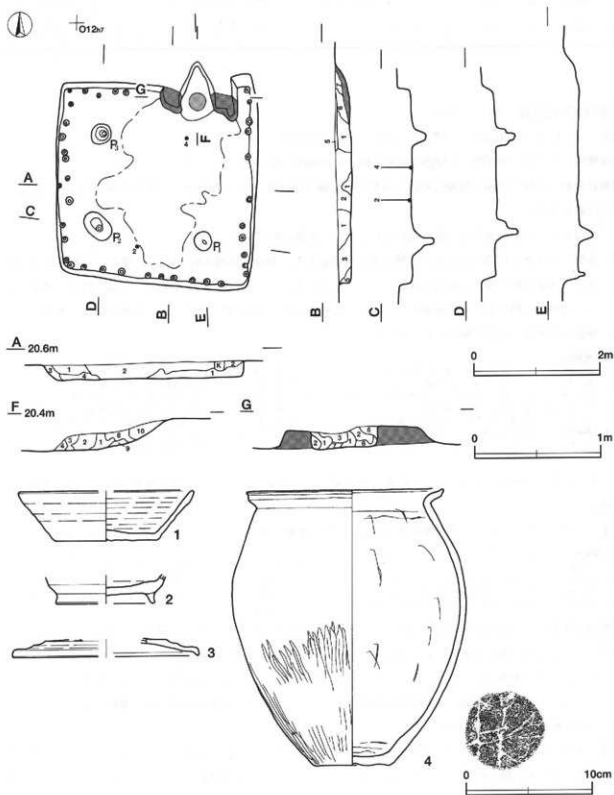
- |                        |                                  |
|------------------------|----------------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量   | 6 暗褐色 砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒少量 |
| 2 褐色 ロームブロック中量         | 7 黒褐色 炭化粒子・砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子・粘土粒少量 |
| 3 暗褐色 炭化粒子中量、ロームブロック少量 |                                  |
| 4 褐色 ローム粒中量            |                                  |
| 5 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量   |                                  |

遺物出土状況 土師器片5点（甕4、瓶1）、須恵器片20点（坏10、蓋4、甕6）、鉄銹2点がほぼ全域から散在した状態で出土している。第186図1は甕の火床部、2は南部の床面からそれぞれ出土している。また、4は電手前の床面から破片の状態でまとまって出土しており、住居廃絶時に投棄されたものと考えられる。鉄銹2点は混入したものである。

所見 本跡から検出された主柱穴は3か所であり、4本柱を想定した場合の北東コーナー寄りの主柱穴は検出



されなかった。主柱穴の想定される場所が竈の前面にあたり、作業をする際に不都合が生じるためと思われる。上屋は別の方法で支えられたことが考えられるが、その痕跡は確認されなかった。本跡の時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第186図 第1373号住居跡・出土遺物実測図

第1373号住居跡出土遺物観察表（第186図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[138]	3.9	[8.2]	雲母・石英	灰白	普通	底部回転へつ切り難し	甕置土中	P10544, 40%
2	須恵器	高台付坏	-	(2.3)	[7.6]	雲母・長石・石英	灰黄褐	普通	底部回転へつ切り難し, 高台部付	甕置寄り床面	P10545, 10%
3	須恵器	蓋	[14.6]	(1.4)	-	長石・石英	灰	普通	天井部石目りの回転へつ切り	南西部土中	P10546, 5%
4	土師器	甕	20.2	28.9	7.8	雲母・長石・石英	赭	普通	口縁部横ナズ, 身体外周土粒ナズ・下位へつくり, 内面へつナズ, 底部横ナズ	甕手前床面	P10547, 95%, 外観炭化付着, P157

第1374号住居跡（第187・188図）

位置 調査区東部のO1217区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 中央部と南壁際、東壁際を第93号掘立柱建物跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.92m、短軸3.82mの方形で、主軸方向はN-1°-Wである。壁高は28~43cmで、各壁ともほぼ直立する。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで90cm、両袖部幅160cmで、壁外への掘り込みは45cmである。袖部は掘り残した地山を基部として、その上部にローム土混じりの砂質粘土を貼り付けて構築されており、内側が火熱を受けて赤変硬化している。火床面は浅い皿状に掘り窪められ、火熱を受けて赤変しており、煙道は火床部から急な傾斜で立ち上がる。

甕土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・砂粒中量、粘土粒子少量	8 暗赤褐色	灰中量、焼土ブロック・炭化物少量
2 暗褐色	ローム粒子中量、砂粒少量	9 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子少量
3 暗赤褐色	ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・灰少量	10 暗褐色	ローム粒子少量、粘土粒子・砂粒中量
4 暗褐色	ローム粒子中量、砂粒少量	11 暗褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒中量
5 灰褐色	灰少量、焼土粒子・炭化粒子少量	12 暗褐色	粘土粒子少量、砂粒中量、ローム粒子少量
6 極暗赤褐色	炭化粒子中量、ローム粒子・焼土ブロック・砂粒少量	13 褐色	ローム粒子中量
7 暗褐色	粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子少量	14 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子少量

ピット 主柱穴は検出されていない。壁溝内から深さ5~10cmの小ピット11か所が検出されており、壁柱穴の可能性はある。

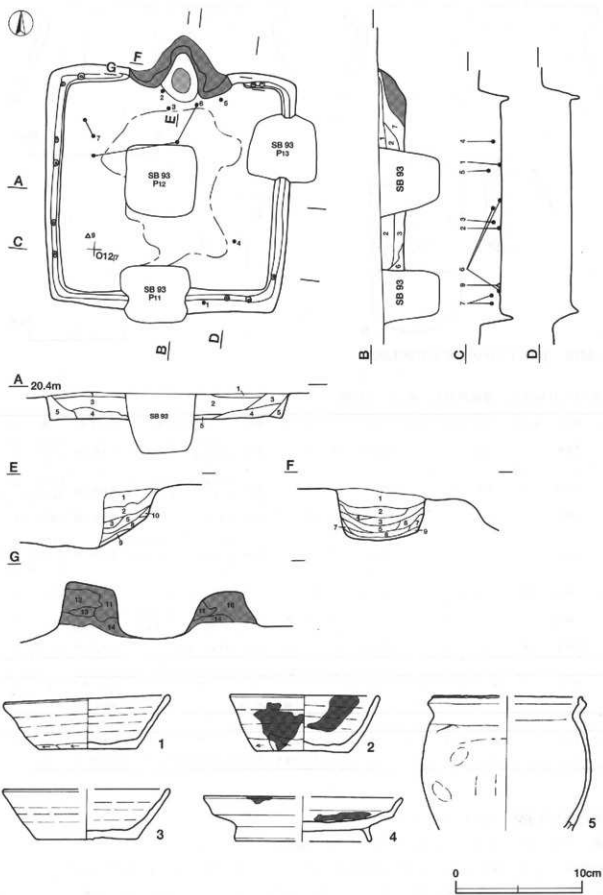
覆土 7層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

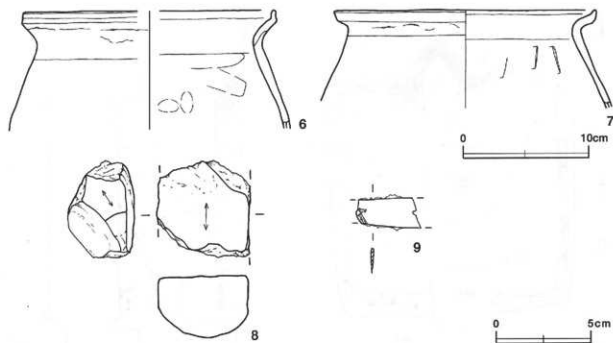
1 黒褐色	ローム粒子少量	5 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子少量
2 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量	6 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
3 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	7 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
4 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量		

遺物出土状況 土師器片20点（甕19, 瓶1）、須恵器片56点（坏39, 蓋3, 盤1, 甕13）、砥石1点、刀子1点、鉄滓2点が甕手前の覆土下層を中心に出土している。甕手前からは第187・188図2・3・5・6が出土しており、そのうち2は床面からの出土である。また、1は南壁際、9の刀子は南西部のいずれも床面から出土している。1・2の体部内・外面には炭化物が付着している。また、4の内面は研磨され、墨痕も認められることから、硯に転用されたと考えられる。

所見 本跡は主柱穴をもたない住居跡であり、時期は出土土器から8世紀後葉と考えられる。西には大形住居である第1370号住居跡が位置し、同住居跡を中心にして小形住居5軒が隣接しており、本跡もこれらの住居跡とともに同一の集落を構成していたと考えられる。



第187图 第1374号住居跡・出土遺物実測図



第188図 第1374号住居跡出土遺物実測図

第1374号住居跡出土遺物観察表 (第187・188図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	129	4.3	7.6	雲母・長石・石英	灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り、底部回転ヘラ切り後、一方向のヘラ削り	南東部床面	P10548, 100%, PL58
2	須恵器	坏	118	4.6	7.3	雲母	灰白	普通	体部下端手持ちヘラ削り、底部回転ヘラ切り後、ヘラナデ	甕手前床面	P10549, 70%, 内面磨削・擦痕有り, PL59
3	須恵器	坏	[130]	4.0	[7.8]	雲母・長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り難し	甕手前下部	P10550, 30%
4	須恵器	盤	[157]	3.6	[11.0]	雲母・長石・石英	灰白	普通	体部口クロナデ、底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	南東部下層	P10551, 30%, 内面磨削・擦痕有り、転用観あり
5	土師器	甕	[118]	(10.7)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部ナデ、体部内面ナデ・指痕	甕手前中層	P10552, 30%
6	土師器	甕	[198]	(9.4)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面ナデ、内面ヘラナデ・指痕	甕手前下層・西側寄り床面	P10553, 10%
7	土師器	甕	205	(7.8)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部ナデ、底部横ナデ・内面ナデ	北西部下層	P10554, 20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
8	砥石	(3.1)	4.9	(3.4)	(96.5)	凝灰岩	両側欠損、砥面2面。	北東部壁土中	Q10023

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
9	刀子	(3.5)	(1.6)	0.2	(3.3)	鉄	刃部の破片、刃先欠損、縄状の繊維質付着。	南西部床面	M10105

第1375号住居跡 (第189・190図)

位置 調査区東部のO12j0区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 中央部と東壁際を第98号掘立柱建物跡、南東コーナー部を第1181号土坑に掘り込まれている。

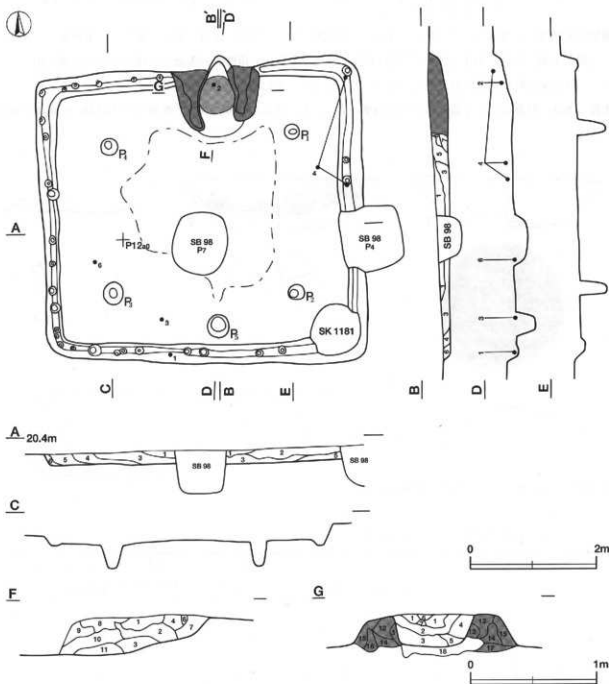
規模と形状 長軸5.18m、短軸4.90mの方形で、主軸方向はN-0°である。壁高は12~24cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

床 はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部に付設されており、規模は焚口部から煙道部まで130cm、両袖部幅135cmで、壁外への掘り込みは20cmである。袖部は床面と同じ高さの地山面上にローム土混じりの砂質粘土で構築されており、内側が火熱を受けて赤変硬化している。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、赤変硬化しており、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- |        |                        |          |                             |
|--------|------------------------|----------|-----------------------------|
| 1 暗褐色  | 粘土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量 | 7 極暗赤褐色  | 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量    | 8 褐色     | ローム粒子中量                     |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子少量         | 9 におい黄褐色 | 粘土粒子多量、ローム粒子少量              |
| 4 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化物少量     | 10 褐色    | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量    |
| 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ローム粒子少量       |          |                             |
| 6 黒褐色  | ローム粒子微量                |          |                             |



第189図 第1375号住居跡実測図

- 11 黒褐色 焼土粒子・炭化物中量  
 12 灰黄褐色 ロームブロック・粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子少量  
 13 暗赤褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量  
 14 灰黄褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒中量  
 15 暗褐色 ローム粒子・砂粒中量、粘土粒子少量  
 16 黒褐色 ローム粒子中量、粘土粒子・砂粒少量  
 17 灰褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒中量  
 18 にがい赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子少量

ビット 5か所。主柱穴はP1～P4で、深さは39～47cmである。P5は深さ35cmで、竈と対峙する位置にあり、出入り口施設に伴うビットと考えられる。また、深さ10cmほどの小ビット29か所が壁溝内から検出されており、壁柱穴と考えられる。

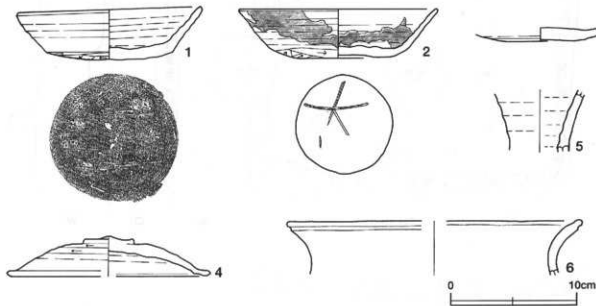
覆土 7層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量  
 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量  
 3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量  
 4 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量  
 5 暗褐色 ローム粒子中量  
 6 褐色 ロームブロック中量  
 7 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片13点(杯5, 甕8), 須恵器片28点(杯14, 蓋11, 壺2, 甕1)が東壁寄りや南壁寄りの覆土下層を中心に出土している。第190図1はほぼ完形で、南壁際の床面から伏せられた状態で出土しており、住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。また、2は竈の火床部から出土している。

所見 本跡の時期は出土土器から8世紀前半と考えられ、住居の規模や柱穴の配置など当該期の住居跡の典型である。



第190図 第1375号住居跡出土遺物実測図

第1375号住居跡出土遺物観察表(第190図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	杯	14.5	4.2	10.1	長石・黒色珪点	灰	普通	体部ロクロ整形、底部多方向のヘラ削り	南壁際床面	P10555, 100%, PL58
2	須恵器	杯	15.6	3.9	6.8	雲母・長石・赤色粒子	灰	普通	体部ロクロ整形、底部多方向のヘラ削り	竈火床部	P10556, 80%, 内外相違付着、底部ヘラ書き2大, PL58
3	須恵器	杯	-	(1.0)	4.8	長石・石英	灰	普通	底面軸へう削り、多方向へう削り	南壁際床面	P10557, 10%
4	須恵器	蓋	(15.4)	3.2	-	雲母・長石・石英	灰	普通	天井部左回りの回転へう削り	東壁際下層	79058, 60%, PL58

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5	須臾器	長頸壺	-	(50)	-	長石	灰	良好	頸部口クロ整形	東西部覆土中	P10559, 5%, 外面自然釉
6	土師器	壺	[23.2]	(48)	-	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部・頸部・腹部に刷毛目による波線	西壁寄り床面	P10561, 5%

### 第1376号住居跡 (第191・192図)

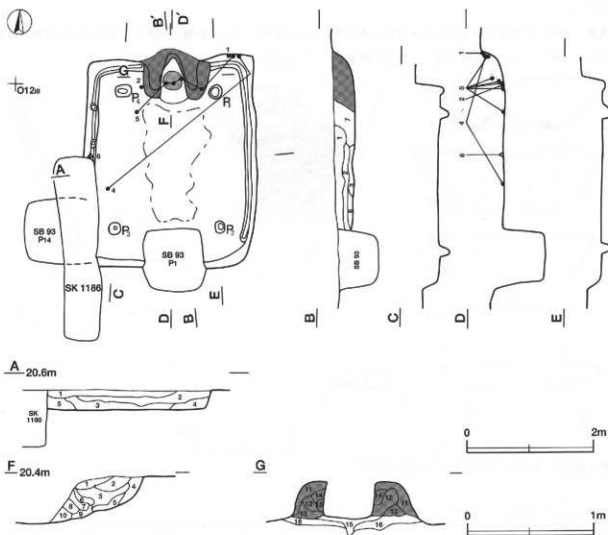
**位置** 調査区東部のO128区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

**重複関係** 南壁際の中央部を第93号掘立柱建物跡、西壁際の南寄りを第1186号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸3.40m、短軸2.72mの南北に長い長方形で、主軸方向はN-0°である。壁高は22~42cmで、各壁とも外方向に開き気味に立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝は南壁際を除いて巡っている。

**竈** 北壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで80cm、両袖部幅105cmである。壁外への掘り込みは10cmほどで、袖部はローム土を主体とする暗褐色土を基部としてその周囲に砂質粘土を貼り付けて構築されている。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道は外傾して緩やかに立ち上がる。



第191図 第1376号住居跡実測図

覆土層解説

- |        |                             |           |                          |
|--------|-----------------------------|-----------|--------------------------|
| 1 暗褐色  | ローム粒子中量                     | 9 赤褐色     | 焼土粒子多量、ローム粒子少量           |
| 2 灰暗褐色 | ロームブロック少量                   | 10 暗褐色    | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量      |
| 3 暗褐色  | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量         | 11 暗褐色    | ローム粒子・砂粒中量、粘土粒子少量        |
| 4 暗褐色  | ローム粒子中量、焼土ブロック・砂粒少量         | 12 灰褐色    | 粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子少量   |
| 5 暗褐色  | ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量    | 13 灰褐色    | 粘土粒子・砂粒中量                |
| 6 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 | 14 にぶい赤褐色 | 粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・焼土ブロック少量 |
| 7 暗褐色  | ローム粒子中量                     | 15 にぶい赤褐色 | 焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子少量      |
| 8 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量      | 16 暗褐色    | ローム粒子中量                  |

ピット 4か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは12～20cmである。また、壁溝内から小ピット2か所が検出されている。

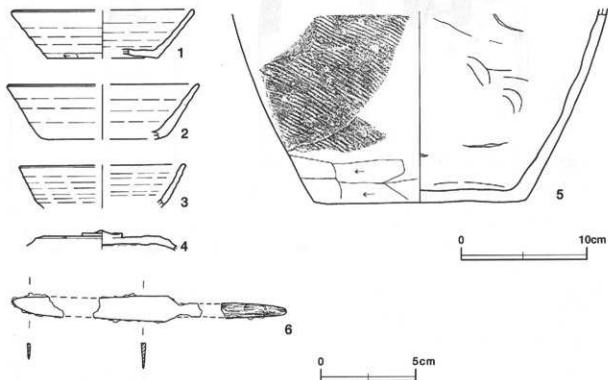
覆土 7層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- |        |                |       |                        |
|--------|----------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色  | ローム粒子・炭化粒子少量   | 5 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量         |
| 2 黒褐色  | ローム粒子少量        | 6 暗褐色 | ローム粒子中量                |
| 3 灰暗褐色 | ロームブロック少量      | 7 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 4 暗褐色  | ローム粒子中量、炭化粒子少量 |       |                        |

遺物出土状況 土器器片6点(杯5, 甕1), 須恵器片22点(杯15, 蓋2, 甕5), 刀子1点, 鉄滓2点が北側部分の床面を中心に出土している。竈付近では, 第192図2が竈西側の床面, 5が竈の火床部から出土している。また, 6の刀子は西壁際の床面から出土しており, 本跡に伴うものと考えられる。鉄滓2点は混入したものである。

所見 本跡の時期は出土土器から8世紀中葉と考えられ, 北西へ4mの距離に位置する第1375号住居跡と主軸方向が一致しており, 両跡は同一の集落を構成していたと想定される。



第192図 第1376号住居跡出土遺物実測図

第1376号住居跡出土遺物観察表(第192図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	杯	[14.2]	3.8	[8.8]	雲母・長石	灰白	普通	竈跡内へ半部埋れ, 多方向へへり出し	北東部上部	P10562, 30%



番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	須恵器	坏	[16.0]	4.4	[9.6]	雲母・長石	灰白	普通	体部ロクロ整形	龍西側床面	P10563, 10%
3	須恵器	坏	[13.1]	(3.4)	-	長石	灰	普通	体部ロクロ整形	北東部覆土中	P10564, 5%
4	須恵器	壺	-	(1.5)	-	雲母・長石	灰白	普通	天井部右回りの回転へう 刷り	北東部上層・ 西壁際床面	P10565, 30%
5	須恵器	壺	-	(15.2)	16.7	雲母・長石・石英	灰	普通	飾り柄付・下層へ刷り、内面紅焼	龍火床部	P10566, 30%

番号	器種	高さ	幅	重さ	材質	特徴	出土位置	備考	
6	刀子	[14.4]	1.4	0.3	(11.0)	鉄	刃部・茎部一部欠損、両端有り、茎部木質付着。	西壁際床面	M10112, 60%

### 第1377号住居跡 (第193図)

位置 調査区東部のO12h0区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

規模と形状 長軸3.50m、短軸3.20mの隅丸方形で、主軸方向はN-70°-Eである。壁高は22~30cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

床 はほぼ平坦で、竈の手前がよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 東壁の南寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで125cm、両袖部幅95cmである。壁外への掘り込みは80cmほどで、袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床面は5cmほど掘り窪められた部分にローム土を床面の高さまで埋め戻して使用され、火熱を受けて赤変硬化している。煙道は、火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。また、竈の手前には、炭化物が薄く広がっている。

#### 竈土層解説

1	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量	7	暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・炭化物少量
2	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量	8	暗褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・砂粒少量
3	極暗赤褐色	炭化粒子中量、ローム粒子・焼土ブロック少量	9	暗褐色	ローム粒子中量
4	暗褐色	ローム粒子・砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	10	暗褐色	ローム粒子・砂粒中量
5	赤褐色	ロームブロック・焼土粒子中量、炭化粒子少量	11	暗赤褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・粘土粒子少量
6	暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子中量、炭化物少量	12	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量、砂粒少量
			13	暗赤褐色	焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子少量
			14	暗褐色	ローム粒子中量

炉 中央部に付設されており、長径35cm、短径25cmの長径方向を住居の主軸方向と同じくする楕円形を呈している。炉床面は浅い皿状に掘りくぼめられて赤変硬化しており、北側でP2と接している。

ピット 4か所。P1は深さ10cmほどで、西壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P2~P4は深さ16~18cmで、炉の西側から北側にかけて炉を囲むように位置しており、炉に伴うピットと考えられる。また、壁溝内から深さ5~10cmの小ピット38か所がほぼ等間隔に検出されており、壁柱穴と考えられる。

覆土 9層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

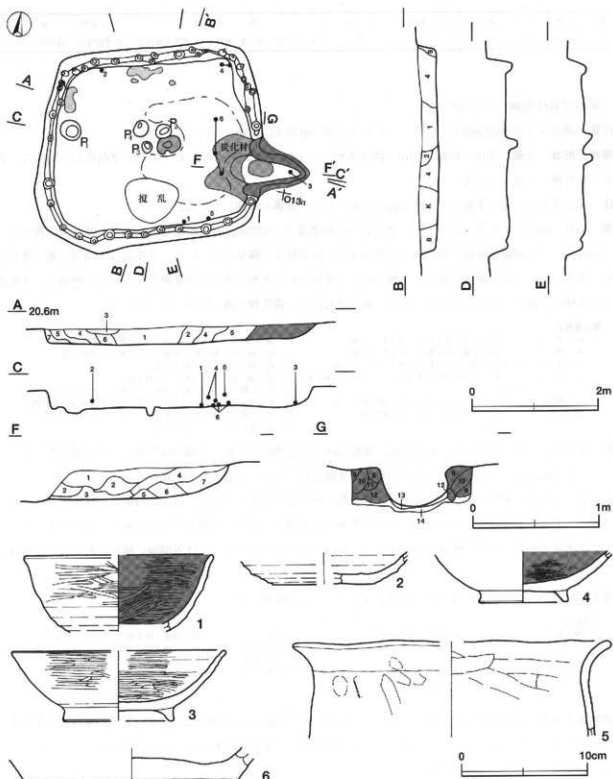
#### 土層解説

1	極暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量	6	褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量
2	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子中量	7	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
3	黒褐色	ローム粒子少量	8	暗褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・砂粒少量
4	暗褐色	ローム粒子中量、炭化物少量	9	褐色	ローム粒子多量
5	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子中量、ロームブロック少量			

遺物出土状況 土師器片28点(碗24, 甕4)、須恵器1点(甕1)、灰釉陶器片2点(瓶)が竈付近や東壁寄りの覆土下層を中心に出土している。竈内からは第193図3、竈手前の床面からは6が出土している。また、北壁際の床面から焼土の広がりが検出されている。

所見 本跡は、出土土器から10世紀前半に位置付けられ、竈と炉を有する住居跡である。特殊な住居形態から

見て何らかの工房跡が想定されるが、それを裏付ける遺物は検出されていない。また、北壁際の床面からは鏡土が検出され、食膳具類はあらかじめ持ち出されていることから見て、住居廃絶に伴った焼失住居と考えられる。竈の手に広がる炭化物は、火災に伴うものの可能性もあるが、広がりや竈手前に限定されるなど不自然であり、また、日常的な竈の掻き出しには範囲が広すぎるため、住居廃絶に伴って竈の浄化が行われた可能性もあり、同様な類例の集成が必要である。



第193図 第1377号住居跡・出土遺物実測図

第1377号住居跡出土物観察表 (第193図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	輪	[14.7]	(6.1)	-	赤色粒子	にぶい橙	普通	胴内・外面ロクロ整形後、ヘラ磨	南壁際床面	P10567, 30%
2	土師器	坏	-	(2.5)	[8.0]	炭母・長石	にぶい橙	普通	各部ロクロ整形、底部砥石切り	北西部下層	P10568, 20%
3	土師器	高台付碗	[16.8]	4.6	[8.6]	石英	橙	普通	胴内・外面ヘラ磨、高台磨り付	壁際下部	P10569, 40%
4	土師器	高台付碗	-	(4.1)	7.1	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部高台磨り付付後、ロクロナデ	北東部下層	P10570, 40%
5	土師器	蓋	[24.6]	(7.6)	-	石英・赤色粒子	橙	普通	各部内・外面ヘラナデ・指頭痕	南壁際上層	P10571, 5%
6	土師器	蓋	-	(2.6)	[17.0]	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部内面ナデ	墓手前床面	P10572, 5%

第1379号住居跡 (第194・195図)

位置 調査区東部のP13b1区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 中央部北寄りと南西コーナー部で第98号掘立柱建物跡、南壁際の中央部と南西コーナー部で第112号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

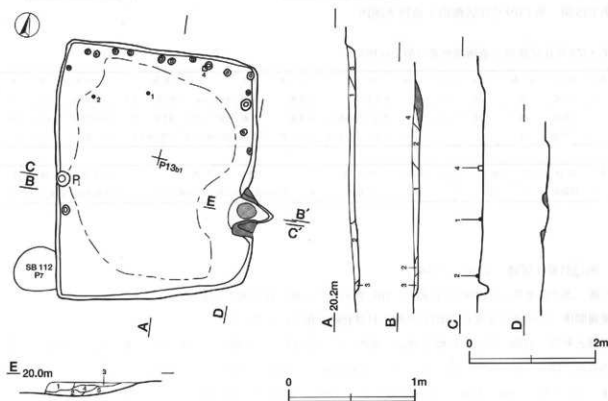
規模と形状 長軸4.14m、短軸3.26mの南北に長い長方形で、主軸方向はN-82°-Eである。壁高は5cmほどで、壁は外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められている。また、壁溝は認められない。

竈 東壁の南寄りに付設されており、焚口から煙道部まで75cm、両袖幅80cmである。壁外への掘り込みは35cmほどで、袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床面は浅い皿状に掘りこぼめられ、赤変硬化しており、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 灰褐色 romeブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、rome粒子少量
- 3 黒褐色 粘土粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子中量、rome粒子・炭化粒子少量



第194図 第1379号住居跡実測図

ビット 1か所。P1は深さ16cmで、竈と対峙する位置にあり、出入口施設に伴うビットと考えられる。また、深さ10cmほどの小ビット16か所が北壁際から東壁際にかけてほぼ等間隔に検出されており、壁柱穴と考えられる。

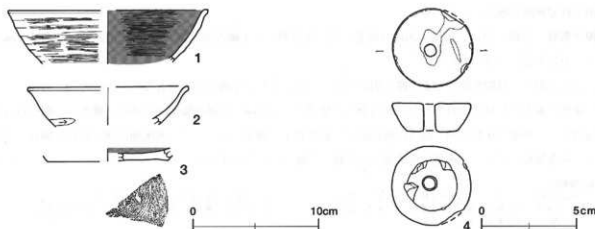
覆土 4層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量  
2 黒褐色 ローム粒子少量  
3 暗褐色 ローム粒子中量  
4 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量

遺物出土状況 土師器片25点(碗15, 甕10), 石製紡錘車1点, 鉄滓1点が床面から散在した状態で出土している。図示した遺物はいずれも北側部分から出土しており, そのうち第195図1・2・4は床面からの出土である。

所見 本跡の竈は東壁の南に寄った位置で検出されており, 住居の形態はやや歪み, 主柱穴も検出されていない。時期は出土土器から10世紀前半と考えられる。



第195図 第1379号住居跡出土遺物実測図

第1379号住居跡出土遺物観察表(第195図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	碗	[15.8]	(4.1)	-	赤色粒子	灰黄褐	普通	朱塗り・外面コテロ彫り後、ヘラ磨き	北壁際床面	P10575, 10%
2	土師器	碗	[12.8]	(3.0)	-	黄緑・赤色粒子	灰黄褐	普通	朱塗りコテロ彫り、下塗りヘラ磨き	北西部床面	P10576, 10%
3	土師器	環	-	(1.0)	[9.6]	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	朱塗り面へ磨き、底部斜板未切り	北西部覆土中	P10791, 5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4	紡錘車	4.3	1.5	0.8	(35.2)	粘板岩	無文、側面がわずかに膨らむ円錐台形。	北壁際床面	Q1034, 90%, PL67

第1381号住居跡(第196・197図)

位置 調査区東部のO1219区に位置し, 南に傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 中央部の北寄りで第117号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.75m, 短軸2.92mの東西に長い長方形で, 主軸方向はN-82°-Eである。南壁の一部は調査前に削平されており, 最も残りのよい北壁は高さが6cmで, 外傾して立ち上がる。

床 はほぼ平坦で, 竈の手前に一部硬化面が認められる。壁溝は南壁際を除いて巡っており, 本来は周回していたと推定される。

竈 東壁の南寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで85cm、両袖部幅60cmで、壁外への掘り込みは35cmである。袖部は砂質粘土で構築されており、火床面は浅い皿状を呈し、火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道は火床部から外傾して立ち上がる様子が若干確認されただけである。

竈土層解説

- |         |                           |        |                   |
|---------|---------------------------|--------|-------------------|
| 1 瓶胎赤褐色 | 焼土粒子・粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量  | 3 瓶胎褐色 | ローム粒子・炭化物・粘土粒子少量  |
| 2 瓶胎赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 | 4 瓶胎褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量 |
|         |                           | 5 黒褐色  | 焼土粒子・炭化粒子少量       |

ピット 3か所。P1は深さ18cmで、南壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P2は長軸80cm、短軸55cmの長方形、深さ27cmで二段掘り込みになっており、位置と形状から見て貯蔵穴の可能性がある。P3は深さ26cmで、形状から見て柱穴と考えられるが、対応する柱穴は確認されていない。あるいは、P1・3の2本柱で上屋を支えていたとも想定される。また、壁溝内から深さ8~12cmの小ピット24か所が検出されており、壁柱穴と考えられる。

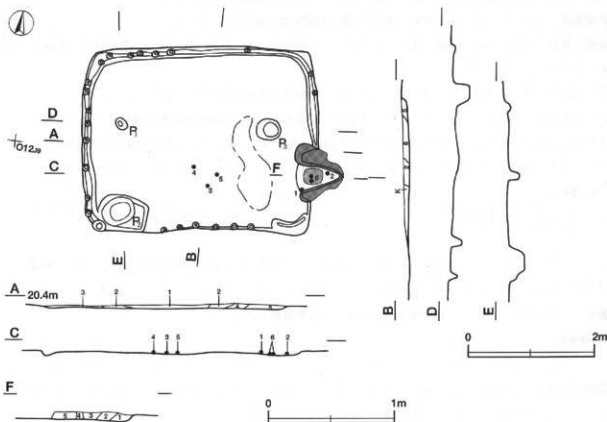
覆土 6層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

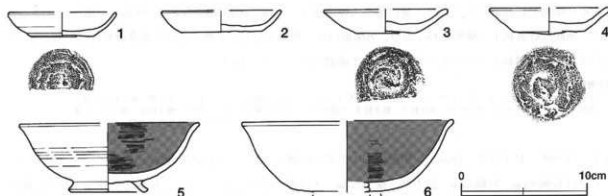
- |         |                |        |                     |
|---------|----------------|--------|---------------------|
| 1 瓶胎赤褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 4 黒褐色  | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量   |
| 2 黒褐色   | ローム粒子・炭化粒子微量   | 5 瓶胎褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 3 瓶胎褐色  | ローム粒子中量        | 6 黒褐色  | ロームブロック少量、焼土粒子微量    |

遺物出土状況 土師器片18点(碗13, 小皿4, 甕1)が竈周辺を中心に出土している。第197図1・2・6は竈の火床部、3~5は中央部南寄りの床面からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、出土した土師器小皿の形状から見て10世紀後半以降と考えられる。また、本跡の東には工房跡と考えられる第1382号住居跡が隣接しており、本跡は工房跡に付属する居住施設と想定される。



第196図 第1381号住居跡実測図



第197図 第1381号住居跡出土遺物実測図

第1381号住居跡出土遺物観察表(第197図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	小皿	[8.6]	1.9	5.1	雲母・長石	にぶい褐	普通	体部クロコ整形, 底面刷毛ヘラ切り	竈火床部	P10598, 40%
2	土師器	小皿	[9.4]	1.7	[6.4]	雲母	にぶい橙	普通	体部クロコ整形, 底面刷毛ヘラ切り	竈火床部	P10599, 30%
3	土師器	小皿	[9.3]	2.1	5.6	石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	体部クロコ整形, 底面刷毛ヘラ切り	中央部床面	P10600, 40%
4	土師器	小皿	[9.7]	1.9	[4.6]	長石・赤色粒子	橙	普通	体部クロコ整形, 底面刷毛ヘラ切り	中央部床面	P10601, 40%
5	土師器	高台付碗	[14.1]	5.5	5.6	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底面刷毛ヘラ切り後, 高台取り付付	中央部床面	P10602, 50%
6	土師器	高台付碗	[16.8]	(5.6)	-	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内面ヘラ磨き, 高台取り付付後	竈火床部	P10603, 20%

### 第1382号住居跡(第198図)

位置 調査区東部のO12i0区に位置し, 南に傾斜した台地の南端部に立地している。

重複関係 東コーナー部と南西壁際で第117号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.78m, 短軸2.95mの長方形で, 主軸方向はN-113°-Wである。壁高は3~6cmで, 各壁とも外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で, 中央部がよく踏み固められており, 壁溝は北東壁際を除いて巡っている。

炉 南西壁際の中央部に付設されており, 平面形は長径85cm, 短径45cmの楕円形を連結したような形状で, 長径方向は住居の主軸方向と一致する。炉床面は8cmほど掘り窪められており, 火熱を受けて赤変硬化している。また, 付近の床面から炉を囲むように粘土塊が確認されており, 炉壁の一部と考えられる。

#### 伊土層解説

- |                      |                            |
|----------------------|----------------------------|
| 1 にぶい赤褐色 焼土粒子・灰中量    | 4 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子多量        | 5 暗赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子少量     |
| 3 極暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量 |                            |

ピット 2か所。P1・2は深さがいずれも20cmほどで, 形状から主柱穴の可能性がある。また, 壁溝内から深さ8~12cmの小ピット10か所が検出されており, 壁柱穴と考えられる。

覆土 4層からなり, レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

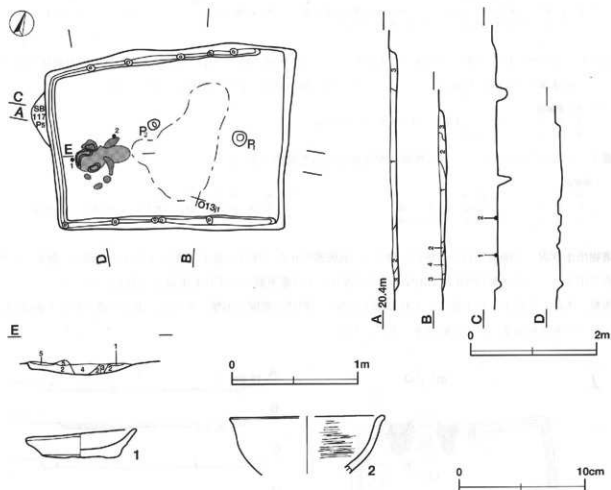
#### 土層解説

- |                          |                              |
|--------------------------|------------------------------|
| 1 極暗褐色 ローム粒子少量           | 3 褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 2 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 4 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量   |

遺物出土状況 土師器片21点(碗17, 小皿1, 甕3)が出土しており, 遺物は覆土下層を中心にほぼ全域に散在している。第198図1・2はいずれも炉の周辺の床面から出土している。

所見 当初, 竈を有する住居跡と考えて調査を進めたが, 竈を想定した場合の煙道部にあたる部分から壁溝が

検出されたため、柱を有する建物跡と判断した。木跡は出土土器から10世紀後半以降に位置づけられ、何らかの工房跡が想定されるが、それを裏付ける遺物は出土していない。



第198図 第1382号住居跡・出土遺物実測図

第1382号住居跡出土遺物観察表(第198図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土器	小皿	8.7	2.3	6.0	赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部ワロ彫刻、足部凹へう寄り	伊西側床面	P10604, 50%
2	土器	碗	[12.3]	(4.6)	-	雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	体部ワロ彫刻、内面へう磨き	伊北側床面	P10605, 20%

第1390号住居跡(第199図)

位置 調査区西部のO10i2区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 南壁際を東西に第78号溝跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.26m、短軸2.95mのはほぼ方形で、主軸方向はN-3°-Wである。壁高は6~10cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝が周回している。

竈 北壁際の東寄りに付設されており、焚口部から煙道部まで65cm、両袖部幅105cmである。壁外への掘り込みは15cmほどで、天井部は崩落し、袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床部は浅い皿状に掘り窪められ、火熱を受けて赤変硬化しており、煙道は外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- |        |                                   |          |                               |
|--------|-----------------------------------|----------|-------------------------------|
| 1 黒褐色  | 焼土ブロック・炭化粒子少量                     | 5 黒褐色    | ロームブロック・炭化粒子少量                |
| 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒<br>子・砂粒少量 | 6 にぶい赤褐色 | ロームブロック・焼土粒子中量、炭化物・粘土粒子<br>少量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化物・砂粒少量           | 7 暗赤褐色   | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量         |
| 4 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量               |          |                               |

ビット 1か所。P1は深さが22cmで、対応するビットは検出されていないが、形状から柱穴の可能性がある。また、南壁溝内から深さ10cmほどの小ビット2か所が検出されており、壁柱穴と考えられる。

ビット土層解説

- |       |                         |
|-------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 褐色  | ローム粒子多量                 |

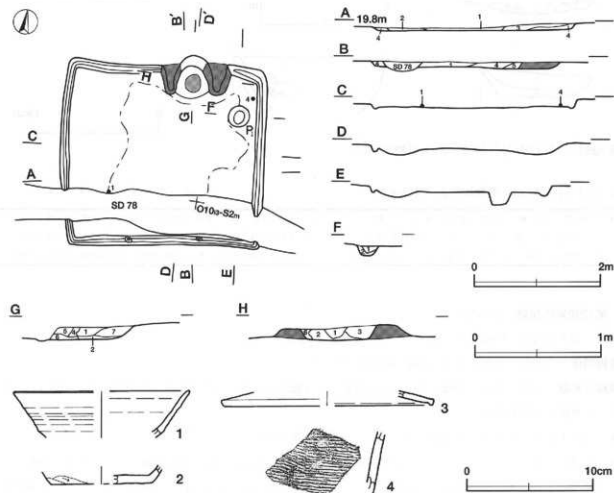
覆土 5層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- |       |                |       |                      |
|-------|----------------|-------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量        | 4 褐色  | ローム粒子多量              |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量 | 5 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子少量 |       |                      |

遺物出土状況 土師器片17点(坏15, 甕2), 須恵器片6点(坏3, 蓋1, 甕2)がほぼ全域から散在した状態で出土している。第199図1は南西コーナー寄り、4は竈東側のいずれも床面から出土している。

所見 本跡から出土した土器はいずれも細片であり、形状の把握が困難であるが、出土土器の形状と組成割合からみて8世紀後葉から9世紀前葉と考えられる。



第199図 第1390号住居跡・出土遺物実測図



第1390号住居跡出土遺物観察表(第199図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[13.8]	(4.7)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	体部ロクロ整形	南東部床面	P10608, 10%
2	須恵器	坏	-	(1.4)	[8.0]	雲母・長石・石英	灰	普通	胴部手揉みへり作り, 口縁部へり削り	北西部敷土中	P10609, 5%
3	須恵器	蓋	[16.5]	(1.2)	-	長石・石英	黄灰	普通	口縁部・外周部ロクロナデ	北東部敷土中	P10610, 5%
4	須恵器	甕	-	(5.0)	-	雲母・長石・石英	浅黄橙	不良	胴部外周縁部の平行叩き, 内蓋ナデ	北東部床面	TP10025, 5%

第1391号住居跡(第200図)

**位置** 調査区東部のP10b3区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。また、本跡から南へ1mには第1349号住居跡が隣接している。

**重複関係** 竈部分を第1140号土坑に掘り込まれ、中央部から北西部にかけて攪乱を受けている。

**規模と形状** 床面がほぼ露出した状態で検出されたため、壁の立ち上がりは不明である。平面形は長軸3.96m、短軸3.88mの方形で、主軸方向はN-5°-Wである。

**床** ほぼ平坦で、南壁際に一部硬化面が認められ、壁溝が周回している。

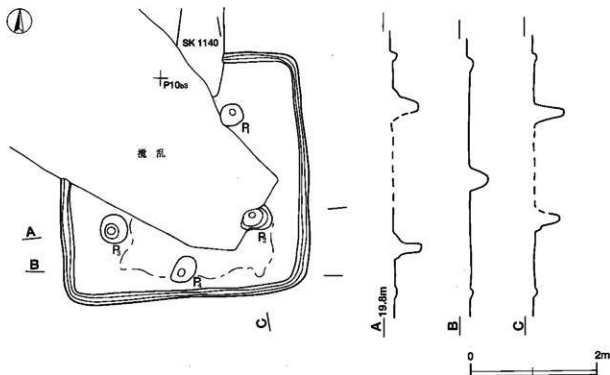
**竈** 第1140号土坑に掘り込まれたことにより遺存していない。

**ピット** 4か所。主柱穴はP1~P3が相当し、深さは42~48cmである。P4は深さ30cmで、南壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 検出されなかった。

**遺物出土状況** 土師器片2点(表2)が出土している。

**所見** 本跡の時期は土器が細片のため断定できないが、住居の規模や主軸方向が隣接する第1349号住居跡と近似することから見て8世紀代の可能性がある。



第200図 第1391号住居跡実測図

(2) 掘立柱建物跡

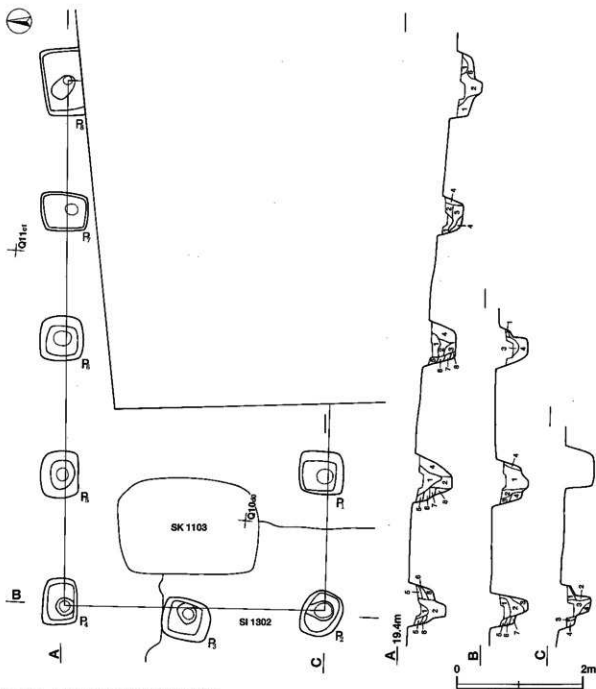
今回の調査で、当該期に帰属する掘立柱建物跡17棟を検出した。以下、その概要について記述する。

第90号掘立柱建物跡 (第201図)

位置 調査区西部のQ10c0区に位置し、東に傾斜する台地の南端部に立地している。また、南東部は調査区域外に延びている。

重複関係 P 2・P 3 が第1302号住居跡を掘り込んでいる。また、第1103号土坑が本跡内に位置している。

規模と構造 桁行4間、梁行2間の側柱式の建物跡で、桁行方向はN-86°-Eである。規模は桁行長8.40m、梁行長4.22mを測り、柱間寸法は桁行・梁行ともに2.10mを基調とする。



第201図 第90号掘立柱建物跡実測図

柱穴 平面形はいずれも隅丸長方形を呈し、深さは38～66cmであり、東に傾斜した地形のために、東に位置する柱穴ほど確認面からの深さが浅くなっている。また、柱材は廃絶時に抜き取られたことが想定され、すべての柱穴から柱抜き取り痕が確認されている。土層断面図中の第1～4層が柱抜き取り痕に相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土で、ローム土を主体とした暗褐色土・褐色土で突き固められて互層をなしている。

土層解説(各柱穴共通)

1 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	5 褐色	ロームブロック多量、炭化粒子少量
2 極暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	6 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック少量	7 褐色	ロームブロック多量
4 暗褐色	ロームブロック中量	8 暗褐色	ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片3点(坏1, 甕2), 須恵器片4点(坏1, 蓋1, 甕2)が柱抜き取り痕の覆土中から出土しているが、いずれも細片で、図示できたものはない。

所見 本跡は、形状から見て屋として機能していたと考えられる。時期は遺物がいずれも細片のため明確にしないが、8世紀後葉の住居跡を掘り込んでいることや須恵器片が出土していることからみて9世紀代と考えられる。さらに、本跡内に位置する第1103号土坑からは灰釉陶器長頸瓶や須恵器壺が出土しており、これらの遺物は本跡に保管されていたものが廃棄されたとも想定され、第1103号土坑の年代観に従うならば、9世紀後葉に廃絶されたと考えられる。

第91号掘立柱建物跡(第202図)

位置 調査区東部のO1215区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。また、西側部分は調査区域外に延びている。

重複関係 P1を第1369号住居跡に掘り込まれ、P3～P6が第1370号住居跡を掘り込んでいる。

規模と構造 桁行3間の銅柱式の建物跡であり、梁行は西側部分が調査区域外のため断定はできないが、付近の掘立柱建物跡の形状から見て2間の可能性が高い。桁行方向はN-1°-Wであり、桁行長は7.20mで、梁行長は確認された部分で2.40mを測る。また、柱間寸法は桁行・梁行ともに2.40mを基調としており、柱筋は揃っている。

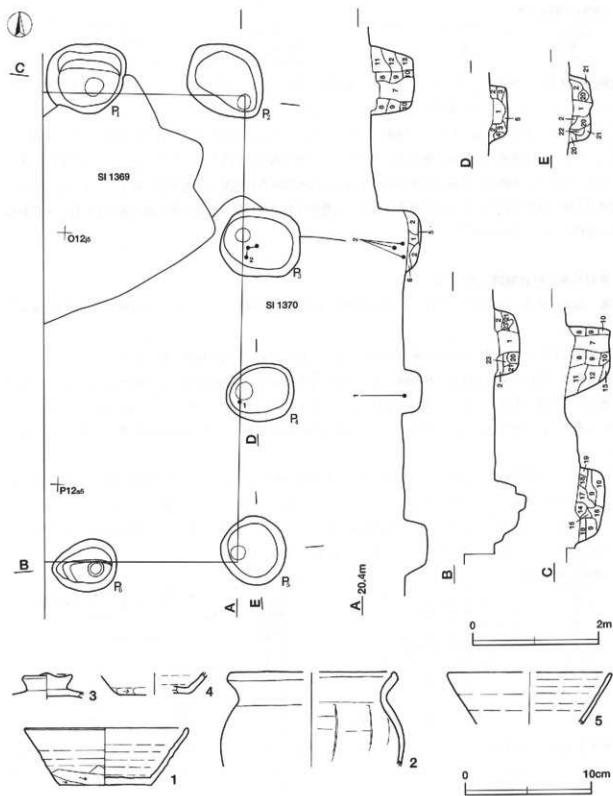
柱穴 平面形はP5だけが円形で、それ以外はいずれも楕円形を呈し、深さは30～70cmである。柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・7・14～17層が相当し、しまりが弱い。それ以外の層は埋土であり、ローム土を主体とした暗褐色土・褐色土で互層をなし、突き固められている。また、P2・P3の土層断面からは、埋土の部分で再度掘り込んだ様子が認められ、立て替えの可能性が指摘される。

土層解説(各柱穴共通)

1 極暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量	13 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量	14 極暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量	15 極暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子中量	16 極暗褐色	ローム粒子少量
5 暗褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量	17 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
6 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子中量、粘土粒子少量	18 暗褐色	ロームブロック中量
7 極暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	19 黒褐色	ロームブロック少量
8 褐色	ロームブロック多量	20 暗褐色	炭化粒子中量、ローム粒子少量
9 暗褐色	ロームブロック中量	21 褐色	ローム粒子多量
10 褐色	ロームブロック多量	22 褐色	ローム粒子多量
11 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	23 褐色	ローム粒子多量
12 褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片19点(坏1, 甕18), 須恵器片11点(坏5, 蓋2, 甕4)が各柱穴の柱抜き取り痕から出土している。第202図1・4はP4, 2・3はP3, 5はP6のいずれも柱抜き取り痕から出土している。

所見 本跡の時期は出土土器の形状から見て9世紀前葉と考えられる。また、本跡から南西へ25mには両跡の  
 関連が窺われる大形住居の第1361号住居跡が位置しており、穎稲などを納める屋として機能していたと考えら  
 れる。



第202図 第91号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第91号掘立柱建物跡出土物観察表 (第202図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	128	45	74	長石・石英	灰	普通	底面破れへうり痕、多角形のへうり痕	P4抜き取り痕	P10612, 60%, P162
2	土師器	壺	[132]	(75)	-	雲母・長石・石英	にぶい灰	普通	体部外面ナデ、内面ヘラナデ	P3抜き取り痕	P10613, 30%
3	須恵器	壺	—	(21)	—	雲母・長石・石英	黄灰	普通	つまみ接合後、ロクロナデ	P3抜き取り痕	P10614, 10%
4	須恵器	坏	—	(17)	[58]	雲母・長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちへうり痕	P4抜き取り痕	P10615, 5%
5	須恵器	坏	[132]	(41)	—	雲母・長石・石英	黄灰	普通	体部ロクロ型	P4抜き取り痕	P10616, 5%

## 第93号掘立柱建物跡 (第203・204図)

位置 調査区西部のO12j8区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 P1が第1376号住居跡、P11～P13が第1374号住居跡を掘り込み、P5が第1307号土坑、P14が第1186号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行4間、梁行3間の側柱式の建物跡で、桁行方向はN-2°-Eである。規模は桁行長7.65m、梁行長5.25mであり、柱間寸法は桁行・梁行ともに1.80mを基調とするが、梁行中央のP6・P7間とP13・P14間は1.50mと狭くなっている。

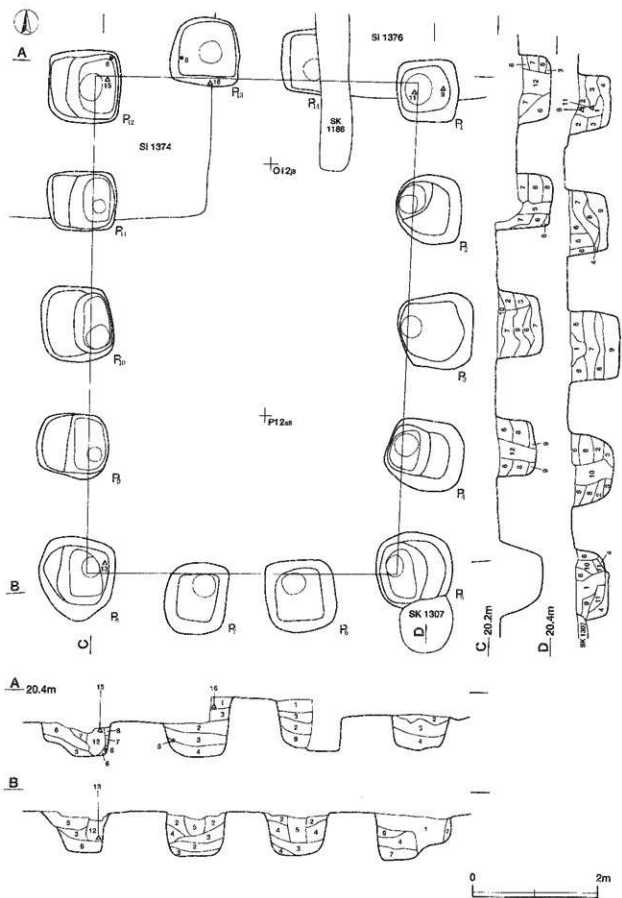
柱穴 平面形は隅丸方形を呈し、深さは54～92cmである。柱抜き取り痕はP13・P14を除いて確認され、第1・5・10・12層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土であり、ローム土を主体とした暗褐色土・褐色土で突き固められており、互層になっている。

## 土層解説 (各柱穴共通)

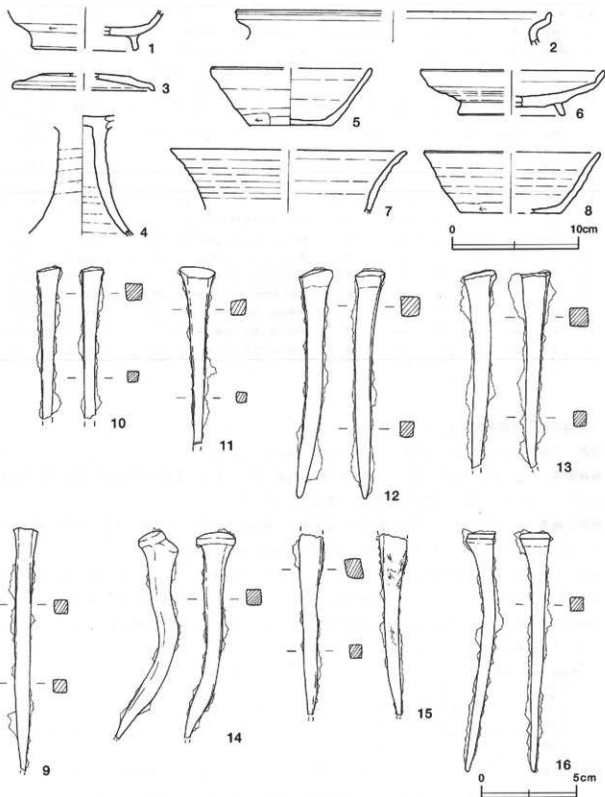
1	黒褐色	ロームブロック・炭化物少量	7	褐色	ロームブロック多量
2	暗褐色	ロームブロック中量、炭化物少量	8	褐色	ロームブロック中量、炭化物少量
3	暗褐色	ロームブロック中量	9	褐色	ロームブロック多量、炭化物少量
4	黒褐色	ロームブロック中量	10	暗褐色	ロームブロック中量
5	黒褐色	ロームブロック少量	11	黒褐色	ロームブロック中量
6	褐色	ロームブロック多量	12	暗褐色	ロームブロック中量、炭化物少量

遺物出土状況 土師器片14点(坏7, 壺7), 須恵器片4点(坏1, 壺3), 鉄釘8点が各柱穴から出土している。第204図1はP4, 2はP7, 3・4はP10, 5～7はP12, 8はP13の覆土中から出土しており、そのうち6・8は埋土からの出土である。また、鉄釘が多量に出土しており、9～12はP1, 13・14はP8, 15はP12, 16はP13のいずれも柱抜き取り痕から出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から9世紀前葉に位置付けられる。本跡からは鉄釘が8点と多量に出土しており、いずれも最大幅が1cmを超え、平均の重さも42gほどの大形品である。また、建物の面積は40㎡を超え、柱穴の掘り方も1辺が1mほどの隅丸方形を呈する大形のものであることから、堅固な上屋を備えていたことが想定され、機能としては頼箱などを納める倉庫、あるいは居住施設の一部としての屋などが考えられる。さらに、本跡を中心にして、西側には第91・115号掘立柱建物跡、東側には第98号掘立柱建物跡が並列し、南側には1辺が6mを超える大形住居である第1361号住居跡が位置しており、かかる有力者層の館的な様相を呈している。



第203图 第93号掘立柱建物跡実測图



第204図 第93号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第93号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第204図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴	出土位置	備考
1	須恵器	高台付杯	-	(3.3)	[8.0]	長石・石英	灰	普通	底縁部へ少量り紙、高台縁り付	P 4 覆土中	P10617, 5%

番号	種類	口径	口径	口径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
2	土師器	高	[25.0]	(2.5)	-	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ	P 7 覆土中	P10618, 5%
3	須恵器	高	[11.4]	(1.3)	-	長石・石英	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	P 10 覆土中	P10619, 20%
4	須恵器	蓋	-	(9.5)	-	雲母・長石・石英	にぶい黄	不良	脚部ロクロ整形	P 10 覆土中	P10620, 30%
5	須恵器	坏	[12.6]	4.6	6.5	雲母・長石・石英	灰	普通	底面回転ヘラ削り後、多方向のヘラ削り	P 12 覆土中	P10621, 60%
6	須恵器	蓋	[14.6]	3.6	[8.4]	雲母・長石・石英	灰	普通	底面回転ヘラ削り後、高台削り付	P 12 覆土中	P10622, 20%
7	須恵器	広口長頸壺	[19.0]	(5.0)	-	緻密	灰白	良好	口縁部ロクロ整形	P 12 覆土中	P10623, 5%, 内面自然釉
8	須恵器	坏	[13.8]	4.8	[8.0]	雲母・長石・石英	灰	普通	底面多方向のヘラ削り	P 13 覆土中	P10624, 30%

番号	器種	長さ	最大幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
9	釘	(129)	1.2	0.8	(42.0)	鉄	角釘。脚部は断面方形を呈する。	P 1 抜き取り裏	M0114, 95%, PL70
10	釘	(82.0)	1.2	0.9	(24.0)	鉄	脚部先端欠損。頭部・脚部は断面方形を呈する。	P 1 抜き取り裏	M0115, 60%, PL70
11	釘	(9.5)	2.0	1.4	(45.0)	鉄	脚部先端欠損。頭部・脚部断面は菱形を呈する。	P 1 抜き取り裏	M0116, 70%, PL70
12	釘	12.1	1.6	1.0	(53.5)	鉄	頭部は叩かれ、やや潰れている。	P 1 抜き取り裏	M0117, 100%, PL70
13	釘	(10.5)	1.6	1.0	(46.0)	鉄	脚部先端欠損。頭部は叩かれ、やや潰れている。	P 8 抜き取り裏	M0118, 90%, PL70
14	釘	(10.9)	2.0	0.8	(46.0)	鉄	脚部歪曲。頭部は叩かれ、潰れている。	P 8 抜き取り裏	M0119, 95%, PL70
15	釘	(9.6)	(1.1)	(1.0)	(36.0)	鉄	頭部欠損。脚部は断面方形を呈する。	P 12 抜き取り裏	M0120, 70%, PL70
16	釘	12.6	1.6	0.7	42.0	鉄	脚部歪曲。頭部は叩かれ、潰れている。	P 13 抜き取り裏	M0121, 60%, PL70

#### 第94号掘立柱建物跡 (第205・206図)

位置 調査区西部のO10j2区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 P 2・P 6・P 10・P 14の上層を第2号道路跡、P 7・P 8の上層を第1140号土坑にそれぞれ掘り込まれている。また、P 11の想定される位置が攪乱を受けている。

規模と構造 桁行、梁行ともに3間の総柱式の建物跡で、桁行方向はN-2°-Wである。規模は桁行長6.60m、梁行長5.20mであり、柱間寸法は桁行が2.10m、梁行は1.80mを基調としている。

柱穴 平面形はいずれも隅丸方形を呈し、深さはP 6・10だけが20cmほどと浅く、それ以外は36~55cmである。廃絶に際して柱は抜き取られており、土層を観察できたすべての柱穴から柱抜き取り痕が確認されている。土層断面図中の第1・6・7層が柱抜き取り痕に相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土であり、ローム土を主体とした暗褐色土や褐色土で突き固められて互層になっている。

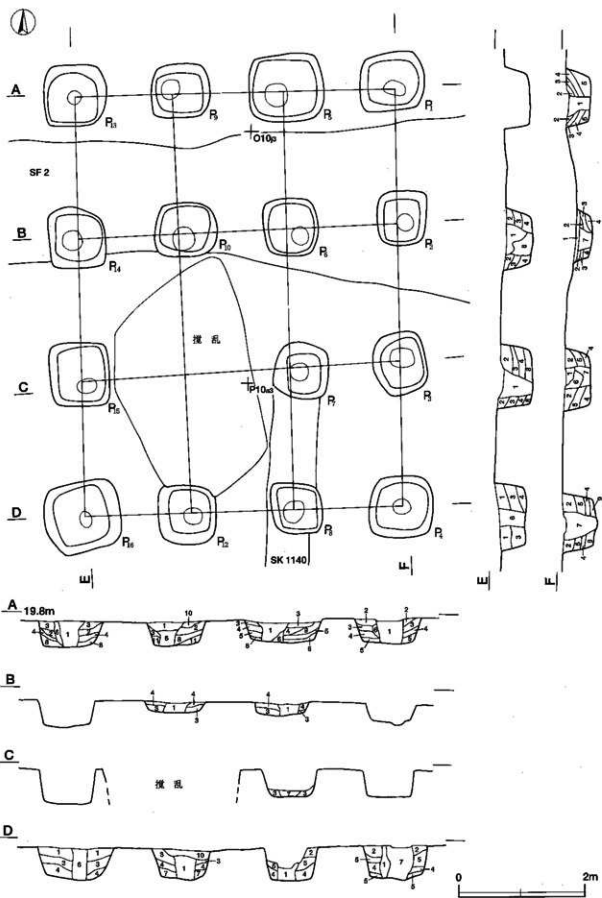
#### 土層解説 (各柱穴共通)

- |        |                       |        |                       |
|--------|-----------------------|--------|-----------------------|
| 1 黒褐色  | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量  | 7 暗褐色  | ロームブロック中量             |
| 2 暗褐色  | ロームブロック多量             | 8 暗褐色  | ロームブロック中量             |
| 3 暗褐色  | ロームブロック中量、炭化粒子少量      | 9 褐色   | ロームブロック多量             |
| 4 暗褐色  | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 10 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量         |
| 5 褐色   | ロームブロック多量             | 11 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 6 強暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量   |        |                       |

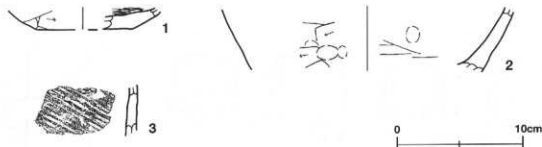
遺物出土状況 土師器片13点(坏7, 甕6), 須恵器片4点(坏3, 甕1)が各柱穴から出土している。遺物はいずれも柱抜き取り痕からの出土であり、第206図1はP13, 2はP15から出土している。

所見 本跡は形状から見て倉としての機能が想定され、当遺跡において最も堅固な構造の建物跡である。本跡の周囲に掘立柱建物跡は検出されていないが、北西25mには日隠し状の施設を伴う第80号掘立柱建物跡が桁行方向を同じくして位置しており、両跡の関連が窺われる。また、本跡の西側は調査区域外になっているが、掘立柱建物跡群が西側にも広がるのが想定される。本跡の時期は、出土土器の形状や第80号掘立柱建物跡の年代観から9世紀中頃と考えられる。





第205图 第94号掘立柱建物跡実測图



第206図 第94号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第94号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第206図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	環	-	(1.9)	[7.5]	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部・方向のへっ閉り	P15遺跡裏側	P10642, 10%
2	須恵器	甕	-	(5.2)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	不良	体部下層へっ閉り, 内面へっ閉り・顔面	P15遺跡裏側	P10643, 5%
3	須恵器	甕	-	(4.1)	-	雲母・長石・石英	灰黄褐	普通	体部外面開位の平行へっ閉り, 内面開	P15遺跡裏側	TP10018, 5%

### 第95号掘立柱建物跡(第207・208図)

位置 調査区西部のO13j5区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 P1・P6が第1083号住居跡、P11が第1091号住居跡を掘り込み、P2・P7が第1202号土坑、P3・P8・P13が第1084号住居跡、P14・P15が第1085号住居跡にそれぞれ掘り込まれている。

規模と構造 桁行4間、梁行2間の総柱式の建物跡で、桁行方向はN-15°-Wである。規模は桁行長8.77m、梁行長4.25mで、桁行の柱間寸法は2.40mを基調とするが、北側部分と南側部分では1.80mと狭くなる構造を示している。また、梁行の柱間寸法も西側部分が2.40m、東側部分が1.80mで、東側の柱間が狭くなっている。

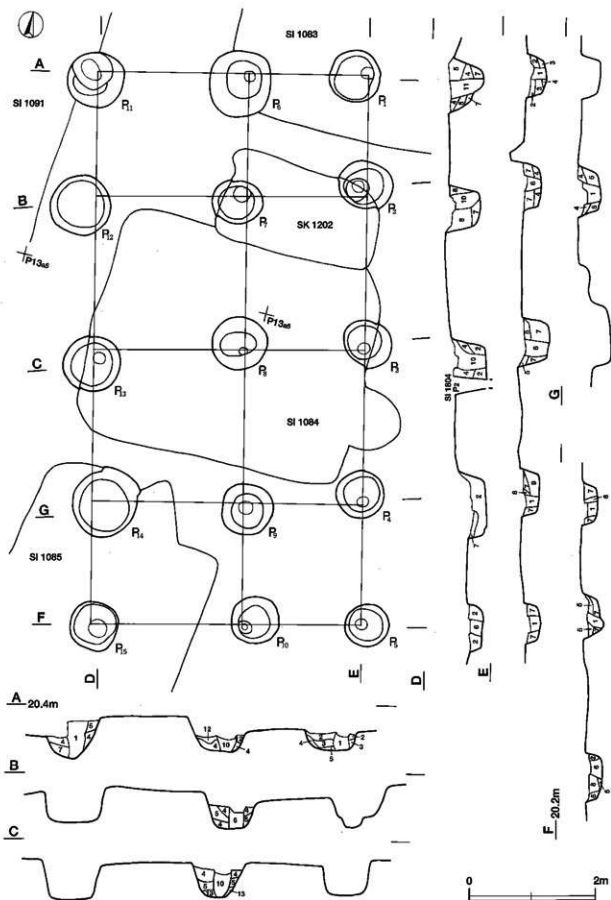
柱穴 平面形はいずれも円形を呈し、深さは23~60cmである。柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・6・10・11層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土であり、ローム土を主体とした暗褐色土や褐色土で突き固められており、互層になっている。

#### 土層解説(各柱穴共通)

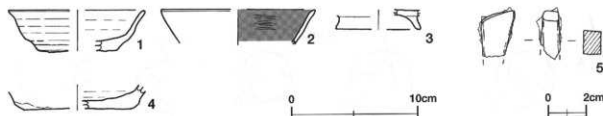
1 黒褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	8 褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	9 褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	10 黒褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子中量	11 灰褐色	ローム粒子中量
5 暗褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	12 黒暗褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量
6 暗褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	13 褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック微量
7 褐色	ローム粒子中量, 炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片88点(坏36, 甕52), 須恵器片22点(坏12, 蓋2, 甕8), 棒状の鉄製品1点(釘カ)が各柱穴から出土している。第208図1・2はP4, 3はP7, 4はP12のいずれも埋土から出土している。また、釘と考えられる棒状の鉄製品はP8の柱抜き取り痕から出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器の形状や重複関係からみて、10世紀前半と考えられる。本跡の西20mに位置する三面庇の第131号掘立柱建物跡と桁行方向が直交しており、同建物跡に付属する倉として機能していたと推測される。



第207图 第95号掘立柱建物跡実測图



第208図 第95号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第95号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第208図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[10.9]	3.3	[8.0]	長石・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ削り	P 4 埋土	P10644, 30%
2	土師器	椀	[12.3]	(2.8)	-	雲母	にぶい黄褐	普通	底部回転ヘラ削り	P 4 埋土	P10646, 5%
3	土師器	高台付椀	-	(1.6)	[6.8]	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け、内面黒色処理	P 7 埋土	P10647, 5%
4	土師器	坏	-	(2.0)	[8.8]	赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ削り	P 12 埋土	P10648, 5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5	釘	(2.4)	1.8	1.0	(12.0)	鉄	脚部欠損、頭部は片側に傾斜する。	P 8 抜き取り痕	M10125

第96号掘立柱建物跡 (第209図)

位置 調査区西部のP13a2区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 P 2 が第1254号住居跡、P 3・P 6 が第1255号住居跡、P 4・P 7 が第1380号住居跡をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と構造 桁行、梁行とともに2間の総柱式の建物跡で、桁行方向はN-75°-Eである。規模は桁行長5.85m、梁行長5.00mを測る。また、桁行の柱間寸法は西側部分で2.50m、東側部分で3.30mを基調とし、梁行は2.50mを基調としている。

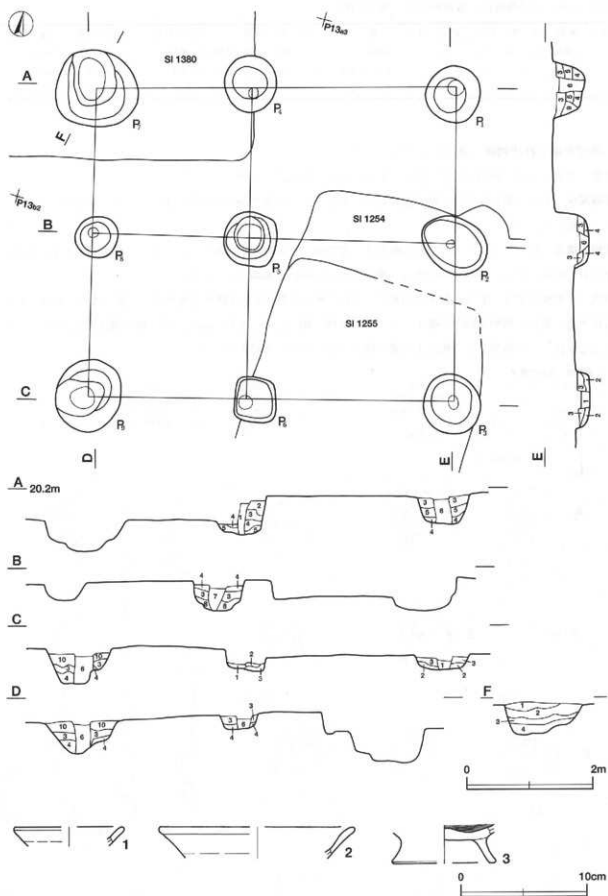
柱穴 平面形はP 2 が楕円形、P 6 が隅丸方形で、それ以外は円形を呈し、深さは20~50cmである。柱抜き取り痕は第1・6・7層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土であり、ローム土を主体とした暗褐色土や褐色土で突き固められて互層をなしている。

土層解説 (各柱穴共通)

- |        |                       |         |                  |
|--------|-----------------------|---------|------------------|
| 1 黒褐色  | ローム粒子少量、炭化粒子微量        | 6 極暗褐色  | ローム粒子少量、炭化粒子微量   |
| 2 黒暗褐色 | ロームブロック少量、粘土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色   | ローム粒子少量、炭化粒子微量   |
| 3 暗褐色  | ロームブロック少量、炭化粒子微量      | 8 褐色    | ロームブロック多量、炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色  | ロームブロック中量、炭化粒子微量      | 9 暗褐色   | ロームブロック中量        |
| 5 暗褐色  | ロームブロック中量             | 10 極暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片72点(椀36、小皿1、甕35)が各柱穴の柱抜き取り痕などから出土している。第209図1・2はP 5の柱抜き取り痕、3はP 8の埋土から出土している。

所見 本跡は、出土した土器の形状から10世紀後半に位置付けられ、規模と構造から見て倉として機能していたと考えられる。本跡と同じ総柱式の建物跡で、桁行方向と規模を同じくする第114号掘立柱建物跡が、柱穴の重複はないものの本跡の東側部分で重なった状態で確認されており、出土土器の形状から見て第114号掘立柱建物跡から本跡への建て替えが行われたことが想定される。



第209圖 第96号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第96号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第209図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	小皿	[8.6]	(1.5)	-	赤色粒子	にぶい微	普通	体部口クロ整形	P5抜き取り裏	P10649, 5%
2	土師器	坏	[15.4]	(2.5)	-	雲母・赤色粒子	にぶい微	普通	体部口クロ整形	P5抜き取り裏	P10650, 5%
3	土師器	高台付碗	-	(3.0)	[8.0]	長石・石英	にぶい微	普通	底面回転へり取り見, 高台残り付	P8掘土	P10651, 10%

第97号掘立柱建物跡 (第210・211図)

位置 調査区東部のP12b6区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

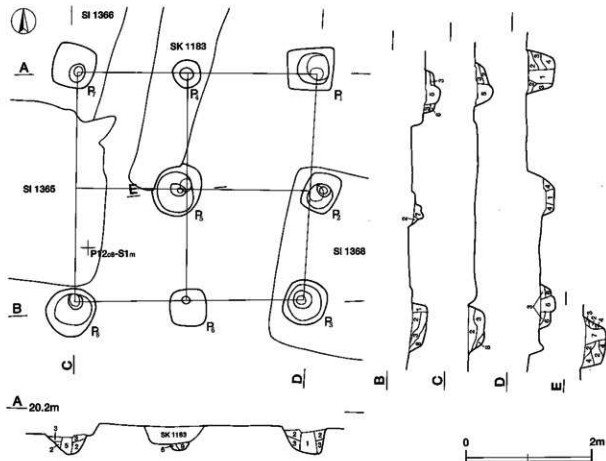
重複関係 P7が第1366号住居跡を掘り込み、P2・P3が第1368号住居跡、P4・P5が第1183号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と構造 桁行、梁行ともに2間の総柱式の建物跡で、桁行方向はN-0°である。規模は桁行長3.84m、梁行長3.60mであり、柱間寸法は桁行・梁行ともに1.80mを基調としている。

柱穴 平面形はP4・P5・P8が円形で、それ以外は方形、または隅丸方形を呈し、深さは22~40cmである。柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・5・7・9層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土であり、ローム土を主体とした暗褐色土や褐色土で突き固められており、互層をなしている。

土層解説 (各柱穴共通)

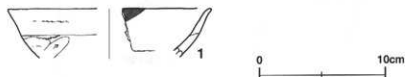
- |       |                   |        |                   |
|-------|-------------------|--------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量   | 5 暗褐色  | ロームブロック中量         |
| 2 褐色  | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 | 7 暗褐色  | ローム粒子中量, 炭化粒子微量   |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 8 暗褐色  | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 4 褐色  | ロームブロック中量         | 9 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量      |
| 5 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量   |        |                   |



第210図 第97号掘立柱建物跡実測図

遺物出土状況 土師器片7点(杯3, 甕4), 須恵器片2点(杯2)が各柱穴の埋土などから出土している。第211図1はP8の埋土から出土しており, 口縁部に油煙が付着している。

所見 本跡の時期は, 出土した土器の形状から8世紀前葉と考えられる。周囲に同時期の掘立柱建物跡は確認されていない。しかし, 大形住居跡を中心とする同時期の集落が本跡の東側に広がっていることから, 本跡は集落に付属する倉と思われる。



第211図 第97号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第97号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第211図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	杯	[162]	(39)	-	赤色粒子	橙	普通	口縁部焼ナデ, 体部外面へラ 削り・編み肌, 内面焼ナデ	P8埋土	P10625, 5%, 口縁部油煙付着

#### 第98号掘立柱建物跡(第212・213図)

位置 調査区東部のP12a0区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 P1・P2が第1380号住居跡, P4・P7が第1375号住居跡を掘り込み, P5・P6が第1379号住居跡を掘り込まれている。

規模と構造 桁行, 梁行ともに2間の総柱式の建物跡で, 桁行方向はN-4°-Eである。規模は桁行長5.50m, 梁行長5.39mであり, 柱間寸法は桁行・梁行ともに2.70mを基調としている。

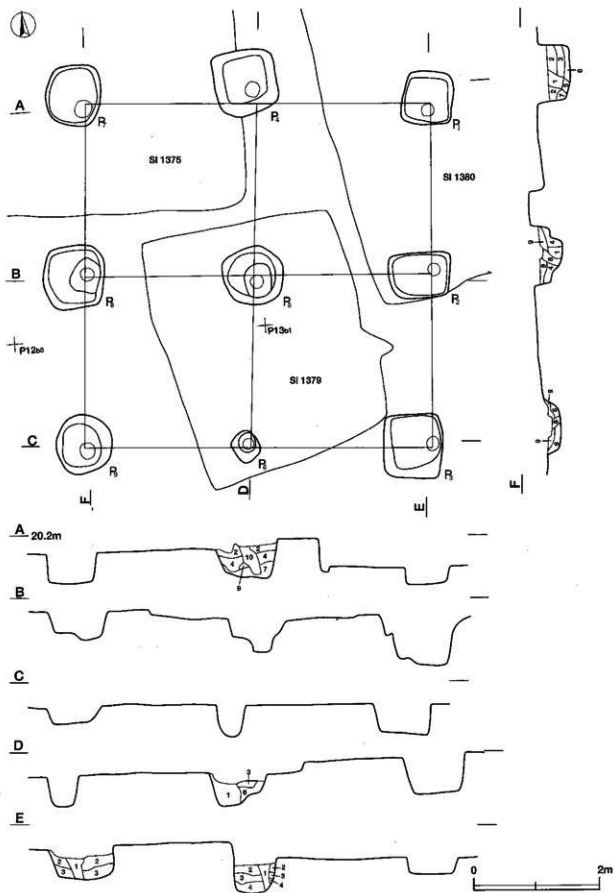
柱穴 平面形はP5・P6・P9が円形で, それ以外は方形, または隅丸方形を呈し, 深さはP1・P9が25cmほどで, その他は50~78cmである。柱抜き取り痕(第1・5・8・10層)は全ての柱穴から確認され, しまりが弱い。その他の層は埋土であり, ローム土を主体とした暗褐色土や褐色土で突き固められており, 互層をなしている。

#### 土層解説(各柱穴共通)

1 黒褐色	ローム粒子微量	6 褐色	ロームブロック中量
2 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	7 暗褐色	ローム粒子少量
3 褐色	ロームブロック少量	8 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック微量	9 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	10 黒褐色	ロームブロック・炭化物微量

遺物出土状況 土師器片30点(杯10, 甕20), 須恵器片6点(杯4, 甕2)が各柱穴の埋土などから出土している。第213図1はP3の柱抜き取り痕, 2はP9の埋土から出土している。

所見 本跡の時期は, 8世紀前葉の住居跡を掘り込んでいることや厨と考えられる第1091号住居跡や屋と考えられる第99号掘立柱建物跡と桁行方向を同じくすること, さらに出土土器の傾向などからみて8世紀中葉と考えられる。本跡は建物の構造から倉としての機能が想定され, 前述した大形住居跡や掘立柱建物跡とともに集落内における有力者層の館の一部を担っていたものと思われる。



第212图 第98号掘立柱建物跡実測图





第213図 第98号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第98号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第213図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	高台付坪	-	(13)	-	長石・石英	灰	普通	底縁削平ヘラ削り後、高台盛り付け	P3抜き取り痕	P10626, 5%
2	須恵器	甕	-	(44)	-	常母・長石・石英	褐色	普通	底部が面割の平打叩き、古面+テ	P9埋土	TP10016, 5%

### 第99号掘立柱建物跡(第214・215図)

位置 調査区東部のP12c9区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 P5・P6がいずれも第1372号住居跡を掘り込んでいる。また、P1が第112号掘立柱建物跡、P2が第112号掘立柱建物跡と第131号掘立柱建物跡、P6が第70号溝跡、P5が第70号溝跡と第1363号住居跡、P7が第1371号住居跡、P8が第1371号住居跡と第131号掘立柱建物跡にそれぞれ掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁行2間の側柱式の建物跡で、桁行方向をN-2'-Eとする南北棟である。規模は桁行長が7.70m、梁行長は5.26mを測る。また、柱間寸法は桁行・梁行ともに概ね2.40mを基調としており、柱筋や間尺は揃っている。

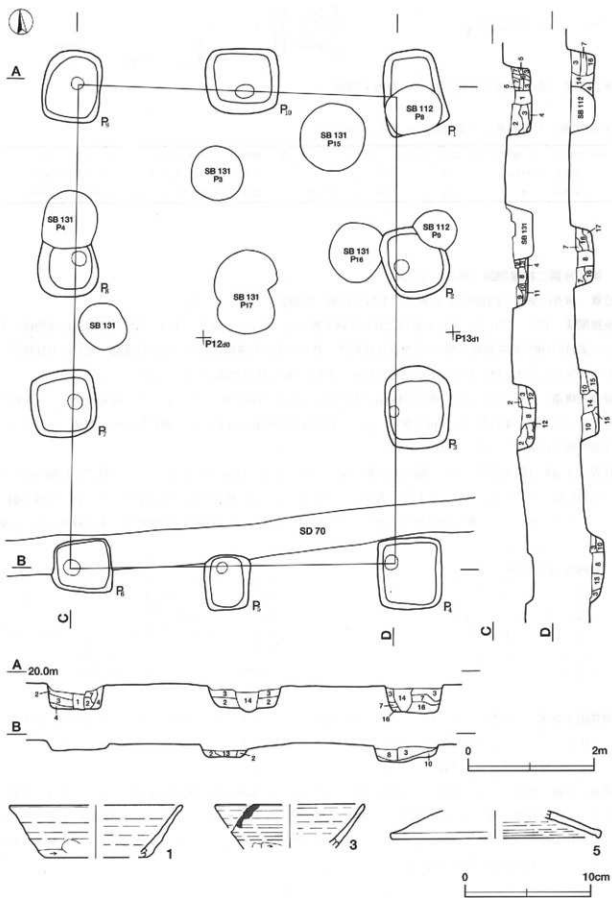
柱穴 平面形は隅丸方形、ないし隅丸長方形を呈し、深さは19~44cmである。ほとんどの柱穴が長軸方向を桁行方向に揃えているのに対して、P6・P10だけが直交している。柱抜き取り痕は第1・8・13・14層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土であり、ローム土を主体とした暗褐色土や褐色土で突き固められて互層をなしている。

#### 土層解説(各柱穴共通)

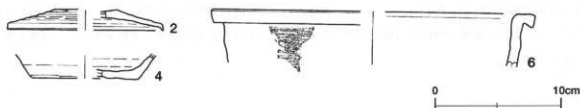
1	暗褐色	ローム粒子少量	10	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量
2	褐色	ロームブロック中量	11	褐色	ロームブロック中量
3	褐色	ロームブロック中量	12	暗褐色	ロームブロック少量
4	褐色	ロームブロック中量	13	褐色	ローム粒子中量
5	褐色	ローム粒子中量	14	暗褐色	ローム粒子少量、粘土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
6	褐色	ローム粒子中量	15	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
7	暗褐色	ローム粒子少量	16	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量
8	暗褐色	ローム粒子少量	17	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
9	褐色	ロームブロック中量			

遺物出土状況 土師器片45点(坏7, 甕38), 須恵器片16点(坏8, 蓋3, 鉢1, 甕4)が各柱穴の埋土などから出土している。第214・215図1・2はP7の埋土, 3~6はP10の柱抜き取り痕から出土しており, そのうち3の口縁部には油煙が付着している。

所見 本跡の時期は, 出土土器から8世紀中葉と考えられる。本跡は他の掘立柱建物跡と比して柱穴の規模が大きく, また柱筋も揃っており, 屋として機能していたものと考えられる。さらに, 同時期に比定される第1091号住居跡や第98号掘立柱建物跡, 第117号掘立柱建物跡とともに, 「大形住居+屋+倉」という構成が看取され, かかる有力者層の存在が窺われる。



第214图 第99号掘立柱建物跡・出土遺物実測図



第215図 第99号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第99号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第214・215図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[13.6]	4.2	[8.2]	雲母・長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り	P7埋土	P10627, 5%
2	須恵器	甕	[12.4]	(1.6)	-	雲母・長石	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	P7埋土	P10628, 10%
3	須恵器	坏	[11.8]	(3.5)	-	雲母・長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り	2跡抜き取り痕	P10629, 10%, 口縁部油漉付着
4	須恵器	坏	-	(2.0)	[8.2]	雲母・長石・石英	灰	普通	底部縁ヘラ削り, 多段階ヘラ削り	2跡抜き取り痕	P10630, 10%
5	須恵器	甕	[16.7]	(2.2)	-	長石・石英	黄灰	普通	外周部・口縁部ロコナテ	2跡抜き取り痕	P10631, 10%
6	須恵器	鉢	[25.4]	(4.2)	-	雲母・長石・石英	灰	普通	口縁部ロコナテ, 縁部縁の平行削り	2跡抜き取り痕	P10632, 5%

第111号掘立柱建物跡 (第216・217図)

位置 調査区東部のO13I2区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 P1～P5・P10が第1091号住居跡, P6・P7が第1380号住居跡, P8が第1096号住居跡, P9が第1090号住居跡をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と構造 桁行3間, 梁行2間の側柱式の建物跡で、桁行方向をN-78°-Eとする東西棟である。規模は桁行長7.52m, 梁行長4.96mであり、柱間寸法は桁行・梁行ともに概ね2.50mを基調とし、柱筋も揃っているが、最も間隔の狭いP4・P5間隔は1.80m, 最も広いP2・P3間やP5・P6間は3.00mを測るなど、ばらつきが見られる。

柱穴 平面形はP1・P2・P4・P10が円形で、その他は隅丸方形, ないし隅丸長方形を呈しており、深さは20～57cmである。柱抜き取り痕は第3・6～9・11・12・14・15・18層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土であり、ローム土を主体とした暗褐色土や褐色土で埋め戻されて互層をなしているが、強く突き固められてはいない。

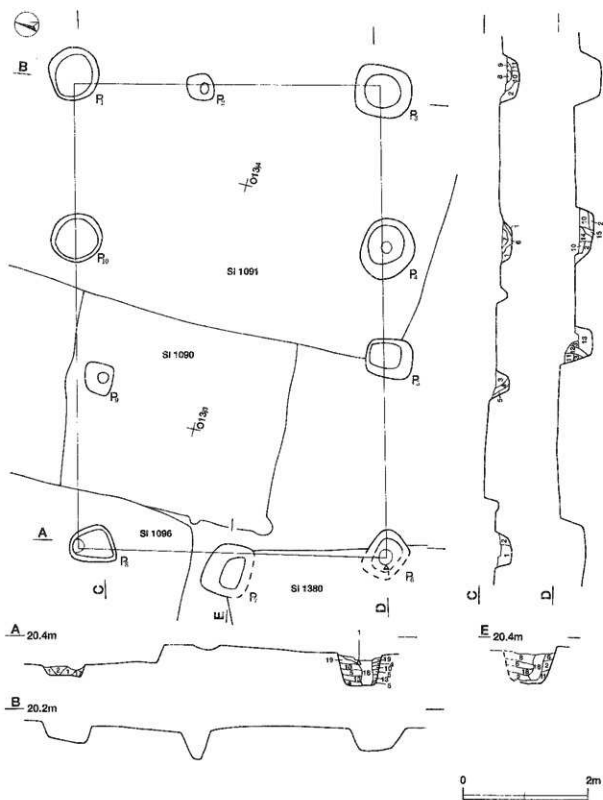
土層解説 (各柱穴共通)

1	褐色	ロームブロック多量	11	褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量
2	褐色	ロームブロック中量	12	暗褐色	ロームブロック少量
3	黒褐色	ローム粒子少量	13	暗褐色	ローム粒子中量
4	暗褐色	ロームブロック少量	14	暗褐色	ローム粒子微量
5	明褐色	ロームブロック多量	15	暗褐色	ローム粒子中量
6	黒褐色	ローム粒子微量	16	褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量
7	黒褐色	ローム粒子少量	17	褐色	ロームブロック中量
8	黒褐色	ローム粒子微量	18	暗褐色	ローム粒子少量
9	黒褐色	ローム粒子微量	19	暗褐色	ロームブロック少量
10	黒褐色	ロームブロック微量			

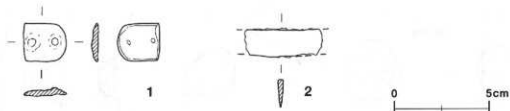
遺物出土状況 土師器片5点(坏1, 甕4), 須恵器片4点(坏3, 甕1)がP1・P2・P4・P7の柱抜き取り痕, 不明鉄製品1点, 刀子1点がP6の柱抜き取り痕から出土している。土器はいずれも細片で、形状を把握できるものは出土していない。また、第217図1の鉄製品は板状を呈しており、馬具の可能性がある。

所見 本跡からの出土遺物では、細かな時期の判断は困難である。本跡は、桁行方向を同一にする第112・131

号掘立柱建物跡と同時期に機能していたことが想定され、時期は同建物跡の年代観に従って10世紀前半と推定される。また、柱穴規模や形状から見て堅固な1層は想定されず、私的な動産の保管場所といった雑沓的な機能が推定される。



第216図 第111号掘立柱建物跡実測図



第217図 第111号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第111号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第217図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	鈍尾	2.2	2.0	0.2	(3.7)	鉄	孔径0.2cmの目釘穴2か所有り、馬具の帯金具カ。	P6敷き取り裏	M10127, 30%, P149
2	刀子	(4.1)	(1.5)	0.3	(3.0)	鉄	刃部の破片。	P19敷き取り裏	M10128

### 第112号掘立柱建物跡(第218・219図)

位置 調査区東部のP13b1区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 P4・P7が第1379号住居跡に掘り込まれ、P8・P9が第99号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。規模と構造 桁行、梁行ともに2間の総柱式の建物跡で、桁行方向をN-74°-Eとする東西棟である。規模は桁行長4.51m、梁行長4.21mを測り、柱間寸法は東側部分の桁行と北側部分の梁行が2.40m、西側部分の桁行と南側部分の梁行が1.80mを基調としており、南西側で柱間寸法が狭く、北東側で柱間寸法が広がる構造を示している。

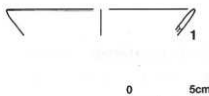
柱穴 平面形はP6・P8が隅丸方形で、その他は円形を呈し、深さは30~38cmである。柱抜き取り痕は第1・5・7・10・11層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土であり、ローム土を主体とした暗褐色土や褐色土で互層に突き固められている。

#### 土層解説(各柱穴共通)

1 極暗褐色	ロームブロック少量	7 暗褐色	ローム粒子中量
2 暗褐色	ロームブロック中量、 焼土粒子少量、炭化粒子微量	8 褐色	ロームブロック中量、 焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック中量	9 黒褐色	ローム粒子少量、 焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック中量	10 黒褐色	ロームブロック少量、 炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック中量、 焼土粒子・炭化粒子微量	11 黒褐色	ロームブロック少量、 炭化粒子・砂粒微量
6 褐色	ロームブロック多量		

遺物出土状況 土師器片11点(碗5, 甕6), 須恵器片5点(杯4, 甕1), 灰釉陶器片1点(瓶)がP2・P3・P7・P8から出土している。第219図1はP8の柱抜き取り痕から出土しており、焼成が悪く、褐灰色を呈している。

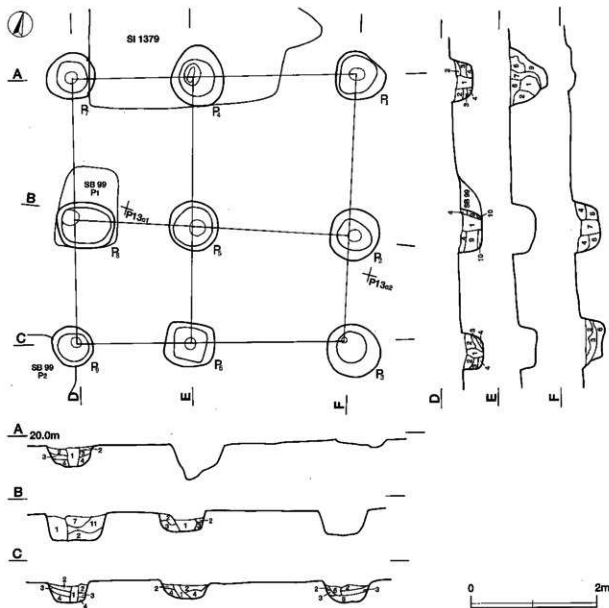
所見 本跡は、桁行方向を同一にする第111・131号掘立柱建物跡と同時期に倉として機能していたと想定され、時期は出土土器と併せて10世紀前半に位置付けられる。



第218図 第112号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第112号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第219図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	杯	[15.0]	(21)	-	雲母・赤色粒子	褐灰	普通	体部口口整形	P8抜き取り裏	P10652, 5%



第219図 第112号掘立柱建物跡実測図

### 第113号掘立柱建物跡 (第220図)

**位置** 調査区東部のO12h5区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。また、北側部分は調査区域外に延びている。

**重複関係** P 7 が第1257号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と構造** 桁行・梁行ともに2間が確認され、桁行方向を $N-3^{\circ}-W$ とする南北棟であり、形状から見て北側部分はさらに調査区域外に延びるものと考えられる。規模は梁行長3.93m、確認された部分の桁行長5.30mの側柱式の建物跡で、柱間寸法は桁行が2.50m、梁行が2.00mを基調としている。

**柱穴** 平面形はP 6・P 7 が円形で、その他は楕円形を呈し、深さは20~58cmである。柱抜き取り痕(第1・2・5・6層)はすべての柱穴から確認され、しまりが弱い。その他の層は埋土であり、ローム土を主体とした暗褐色土や褐色土で互層に突き固められている。

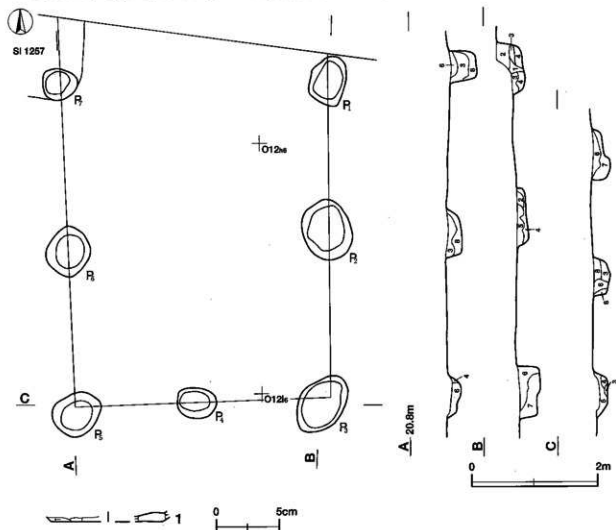
土層解説 (各柱穴共通)

- |       |                   |        |                 |
|-------|-------------------|--------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量   | 5 極暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量   | 6 暗褐色  | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 7 極暗褐色 | ロームブロック少量       |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 8 褐色   | ロームブロック多量       |

遺物出土状況 土師器片17点(坏2, 甕15), 須恵器片2点(杯1, 蓋1)がP7の埋土から出土している。

第220図1は須恵器杯の底部片で, 箱形を呈するものである。

所見 本跡は桁行方向を同一にして, 東西に並列する第117号掘立柱建物跡とともに倉庫的な機能を果たしていたと考えられ, 時期は出土土器と併せて8世紀中葉と考えられる。



第220図 第113号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

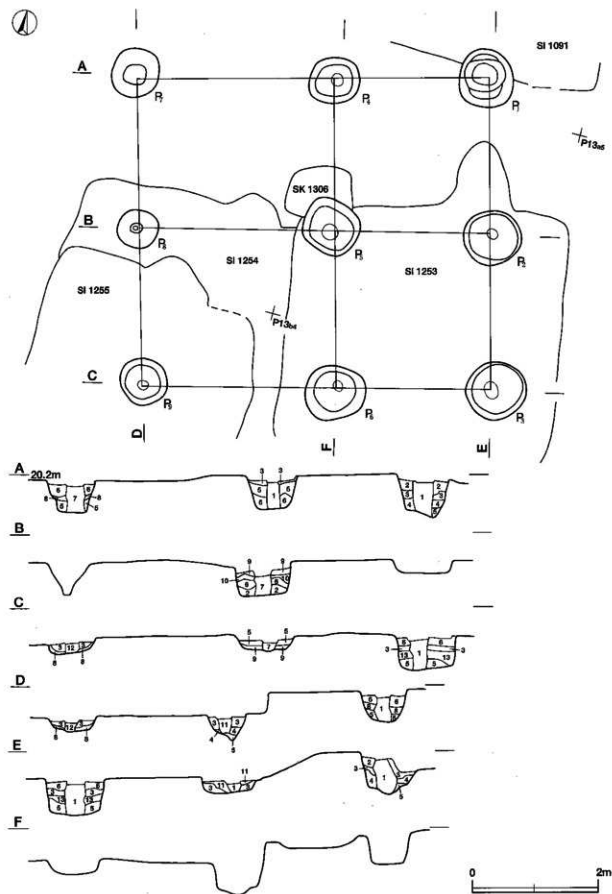
第113号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第220図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	-	(0.8)	[8.8]	雲母・長石・石英	灰	普通	底部多方向のヘラ削り	P7埋土	P10633, 5%

第114号掘立柱建物跡 (第221・222図)

位置 調査区東部のP13a3区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 P1が第1091号住居跡, P5が第1253号住居跡と第1306号土坑, P2・P3・P6が第1253号住居跡, P8が第1254号住居跡, P9が第1255号住居跡をそれぞれ掘り込んでいる。



第221图 第114号掘立柱建物跡実測图



**規模と構造** 桁行、梁行ともに2間の総柱式の建物跡で、桁行方向をN-75°-Eとする東西棟である。規模は桁行長5.60m、梁行長5.00mを測り、梁行の柱間寸法は2.50mを基調としているが、桁行は東側部分で2.50m、西側部分で3.10mと柱間寸法が異なる構造を示している。

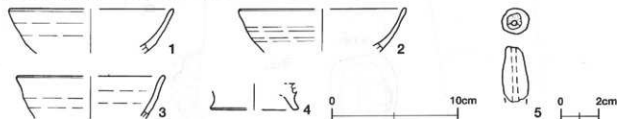
**柱穴** 平面形はP5が隅九方形で、それ以外は円形を呈しており、深さは18~60cmである。柱抜き取り痕は第1・7・11・12層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土であり、ローム土を主体とした暗褐色土や褐色土で互層に突き固められている。

**土層解説 (各柱穴共通)**

- |        |                        |         |                           |
|--------|------------------------|---------|---------------------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量        | 8 褐色    | ロームブロック多量, 炭化粒子微量         |
| 2 褐色   | ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 黒褐色   | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量  |
| 3 暗褐色  | ロームブロック少量, 炭化粒子微量      | 10 褐色   | ロームブロック多量, 炭化粒子微量         |
| 4 暗褐色  | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 黒褐色  | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量         |
| 5 暗褐色  | ロームブロック中量              | 12 灰褐色  | 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量, ローム粒子微量 |
| 6 極暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量      | 13 極暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量            |
| 7 暗褐色  | ローム粒子少量, 炭化粒子微量        |         |                           |

**遺物出土状況** 土師器片75点(椀44, 甕31), 須恵器片10点(甕10), 管状土錘1点が各柱穴の柱抜き取り痕を中心に出土している。第222図1はP7, 2~4はP2, 5はP6のいずれも柱抜き取り痕から出土している。

**所見** 本跡の時期は小皿が出土していないことや土師器碗の形状などから10世紀前半と考えられ、倉として機能していたと想定される。柱穴の重複はないものの、本跡と同じ総柱式の建物跡で、規模や桁行方向を同じくする第96号掘立柱建物跡が本跡の西側部分で重なった形で確認されており、出土土器の形状から見て本跡から第96号掘立柱建物跡への建て替えが行われたことが想定される。



第222図 第114号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第114号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第222図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	椀	[13.0]	(3.5)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	体部クロ口整形	P7抜き取り痕	P10653, 5%
2	土師器	椀	[13.2]	(3.4)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部クロ口整形	P2抜き取り痕	P10654, 5%
3	土師器	椀	[11.6]	(3.4)	-	石英・赤色粒子	橙	普通	体部クロ口整形	P2抜き取り痕	P10655, 5%
4	土師器	高台付椀	-	(2.1)	[6.6]	赤色粒子	にぶい黄橙	普通	高台部付口部コナテ, 内面黒色	P2抜き取り痕	P10656, 5%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5	管状土錘	(2.9)	0.7	0.3	(4.1)	土製	ナデ, 褐灰色を呈する。	P6抜き取り痕	DP10022, 90%

**第115号掘立柱建物跡 (第223・224図)**

**位置** 調査区東部のP12c5区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。また、西側部分は調査区域外に延びている。

**重複関係** P1・P2が第1366号住居跡を掘り込み、P3が第1365号住居跡に掘り込まれている。

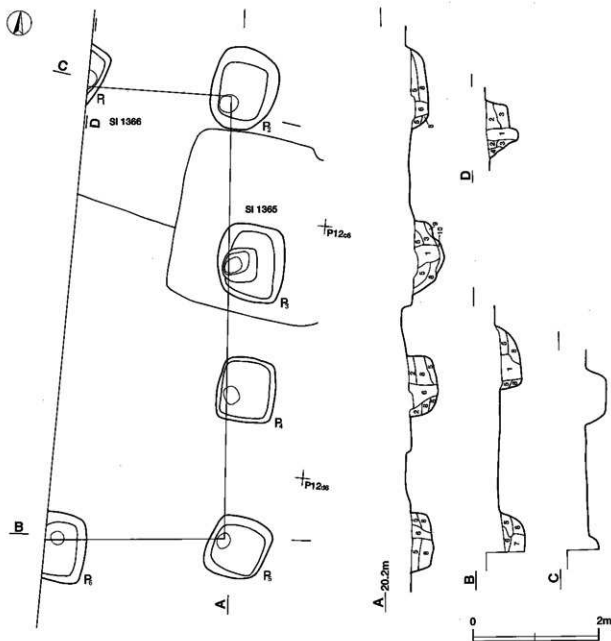
**規模と構造** 桁行3間の側柱式の建物跡で、桁行方向をN-4°-Wとする南北棟と考えられる。梁行は調査

区域外に延びているため断定はできないが、形状から見て2間の可能性が高い。規模は、桁行長が7.30m、梁行長は確認された部分で2.65mを測る。また、柱間寸法はP3・P4間だけが2.10mと短く、それ以外は桁行・梁行ともに2.40mを基調としている。

柱穴 平面形は隅丸方形、または隅丸長方形を呈し、深さは28~58cmである。柱抜き取り痕は第1・6・7層が相当し、しまりが弱い。それ以外の層は埋土であり、ローム土を主体とした暗褐色土・褐色土で互層をなし、突き固められている。

土層解説 (各柱穴共通)

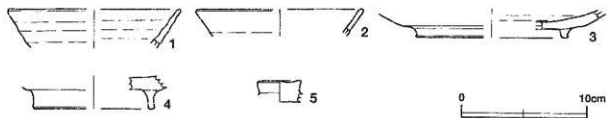
- |        |                       |        |                  |
|--------|-----------------------|--------|------------------|
| 1 暗褐色  | ローム粒子中量、炭化粒子少量        | 6 極暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量   |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量    | 7 暗褐色  | ローム粒子中量、炭化粒子少量   |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック少量             | 8 暗褐色  | ロームブロック中量        |
| 4 極暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 褐色   | ロームブロック多量        |
| 5 暗褐色  | ロームブロック中量             | 10 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量 |



第223図 第115号掘立柱建物跡実測図

遺物出土状況 土師器片12点(甕12), 須恵器片9点(杯5, 甕2, 蓋1), 鉄滓4点が各柱穴の柱抜き取り痕から出土している。第224図1~4はいずれもP3の柱抜き取り痕, 5はP4の柱抜き取り痕から出土している。

所見 本跡の時期は8世紀代の住居跡を掘り込んでいることや出土土器の形状から9世紀前葉と考えられ, 銅鑊などを納める倉庫としての機能が想定される。



第224図 第115号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第115号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第224図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	杯	13.6	(3.1)		長石・石英	灰	普通	体部ロクロ整形	P3柱抜き取り痕	P10634, 5%
2	須恵器	杯	13.0	(2.1)		雲母・長石	灰	普通	体部ロクロ整形	P3柱抜き取り痕	P10635, 5%
3	須恵器	甕		(2.2)	11.9	雲母・長石・石英	灰白	普通	底面凹へた型取り後, 高付取り付	P3柱抜き取り痕	P10636, 10%
4	須恵器	甕		(2.7)	9.4	雲母・長石・石英	灰	普通	底面凹へた型取り後, 高付取り付	P3柱抜き取り痕	P10637, 5%
5	須恵器	蓋		(1.7)		雲母・長石・石英	灰黄褐	特殊	つまみ取り付付後, ロクロナデ	P4柱抜き取り痕	P10638, 5%

### 第116号掘立柱建物跡(第225図)

位置 調査区東部のP12h6区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。また, 北側部分は調査区域外に延びている。

重複関係 P2が第1373号住居跡に掘り込まれている。

規模と構造 梁行2間の側柱式の建物跡で, 桁行方向をN-4°-Eとする南北棟である。桁行は調査区域外に延びているために断定はできないが, 形状から見て3間の可能性が高い。規模は梁行長が4.57m, 桁行長は確認できた部分で2.53mを測り, 柱間寸法は桁行・梁行ともに2.40mを基調としている。

柱穴 平面形はP1~P3が楕円形, P4が円形, P5が隅丸長方形を呈し, 深さは20~50cmである。柱抜き取り痕はすべての柱穴で確認され, 第1・13層が相当し, しまりが弱い。それ以外の層は埋土であり, ローム土を主体とした暗褐色土・褐色土で突き固められて互層をなしている。

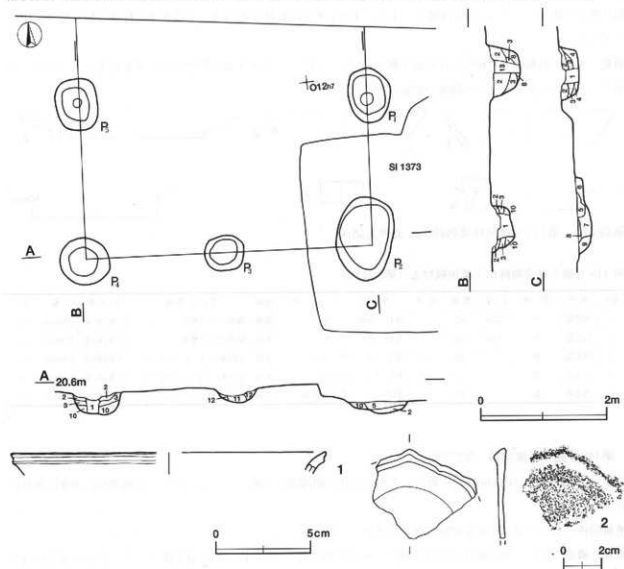
#### 土層解説(各柱穴共通)

1	系	褐色	ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量	8	相	色	ロームブロック中量
2	階	褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量	9	調	色	ロームブロック中量
3	階	褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量	10	階	色	ロームブロック中量, 炭化物微量
4	階	褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量	11	階	色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量
5	階	褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量	12	階	色	ロームブロック多量
6	階	褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量	13	階	褐色	ローム粒子中量, 焼土ブロック・炭化物微量
7	階	褐色	ロームブロック中量				

遺物出土状況 土師器片8点(杯1, 甕7), 銅鏡の破片1点が出土している。第225図1・2はいずれもP4の柱抜き取り痕から出土している。

所見 本跡は, 本跡の南に柱筋を揃えて並列する第97号掘立柱建物跡と同時期に倉庫的な機能を果たしていたと想定され, 時期は出土土器と併せて8世紀前葉と考えられる。P4から出土した銅鏡は八咫鏡の破片であり,

化学分析の結果、混入の可能性が高い。なお、分析結果の詳細については、巻末の付章を参照されたい。



第225図 第116号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第116号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第225図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	壺	[25.0]	(1.7)	-	赤埴・灰石・石英	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ	P4(抜き取り)	P10639, 5%

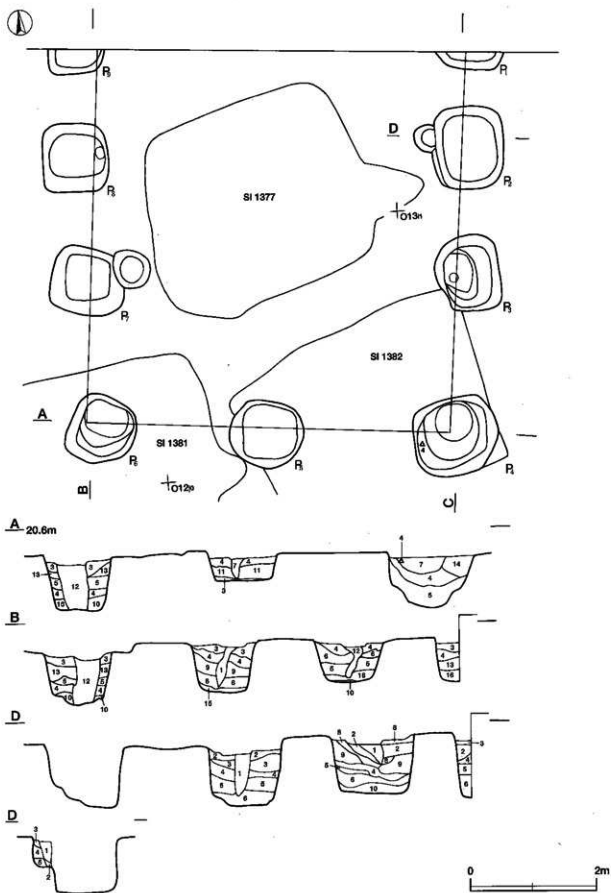
番号	器種	面径	最大厚	最小厚	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2	八棱鏡	(4.9)	0.6	0.3	(33.0)	銅	外周は菱花状、縁は断面三角形。	P4(抜き取り)	M10234, 20%, P120

第117号掘立柱建物跡(第226・227図)

位置 調査区東部のO12h0区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 P3～P5が第1382号住居跡、P6が第1381号住居跡にそれぞれ掘り込まれている。

規模と構造 梁行2間の側柱式の建物跡で、桁行方向を $N-5^{\circ}-E$ とする南北棟である。桁行は3間が確認されているが、さらに北側に延びるものと思われる。規模は梁行長が5.50m、桁行長は確認できた部分で5.85mを測る。また、柱間寸法は桁行が2.10m、梁行が2.70mを基調としている。

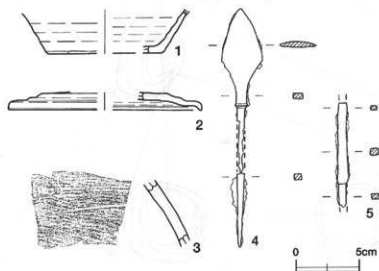


第226图 第117号掘立柱建物跡実測图

**柱穴** 平面形はほぼ隅丸方形を呈し、深さは50~93cmである。柱抜き取り痕は第1・7・12・14層が相当し、しまりが弱い。それ以外の層は埋土であり、ローム土を主体とした暗褐色土・褐色土で互層に突き固められている。また、P2の西側部分には径40cmほどの張り出しがあり、土層から判断して柱を抜き取る際に掘り込まれた痕と考えられる。

**土層解説(各柱穴共通)**

- |        |                  |         |                  |
|--------|------------------|---------|------------------|
| 1 黒褐色  | ローム粒子少量,炭化物微量    | 9 暗褐色   | ロームブロック中量,炭化粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック少量,炭化粒子数粒 | 10 褐色   | ロームブロック多量,炭化粒子数粒 |
| 3 暗褐色  | ロームブロック中量        | 11 褐色   | ロームブロック多量        |
| 4 暗褐色  | ロームブロック中量        | 12 暗褐色  | ローム粒子・炭化粒子少量     |
| 5 褐色   | ロームブロック多量        | 13 暗褐色  | ロームブロック中量,炭化粒子数粒 |
| 6 暗褐色  | ロームブロック中量        | 14 極暗褐色 | ローム粒子少量,炭化粒子微量   |
| 7 極暗褐色 | ローム粒子少量,炭化物微量    | 15 暗褐色  | ロームブロック中量,焼土粒子数粒 |
| 8 黒褐色  | ローム粒子少量,炭化粒子微量   | 16 暗褐色  | ロームブロック中量        |



**遺物出土状況** 土器器片38点(杯8, 甕30), 須惠器片35点(杯12, 蓋1, 甕22), 鉄線2点が各柱穴から出土している。第227図1はP2, 2はP3のいずれも埋土から出土している。

**所見** 本跡の時期は出土土器から8世紀中葉と考えられ、南に隣接する第99号掘立柱建物跡と桁行方向や柱穴規模がほぼ一致しており、同時期に須船などを納める倉庫として機能していたものと考えられる。

第227図 第117号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第117号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第227図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須惠器	杯	-	(3.5)	[9.0]	雲母・長石・石英	灰	普通	底部一方のヘラ削り	P2埋土	P10640, 10%
2	須惠器	甕	[15.4]	(1.4)	-	長石・石英	灰	普通	天井部右側の回転ヘラ削り	P3埋土	P10641, 5%
3	須惠器	甕	-	(5.3)	-	雲母・長石・石英	灰	普通	胴部左側の平行刃, 舌先ヘラ削り	P3抜き取り痕	TP10017, 5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4	鉄	[19.1]	3.2	0.5	(39.2)	鉄	柳葉式, 基部一部欠損, 台状開有り。	P4抜き取り痕	M10134, PL69
5	鉄	(8.4)	0.9	0.6	(13.0)	鉄	龍鱗部から基部にかけての破片, 台状開。	P9抜き取り痕	M10125, PL69

**第131号掘立柱建物跡(第228~230図)**

**位置** 調査区東部のP12b8区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

**重複関係** P4・P16が第99号掘立柱建物跡の柱穴, P5・P19が第1371号住居跡, P7・P8が第1367号住居跡をそれぞれ掘り込み, P12が第1308号土坑に掘り込まれている。

**規模と構造** 桁行4間, 梁行2間の身舎に、西妻側を除いた三面に庇が付属する建物跡で、桁行方向をN-75°-Eとする東西棟である。桁行は身舎だけで9.10m, 庇の部分を含めると10.90mを測り、梁行は身舎だけで5.00m, 庇の部分を含めると8.60mになる。柱間寸法は桁行, 梁行ともにほぼ2.40mで、庇の間はほぼ1.80m

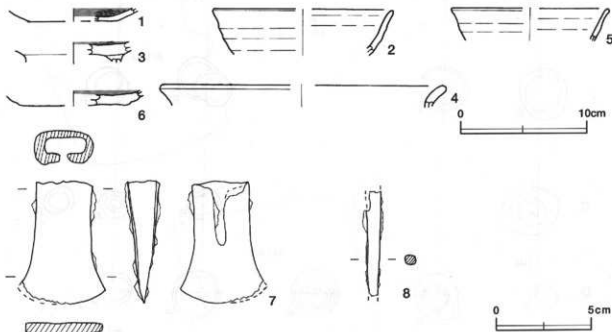
である。

柱穴 平面形はいずれも円形を呈し、深さは30~68cmであり、身舎と庇の柱穴規模に明確な違いは認められない。柱抜き取り痕は第1・4・10・12層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土であり、ローム土を主体とした暗褐色土や褐色土で互層に突き固められている。

土層解説 (各柱穴共通)

1 暗褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック中量, 炭化物微量
2 暗褐色	ロームブロック中量, 炭化物少量	8 暗褐色	ロームブロック中量
3 暗褐色	ロームブロック中量	9 暗褐色	ローム粒子多量
4 黒褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子・粘土粒子微量	10 暗褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック少量, 炭化物微量	11 褐色	ロームブロック多量
6 褐色	ロームブロック多量, 炭化粒子微量	12 暗褐色	ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片102点(碗42, 壺60), 須恵器片24点(坏13, 蓋1, 壺10), 鉄斧1点, 棒状の鉄製品(釘カ)1点が各柱穴の埋土を中心に出土している。第230図1はP3, 2・3はP8, 4はP21, 5・6はP24のいずれも埋土から出土している。また7の鉄斧はP23, 8の棒状の鉄製品はP14のいずれも柱抜き取り痕から出土している。

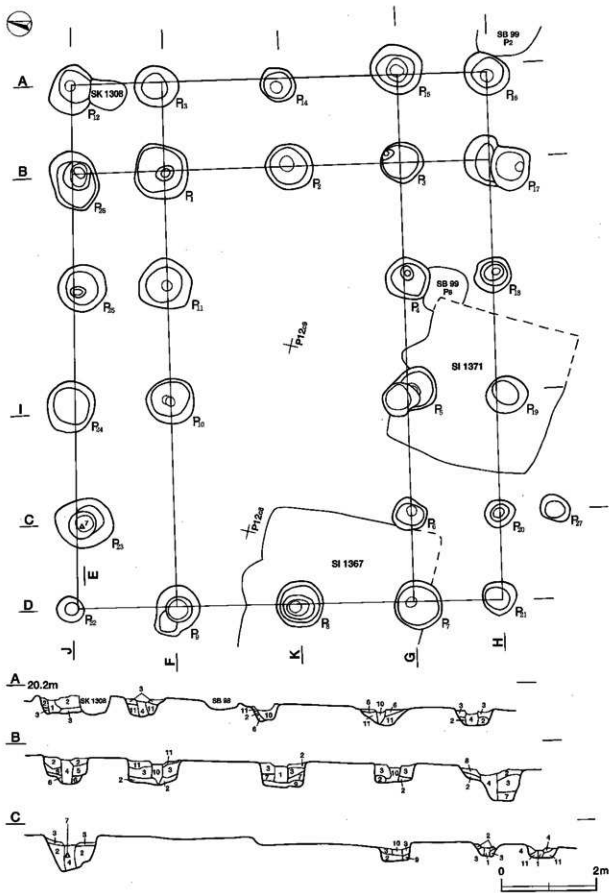


第228図 第131号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第131号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第228図)

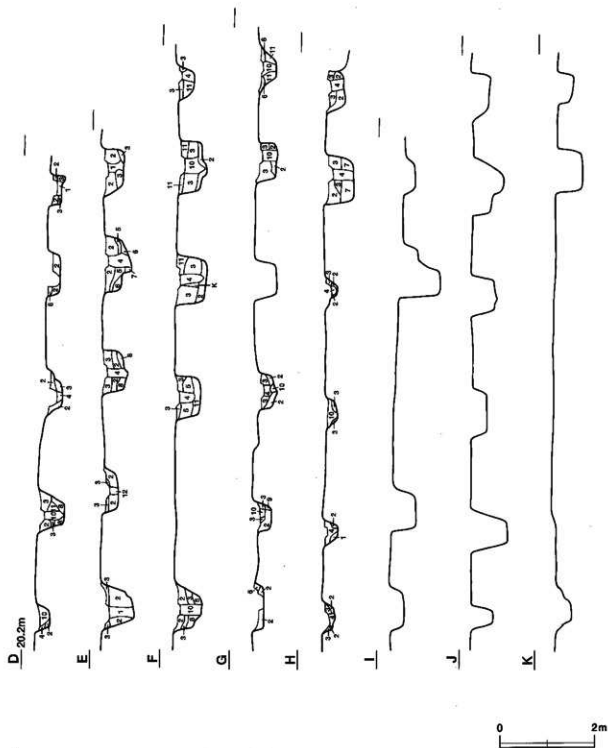
番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	-	(1.0)	[7.0]	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部一方向のヘラ削り	P3埋土	P10657, 5%
2	土師器	碗	[14.0]	(3.6)	-	石英	にぶい黄橙	普通	体部ロク口整形	P8埋土	P10658, 5%
3	土師器	高台付碗	-	(1.7)	-	石英	にぶい黄	普通	高台貼り付け後, ロクロナデ	P8埋土	P10659, 5%
4	土師器	壺	[22.0]	(1.8)	-	炭母・長石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ	P21埋土	P10660, 5%
5	土師器	碗	[12.4]	(2.6)	-	雲母・長石	明褐色	普通	体部ロク口整形	P24埋土	P10661, 5%
6	土師器	坏	-	(1.2)	[8.8]	赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ削り, 底面縁ヘラ削り	P24埋土	P10662, 5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
7	鉄斧	6.5	[4.7]	1.5	(76.0)	鉄	袋部・刃先端一部欠損。方形の袋部を有し、刃部は楕円。	P23抜き取り痕	M1029, 90%, P140
8	不明	(5.6)	0.7	0.5	(5.5)	鉄	断面隅丸長方形の棒状。鉄釘カ。	P14抜き取り痕	M10139



第229图 第131号掘立柱建物跡実測图(1)





第230図 第131号掘立柱建物跡実測図（2）

所見 本跡の時期は出土土器から10世紀前半に位置付けられる。本跡は規模や構造から見て当該期の集落の中心的な役割を担っていた建物跡と考えられ、同時期に比定される複数の掘立柱建物跡が本跡の東側に柱筋を揃えて並列している。また、当調査区からは鉄鉢形土器や灯明具など仏具的な遺物が少なからず出土しており、仏堂的な建物跡の可能性も指摘できる。

### (3) 大形堅穴状遺構

今回の調査で、4基の大形堅穴状遺構を確認した。大形堅穴状遺構（円形有段遺構）は、茨城県南部から千葉県北部、栃木県中央部にかけて検出されており、特に官衙関連遺跡から検出される例が多い。当遺跡においても大形堅穴状遺構として既に3例が報告され、また、土坑として報告されたものの中にも2例含まれており、今回の報告と併せて計9基が検出されている。このような大形堅穴状遺構の性格については不明な点が多いが、水室とする説もあり、当遺跡の北端部に位置する第606号土坑の土壌分析で水性珪藻が検出されたことは、水室の可能性を迫るものといえる。以下、検出された遺構と遺物の特徴を記述する。

#### 第4号大形堅穴状遺構（第231～233図）

**位置** 調査区西部のP10g5区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

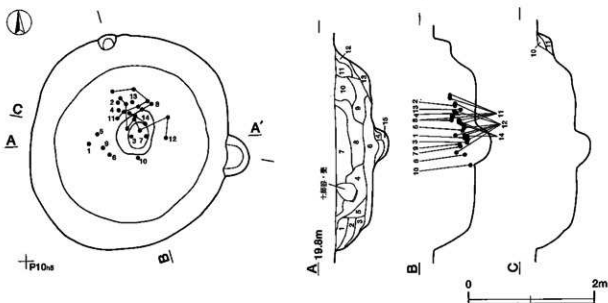
**規模と形状** 長径3.54m、短径3.16mの若干南北に長い楕円形で、深さは65cmほどである。底面はほぼ平坦な円形で、底面径は2.45～2.55mを測り、中央部には径0.55～0.75mの楕円形で深さ0.30mの掘り込みを有している。

**覆土** 15層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

#### 土層解説

1 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	8 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2 黒褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量	9 黒褐色	ロームブロック・粘土粒子中量、焼土粒子少量
3 黒褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	10 黒褐色	ロームブロック少量
4 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量	11 暗褐色	ロームブロック中量
5 灰褐色	粘土粒子多量、ロームブロック中量	12 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
6 強暗褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	13 暗褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化粒子少量
7 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	14 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
		15 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量

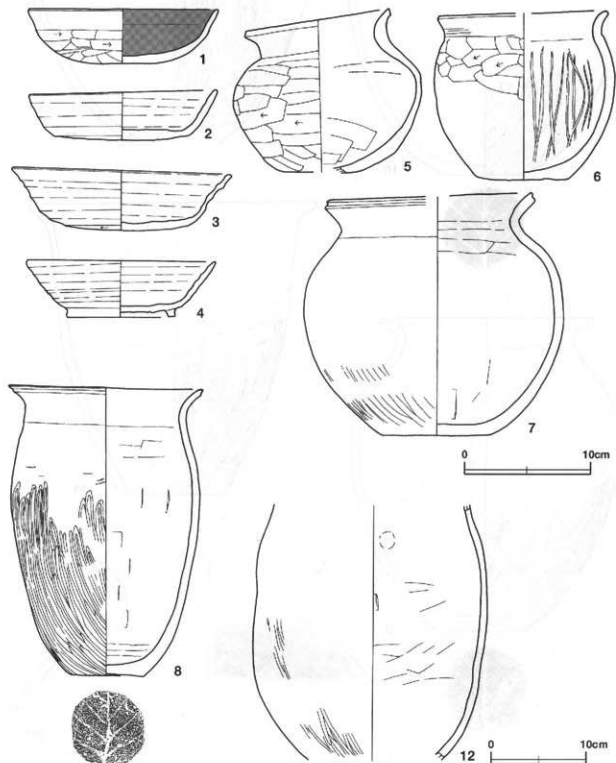
**遺物出土状況** 土師器片23点（坏7，皿1，甕14，瓶1），須恵器片9点（坏3，盤1，蓋1，甕4），馬頭骨1が中央部の覆土中層から下層にかけて出土している。遺存状態はいずれも良好で、14点を図示することができ、そのうち第233図9と10の土師器甕はほぼ完形の状態で覆土中層から逆位で出土している。その他の土器は覆土中層から下層にかけて破砕された状態でまぎって出土している。また、馬頭骨も土器類と共に中央



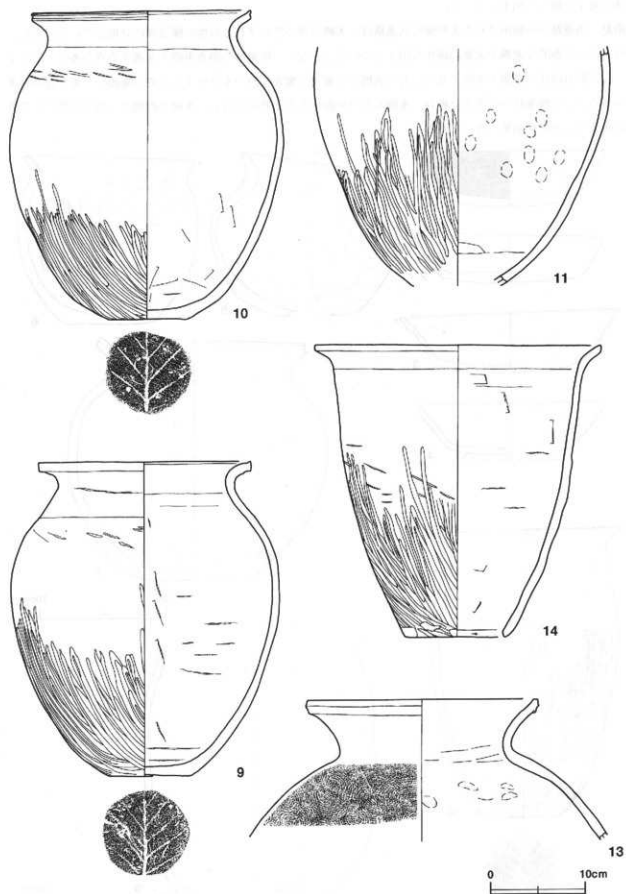
第231図 第4号大形堅穴状遺構実測図

部の覆土下層から出土している。

所見 当遺跡から検出された大形堅穴状遺構は、本跡を含めていずれも台地の縁辺部に立地している。また、付近から官衙的な遺構や大甕の破片が出土していることなど、他遺跡の調査事例と共通する点が多い。このような円形有段状の遺構を氷室と見て、有力者層の主催する饗宴に酒や氷を供するための施設の一部と見る論説があるが、立地条件から考えた場合、本跡もその可能性が充分想定される。本跡の時期は、出土土器から7世紀末葉から8世紀前葉と考えられる。



第232図 第4号大形堅穴状遺構出土物実測図(1)



第233图 第4号大形竖穴状遗物出土遺物実測図(2)

第4号大形堅穴状遺構出土遺物観察表 (第232・233図)

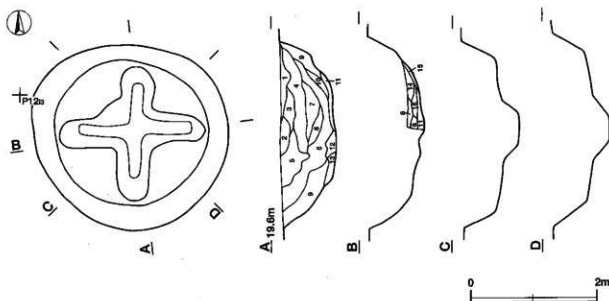
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	15.0	4.3	-	赤色砂子	褐色	普通	体部外面へラ削り、内面ナデ	中央部下層	F1087, 70%, PL58
2	須恵器	坏	14.8	4.0	10.7	雲母・長石・石英	灰白	普通	体部コケロ成形、底面回転へラ削り	中央部中層	F1088, 80%, PL58
3	須恵器	坏	17.2	4.7	11.0	雲母・長石・石英	灰黄	普通	体部コケロ成形、底面回転へラ削り	中央部下層	F1089, 90%, PL59
4	須恵器	高台付坏	15.0	4.5	8.5	雲母・長石・石英	黄灰	普通	底面回転へラ削り後、高台削り付け	中央部下層	F1090, 90%, PL59
5	土師器	小形壺	11.5	13.2	5.5	長石・赤色砂子	にぶい橙	普通	体部内面・底面へラ削り、内面ヘラナデ	中央部下層	F1081, 90%, PL60
6	土師器	小形壺	[132]	13.4	7.2	雲母・長石・石英	橙	普通	体部内面へラ削り、底面多方向へラ削り	中央部下層	F1082, 90%, PL60
7	土師器	壺	[160]	19.3	8.6	雲母・長石・石英	褐色	普通	体部外面上段ヘラナデ、下位へラ磨き、内面ヘラナデ、底面本裏面	中央部下層	F1083, 60%, 外環状化付着, PL60
8	土師器	壺	20.0	30.3	7.8	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面上段ヘラナデ、中位以下へラ磨き、内面ヘラナデ、底面本裏面	中央部中層	F10684, 95%, 外環状化付着, PL60
9	土師器	壺	21.9	32.8	8.8	雲母・長石・石英	橙	普通	体部外面上段ヘラナデ、下位へラ磨き、内面ヘラナデ・輪縁本裏面、底面本裏面	中央部中層	F10685, 100%, 外環状化付着, PL60
10	土師器	壺	22.7	32.4	8.2	雲母・長石・石英	橙	普通	体部外面上段・内面ヘラナデ、下位へラ磨き	中央部下層	F1086, 90%, PL59
11	土師器	壺	-	(25.0)	-	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部外面へラ磨き、内面ナデ・頸縁面	中央部中層	F10687, 40%
12	土師器	壺	-	(26.8)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面へラ磨き、内面ヘラナデ	中央部中層	F10688, 90%, PL61
13	須恵器	壺	23.9	(15.0)	-	雲母・長石・石英	黄灰	普通	体部内面・底面のみ、内面ヘラナデ・頸縁	中央部中層	F1088, 20%, PL59
14	土師器	甗	30.0	30.5	10.3	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ・輪縁のみ	中央部中層・下層	F10690, 85%, PL58

第5号大形堅穴状遺構 (第234・235図)

位置 調査区西部のP1213区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

規模と形状 長径3.18m、短径2.97mの円形で、深さは0.85mほどである。底面は径が2.30~2.45mの円形で、中央部には深さ0.25mの十字状の掘り込みを有している。

覆土 16層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。



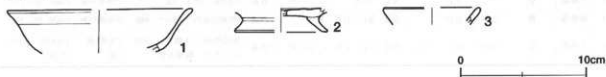
第234図 第5号大形堅穴状遺構実測図

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	10 暗褐色	ロームブロック中量
2 暗褐色	ロームブロック少量	11 暗褐色	ローム粒子中量, 炭化物・粘土ブロック少量
3 暗褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化物少量	12 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量
4 暗褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量	13 暗褐色	ローム粒子・粘土ブロック中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量
5 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	14 暗褐色	ロームブロック中量, 粘土ブロック少量
6 褐色	ローム粒子多量, 焼土ブロック微量	15 暗褐色	ロームブロック中量
7 暗褐色	ロームブロック中量, 炭化物少量	16 暗褐色	ロームブロック中量
8 黒褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子微量		
9 褐色	ロームブロック多量		

遺物出土状況 土師器片49点(碗13, 小皿2, 甕34), 須恵器片6点(甕6)がほぼ全域から散在した状態で出土している。遺物はいずれも細片のため, 3点だけが図示できた。第235図1~3はいずれも覆土中からの出土である。

所見 本跡は, 底面に掘り込まれた部分の形状が十字状で, 他の大形竪穴状遺構と様相が異なるが, それ以外の部分の形状や全体の規模は近似しており, 同様の機能を有していた可能性が指摘できる。本跡の時期は出土土器がいずれも細片のため特定が困難であるが, 土師器小皿や碗が出土していることなどから判断して10世紀後半と考えられる。



第235図 第5号大形竪穴状遺構出土遺物実測図

第5号大形竪穴状遺構出土遺物観察表(第235図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	杯	[147]	(35)	-	雲母・長石	にぶい橙	普通	体部口ロ成形成	覆土中	P10788, 10%
2	土師器	高台付碗	-	(19)	[73]	雲母・長石	にぶい橙	普通	高台附り付付け, ロクロナデ	覆土中	P10789, 10%
3	土師器	小皿	[76]	(14)	-	長石	橙	普通	体部口ロ成形成	覆土中	P10790, 5%

第6号大形竪穴状遺構(第236図)

位置 調査区西部のP14a2区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。

規模と形状 長径3.65m, 短径3.37mの円形を呈し, 深さ1.77mで, 掘鉢状に掘り込まれている。

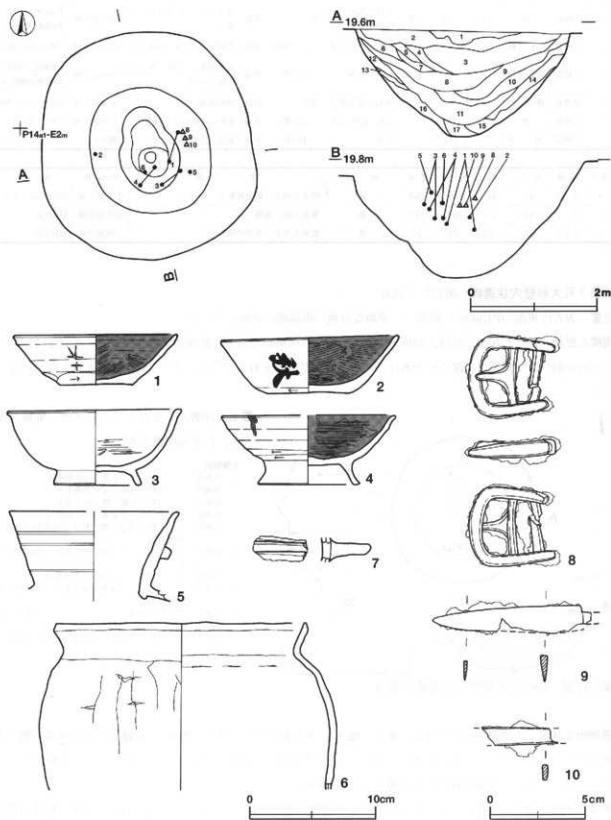
覆土 17層からなり, ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	10 暗褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子微量	11 暗褐色	ロームブロック中量
3 暗褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化物微量	12 暗褐色	ロームブロック中量
4 褐色	ロームブロック多量	13 暗褐色	ロームブロック中量
5 暗褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量	14 暗褐色	ロームブロック中量
6 暗褐色	ロームブロック中量	15 暗褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量
7 褐色	ロームブロック多量, 炭化物微量	16 暗褐色	ローム粒子中量, 炭化粒子微量
8 暗褐色	ロームブロック少量	17 暗褐色	ロームブロック少量
9 暗褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子微量		

遺物出土状況 土師器片41点(碗31, 甕9, 羽釜1), 須恵器片21点(杯14, 蓋1, 甕4, 壺1, 甗1), 鉄具1点, 刀子1点, 不明鉄製品1点(鉄鎌カ), 鉄滓1点がいずれも中央部の覆土中層から出土している。そのうち第236図1の体部外面には倒位で「十大」と刻書されており, 2の体部外面には横位で「秋」と墨書されている。

所見 第236図2の体部外面に「秋」と墨書された文字は墨書土器としては達筆で、筆遣いに習熟した識字層によるものと見られる。また、鉸具や刀子の出土も有力者層との関連が窺われる。本跡の時期は、出土土器から10世紀前半と考えられる。



第236図 第6号大形竪穴状遺構・出土遺物実測図

第6号大形竪穴状遺構出土遺物観察表 (第236図)

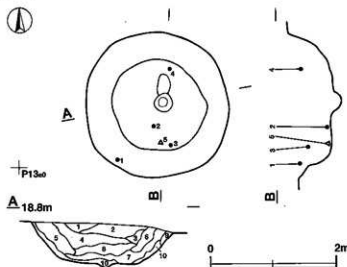
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	12.8	4.0	5.8	長石・赤色粒子	橙	普通	底部一方へのヘラ削り	中央部中層	P10699, 70%, 外部外層跡 [十九]
2	土師器	坏	14.0	4.6	6.3	雲母・長石・赤色粒子	橙	普通	底部下端・底部回転ヘラ削り	中央部中層	P10700, 80%, 外周層1枚, P16
3	土師器	高台付碗	13.7	6.1	6.7	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ削り後, 高台削り付け	中央部中層	P10701, 90%, P19
4	土師器	高台付碗	[13.6]	5.5	[8.0]	長石・石英	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ削り後, 高台削り付け	中央部中層	P10702, 60%, 口縁部地層付着
5	須恵器	横板*	[13.4]	(7.1)	-	長石・黒色斑点	黄灰	良好	頸部沈蝕2条	中央部上層	P10703, 1%, 自然物
6	土師器	壺	19.7	(13.2)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	内部内・外周ヘラナデ・輪縁み痕	中央部上層	P10704, 30%, P14
7	土師器	羽蓋	-	(1.4)	-	石英	にぶい橙	普通	銅鉋り付け後, ナデ	覆土中	P10705, 5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
8	絞具	4.5	4.2	0.9	28.0	鉄	円金具固定・刺金可動式, 器具カ。	中央部上層	M1013, 100%, P16
9	刀子	(8.4)	1.5	0.4	(11.7)	鉄	基部欠損, 両側カ。	中央部中層	M10136
10	刀子*	(4.1)	(0.9)	0.4	(5.2)	鉄	断面長方形, 基部の破片カ。	中央部中層	M10138

第7号大形竪穴状遺構 (第237・238図)

位置 調査区東部のP13d0区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。

規模と形状 長径2.40m, 短径2.33mの円形で, 深さは0.66mである。底面は平坦な円形で, 底面径は1.45~1.50mを測り, 中央部には深さ0.20mほどの円形の掘り込みを有している。また, 底部は粘土層を掘り込んでいる。



第237図 第7号大形竪穴状遺構実測図

覆土 10層からなり, ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

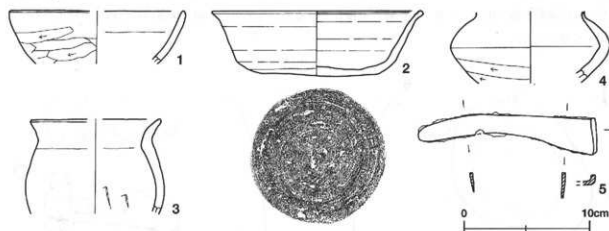
- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化物微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, 粘土粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量, 粘土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 8 黒褐色 ロームブロック少量, 焼七粒子・炭化物・粘土粒子微量
- 9 暗褐色 粘土粒子中量, ロームブロック・炭化粒子微量
- 10 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子少量, 炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片95点 (坏16, 甕51, 甗28), 須恵器片22点 (坏16, 甕6), 鉄鉢1点が中央部の覆土下層を中心に出土している。第238図2~5はいずれも中央部から出土しており, そのうち2・5は底面からの出土である。また, 土師器碗や小皿は覆土上層から出土している。

所見 本跡の南5mは崖状になっており, 付近の遺構の遺存状況が良くないことから見て, 本来の形状は確認された規模よりも深く大形であったと推定される。本跡の時期は主体となる土器から判断して8世紀前葉と考



えられる。



第238図 第7号大形堅穴状遺構出土遺物実測図

第7号大形堅穴状遺構出土遺物観察表(第238図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[13.8]	(3.2)	-	長石・石英	橙	普通	体部外面へウ摺り、内面横ナア	南西部上層	P10706, 20%
2	須恵器	坏	16.7	5.2	10.3	薬母・長石・石英	黄灰	普通	体部コケ成形、美形回転へウ摺り	中央部下層	P10707, 20%, PL28
3	土師器	小形壺	[10.2]	(7.5)	-	長石・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ナア、内面へウナア	中央部中層	P10708, 10%
4	須恵器	短頸壺	-	(5.7)	-	長石・石英	灰	普通	体部下端回転へウ摺り	中央部上層	P10709, 20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5	鎌	14.3	2.9	0.3	(34.0)	鉄	刃部はわずかに彎曲、研ぎ鏡り有り、基部は全体を折り返す。	中央部下層	M1018, 95%, PL68

#### (4) 井戸跡

今回の調査で、当該期に該当する2基の井戸跡を確認した。以下、検出された遺構及び遺物について記述する。

#### 第34号井戸跡(第239図)

位置 調査区東部のP11g3区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

規模と形状 長径2.50m、短径1.94mの楕円形で、長径方向はN-58°-Eである。確認面から1.00mまでは漏斗状、それ以下は径1.40mほどの円筒状に掘り込まれている。深さは3.90mほど掘り下げた時点で湧水してきたため以後の調査を断念したが、ローム層を掘り抜き、さらに粘土層も掘り込んでいることが確認された。

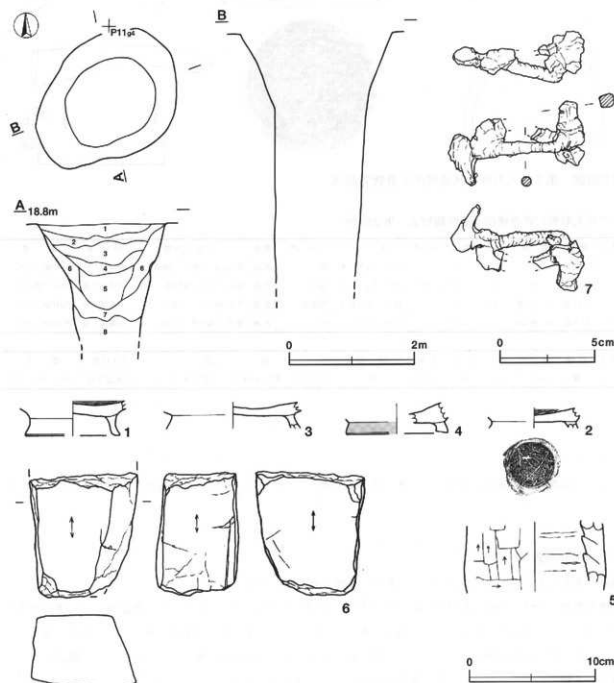
覆土 8層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

#### 土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	5 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
2 黒褐色	炭化物中量、ローム粒子・焼土ブロック少量	6 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量
3 黒褐色	ローム粒子・焼土ブロック・炭化物少量	7 黒褐色	炭化物中量、ロームブロック・焼土ブロック少量
4 黒褐色	炭化物中量、ローム粒子・焼土ブロック・灰少量	8 黒褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物・灰少量

遺物出土状況 土師器片71点(碗24, 甕46, 円筒形土器1), 須恵器片21点(甕21), 灰釉陶器1点(長頸瓶), 不明鉄製品1点, 鉄滓1点, 砥石1点, 獣骨片が出土している。第239図1~4はいずれも覆土中からの出土である。獣骨片は少量であり、同定には至らなかった。

所見 本跡の時期は出土土器から10世紀前半と考えられる。本跡及び同時期に比定される第1308・1310号住居跡からは円筒形土器が出土し、互いに位置が近接していることなどから、同一集落内に位置して使用されていたことが想定される。



第239図 第34号井戸跡・出土遺物実測図

第34号井戸跡出土遺物観察表(第239図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施底	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	高台付椀	-	(28)	[7.4]	長石・石英	橙	普通	裏面凹縁ヘラ削り足、高台削り付	覆土中	P10754, 10%
2	土師器	高台付椀	-	(1.6)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	高台削り付け後、ナデ	覆土中	P10755, 10% 底部刻劃「×」

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3	須惠器	高台付杯	-	(21)	-	長石・石英	にぶい濁	普通	底縁部へタ彫り肌、高台彫り付け	覆土中	P10756, 10%
4	灰釉陶器	長頸瓶	-	(24)	[8.0]	緻密	灰白・オリブ灰	良好	高台彫り付け後、ロクロナデ	覆土中	P10757, 5%
5	土師器	円筒形土器	-	(5.5)	-	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	縁部削へタ彫り、内面ナデ・縁部ナデ	覆土中	P10758, 5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
6	砥石カ	(9.8)	(8.6)	6.5	(844)	雲母片岩	砥面3面、角柱状を呈する。	覆土中	Q10026

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
7	不明	(7.0)	(3.4)	(0.8)	(23.5)	鉄	先端部屈曲。鍔金に差し込む鍔金の一様々。	覆土中	M10156

### 第36号井戸跡 (第240図)

位置 調査区南部のP11f9区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

規模と形状 北側部分が調査区域外のため、長径2.80m、短径1.91mが確認できただけであり、平面形状は円形と推定される。確認面から1.50mまでは漏斗状、それ以下は径1.10mほどの円筒状に掘り込まれている。深さは2.50mほど掘り下げた時点で湧水したため以後の調査を断念したが、ローム層を掘り抜き、さらに粘土層を掘り込んでいることが確認された。

覆土 8層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

#### 土層解説

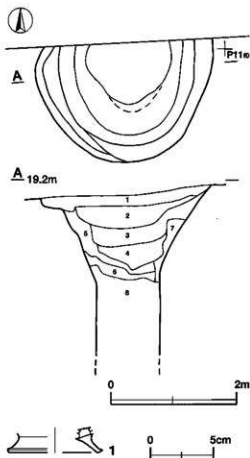
- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物・砂粒少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
- 3 黒褐色 炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化物粒子・粘土粒子少量、ローム粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量、粘土粒子少量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物・粘土粒子少量、焼土粒子微量
- 7 暗褐色 ロームブロック中量、粘土粒子少量、焼土粒子・炭化物粒子微量
- 8 黒褐色 ロームブロック・粘土粒子少量

遺物出土状況 土師器片80点(椀29, 甕51), 須惠器片39点(杯4, 甕35), 埴輪片1点, 鉄滓2点が出土している。第240図1は覆土中層から出土している。また、埴輪片は本跡から北西へ35mの距離に位置する第1345号住居跡から出土した破片と接合関係にあり、実測図は第1345号住居跡で紹介している。

所見 本跡から出土した土器はいずれも細片のため時期判定は困難であるが、接合関係にある第1345号住居跡の年代観から判断して、時期は10世紀後半と考えられる。

### 第36号井戸跡出土遺物観察表 (第240図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	高台付杯	-	(2.0)	[7.9]	雲母・長石	灰褐	普通	高台彫り付け後、ロクロナデ	覆土中	P10662, 5%



第240図 第36号井戸跡・出土遺物実測図

### (5) 溝跡

当遺跡からは6条の溝跡が検出されており、そのうち第76・77号溝跡が当該期に該当する。これの溝跡は須恵器大甕を始めとする大量の土器が出土した第16・35号溝跡との関連が窺われるものであり、以下、その概要について記述する。また、平面図は遺構全体図に掲載する。

#### 第76号溝跡 (第241・242図)

**位置** 調査区南部のQ11c7~P13e0区に位置し、南に傾斜した台地の南端部に立地している。

**重複関係** 西側部分を本跡と平行して走る第75号溝跡、東側部分を第79号溝跡に掘り込まれている。

**規模と形状** 当調査区の最南端部を東北東方向(N-70°-E)に直線的に延びており、確認された長さは90mほどである。さらに、両側とも調査区域外に延びていることが視認され、確認できた総延長は200mを超える。規模は上幅2.7~5.6m、下幅0.8~1.1m、深さ1.3~2.2mを測り、形状は底面がほぼ平坦で、壁面は外傾して直線的に立ち上がる箱型研状を呈している。また、底面の傾きはほとんど認められないが、西端部の第11号不明遺構と接する付近では、標高が他の部分と比べて0.4mほど低くなっている。

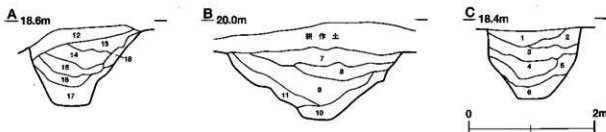
**覆土** 18層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。底面は粘土層を掘り込んでおり、覆土中に粘土粒子の流入が見られる。

#### 土層解説

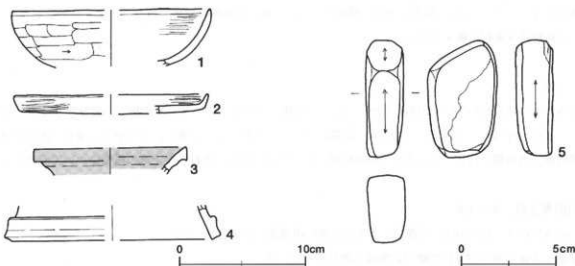
1	黒褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	10	暗褐色	ローム粒子中量
2	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	11	褐色	ローム粒子多量
3	暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	12	極暗褐色	ローム粒子多量
4	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量	13	灰黄褐色	粘土粒子中量、ローム粒子微量
5	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量	14	ぶい黄褐色	粘土粒子多量
6	極暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量	15	灰黄褐色	粘土粒子多量、ロームブロック少量
7	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	16	暗褐色	粘土粒子中量、ローム粒子少量
8	暗褐色	ローム粒子中量、粘土粒子少量	17	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子中量
9	褐色	ローム粒子多量	18	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子中量

**遺物出土状況** 土師器片284点(坏67, 甕217), 須恵器片98点(坏38, 蓋2, 甕58), 灰陶陶器片1点(瓶), 陶器片3点, 砥石1点が散在した状態で出土しており、集中地点は認められない。第242図1・4は西側部分の覆土中、2・3は東側部分の覆土中から出土している。出土した土器のほとんどは細片で、破断面が摩耗しており、埋没途中で混入したものである。

**所見** 本跡は、集落を大きく取り囲む第16・20・35号溝跡と規模や形状が近似しており、出土土器も同時期の8世紀代であることから、同じ時期に上述の溝跡とともに一連の機能を有していたことが想定される。本跡は調査区域外にも延びており、その部分では現在でも痕跡を視認することができ、溝絶後に集落を営んだ人々にとっても、この溝は十分にその存在が意識されたものと思われる。また、本跡の南側は崖状になっており、溝によって集落を区画する必要は考えられず、防衛的な機能などその他の目的が想定され、当遺跡から5点出土している「城内」「城内丕」という墨書との関連が窺われる。



第241図 第76号溝跡実測図



第242図 第76号溝跡出土遺物実測図

第76号溝跡出土遺物観察表(第242図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴	出土位置	備考
1	土器器	坏	[15.8]	(4.5)	-	雲母・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラ磨き	西部覆土中	P10727, 10%
2	土器器	盤	[15.4]	1.5	[14.8]	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部・体部内・外面ヘラ磨き	東部覆土中	P10728, 5%
3	灰物陶器	長頸瓶	[12.9]	(2.1)	-	緻密	灰白・暗オリーブ	良好	口縁部内・外面ロクロナテ、縁は流し磨け	東部覆土中	P10729, 5%
4	須恵器	円面鏡	-	(2.7)	[16.0]	石英	灰	普通	透かし孔ヘラ切り	西部覆土中	P10730, 5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5	磨石	6.2	3.7	2.0	77.6	雲母片岩	側面4面を砥面とする。	覆土中	Q10025, 100%

### 第77号溝跡(第243図)

位置 調査区西部のO10h9～O11b4区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

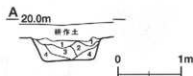
重複関係 第1423号住居跡を掘り込み、第23号方形竪穴状遺構に掘り込まれている。

規模と形状 当調査区の北端部を東西方向(N-85°-W)に直線的に延びており、確認された長さは25mほどである。両側とも調査区域外に延びており、規模は上幅0.7～1.1m、下幅0.4～0.75m、深さ0.15～0.4mを測り、形状は底面がほぼ平坦で、壁面は外傾して直線的に立ち上がる箱薬研状を呈している。また、底面の傾きはほとんど認められない。

覆土 4層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

#### 土層解説

- 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量
- 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 褐色 ロームブロック多量



第243図 第77号溝跡実測図

遺物出土状況 土器器片77点が出土している。出土した土器はいずれも細片で、破断面が摩耗しており、埋没途中で混入したものである。

所見 本跡は、当調査区の北側(7区)で方形に取り囲む第16号溝跡と規模や形状が近似しており、重複関係

とも矛盾しないことから、同じ時期に上述の溝跡とともに一連の区画的な機能を有していたことが想定される。従って、時期は8世紀と推定される。

#### (6) 土坑

当調査区からは158基の土坑が検出されているが、性格が分かるものの多くは中世から近世にかけての墓塚であり、それ以外のものは性格のみならず、時期についても不明なものが多い。その中で、遺物の出土状況から帰属時期を当該期に特定できる土坑が14基検出されており、以下、それらの土坑の概要について記述する。

#### 第1101号土坑 (第244図)

**位置** 調査区西部のP10h6区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

**重複関係** 本跡が第1318号住居跡の北西部を掘り込んでいる。

**規模と形状** 径0.90mほどの円形で、深さは0.63mである。底面は若干凹凸のある円形で、壁は外傾して直線的に立ち上がる。

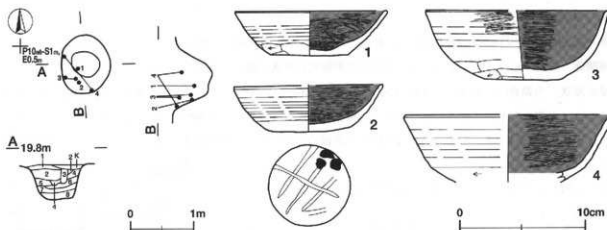
**覆土** 8層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

#### 土層解説

- |       |                              |       |                       |
|-------|------------------------------|-------|-----------------------|
| 1 褐色  | ロームブロック多量、焼土粒子微量             | 6 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量        | 7 褐色  | ロームブロック多量             |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子微量             | 8 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物少量       |
| 4 暗褐色 | ロームブロック多量                    |       |                       |
| 5 褐色  | ロームブロック・粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子少量 |       |                       |

**遺物出土状況** 土師器片12点(杯3, 碗4, 甕5)が出土している。第244図1・2は覆土下層, 4は覆土上層から出土している。3は覆土下層と上層から出土した破片が接合されたものであり、埋め戻しの段階で混入、あるいは投棄されたものと考えられる。また、2の底部には判読不明であるが、墨書がされている。

**所見** 本跡の時期は出土土器から10世紀前半と考えられ、遺構の形状や土層の堆積状況からみて墓塚の可能性はある。



第244図 第1101号土坑・出土遺物実測図

#### 第1101号土坑出土遺物観察表 (第244図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	杯	120	3.5	6.1	長石・赤色粒子	におい黄褐	普通	底部一方向のヘラ削り	中央部下層	PH88, 10%, PL12

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	土師器	坏	[119]	3.7	6.6	炭粒・長石	にぶい橙	普通	底部多方向のヘラ削り、一部ヘラ磨き	南部下層	P10664, 60%, 底部磨痕有り
3	土師器	椀	[144]	5.5	5.9	長石・石英	にぶい橙	普通	底部一方肉のヘラ削り	南部下層	P10665, 50%
4	土師器	椀	[164]	(54)	-	長石・石英	橙	普通	底部下縁石回りの回転ヘラ削り	覆土上層	P10666, 40%

### 第1103号土坑 (第245図)

**位置** 調査区西部のQ10c9区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。また、第90号掘立柱建物跡内に軸を揃えて位置している。

**重複関係** 南西部で第1302号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸2.25m、短軸1.51mの南北に長い長方形で、長軸方向はN-3°-Wである。深さは0.16~0.24mを測り、底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

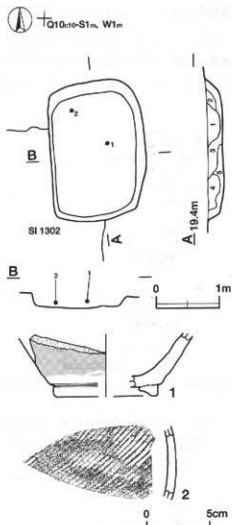
**覆土** 5層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中層、焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中層、焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 ロームブロック中層

**遺物出土状況** 須恵器片2点(長頸瓶1, 甕1), 灰釉陶器片1点(長頸瓶)が出土している。図示した土器はいずれも覆土下層から出土しており、第245図1は胎土に混入物が少なく、焼成が良好で、近在の製品ではないと考えられ、接点はないが、第1330A号住居跡から出土しているものと同一個体である。また、2の灰釉陶器長頸瓶の体部片は本跡から北へ11mの距離に位置する第1315号住居跡から出土した口縁部片と接合関係にあり、前述住居跡の項で記述している。

**所見** 本跡の出土遺物は第1315・1330A号住居跡出土の遺物と密接な関係にあり、本跡は両住居跡が構成する集落に付属して設けられたものと考えられるが、性格については判然としない。本跡の時期は、第1315・1330A号住居跡の年代観や出土土器から9世紀後半と考えられる。



第245図 第1103号土坑・出土遺物実測図

### 第1103号土坑出土遺物観察表 (第245図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	灰釉陶器	長頸瓶	-	(50)	8.2	長石・赤色粒子	灰	良好	体部内・外面ロクロナデ	中央部下層	P10668, 5%, 美濃産
2	須恵器	甕	-	(58)	-	敷密	灰	良好	体部外面叩き、内面ナデ	北西部下層	TP10019, 5%, 外周自然土: SI-1330B TP10012と同一個体+

### 第1104号土坑（第246図）

位置 調査区西部のP10e0区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 本跡が第1323号住居跡の北壁際を掘り込んでいる。

規模と形状 径0.80mほどの円形で、深さは0.58mである。底面は皿状を呈し、壁は外傾して立ち上がる。

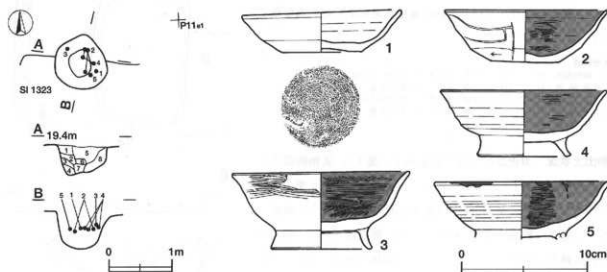
覆土 8層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

#### 土層解説

- |       |                             |        |                        |
|-------|-----------------------------|--------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量          | 5 黒褐色  | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量   |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量・焼土粒子・炭化物少量        | 6 暗褐色  | ロームブロック中量・焼土ブロック・炭化物少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量・焼土粒子・炭化物少量・粘土粒子少量 | 7 暗褐色  | ロームブロック中量・焼土ブロック・炭化物少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量・焼土ブロック・炭化物少量      | 8 極暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量   |

遺物出土状況 土師器片23点（坏5，碗3，甕15）が出土している。第246図1～5はいずれも覆土中層からの出土であり、2の体部外面には右横位で「万」と焼成後に刻書されている。

所見 本跡の時期は出土土器から10世紀前半と考えられ、遺構の形態や埋め戻された堆積状況から墓塚の可能性もある。また、刻書された「万」は吉祥文字とされ、当遺跡に多く見られる文字の一つである。



第246図 第1104号土坑・出土遺物実測図

### 第1104号土坑出土遺物観察表（第246図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	12.7	3.3	6.3	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	底部回転糸切り	覆土中層	P10669, 100%
2	土師器	坏	12.7	4.2	5.5	石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	底部一方向のへら削り	覆土中層	P10670, 70%, P10671 ⑤, ⑥, ⑦, ⑧
3	土師器	高台付碗	13.8	6.2	7.6	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	高台削り付け後、ロクロナデ	覆土中層	P10671, 100%, P160
4	土師器	高台付碗	13.7	5.4	7.1	石英・赤色粒子	橙	普通	裏面回転へら削り後、高台削り付け	覆土中層	P10672, 70%, P160
5	土師器	高台付碗	13.7	(4.5)	-	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転へら削り後、高台削り付け	覆土中層	P10673, 70%, ①, ②, ③, ④, ⑥, ⑦, ⑧, ⑨, ⑩, ⑪, ⑫, ⑬, ⑭, ⑮

### 第1105号土坑（第247図）

位置 調査区西部のP11e1区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 本跡が第1323号住居跡の東壁際を掘り込んでいる。



**規模と形状** 1辺が1.00mほどの隅丸方形で、長径方向はN-85°-Eである。深さは0.19mで、底面はやや凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。

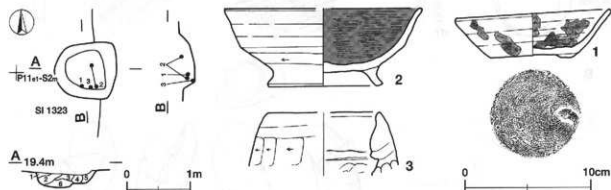
**覆土** 6層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

**土層解説**

- |        |                        |       |                         |
|--------|------------------------|-------|-------------------------|
| 1 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量   |
| 3 黒褐色  | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量   | 6 褐色  | ロームブロック多量、焼土粒子少量、炭化物少量  |

**遺物出土状況** 土師器片54点(杯35, 碗4, 甕14, 円筒形土器1), 須恵器片5点(杯5)が出土している。第247図1は覆土下層, 3は床面からそれぞれ出土している。2は覆土中層と下層から出土した破片が接合されたものである。また, 1の体部両面には漆が付着している。

**所見** 本跡の時期は出土土器から10世紀前半と考えられ、遺構の形状と埋め戻された堆積状況から墓塚の可能性がある。



第247図 第1105号土坑・出土遺物実測図

第1105号土坑出土遺物観察表 (第247図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	杯	122	39	68	石英	にぶい黄緑	普通	底部回転糸切り	覆土下層	P10674, 100%, 内外面漆付着, PL60
2	土師器	高台付碗	[15.6]	4.6	9.2	石英・赤色粒子	橙	普通	高台貼り付け後, ロクロナデ	底面	P9673, 70%, PL62
3	土師器	円筒形土器	[8.6]	(5.0)	-	長石・石英	にぶい緑	普通	縁部外縁へラリ, 内面輪襷6筋	下層・中層	P10676, 5%

**第1109号土坑 (第248図)**

**位置** 調査区西部のP11b4区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

**重複関係** 本跡が第1334号住居跡の南東部を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長径1.76m, 短径1.21mの不整形で、長径方向はN-20°-Eである。深さは8~16cmで、底面は起伏があり、壁は緩やかに外傾している。

**覆土** 6層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

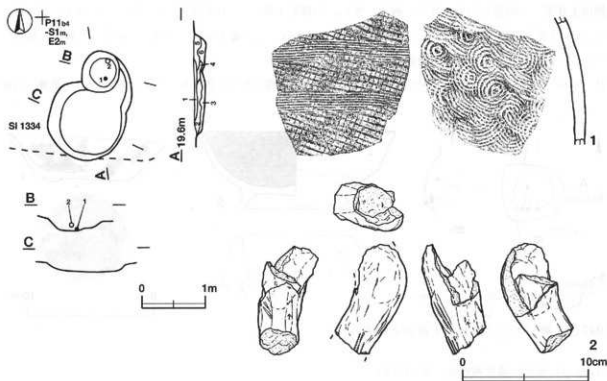
**土層解説**

- |       |                       |        |                        |
|-------|-----------------------|--------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量   | 4 黒褐色  | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量  |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 5 黒褐色  | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量   |

**遺物出土状況** 土師器片41点(杯9, 碗1, 甕30, 甎1), 須恵器片7点(杯3, 甕4), 不明土製品1点が出

土している。第248図1・2はいずれも北部の覆土下層から出土している。2は細片のため形状の復元が困難であるが、土馬の脚部の可能性がある。また、焼土が北側部分の覆土下層から投げ捨てられたようにまとまって出土している。

所見 本跡の北側部分の下層からは、焼土や土器が一括して投棄されており、その中には土馬の脚部の一部と思われる土製品も含まれている。本跡の時期は出土土器から10世紀前半と考えられ、何らかの祭祀が行われたことが想定される。



第248図 第1109号土坑・出土遺物実測図

第1109号土坑出土遺物観察表 (第248図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須臾器	壺	-	(10.3)	-	緻密	黄灰	良好	條襷刷目肌、内面同心状のびり目点	北部下層	TP10020, 5%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
2	土馬カ	(8.8)	3.4	3.4	(16.5)	土製	ナデ、一部閉り肌、ソケット状の接合部有り、土馬の脚部カ。		北部下層	DP10023, 5%, PL66	

### 第1159号土坑 (第249図)

位置 調査区西部のP12f4区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 本跡が第1350号住居跡の南西部を掘り込んでいる。

規模と形状 径0.50mほどの円形で、深さは27cmである。底面は皿状を呈し、壁はほぼ直立している。

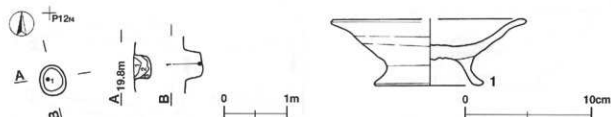
覆土 3層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量  
 2 雑暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量  
 3 暗褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片6点(坏4, 甕2), 須恵器片3点(坏3)が出土している。第249図1は底面から逆位で出土している。

所見 本跡の時期は, 出土土器から10世紀後半と考えられる。性格は不明である。



第249図 第1159号土坑・出土遺物実測図

第1159号土坑出土遺物観察表(第249図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	高台付碗	[150]	5.3	8.4	雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	底縁刻線未切り残, 高台貼り付け	中央部底面	FIG83, 70%, PL61

### 第1178号土坑(第250・251図)

位置 調査区西部のP12e4区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。

規模と形状 長軸2.41m, 短軸2.02mの隅丸長方形で, 長軸方向はN-16°-Wである。深さは25cmを測り, 底面は平坦で, 壁は外傾して立ち上がる。

ピット 4か所。P1~P4は深さ10~34cmで, 竪穴部を囲むように配されており, 上屋が付設されていた可能性がある。

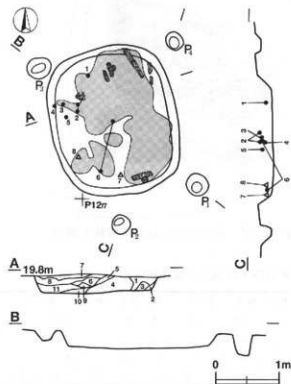
覆土 11層からなり, 焼土や炭化材とともに東側から投げ込まれた堆積状況を示した人為堆積である。

#### 土層解説

- 1 概略 赤褐色 焼土粒子・炭化粒子中量, ローム粒子少量
- 2 黒褐色 炭化粒子中量, 焼土粒子少量, ローム粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量
- 4 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化物少量
- 5 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物・砂粒少量
- 6 暗赤褐色 砂粒中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 7 概略 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 8 概略 褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化物少量, 砂粒微量
- 9 黒褐色 炭化粒子中量, ローム粒子・焼土粒子微量
- 10 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量, 炭少量, ローム粒子微量
- 11 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子・炭少量

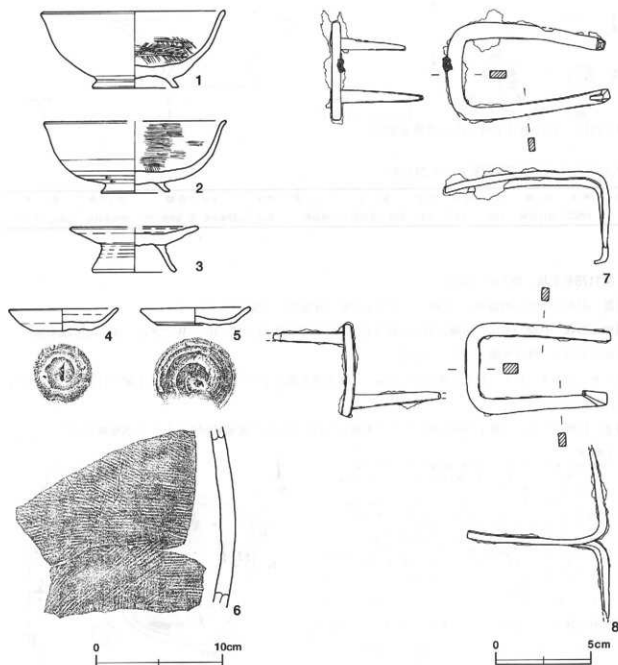
遺物出土状況 土師器片32点(碗23, 甕9), 須恵器片6点(坏1, 甕5), 門金具2点, 骨片, 壁材が散在した状態で出土している。第251図1~5はいずれも北西部の覆土中層, 7・8の門金具は南西部の覆土中層から出土している。また, 北西部の覆土中層から出土した壁材は被熱した痕跡があり, 他の遺物と共に投棄されたと想定される。

所見 本跡は上屋を有していた構造から何らかの貯蔵施設の可能性がある, 時期は出土土器から10世紀後半以降と考えられる。また, 廃絶時には廃棄土坑として利用さ



第250図 第1178号土坑実測図

れている。壁材を投棄したと想定される住居は同時期の焼失住居である第1354号住居跡が該当し、また、門金具の出土は倉庫の存在を窺わせ、本跡の北側や東側に位置する掘立柱建物跡群との関連が窺われる。



第251図 第1178号土坑出土遺物実測図

第1178号土坑出土遺物観察表(第251図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	高台付椀	14.4	6.1	6.8	石英	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ型り後、高台貼り付け	北西部中層	P10894, 60%, P162
2	土師器	高台付椀	[14.4]	5.7	8.3	赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ型り後、高台貼り付け	北西部中層	P10695, 40%
3	土師器	高台付皿	[10.0]	3.6	6.5	石英	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ型り後、高台貼り付け	北西部中層	P10895, 60%, P168
4	土師器	小皿	8.5	1.8	4.6	石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り	北西部中層	P10897, 95%, P168

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5	土師器	小皿	8.7	1.4	6.0	黄母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	北西部中層	P1028, 6%, P160
6	須恵器	甕	-	(145)	-	長石・石英	灰	良好	体部外面叩き, 内面ナデ	南部中層	TP10021, 5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
7	門金具	8.6	5.3	0.4	29.0	鉄	コの字状を呈し, 先端部は直外に屈曲する。木質接着。	南西部中層	M0332, 80%, P170
8	門金具	7.7	4.8	0.5	34.0	鉄	コの字状を呈し, 先端部は2方向に屈曲する。	南西部中層	M0333, 80%, P170

### 第1202号土坑 (第252図)

位置 調査区東部のP13j6区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 南壁際で第1084号住居跡, 北東部と東壁際で第95号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.56m, 短軸1.34mの隅丸長方形で, 長軸方向はN-79°-Wである。深さは24cmを測り, 底面は平坦で, 壁は外傾して立ち上がる。

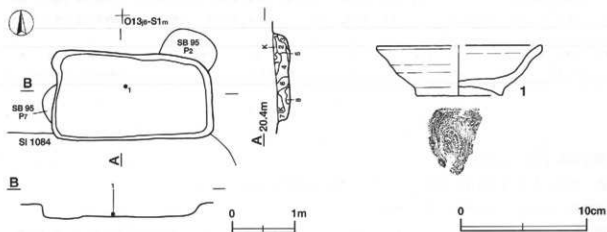
覆土 8層からなり, ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

#### 土層解説

- |       |                      |        |                        |
|-------|----------------------|--------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量    | 5 黒褐色  | ロームブロック少量              |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 黒褐色  | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 褐色  | ロームブロック多量            | 7 暗褐色  | ロームブロック少量, 焼土粒子微量      |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子微量    | 8 極暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化物微量  |

遺物出土状況 土師器片29点(椀20, 甕9), 須恵器片6点(坏4, 蓋1, 甕1)が散在した状態で出土している。第252図1は中央部の底面から出土している。

所見 本跡の時期は出土土器から10世紀後半以降と考えられ, 遺構の形態と埋め戻された堆積状況から墓塚の可能性が高い。



第252図 第1202号土坑・出土遺物実測図

### 第1202号土坑出土遺物観察表 (第252図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[13.0]	4.0	[7.0]	長石	橙	普通	底部回転糸切り	中央部底面	P10710, 40%

### 第1203号土坑 (第253図)

位置 調査区東部のP13c5区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 南側部分で第1086号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 1辺が1.30mほどの不整形円で、深さは7～17cmである。底面は皿状を呈し、壁は外傾して緩やかに立ち上がる。

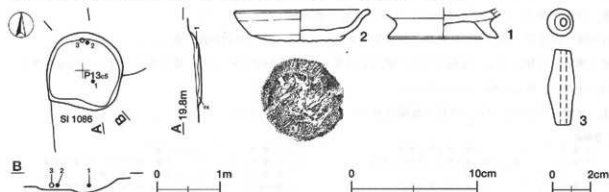
**覆土** 2層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量  
2 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片7点(杯1, 碗3, 甕3), 須恵器片1点(甕), 管状土錘1点が出土している。第253図1は中央部の覆土中層, 2・3は北壁際の覆土中層から完形の状態で出土している。

**所見** 本跡の時期は, 出土土器から10世紀後半と考えられる。性格は不明である。



第253図 第1203号土坑・出土遺物実測図

**第1203号土坑出土遺物観察表(第253図)**

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	高台付碗	-	(2.3)	[8.4]	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底面回転ヘラ取り後, 高台施り付	中央部中層	P10711, 20%
2	土師器	小皿	10.7	2.5	6.8	雲母・赤色粒子	橙	普通	底面回転ヘラ切り	北壁際中層	P0712, 80%, P101

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3	管状土錘	4.0	1.4	0.4	6.9	土製	ナデ, 黄灰色を呈する。	北壁際中層	DF002L, 100%, P106

**第1206号土坑(第254図)**

**位置** 調査区東部のP13d4区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。

**重複関係** 西側部分で第1205号土坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 1辺が1.30mほどの若干歪んだ方形で, 深さは10～26cmである。底面は凹凸があり, 壁は外傾して立ち上がる。

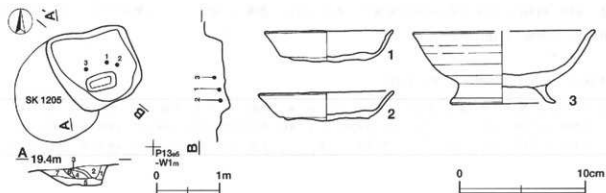
**覆土** 7層からなり, ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量  
2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量  
3 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量  
4 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子微量  
5 褐色 ロームブロック多量, 炭化粒子微量  
6 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量  
7 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片42点(小皿5, 碗28, 甕9), 須恵器片7点(杯4, 甕3)が出土している。遺物は南側部分に集中しており, 一括して投棄された様相を呈している。第254図1・3は中央部の覆土下層と中層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。遺構の性格については断定できないが、形態や堆積状況から墓塚の可能性はある。



第254図 第1206号土坑・出土遺物実測図

第1206号土坑出土遺物観察表(第254図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	小皿	10.2	2.5	6.3	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	中央部下層	PH013. 00%, PL0
2	土師器	小皿	10.6	2.2	6.6	雲母・長石	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	中央部下層	PH014. 00%, PL0
3	土師器	高台付碗 [14.3]	5.8	8.2	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	高台貼り付け後、ロクロナデ	中央部中層	PH015. 00%, PL0	

### 第1208号土坑(第255図)

位置 調査区東部のP13a4区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

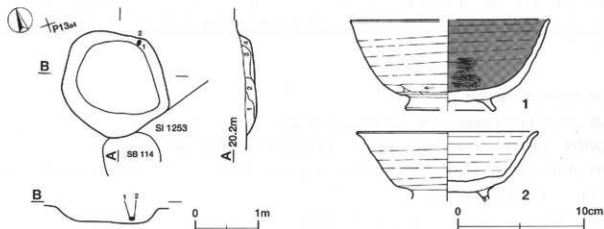
重複関係 南側部分で第114号独立柱建物跡、第1253号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 径1.50mほどの不整形円で、深さは25cmである。底面は若干凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。

覆土 4層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

#### 土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量  
 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量  
 3 黒褐色 ローム粒子少量、炭化物微量  
 4 暗褐色 ローム粒子中量



第255図 第1208号土坑・出土遺物実測図

**遺物出土状況** 土師器片9点(碗5, 甕4), 須恵器片2点(杯2)が出土している。第255図1・2は北東部の壁際の覆土下層から重なって出土している。

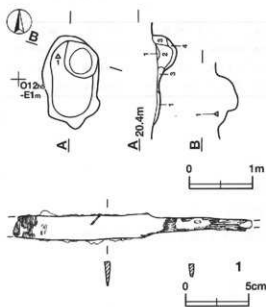
**所見** 本跡の時期は, 出土土器から10世紀後半と考えられる。遺構の性格については断定できないが, 形態や堆積状況から墓塚の可能性がある。

第1208号土坑出土遺物観察表(第255図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	高台付碗	〔15.7〕	7.2	〔7.0〕	石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	北部回転ヘラ切り発, 高台盛り付け	北東部下層	P10716, 60%
2	土師器	高台付碗	14.3	(5.5)	-	石英・長石	橙	普通	東部回転ヘラ切り発, 高台盛り付け	北東部下層	P10517, 70%, P151

### 第1220号土坑(第256図)

**位置** 調査区東部のO12h5区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。



第256図 第1220号土坑・出土遺物実測図

**規模と形状** 長径1.47m, 短径0.77mほどの楕円形で, 長径方向は $N-9^{\circ}-W$ である。深さは15~43cmで, 壁は外傾して立ち上がる。底面は北側部分が柱穴状に深く掘り込まれており, 後世のピットの可能性がある。

**覆土** 4層からなり, ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム粒子多量
- 4 褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子微量

**遺物出土状況** 刀子1点が覆土上層から出土している。

**所見** 本跡の時期は, 土器が出土していないため不明である。出土した刀子は副葬品の可能性があり, 墓塚と想定される。

第1220号土坑出土遺物観察表(第256図)

番号	器種	長さ	幅	重ね	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	刀子	(190)	2.0	0.4	(450)	鉄	切刃・底刃欠, 両面有刃, 互角切刃の鋼製副葬品, 墓塚本質行品。	北西部下層	M10141, PL68

### 第1246号土坑(第257図)

**位置** 調査区東部のP10i8区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。

**重複関係** 本跡が第1314号住居跡の北側部分と, 第1244号土坑の西側部分を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長径0.91m, 短径0.77mの楕円形で, 長径方向は $N-3^{\circ}-E$ である。深さは17cmを測り, 底面は平坦で, 壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 3層からなり, ロームブロックを含んだ人為堆積である。



土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、粘土粒子微量 3 暗褐色 ロームブロック中量  
 2 暗褐色 ロームブロック中量、粘土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片4点(杯2, 甕2)が出土している。第257図1・2は北西部の覆土中層や上層から出土した破片が接合されたものである。

所見 本跡は、埋め戻された堆積状況や遺構の形態から見て、墓塚の可能性が高い。時期は、出土土器から10世紀以降と考えられる。



第257図 第1246号土坑・出土遺物実測図

第1246号土坑出土遺物観察表(第257図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	杯	12.8	3.9	7.5	石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	底部回転糸切り	北西部中層	F10718, 79%, PL1
2	土師器	杯	13.6	3.5	[7.2]	石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	底部回転糸切り	北西部中層	P10719, 50%

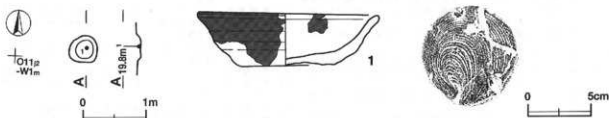
第1288号土坑(第258図)

位置 調査区東部のO11i2区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

規模と形状 径0.45mほどの円形で、深さは13cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

遺物出土状況 土師器2点(杯2)が出土している。第258図1は底面から逆位の状態で出土しており、体部両面に油煙が付着している。

所見 本跡の時期は、出土土器から10世紀以降と考えられる。



第258図 第1288号土坑・出土遺物実測図

第1288号土坑出土遺物観察表(第258図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	杯	14.2	4.4	7.4	石英	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り	中央部底面	P10720, 90%, 内外面油煙付着, PL1

### (7) その他の遺構

当遺跡の南部と東部にはローム層が落ち込み、その低くなった部分に厚く黒色土が堆積した部分があり、これらの2地点は船着き場の伝承が残されている点で共通し、単なる埋没谷ではないと考えられてきた。今回、南側の部分が調査区域に該当しており、その伝承を確かめるべく調査を進めた。以下、その概要を記述する。

#### 第11号不明遺構 (第259~261図)

位置 調査区南部のQ11b7区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 第8号道路跡が本跡の上部に構築されており、南端部で第76号溝跡と接している。本跡の覆土は第76号溝跡の上部にも及んでおり、同溝跡が本跡の底面と同じ高さまで埋没した後、両跡同時に堆積していったと考えられる。

規模と形状 長径9.10m、短径8.50mの不整形で、長径方向はN-25°-Wである。底面は若干起伏があり、南西に向かって緩やかなスロープ状を呈し、確認面からの深さは南西端部で1.6mを測る。また、北東部のP1付近が挿鉢状に深くなっており、深さは1.9mほどである。なお、底面は粘土層を掘り込んでいる。

ピット 7か所。P1・P2は深さがそれぞれ115cm、75cmで、規模と形状から柱穴と考えられ、特にP2の土層断面からは版築状に突き固められている様子が確認された。P3~P7はいずれも深さ20cmほどで、性格は明確にしないが、本跡の北側部分に巡らされている状況からみて、櫛状の施設が付設されていた可能性がある。

#### P1土層解説

- |       |                           |       |                |
|-------|---------------------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | 粘土粒子多量、炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 4 暗褐色 | 粘土粒子多量、ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 粘土粒子多量、焼土粒子・炭化物少量、ローム粒子微量 | 5 黒褐色 | 粘土粒子多量         |
| 3 暗褐色 | 粘土粒子多量、焼土粒子・炭化物少量         |       |                |

#### P2土層解説

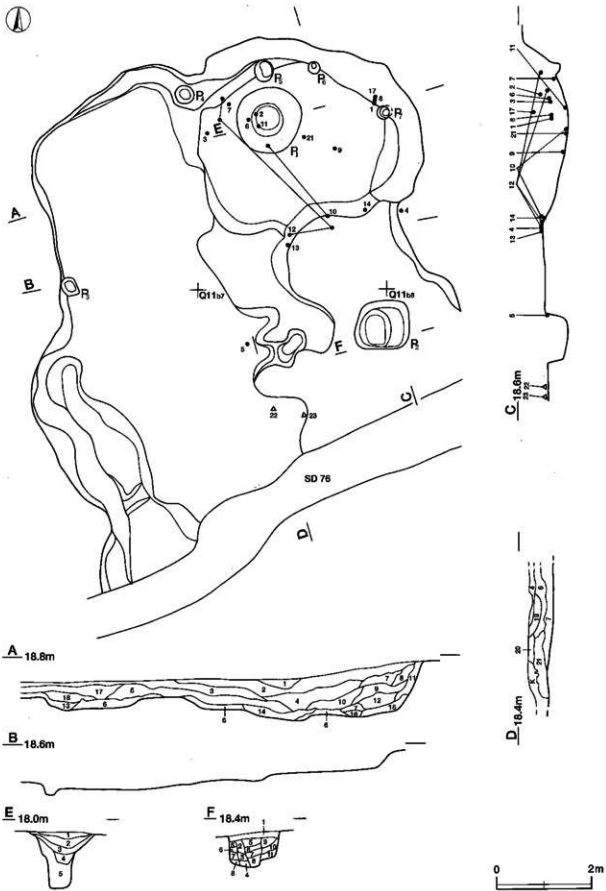
- |       |                          |        |                  |
|-------|--------------------------|--------|------------------|
| 1 黒褐色 | 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色  | 粘土粒子中量、ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・粘土粒子中量           | 8 暗褐色  | ロームブロック・粘土粒子中量   |
| 3 黒褐色 | 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量      | 9 黒褐色  | 粘土粒子少量、炭化粒子微量    |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・粘土粒子中量           | 10 黒褐色 | 粘土粒子中量、ローム粒子微量   |
| 5 黒褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 暗褐色 | ロームブロック・粘土粒子中量   |
| 6 暗褐色 | ロームブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量    |        |                  |

覆土 21層からなり、第1~4層はレンズ状の堆積状況を示し、第5~21層はブロック状の堆積状況を示しており、人為的に埋め戻された後、自然堆積したものと考えられる。

#### 土層解説

- |        |                                |          |                                |
|--------|--------------------------------|----------|--------------------------------|
| 1 黒褐色  | ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量              | 12 にぶい褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子・粘土粒子少量、焼土ブロック微量 |
| 2 黒褐色  | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量       | 13 黒褐色   | 粘土粒子少量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量     |
| 3 暗褐色  | 粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量       | 14 仮暗褐色  | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量       |
| 4 暗褐色  | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量       | 15 にぶい褐色 | 粘土粒子多量、ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量   |
| 5 暗褐色  | ロームブロック中量、粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量   | 16 褐色    | 粘土粒子中量、ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量   |
| 6 黒褐色  | 粘土粒子中量、ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量   | 17 褐色    | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量          |
| 7 褐色   | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量          | 18 黒褐色   | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量        |
| 8 褐色   | ロームブロック中量、粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量   | 19 黒褐色   | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量            |
| 9 褐色   | ロームブロック中量、炭化粒子・粘土粒子少量、焼土ブロック微量 | 20 黒褐色   | ローム粒子微量                        |
| 10 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量        | 21 黒褐色   | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量              |
| 11 褐色  | ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量 |          |                                |

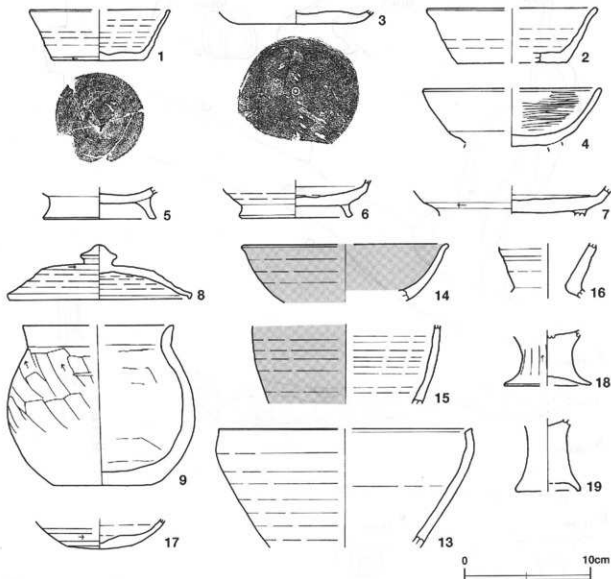
遺物出土状況 土師器片1454点(坏327, 碗32, 高坏6, 壺1085, 甗3, ミニチュア土器1), 須恵器片620点(坏265, 蓋21, 盤4, 高盤1, 甗329), 灰釉陶器片6点, 不明銅製品1点(飾り金具), 刀子1点, 棒状の鉄製品1点(釘), 鉄滓3点, 馬骨4点(大腿骨)が出土している。遺物の多くは破断面が摩耗しており、混入したものであるが、北東部の挿鉢状に掘り窪められた部分には遺物の集が見られ、第260・261図1~3,



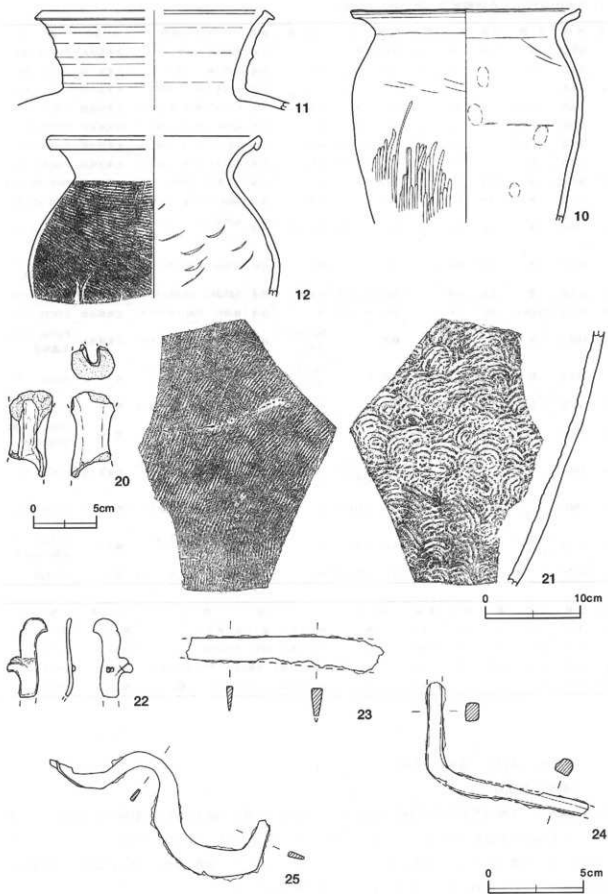
第259图 第11号不明遺構実測図

6～8, 9～11の土器が破碎された状態で馬骨とともに出土し、人為的な堆積状況と併せて、意図的に投棄された様子が窺える。投棄された時期は、土器の形状から8世紀後半と考えられる。また、22の不明銅製品と23の刀子は南東部の覆土下層から出土している。

所見 本跡付近は古来、船着き場の伝承地の一つであり、その想定に従って調査を進めた結果、人為的に掘り込まれた痕跡を確認することはできたが、柱穴が検出されたこと以外、伝承を裏付けるような踏み固められた痕跡や遺物は検出されなかった。むしろ、粘土層を不整形に掘り込んでいることや粘土の供給源が他にないことなどから判断すれば、粘土採掘坑の可能性が指摘できる。また、廃絶後の窪地は出土土器の多さから廃棄土坑として利用されたことが想定され、灰釉陶器や馬骨の出土は当遺跡西部の第30号井戸跡の出土状況と類似する。遺物は7世紀から10世紀にかけてのものが出土し、8世紀から9世紀にかけてのものが主体であることから判断すれば、8世紀には既に廃棄土坑として利用されていた様子を窺うことができ、人為的に掘り込まれた時期は7世紀頃と考えられる。



第260図 第11号不明遺構出土遺物実測図(1)



第261图 第11号不明遺構出土遺物実測図(2)

第11号不明遺構出土遺物観察表(第260・261図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[11.0]	4.0	7.1	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ削り	北東部底面	P10733, 60%
2	須恵器	坏	[13.2]	4.4	[8.6]	長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り	北東部上層	P10734, 30%
3	須恵器	坏	-	(1.1)	9.0	雲母・長石・石英	灰白	普通	底部多方向のヘラ削り	北東部中層	P10735, 20%
4	土師器	高台付鉢	[13.9]	(4.6)	-	長石・石英	明赤褐	普通	底部回転ヘラ削り見, 高台削り付	北東部底面	P10736, 50%
5	土師器	高台付鉢	-	(2.5)	8.8	長石・石英	橙	普通	底部回転ヘラ削り見, 高台削り付	中央部底面	P10737, 20%
6	須恵器	高台付坏	-	(3.0)	8.6	雲母・長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り見, 高台削り付	北東部中層	P10738, 20%
7	須恵器	盤	-	(2.5)	-	雲母・長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り見, 高台削り付	北東部底面	P10739, 10%
8	須恵器	蓋	14.3	4.3	-	長石・石英	灰	普通	天井部右側の回転ヘラ削り	北東部中層	P10740, 70%, PL60
9	土師器	甕	[11.9]	12.7	7.8	雲母	灰黄	普通	胴部回転ヘラ削り, 内面ヘラ削り・磨削痕	北東部底面	P10741, 60%, PL60
10	土師器	甕	[24.0]	(22.4)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	胴部内面上部ヘラ削り・下部ヘラ削り, 内面ヘラ削り・磨削痕	北東部底面	P10742, 30%, PL62
11	須恵器	甕	[25.4]	(10.4)	-	長石	黄灰	良好	胴部内・外面口クロナテ	北東部底面	P10743, 10%, 胴部自然釉
12	須恵器	甕	[22.0]	(16.9)	-	雲母・長石・石英	灰黄褐	普通	胴部内面等, 内面口縁の磨削痕	北東部底面	P10744, 30%, PL62
13	須恵器	捏ね鉢	[20.0]	(9.4)	-	雲母・長石・石英	灰	普通	胴部内・外面口クロナテ	北東部底面	P10745, 10%
14	瓦輪陶器	輪	[16.2]	(4.5)	-	緻密	灰白・オリブ灰	良好	胴部内・外面口クロナテ	北東部底面	P10746, 10%, 美濃産産
15	瓦輪陶器	瓶	-	(6.5)	-	緻密	灰白・オリブ灰	良好	胴部内・外面口クロナテ, 輪は流し掛け	覆土中	P10747, 5%
16	須恵器	平瓶	-	(1.4)	-	長石	灰	良好	胴部内・外面口クロナテ, 花輪2条	覆土中	P10748, 5%
17	須恵器	甕	-	(2.2)	-	長石	灰白	良好	底部外面回転ヘラ削り	覆土中	P10749, 5%, 美濃産 底部内面自然釉
18	土師器	ミニチュア土器	-	(4.4)	[8.6]	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	胴部外面ヘラ削り, 胴部内面ナテ	北東部上層	P10750, 20%
19	土師器	ミニチュア土器	-	(5.8)	[5.0]	石英・赤色粒子	橙	普通	胴部外面・胴部内面ナテ	覆土中	P10751, 20%
20	須恵器	短頸蓋の脚部	-	(6.7)	(3.6)	長石・石英	灰	普通	胴部外面ナテ, 内面ヘラ削り	覆土中	P10752, 5%, 胴部付短頸蓋
21	須恵器	大甕	-	(27.2)	-	長石・黒色斑点	灰	良好	胴部内面等, 内面口縁の磨削痕	覆土中	TP10022, 5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
22	不明	(4.2)	2.1	0.2	(4.6)	銅	飾り金具の一部, 裏に鉄有り。	覆土中	M10149, PL70
23	刀子	(10.8)	(2.0)	0.6	(22.0)	鉄	刃部の破片, 切先・茎部欠損。	南部底面	M10150
24	不明	(12.6)	1.0	1.0	(35.5)	鉄	断面方形の棒状, 両端欠損, 中央部で強く屈曲する。	南部底面	M10151
25	不明	(12.4)	(1.5)	0.3	(24.0)	鉄	断面長方形, S字状に屈曲し, 一端が尖る。	覆土中	M10152

### 3 その他の時代の遺構と遺物

#### (1) 方形堅穴状遺構

今回の調査で, 3基の方形堅穴状遺構を確認した。これまでの調査で確認された方形堅穴状遺構は, いずれも中世の火葬施設や墓塚群を囲むように位置しており, そのうちの2基からは青粉や白歯が出土している。今回の調査では, 遺構の性格を示す遺物は出土しなかったが, これまでの調査と同様に墓域に隣接して検出されており, 葬送に関わる遺構と考えられる。以下, その特徴を記述する。

### 第22号方形竪穴状遺構 (第262図)

位置 調査区西部のO11h3区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

規模と形状 長軸2.50m、短軸2.13mの若干南北に長い長方形で、主軸方向は $N-15^{\circ}-W$ である。壁高は20~32cmで、各壁とも外方向に開き気味に立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。

ピット 3か所。P1~P3は深さ13~26cmで、垂直に掘り込まれており、柱穴の可能性はあるが、位置が不揃いで断定できない。また、東壁際から深さ5~10cmの小ピット9か所が検出されており、壁柱穴と考えられる。

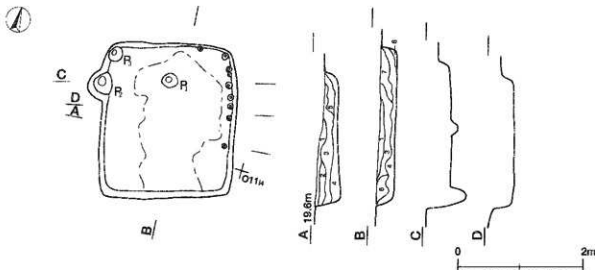
覆土 8層からなり、各層ともロームブロックを含んだ人為堆積である。

#### 土層解説

- |                             |                             |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・焼土/ブロック・炭化物少量 | 5 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物少量  |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物少量  | 6 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子少量  |
| 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物少量  | 7 暗褐色 ロームブロック・焼土/ブロック・炭化物少量 |
| 4 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量    | 8 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量      |

遺物出土状況 青磁片1点(碗)、鉄滓1点が出土している。覆土中から出土した青磁片は細片のため形状を復元できないが、鍋蓋弁文が施されており、時期判断の根拠になるものと思われる。また、土師器片10点と須恵器片2点が出土しているが、いずれも細片で破断面が摩耗しており、混入したものである。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土磁器から中世前半と考えられる。



第262図 第22号方形竪穴状遺構実測図

### 第23号方形竪穴状遺構 (第263・264図)

位置 調査区西部のO11g1区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 南側部分で第77号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北側部分が調査区域外に延びているため、東西軸3.21m、南北軸1.72mだけが確認され、平面形は方形、または長方形と推定される。主軸方向は $N-4^{\circ}-W$ で、壁高は38~58cmを測り、壁はほぼ直立する。また、南壁際の中央部には、壁外へ70cmほど掘り込んで出入り口施設が付設されており、底面は床面に向かって緩やかに傾斜したスロープ状を呈している。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められている。南壁際の中央部にはローム土や粘土を用いてスロープ状の出入り口施設が付設され、壁外に掘り込んだ張り出し部の底面と連結している。また、上面は踏み固め

られて硬化している。

出入り口施設土層解説

1 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物・粘土粒子少量	4 黒褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
2 灰青色	粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	5 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量	6 にぶい黄褐色	粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子少量
		7 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 8か所。主柱穴はP1・P2が相当し、深さはそれぞれ67cm、84cmである。また、P3～P7は深さ20～46cmで、いずれも壁際に位置しており、壁柱穴と考えられる。そのうち、P5・P6は斜面状の出入り口施設の下部から検出されている。P8は灰の下部から検出されて、深さも12cmと浅く、皿状を呈していることや焼土がわずかに認められることなどから、炉の可能性も考えられる。

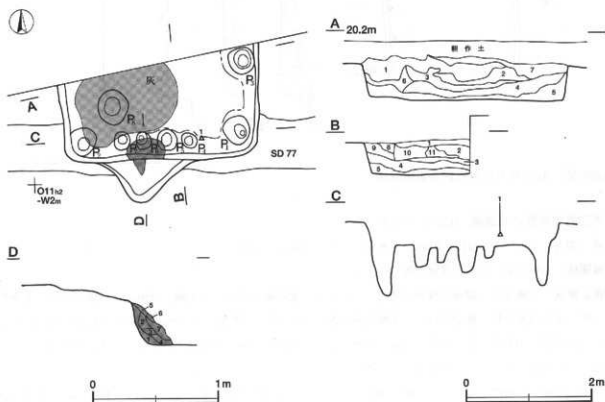
覆土 11層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 強暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物少量	7 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量
2 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物少量	8 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量	9 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化物・粘土粒子少量
4 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化物・粘土粒子少量	10 黒褐色	炭化物中量、ロームブロック少量
5 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化物・粘土粒子・灰少量	11 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
6 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量		

遺物出土状況 棒状鉄製品1点(釘カ)、鉄滓3点がほぼ全域から散在した状態で出土している。第264図1の鉄製品は南東コーナー部の覆土中層から出土している。南西コーナー部の床面には薄く灰が広がっており、柱穴の上部にも及んでいる。また、覆土中から土師器片21点、須恵器片9点が出土しているが、いずれも細片で破断面が摩滅しており、混入したものである。

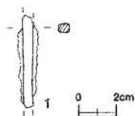
所見 本跡の出入り口施設の下部から壁柱穴が検出されており、出入り口施設は本跡が構築された当初ではな



第263図 第23号方形竪穴状遺構実測図



く、後から付設されたものと考えられる。また、南西コーナー部に広がっている灰の下層からは皿状の掘り込み（P 8）が検出され、この部分で何らかの有機物を燃やしたとも考えられるが、その目的や用途については不明である。本跡の時期は遺構の形態から中世と考えられるが、判断できる遺物が出土していないため詳細は不明である。



第264図 第23号方形竪穴状遺構出土遺物実測図

第23号方形竪穴状遺構出土遺物観察表（第264図）

番号	器種	全長	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	釘金	(3.4)	0.6	0.1	(8.8)	鉄	断面長方形の棒状、両部欠損。	覆土中	M10084

#### 第24号方形竪穴状遺構（第265図）

位置 調査区西部のO11i1区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

規模と形状 長軸2.42m、短軸2.26mの方形で、主軸方向はN-79°-Eである。壁高は32~44cmで、各壁ともほぼ直立する。また、東壁際の中央部を壁外に30cmほど掘り込んで出入り口施設が付設されており、底面は床面に向かって緩やかに傾斜したスロープ状を呈している。南壁の西寄りにも壁外に75cmほど掘り込まれた張り出し部が設けられているが、性格は不明である。

床 ほぼ平床で、中央部から出入り口施設にかけてよく踏み固められている。東壁際の出入り口施設はローム土や粘土を用いてスロープ状に構築され、層状をなして上面が硬化しており、壁外に掘り込んだ部分と連結している。また、壁溝は南壁際で認められる。

##### 出入り口施設土層解説

- 1 灰褐色 粘土ブロック中量、コムブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 2 黒褐色 炭化物・粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土ブロック少量
- 3 黒褐色 炭化物中量、ロームブロック・焼土粒子・粘土ブロック少量
- 4 黒褐色 炭化物・粘土ブロック中量、コムブロック・焼土粒子少量

ピット 3か所。主柱穴はP 1が相当し、深さは50cmである。P 3は深さが12cmで皿状を呈しており、付近にはわずかながら焼土も認められることから、炉の可能性も考えられる。P 2は深さが36cmで、性格は不明である。

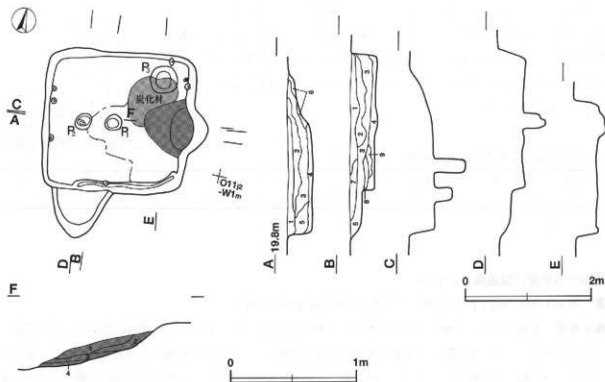
覆土 11層からなり、ロームブロックや粘土を含んだ人為堆積である。

##### 土層解説

- |        |                        |       |                             |
|--------|------------------------|-------|-----------------------------|
| 1 黒褐色  | ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量     | 6 暗褐色 | 粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 |
| 2 暗褐色  | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物少量   | 7 暗褐色 | コムブロック中量、焼土粒子・炭化物少量         |
| 3 強暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量   | 8 暗褐色 | 粘土ブロック中量                    |
| 4 黒褐色  | 炭化物中量、ロームブロック・焼土ブロック少量 | 9 黒褐色 | 粘土粒子中量、ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量   |
| 5 黒褐色  | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量   |       |                             |

遺物出土状況 北東コーナー部の床面には薄く炭化物が広がっており、この炭化物はスロープの下部からも検出されている。また、土師器片11点、須恵器片11点、鉄滓2点が出土しているが、出土した土器はいずれも細片で破断面が摩滅しており、混入したものである。

所見 本跡の北東コーナー部に広がっている炭化物はP 3の1層やスロープ状の出入り口施設の下部からも確認されており、何らかの有機物を燃やしたことが想定されるが、その目的や用途については判然としない。本跡の時期は遺構の形態から中世と考えられるが、判断できる遺物が出土していないため、詳細は不明である。



第265図 第24号方形竪穴状遺構実測図

## (2) 掘立柱建物跡

今回の調査で、中世の墓域に伴う掘立柱建物跡1棟を検出した。以下、その概要について記述する。

### 第92号掘立柱建物跡 (第266図)

**位置** 調査区西部のP10b5区に位置しており、本跡の南側や東側には中世の墓域が広がっている。

**規模と構造** 桁行、梁行ともに2間の側柱式の建物跡であり、桁行長・梁行長ともに4.50mほどの正方形を呈する。桁行方向は、第2号道路跡が北側から本跡に向かって南北に走っていることや墓域が本跡の東側や南側に広がっていることなどから北側を正面とする南北棟と推定される。柱間寸法は桁行・梁行ともに概ね2.20mを基調としているが、P8が西側に寄った位置で検出されているため北側部分の柱間寸法は等間隔ではない。

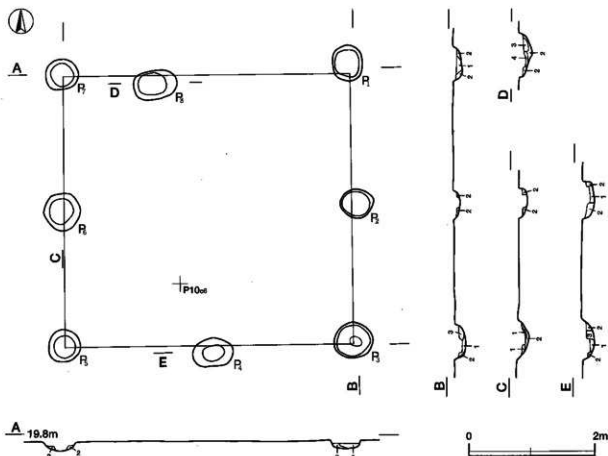
**柱穴** 平面形はP1・P4・P8が楕円形を呈し、それ以外は円形で、深さは11~27cmである。柱抜き取り痕は土層断面図中の第1層が相当し、しまりが弱い。それ以外の層は埋土であり、ローム土を主体とした暗褐色土・褐色土で埋め戻されているが、それほど突き固められてはいない。

#### 土層解説 (各柱穴共通)

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量、白色粘土粒子少量

**遺物出土状況** 混入した土器器細片14点、須恵器器細片4点が出土している。

**所見** 本跡の詳細な時期は判断できる遺物が出土していないため不明であるが、本跡の南側や東側には中世の墓域群が隣接し、また、本跡の柱穴は古代のものに比して小形であることなどから、中世の墓域に伴う小堂と考えられる。



第266図 第92号掘立柱建物跡実測図

### (3) 井戸跡

今回の調査で、計3基の井戸跡を検出した。第34・36号井戸跡については既に奈良・平安時代の項で記述しており、ここでは、中世の墓域に伴うと考えられる第35号井戸跡についてその概要を記述する。

#### 第35号井戸跡 (第267図)

**位置** 調査区西部のP10d6区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

**規模と形状** 長径1.56m、短径1.17mの楕円形で、長径方向はN-76°-Wである。確認面から円筒状に掘り込まれ、深さ1.80mほど掘り下げた時点で湧水したため以後の調査を断念したが、ローム層を掘り抜き、さらに粘土層も掘り込んでいることが確認された。

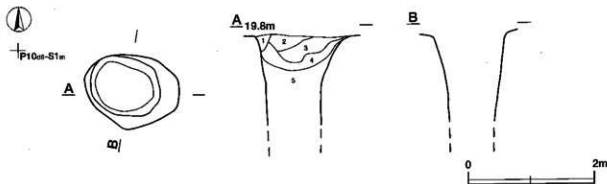
**覆土** 5層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

#### 土層解説

- |       |                              |       |                              |
|-------|------------------------------|-------|------------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量          | 3 褐色  | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・粘土粒子中量、焼土粒子少量        |
|       |                              | 5 暗褐色 | ロームブロック中量、粘土粒子少量             |

**遺物出土状況** 出土していない。

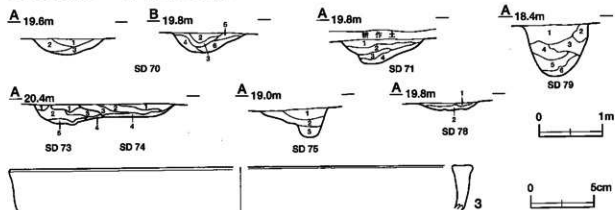
**所見** 本跡からは遺物が出土していないため時期を明確にし得ないが、本跡の東側に中世の墓域群が広がっていることや円筒状を呈した形状から、墓域に伴う中世の井戸跡と想定される。



第267図 第35号井戸跡実測図

(4) 溝跡

当遺跡からは奈良・平安時代の項で紹介した第76・77号溝跡を除いて4条の溝跡が検出されている。時期については不明なものが多いが、第70号溝跡は当調査区の南寄りの部分を東西に直線的に延びており、平安時代の遺構を掘り込んでいることから判断して中世以降の何らかの区画溝と考えられる。その他の溝跡は、最近の地籍図の筆境と位置がほぼ一致し、掘り込みも深いことから区画溝を兼ねた根切り溝の可能性がある。以下、これらの遺構について、平面図は全体図に示し、土層断面図と一覧表を掲載する。



第268図 第70・71・73～75・78・79号溝跡土層断面図，第79号溝跡出土遺物実測図

第70号溝跡土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量
- 2 極暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量

第71号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 褐色 ローム粒子少量

第73号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
- 5 灰褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

第74号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量，炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量，炭化粒子微量

第75号溝跡土層解説

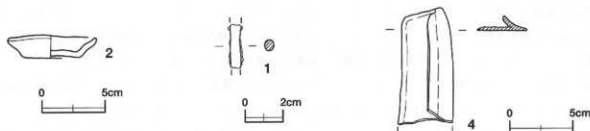
- 1 暗褐色 ローム粒子中量，粘土粒子少量，焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量，粘土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

第78号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量

第79号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 極暗褐色 ロームブロック少量，炭化粒子微量



第269図 第73・79号溝跡出土遺物実測図

第73号溝跡出土遺物観察表(第269図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	不明	(2.3)	0.6	0.5	(1.5)	鉄	断面円形の棒状、釘キ。	覆土中	M10147

第79号溝跡出土遺物観察表(第268・269図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	土器部	かわらけ	6.9	1.8	4.3	雲母・長石	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	覆土中	P10731, 70%, 口縁部割付キ、片底
3	土器部	内耳鍋	[36.6]	(3.5)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	覆土中	P10732, 5%, 口縁部外面割付キ

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4	藤(銅)片	(9.1)	(4.3)	0.3	(90.0)	鉄	袋部の破片、U字形摺りカ。	覆土中	M0048, 5%, P108

### (5) 道路跡

今回の調査で、3条の道路跡を確認した。そのうち、第2号道路跡と第10号道路跡は当調査区の北西部で合流しており、さらに西方、北方に延びている。以下、遺構の特徴について記述するが、ここでは土層断面図と出土遺物を掲載し、平面図は遺構全体図に示す。

#### 第2号道路跡(第270図)

**位置** 調査区西部のO10h4～O10j1区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

**重複関係** 第94号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 今回の調査で確認された長さは17mほどで、幅2.0～3.2mである。当調査区の北西端部(O10j4区)ではほぼ直角に屈曲し、北方向と西方向に延びている。北方向は調査7区で検出された部分に繋がり、全長は約130mを測る。また、西方向は調査9区で検出された部分に繋がり、全長約60mである。路面は褐色のローム層を10～25cm掘り込んで構築されており、断面は緩やかな弧状を呈している。

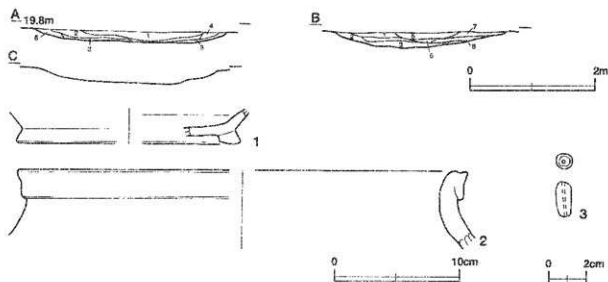
**覆土** 8層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。硬化面は3期に分かれ、最下層であるローム上層と第2・3層の上面が特に硬化している。

#### 土層解説

- |        |                      |        |               |
|--------|----------------------|--------|---------------|
| 1 黒褐色  | ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量     | 5 極暗褐色 | ローム粒子・炭化物少量   |
| 2 暗褐色  | ローム粒子・炭化物少量          | 6 暗褐色  | ローム粒子中量、炭化物少量 |
| 3 暗褐色  | ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物少量   | 7 暗褐色  | ローム粒子中量、炭化物少量 |
| 4 極暗褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量 | 8 褐色   | ロームブロック多量     |

遺物出土状況 常滑片3点(大甕)、管状土鍾1点、鉄滓2点が散在した状態で出土している。第270図2の陶器片は第1期面の上部から出土している。また、土師器片195点、須恵器片11点、灰輪陶器片1点(短頸壺)が出土しているが、これらの土器はいずれも細片で破断面が摩耗しており、混入したものである。

所見 本跡はホーム面を掘り込んでいることから、当初は意図的に構築したと考えられるが、備溝や版築地業、補修痕等は認められず、また、上層にある硬化面も自然堆積した部分が人の往来と共に踏み固められたものと想定されることなどから、曾線道路ではなく、集落に付随した生活路と考えられる。時期は出土陶器から中世(15世紀頃)と考えられる。



第270図 第2号道路跡・出土遺物実測図

第2号道路跡出土遺物観察表(第270図)

番号	種別	器種	口徑	器高	口径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	瓦	常滑瓦	-	(28)	[17.4]	粘土	灰白・オリーブ灰	良好	高台貼り付け後、ロタロナデ	覆土中	P10721, 5%, 忌部14号窯式
2	常滑	大甕	[35.6]	(6.2)	-	長石	黒灰	良好	口縁部内・外面備ナデ	底面	P10722, 5%, 9号式

番号	器種	長さ	径	孔径	口径	材質	特徴	出土位置	備考
3	管玉	1.8	0.9	0.2	1.5	土製	ナデ、明赤褐色を呈する。	覆土中	DP1025, 10%, F16

### 第8号道路跡(第271図)

位置 調査区南部のQ11c6~Q11b8区に位置し、南に傾斜した台地の南端部に立地している。

重複関係 第76号溝跡、第10号不明遺構の覆土上層に構築されている。

規模と形状 当道路の南端部をかすめるように、東北東方向(N-35°-E)に直線的に延びており、確認された長さは10mほどである。南西側は調査区域外に延び、北東側は遺存状態が悪く、消滅している。幅は1.5~1.9m、深さは10cmほどで、断面は緩やかな弧状を呈している。

覆土 4層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。硬化面は最下層である第2層の下層から検出されている。

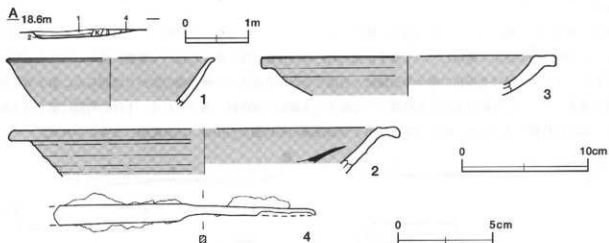
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量  
2 緑褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

- 3 暗褐色 ローム粒子少量, 粘土粒子微量  
4 暗褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 陶器片2点(鉢1・中皿1), 刀子1点が散在した状態で出土している。第271図1・2の陶器はいずれも瀬戸・美濃系と考えられ, 覆土中層から出土している。また, 土師器片101点, 須恵器片41点, 灰釉陶器片1点(碗)が出土しているが, これらの土器はいずれも細片で破断面が摩耗しており, 混入したものである。

所見 土層観察からは人為的に構築された様子は認められず, 自然堆積した暗褐色土が人の往来と共に踏み固められ, 硬化したものと考えられる。時期は出土陶器から近世以降と考えられる。



第271図 第8号道路跡・出土遺物実測図

第8号道路跡出土遺物観察表(第271図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴	出土位置	備考
1	灰釉陶器	碗	[16.7]	(3.8)	-	緻密	灰白・灰青	良好	縁部内・縁外口ナデ, 胎土面(縁外)	覆土中層	P10723, 5%
2	陶器	鉢	[30.1]	(3.6)	-	長石	緑褐色・灰黄	良好	体部内・外面口ナデ, 鉄絵による管紋	覆土中層	P10724, 5%, 白泥跡, 瀬戸系
3	陶器	中皿	[23.2]	(3.1)	-	長石	灰白・灰白	良好	体部内・外面口ナデ	覆土中	P10725, 5%, 白泥跡・透眼跡, 瀬戸系

番号	器種	長さ	幅	重ね	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4	刀子	(13.7)	(1.0)	0.4	(23.0)	鉄	切先欠損, 両面。	覆土中	M10145

第10号道路跡(第272図)

位置 調査区西部のP10a4~P10g0区に位置し, 平坦な台地の南端部に立地している。

重複関係 第1321・1325・1326号住居跡, 第1106号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 確認された長さは48mほどで, 幅2.7~3.2mである。調査区西部(P10g6区)ではほぼ直角に屈曲し, 北方向と東方向に延びている。北方向(N-10°-W)は第2号道路跡に合流し, 東方向(N-80°-E)は20mほど延びたところで湮滅している。路面はローム層を5~10cm掘り込んで構築されており, 断面は緩やかな弧状を呈している。

覆土 9層からなり, 確認された硬化面は1面だけである。第1~3層は断ち割りの硬化面の土層で, 粘土

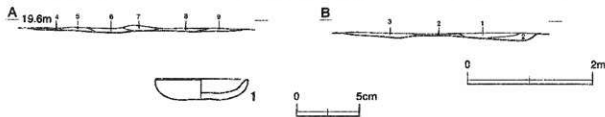
粒子を埋め込んで人為的に構築されている様子が窺える。その他の層はレンズ状の堆積状況を示した自然地蔵である。

#### 土層解説

- |        |                              |        |                     |
|--------|------------------------------|--------|---------------------|
| 1 灰褐色  | 粘土粒子中量、ロームブロック・炭土粒子少量、炭化粒子微量 | 3 暗褐色  | ローム粒子微量             |
| 2 暗褐色  | 粘土粒子中量、ロームブロック・炭土粒子少量、炭化粒子微量 | 6 黒褐色  | ローム粒子・炭土粒子・炭化粒子少量   |
| 3 黒褐色  | 粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量          | 7 黒褐色  | ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量   |
| 4 黒暗褐色 | ローム粒子・炭土粒子少量、炭化粒子微量          | 8 暗褐色  | ローム粒子中量、炭土粒子・炭化粒子少量 |
|        |                              | 9 黒暗褐色 | ローム粒子・炭土粒子少量        |

**遺物出土状況** 上部質土器1点（小皿）、鉄滓1点が出土している。第272図1は覆土中層から出土している。また、土師器片66点、須恵器片17点が出土しているが、これらの土器はいずれも細片で破断面が摩耗しており、混入したものである。

**所見** 硬化面の大部分はローム面が自然に硬化したものであるが、古代の住居跡の上部を通過する部分では粘土を人為的に埋め込んで構築している様子が見られ、この仕法は地山部分に比べて地盤が緩かったためと想定される。また、本跡は北端部で第2号道路跡と合流するが、合流部分の硬化面の広がりには明らかに第2号道路跡が優先しており、本跡は第2号道路跡から分岐する支線的な道路跡と考えられる。本跡の時期は第2号道路跡とほぼ同時期と考えられ、出土土器及び第2号道路跡の年代観から中世（15世紀頃）と考えられる。



第272図 第10号道路跡・出土遺物実測図

#### 第10号道路跡出土遺物観察表（第272図）

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	かわらけ	7.2	1.7	-	長石	にぶい橙	普通	体部内・外面滑ナゲ	覆土中層	PH25 100% PL2

#### (6) ビット群

今回の調査で、ビット群1基を確認した。以下、その概要について記述する。

#### 第7号ビット群（第273図）

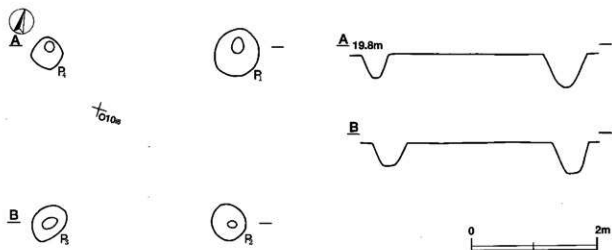
**位置** 調査区西部のO1016区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

**規模と形状** ビット4か所が検出されており、ビット間寸法は2.90m等間である。ビットはいずれも垂直に掘り込まれ、柱穴の可能性があり、深さは36～32cmを測る。

**遺物出土状況** 出土していない。

**所見** 本跡はビットが規則的に配されているが、ビットの掘り方をみると掘立柱建物の柱穴の形状とは異なっている。付近に位置する竪穴住居跡は概して遺存状態が悪く、また、古墳時代の住居跡の柱間寸法や主軸方向と近似していることから判断すると、竪穴住居跡の柱穴の可能性が高い。時期は、遺物が出土していないため、不明である。





第273図 第7号ピット群実測図

(7) 柱穴列跡

今回の調査で、柱穴列跡3基を確認した。以下、その概要について記述する。

第1号柱穴列跡 (第274図)

位置 調査区南部のP11f9区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

規模と形状 西北西方向 (N-74°-W) にピット3か所が直線状に位置している。ピット間寸法は2.00m等間で、各ピットはいずれも垂直に掘り込まれており、深さは16~30cmを測る。

P1土層解説

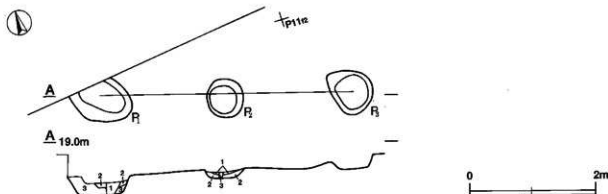
- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 藍褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量

P2土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 藍褐色 ローム粒子少量、粘土粒子微量

遺物出土状況 出土していない。

所見 本跡の時期は、出土遺物がなく不明である。



第274図 第1号柱穴列跡実測図

第2号柱穴列跡 (第275図)

位置 調査区南部のP11f9区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

規模と形状 北方向 (N-13°-W) にピット3か所が直線状に位置している。ピット間寸法は3.50m等間で、

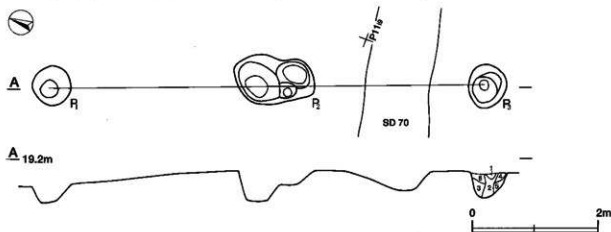
各ビットはいずれも垂直に掘り込まれており、深さは26~50cmを測る。

P3土層解説

- |       |                         |       |                |
|-------|-------------------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量               | 4 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量、粘土粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量        |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック中量、炭化粒子少量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量、粘土粒子微量 |

遺物出土状況 出土していない。

所見 本跡の時期は、出土遺物がなく不明である。



第275図 第2号柱穴跡実測図

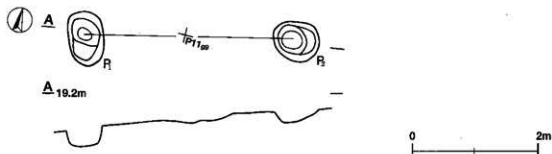
第3号柱穴跡 (第276図)

位置 調査区南部のP11g9区に位置し、平坦な台地の南端部に立地している。

規模と形状 ほぼ東西方向にビット2か所が並列している。ビット間寸法は3.40mで、ビットはいずれも垂直に掘り込まれており、深さはそれぞれ28cm、18cmを測る。

遺物出土状況 出土していない。

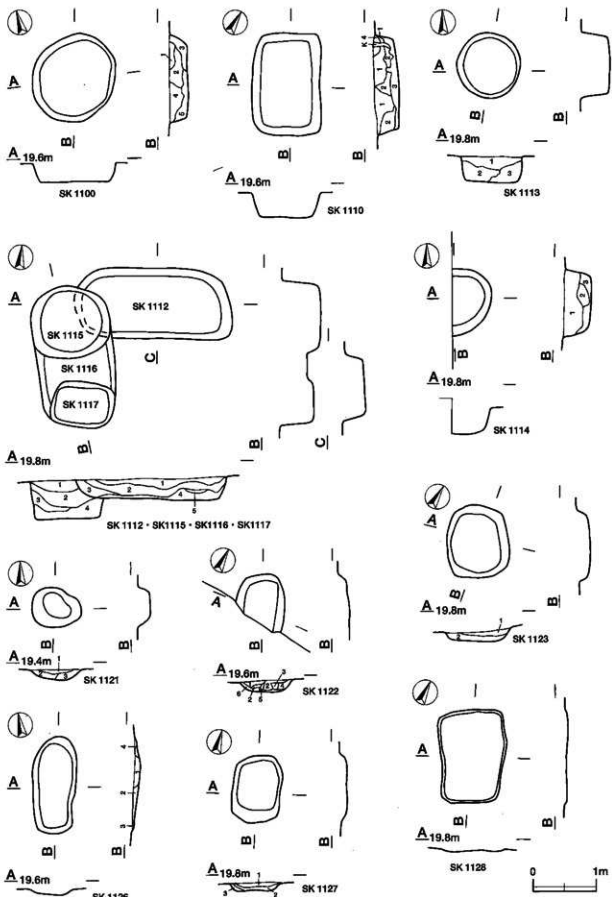
所見 本跡の時期は、出土遺物がないため不明である。



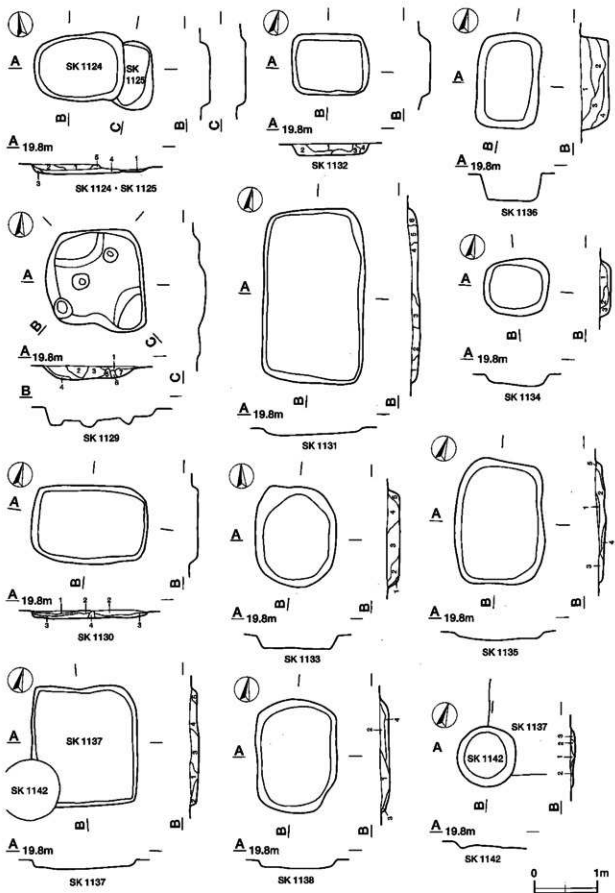
第276図 第3号柱穴跡実測図

(8) 土坑

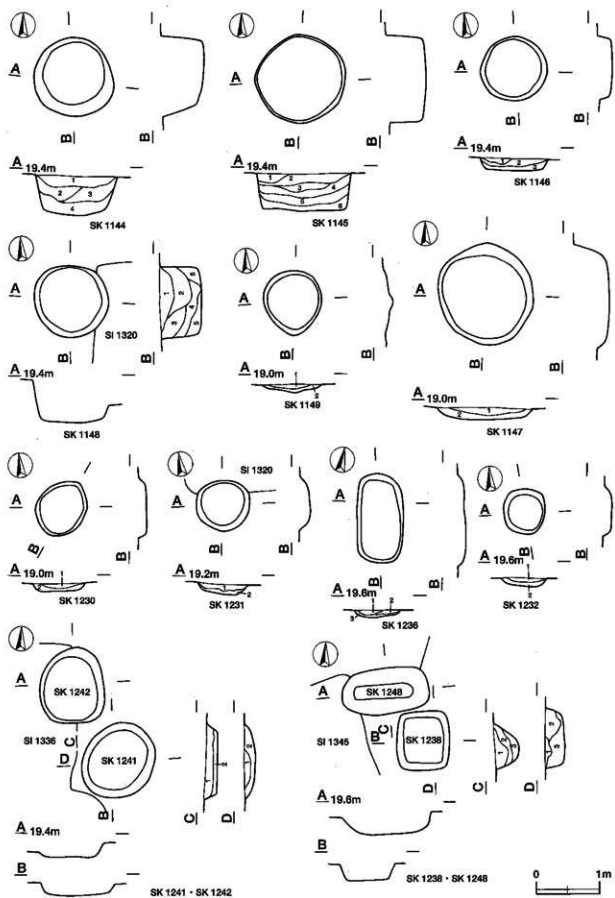
当調査区から検出された土坑は、遺物が少ないために、時期や性格が不明なものが多いが、調査区の西部に位置する一群は、人為的に埋め戻された痕跡があり、形態的にも円形や長方形を基調としており、前年度までに報告された墓塚と類似していることから、墓塚群の可能性が高い。以下、これらの土坑について実測図と土層解説を記載し、その他の性格不明の土坑については一覧表にて紹介する。



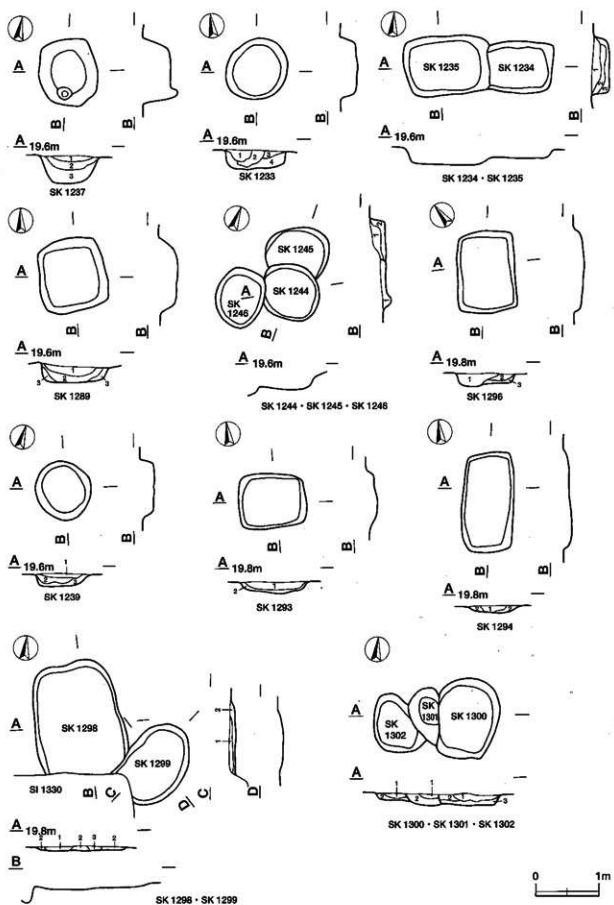
第277图 土坑实测图(1)



第278图 土坑实测图(2)



第279图 土坑实测图(3)

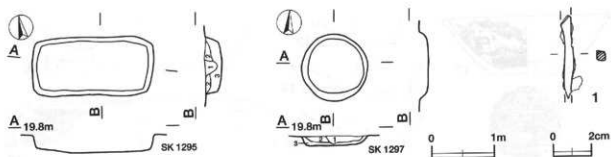


第280図 土坑実測図(4)









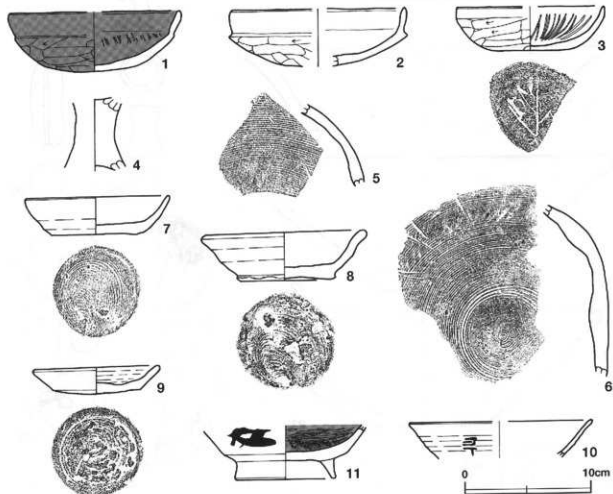
第281図 土坑実測図(5), 第1237号土坑出土遺物実測図

第1237号土坑出土遺物観察表(第281図)

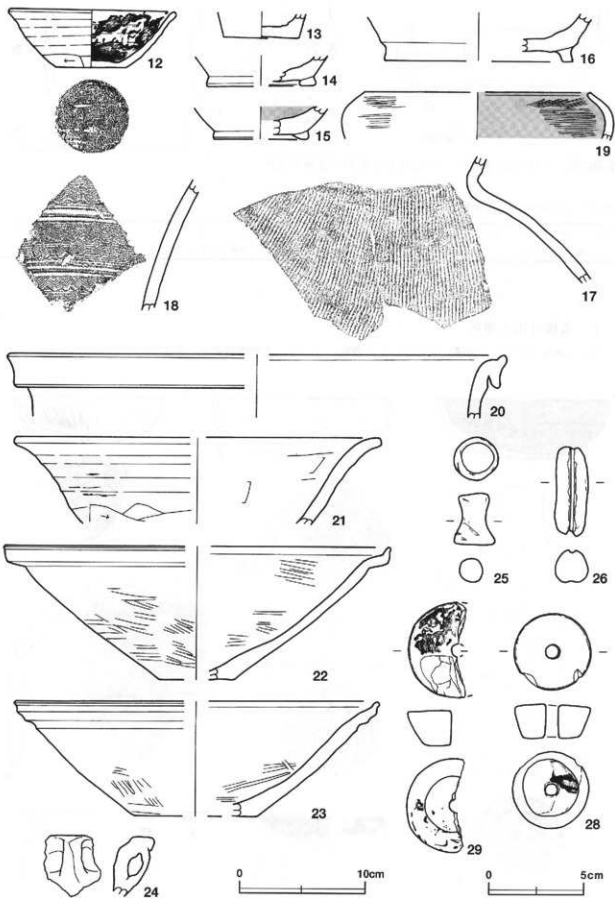
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	鐵	☉(4.4)	○(0.5)	0.5	(2.8)	鉄	断面方形の棒状。鉄鍔の基部カ。	覆土中	M10142

#### 4 遺構外出土遺物

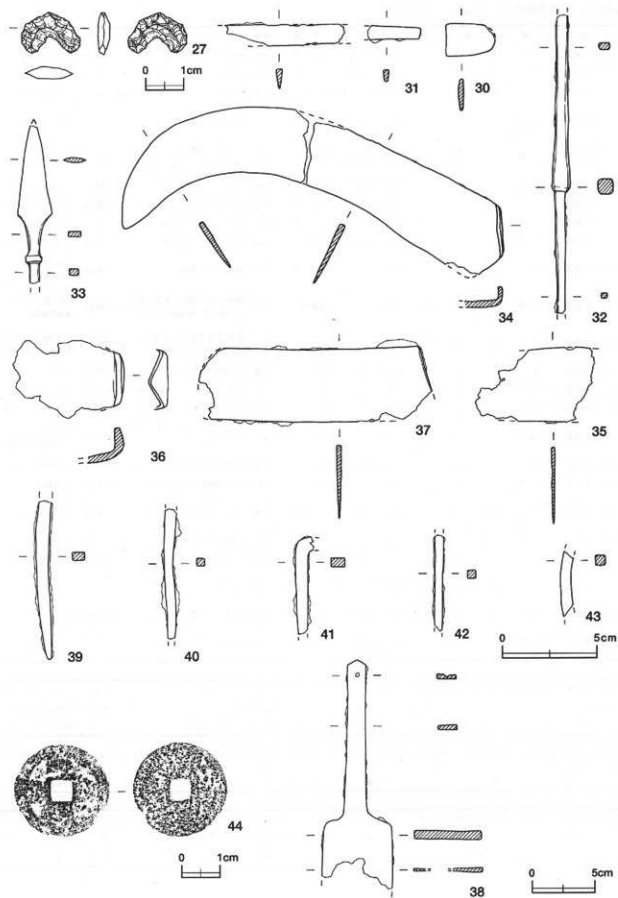
今回の調査で出土した遺構に伴わない主な遺物について、遺物観察表で記述する。



第282図 遺構外出土遺物実測図(1)



第283圖 遺構外出土遺物(2)



第284图 遺構外出土遺物実測図(3)

遺構外出土遺物観察表 (第 282 ~ 284 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	環	[135]	4.8	-	石英・赤色粒子	にぶい澄	普通	体部外面へラ磨り、内面へラ磨き	P11 区確認	P10759, 60%
2	土師器	環	[136]	4.6	-	石英・赤色粒子	にぶい澄	普通	体部外面へラ磨り、内面滑ナデ	SI359 確認	P10760, 50%
3	土師器	環	[116]	3.5	-	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	体部外面へラ磨り、内面放射状の縄文	Q11 区確認	P10761, 50%
4	土師器	ミニチュア土師か	-	(5.7)	-	石英	にぶい澄	普通	胴部外面ナデ	灰土中	P10779, 30%
5	須恵器	提 瓶	-	(5.3)	-	長石・黒色斑点	暗灰	良好	体部外面か目調整、内面ワロナデ、 F8028 (174 号) と同一個体の可能性あり	SI243 覆土中	TP10026, 5%
6	須恵器	提 瓶	-	(13.6)	-	長石・黒色斑点	暗灰	良好	体部外面か目調整、内面ワロナデ	SI335 覆土中	TP10027, 20%
7	土師器	環	11.6	3.1	7.6	雲母・石英	にぶい澄	普通	体部ワロナデ整形、底部回転糸切り	P11 区確認	P10762, 80%
8	土師器	環	12.7	3.9	7.4	雲母・石英	にぶい澄	普通	体部ワロナデ整形、底部回転糸切り	SI314 覆土中	P10763, 80%
9	土師器	小 皿	9.7	2.1	7.0	雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部ワロナデ整形、底部回転へラ切り	P11 区確認	P1067, 90%, PL62
10	土師器	環	[144]	(2.9)	-	長石	にぶい澄	普通	体部ワロナデ整形	P10 区確認	P10764, 5%, 体部外面磨き [待ナ]
11	土師器	高台付椀	-	(4.3)	8.0	雲母	洗黄褐	普通	体部内面へラ磨き、底部回転 へラ切り後、高台貼り付け	P11 区確認	P10766, 50%, 体部外面磨き [□]
12	須恵器	環	13.2	4.6	5.8	雲母・長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちへラ削り、 底部一方向のへラ削り	S899 覆土中	P10781, 60%, 内面磨き付着, PL63
13	須恵器	壺	-	(2.0)	[6.0]	長石・石英	褐灰	普通	底部回転糸切り	Q11 区確認	P10772, 5%
14	須恵器	長頸瓶	-	(2.4)	[8.6]	長石	灰	良好	高台貼り付けワロナデ、内面自然磨	P10 区確認	P10774, 5%
15	灰釉陶器	長頸瓶	-	(2.6)	7.4	緻密	灰白	良好	高台貼り付けワロナデ、亀はらし磨	P10 区確認	P10773, 5%
16	須恵器	短頸壺	-	(3.9)	[15.0]	長石	灰	良好	高台貼り付け後、ワロナ ナデ	P10 区確認	P10775, 5%, 内・外面自然磨
17	須恵器	壺	-	(10.0)	-	雲母・長石・石英	灰	普通	体部内面平ワリ、内面ワロナデ 底口縁	P10 区確認	TP10023, 5%
18	須恵器	大 壺	-	(10.4)	-	長石	灰	良好	胴部外面磨き後、内面ワロナデ	Q11 区確認	TP10024, 5%
19	土師器	鉄鉢形 土 師 器	[178]	(3.8)	-	長石・石英	にぶい澄	普通	体部内・外面へラ磨き	P11 区確認	P10768, 5%
20	陶 器	大 甕	[39.5]	(5.0)	-	長石	灰黄褐	普通	口縁部磨ナデ、縁部はN字状	Q11 区確認	P1075, 5%, 常滑
21	土師器	鉢	[29.0]	(6.9)	-	長石・石英	澄	普通	体部下端へラ削り、内面へラナデ	Q11 区確認	P10770, 10%
22	土師器	上 鉢	[30.4]	10.6	[6.0]	雲母・長石・石英	にぶい澄	普通	体部内・外面へラ磨き	SI1335 付近 確認	P10409, 20%
23	土師器	鉢	[28.6]	9.2	[9.6]	雲母・長石・石英	澄	普通	体部内・外面へラ磨き	Q10 区確認	P10771, 30%
24	土師器	内耳土師	-	(4.8)	-	雲母・長石・石 英・赤色粒子	にぶい澄	普通	耳部貼り付け後、ナデ	S F 2 付 確認	P10778, 5%, 外面炭化物付着

番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
25	耳 栓	2.8	2.3	0.2	10.1	土 製	ナデ、にぶい褐色を呈する。	P11 区確認	DP10026, 100%
26	着流土師	4.8	1.8	1.7	15.8	土 製	ナデ、頸面を幅0.2cmの溝が囲繞する。	SI245 覆土中	DP887, 10%, PL66

番号	器種	長さ	最大径	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
27	石 鏡	1.1	1.6	0.3	0.5	黒曜石	無茎、押圧調整。	P10 区確認	Q10030, 100%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
28	紡錘車	4.0	1.8	0.7	(38.6)	粘板岩	無文、沼田合形、外面磨付着、磨付部は黒色、その他は灰色。	P10 区確認	Q10027, 95%, PL67
29	紡錘車	5.0	1.8	0.7	(30.4)	粘板岩	無文、沼田合形、外面磨付着、磨付部は黒色、その他は灰色。	P10 区確認	Q10028, 60%, PL67

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
30	鈍尾 <small>カ</small>	(2.6)	1.7	0.3	(4.1)	鉄	板状。一端は半円形を呈する。馬具の帯金具 <small>カ</small> 。	P11 区確認	M10158、PL69
31	刀 子	(9.3)	(1.1)	0.4	(9.1)	鉄	刃部・基部の破片、断面不明。	P11 区確認	MJ0159
32	鏃	(8.4)	1.9	0.8	(11.1)	鉄	鹿角部から基部にかけての破片、台状開有り。	SI737 墓土中	M10177
33	鏃	(15.8)	(0.9)	0.9	(22.3)	鉄	柳葉式、台状開有り。	SK227 墓土中	M10178
34	鏃	[20.1]	(4.1)	0.4	(88.0)	鉄	刃部は強く彎曲、基部は上半部のみを折り返す。	SI367 墓土中	M10179
35	鏃	(6.3)	(4.1)	0.2	(16.0)	鉄	刃部の破片。	P10 区確認	M10160
36	鏃	(6.0)	(4.1)	0.4	(27.0)	鉄	基部の折り返し部分は三角形を呈する。	P11 区確認	M10161
37	鏃	(12.4)	4.0	0.3	(54.0)	鉄	切先、基部の一部欠損。	P12 区確認	M10162、PL69
38	不 明	(18.4)	5.6	0.7	(126)	鉄	先端部欠損、基部に目釘穴有り。	P11 区確認	M10163
39	釘 <small>カ</small>	(8.5)	0.7	0.4	(11.1)	鉄	断面長方形の棒状で、一端が尖る。基部欠損の角釘 <small>カ</small> 。	P11 区確認	M10164
40	不 明	(6.8)	0.5	0.4	(8.0)	鉄	断面長方形の棒状で、一端が備る。基部欠損の角釘 <small>カ</small> 。	Q10 区確認	M10165
41	門 <small>カ</small>	(5.1)	0.7	0.5	(9.2)	鉄	断面長方形の棒状で、一端は直角に屈曲する。	P10 区確認	M10166
42	不 明	(5.1)	0.4	0.4	(3.8)	鉄	断面方形の棒状、鉄線の基部 <small>カ</small> 。	P11 区確認	M10167
43	不 明	(3.5)	0.7	0.6	(2.9)	鉄	断面長方形の棒状、若干彎曲、角釘の脚部 <small>カ</small> 。	P11 区確認	M10168

番号	鉄名	径	孔	重量	初辨年	材質	特 徴	出土位置	備 考
44	不 明	2.5	0.6	2.7	不明	銅	円体方形、無背鏡、緑青により判読不明。	P10 区確認	M10169

表2 古墳時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内 部 装 置						出土遺物	備考 (時期)
							掘溝	土坑	土人門	ピット	貯蔵穴	土・石		
658	O13h2	N-11°-W	方形	10.84 × 10.68	37-50	平壇	全周	5	-	20	-	掘1	土師器 (坏・甕)、釘	7世紀前半
1069	O13i3	N-14°-W	方形	6.53 × 5.78	12-38	平壇	[全周]	4	1	6	-	掘1	土師器 (坏・高坏・鉢・甕)、支脚	6世紀後半
1090	O13i3	N-9°-W	[方形]	3.30 × (3.00)	15	平壇	[全周]	-	2	1	-	掘1	土師器 (坏・甕)	7世紀後半
1092	P13e7	N-14°-W	[方形]	4.65 × (2.60)	4	平壇	[全周]	-	-	-	-	掘1	土師器 (高坏)	6世紀後半
1098	P13g3	N-22°-W	[方形]	8.25 × (4.60)	31	平壇	[全周]	2	-	-	-	掘1	土師器 (坏・甕・瓶)、紡錘車	6世紀後半
1251	P13d2	N-3°-E	方形	7.20 × 7.02	21	平壇	全周	3	1	4	-	掘1	土師器 (坏・甕)、鹿角部坏・埴輪、鉄釘、刀子	7世紀後半
1294	P13b3	N-5°-W	[方形]	6.02 × (5.90)	23	平壇	一部	4	1	-	-	掘1	自然 土師器 (坏・甕・瓶)	7世紀前半
1303	Q10b8	N-9°-W	方形	5.42 × 5.31	5	平壇	[全周]	4	1	1	-	掘1	土師器 (坏・甕)	7世紀後半
1305	Q10c4	N-4°-W	方形	6.46 × 5.97	28	平壇	全周	4	2	-	1	掘1	自然 土師器 (坏・鉢・甕)、支脚、不明鉄製品	7世紀後半
1309	Q10a3	N-4°-W	方形	3.75 × 3.48	-	平壇	全周	-	1	-	1	掘1	土師器 (高坏・甕)	7世紀後半
1317	P10h7	N-3°-E	方形	4.70 × 4.40	5	平壇	[全周]	4	1	-	-	掘1	自然 土師器 (坏・甕)、刀子、釘	7世紀後半
1320	P11e2	N-7°-E	方形	5.80 × 5.69	18-37	平壇	[全周]	4	2	-	-	掘1	自然 土師器 (坏・鉢・甕)	7世紀後半
1321	P10f9	N-1°-E	方形	5.50 × 5.50	15-20	平壇	[全周]	4	1	-	1	掘1	自然 土師器 (坏・甕)、小玉、支脚	7世紀後半
1327	P11b1	N-2°-E	方形	4.70 × 4.50	3	平壇	一部	4	1	6	-	掘1	土師器 (甕)	7世紀
1332	P10a8	N-0°	[方形]	[4.30] × [4.00]	-	平壇	-	4	1	-	-	掘1	土師器 (甕)	7世紀
1334	P11b4	N-6°-E	[方形]	[4.20] × [4.20]	-	平壇	-	-	1	1	-	-	土師器 (坏・甕)	6世紀
1337	P11a3	N-5°-E	方形	5.38 × 5.10	10-15	平壇	一部	4	1	-	-	掘1	土師器 (坏・甕)、刀子	7世紀後半
1342	O11a3	N-15°-W	[方形]	4.89 × (3.80)	30	平壇	一部	4	1	-	-	掘1	自然 土師器 (甕)	6世紀後半
1366	P12b5	N-17°-E	[方形]	5.48 × (4.94)	10-12	平壇	[全周]	3	1	-	-	掘1	土師器 (坏・甕)、支脚	7世紀後半
1378	O12b8	N-28°-W	[方形]	(3.30) × (2.30)	25	平壇	一部	-	-	17	-	掘1	自然 土師器 (坏・鉢・甕)	6世紀後半
1380	P13a1	N-15°-W	方形	5.65 × 5.65	30-52	平壇	一部	4	1	11	1	掘2	自然 土師器 (坏・高坏・鉢・甕・瓶)、支脚	6世紀後半
1383	O10i9	N-10°-W	方形	[6.20] × [5.72]	-	平壇	-	4	2	-	1	掘1	土師器 (坏・甕)	7世紀後半

表3 奈良・平安時代住居跡一覽表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	埋深 (cm)	床面	内 部 施 設					掘土	出土遺物	備考 (時期)	
							壁塗	土壁	出入口	ヒツ	貯蔵				釜、炉
1081	O14 15	N-6°-E	[方 形]	3.52 × 3.22	2 ~ 30	平垣	[全周]	1	1	-	-	掘1	自然	土師器 (坏・甕)、磁石	10世紀後半
1082	O14 15	N-17°-W	长方形	3.52 × 3.09	3 ~ 13	平垣	全周	-	-	4	-	掘1	自然	須恵器 (坏・甕)	9世紀後半
1083	O13 14	N-2°-W	[方 形]	(5.52) × (5.10)	22 ~ 27	平垣	[全周]	4	1	1	-	掘1	人為	土師器 (坏・甕、瓶)、須恵器 (坏・甕、鉢)、土、刀子、資金具	8世紀前半
1084	P13 a 5	N-30°-E	长方形	4.60 × 3.68	5 ~ 13	平垣	[全周]	4	1	-	-	掘1	自然	土師器 (小皿・碗・甕)、管状土師	10世紀後半
1085	P13 b 5	N-7°-E	长方形	3.75 × 3.25	3 ~ 20	平垣	一部	3	-	-	1	掘1	人為	土師器 (小皿・甕・甕)、灰輪脚器 (長筒甕)、管状土師、釘	10世紀後半
1086	P13 c 5	N-10°-W	方 形	4.15 × 3.96	12	平垣	全周	4	1	-	-	掘1	自然	土師器 (坏・甕)、須恵器 (坏)、赤土土師	9世紀後半
1087	P13 e 6	N-7°-E	方 形	6.32 × 6.20	30 ~ 40	平垣	[全周]	4	3	-	-	掘1	人為	土師器 (坏・甕、瓶)、須恵器 (坏・甕、鉢)、土、刀子、乾用甕	8世紀前半
1088	P13 e 6	N-10°-E	[方 形]	[4.10] × [4.70]	0 ~ 20	平垣	一部	-	-	9	-	掘1	人為	土師器 (坏・甕)、須恵器 (坏・甕)、砥石	9世紀後半
1091	O13 14	N-5°-E	长方形	7.10 × 6.73	30 ~ 50	平垣	全周	4	1	-	-	掘1	人為	土師器 (甕)、須恵器 (坏・甕・甕・瓶、土師器 (小皿・碗・甕)、灰輪脚器 (長筒甕)、高方、甕	8世紀前半
1093	P13 c 4	N-7°-E	方 形	3.43 × 3.38	12	平垣	全周	3	1	-	-	掘1	人為	土師器 (坏・甕、瓶)、須恵器 (坏・甕、瓶)、木炭製品	10世紀後半
1094	P13 c 5	N-10°-E	长方形	2.67 × 2.26	22 ~ 26	平垣	全周	-	1	4	-	掘1	人為	土師器 (小皿・碗・甕)、支脚	10世紀後半
1095	P13 c 5	[N-1°-W]	[方 形]	[1.66] × [0.31]	4	平垣	一部	-	-	-	-	-	人為	-	8-10世紀
1096	O13 12	N-3°-W	方 形	4.93 × 4.72	38 ~ 47	平垣	全周	4	1	4	-	掘1	人為	土師器 (坏・甕)、須恵器 (坏・甕・甕)、龜	8世紀前半
1097	O13 12	N-6°-W	方 形	3.45 × 3.37	-	平垣	一部	3	1	2	-	掘1	人為	土師器 (甕)、須恵器 (坏・甕、甕、刀、甕	8世紀前半
1099	P13 b 2	N-2°-E	[方 形]	(3.45) × (1.80)	30	平垣	-	1	-	3	-	掘1	-	土師器 (坏)、須恵器 (坏)、灰輪脚器 (甕)	9世紀後半
1250	P13 c 4	N-2°-E	方 形	[4.10] × [3.80]	30 ~ 25	平垣	-	3	1	48	-	掘1	人為	土師器 (坏・碗・小皿)、磁石、刀子	10世紀以降
1252	P13 c 3	N-3°-E	方 形	7.26 × 7.02	0 ~ 21	平垣	全周	4	2	21	-	掘1	自然	土師器 (甕・瓶)、須恵器 (坏・甕・甕・鉢)、刀子、鍬、土師器 (坏・甕)	8世紀後半
1253	P13 a 4	N-10°-W	长方形	4.48 × 4.27	22 ~ 30	平垣	全周	4	1	2	-	掘1	人為	土師器 (坏・甕・甕、瓶、瓶)、灰輪脚器 (甕)、管状土師、刀子、磁皿	10世紀前半
1256	P13 b 3	N-1°-W	方 形	3.60 × 3.25	12	平垣	一部	-	-	10	-	掘1	人為	土師器 (坏・碗・甕)、麴明口、刀子	10世紀前半
1256	O13 17	N-9°-W	[方 形]	[3.80] × [3.50]	-	平垣	一部	4	1	10	-	掘1	-	土師器 (坏・甕)	10世紀前半
1257	O12 g 5	不明	[长方形]	[1.00] × [0.55]	35	平垣	-	-	-	-	-	-	-	-	不明
1300	Q10 46	N-3°-E	方 形	3.62 × 3.40	24 ~ 26	平垣	全周	-	1	4	-	掘1	人為	土師器 (甕)、須恵器 (坏・甕)	8世紀後半
1301	Q10 48	N-2°-E	长方形	4.02 × 3.42	-	平垣	一部	4	1	9	-	掘1	-	土師器 (甕)、須恵器 (坏)	8世紀後半
1302	Q10 49	N-5°-W	方 形	4.36 × 4.26	-	平垣	全周	4	1	9	-	掘1	-	土師器 (坏・甕)、須恵器 (坏・甕)、不明物品	9世紀後半
1304	Q10 77	N-85°-E	长方形	4.62 × 4.15	20 ~ 25	平垣	全周	4	1	-	-	掘1	人為	土師器 (甕・瓶)、須恵器 (坏・甕・甕・瓶)	9世紀中葉
1306	Q10 40	不明	[方 形]	(3.05) × (0.82)	42	平垣	[全周]	-	-	-	-	-	-	-	8世紀
1307	P10 14	N-2°-W	方 形	3.65 × 3.52	13 ~ 21	平垣	全周	4	1	1	-	掘1	自然	土師器 (甕・甕、須恵器 (坏・甕、甕)、須恵器 (坏・甕)	8世紀後半
1308	P10 b 2	N-85°-E	[方 形]	(3.17) × (1.78)	5	平垣	一部	-	-	1	-	掘1	自然	土師器 (坏・陶器土師器・管状土師)	10世紀後半
1310	P10 16	N-9°-W	方 形	4.80 × 4.58	-	平垣	全周	-	-	-	-	[掘1]	-	土師器 (坏・甕・陶器土師)	10世紀後半
1311	P11 11	N-30°-W	[方 形]	[3.50] × [3.30]	-	平垣	-	-	-	-	-	掘1	-	土師器 (坏・甕)、灰輪脚器 (甕)	10世紀後半
1312	P10 16	N-12°-E	长方形	6.02 × 4.53	-	平垣	[全周]	-	-	-	-	[掘1]	-	-	9-10世紀
1313	P10 17	N-3°-W	[方 形]	4.56 × (2.38)	-	平垣	[全周]	-	-	-	-	-	-	須恵器 (坏・甕)	9世紀中葉
1314	P10 18	N-85°-E	长方形	5.98 × 3.45	15 ~ 22	平垣	全周	-	1	3	-	掘1	自然	土師器 (坏・甕・甕、瓶)、灰輪脚器 (坏・甕、甕)、釘、計尺、支脚	10世紀前半
1315	P10 10	N-2°-W	方 形	5.10 × 4.69	28 ~ 56	平垣	全周	3	1	-	-	掘2	人為	土師器 (坏・甕・甕・甕、瓶)、須恵器 (坏・甕・甕、瓶)、灰輪脚器 (坏・甕、甕)、刀	9世紀後半
1316	P10 10	N-8°-E	方 形	3.00 × 2.95	35 ~ 65	平垣	全周	4	1	-	-	掘1	自然	土師器 (甕)、須恵器 (坏・甕、瓶)、磁石、刀子、磁鉢	8世紀後半
1318	P10 h 6	N-0°	长方形	5.48 × 3.92	-	平垣	[全周]	3	1	-	-	掘1	-	土師器 (坏・陶器土師)、須恵器 (坏)	9世紀後半
1319	P11 f 2	N-17°-E	方 形	3.67 × 3.43	6 ~ 34	平垣	全周	-	1	-	-	掘1	自然	土師器 (甕)、須恵器 (坏)、灰輪脚器 (刀、瓦石)	8世紀後半
1320	P10 19	N-0°	长方形	4.70 × 3.91	22 ~ 42	平垣	[全周]	-	1	4	-	掘1	自然	土師器 (甕)、須恵器 (坏・甕)、釘	9世紀中葉
1322	P10 e 0	N-5°-E	长方形	5.30 × 4.18	6 ~ 14	平垣	全周	-	-	-	-	掘1	人為	土師器 (坏・甕)、須恵器 (坏・甕・甕)	9世紀後半
1323	P10 19	N-1°-W	长方形	4.26 × 3.58	43 ~ 52	平垣	[全周]	-	1	-	1	掘1	人為	土師器 (坏・甕、甕)、須恵器 (坏・甕、甕)、灰輪脚器 (坏)、刀子、磁鉢、灰土土師	9世紀後半
1325	P10 f 6	N-15°-W	方 形	3.11 × 3.00	20	平垣	全周	-	1	-	-	掘1	自然	土師器 (坏・甕)	9世紀前半
1326	P10 f 9	N-0°	方 形	3.76 × 3.49	18 ~ 25	平垣	全周	4	1	-	-	掘1	自然	土師器 (甕)、須恵器 (坏・甕)、磁石	8世紀前半
1326	P10 j 9	N-2°-E	方 形	2.75 × 2.75	35	平垣	[全周]	-	1	-	-	掘1	自然	土師器 (坏・甕)、須恵器 (坏・甕)、灰輪脚器 (長筒甕)、磁鉢、釘	9世紀末葉
1329	P11 b 1	N-55°-E	[长方形]	[4.60] × [3.80]	-	平垣	-	3	1	5	-	掘1	-	-	8世紀以降
1330A	P10 c 0	N-95°-E	方 形	4.25 × 4.10	10 ~ 19	平垣	[全周]	4	1	-	-	掘1	-	土師器 (坏・甕)、須恵器 (甕)	9世紀後半

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	地高 (cm)	床面	内 部 施 設					備 考 (特 記)				
							壁土	階 段								
								壁土	出入口	ピット	の儀					
1320 B	P10c 0	N - 0°	長方形	4.82 × 4.10	10 ~ 19	平坦	[全周]	4	1	4	-	葺 1	自然	土師器 (甗、鉢、甕、蓋、甑、須臾器、灰函、埴輪、瓦、刀子、土師器)	9世紀後半	
1321	P10b 0	N - 2° W	長方形	3.50 × 3.08	-	平坦	-	1	3	3	-	葺 1	自然	土師器 (甗)	9世紀後半	
1333	P11 2	N - 0°	[長方形]	[3.90] × [3.30]	-	平坦	-	-	-	-	-	葺 1	-	土師器 (甗)	9世紀	
1335	P11c 4	N - 8° E	方 形	3.48 × 3.40	24 ~ 32	平坦	全周	-	1	1	-	葺 1	人為	土師器 (甗、鉢、甕、須臾器、埴輪、瓦)	9世紀中葉	
1336	P10a 9	N - 97° E	長方形	3.96 × 3.28	18 ~ 36	平坦	全周	-	1	1	1	葺 1	自然	土師器 (甗、甑、灰函、須臾器、埴輪、瓦)	10世紀後半	
1338	P11a 3	N - 5° E	[方 形]	[3.50] × [3.50]	0	平坦	-	4	-	-	-	葺 1	-	土師器 (埴輪、小皿、甗)	10世紀以降	
1339	P11b 5	N - 4° W	[方 形]	3.40 × (2.08)	13 ~ 17	平坦	-	1	-	2	-	-	自然	土師器 (甗、甕)	10世紀	
1341	P11a 4	N - 84° W	[長方形]	2.87 × (2.35)	15	平坦	[全周]	-	-	-	-	-	自然	土師器 (小皿、甗)	10世紀後半	
1344	O11 3	N - 102° E	長方形	3.24 × 2.80	-	平坦	[全周]	-	-	-	-	-	-	-	-	9世紀
1345	P11a 2	N - 16° W	長方形	3.62 × 3.08	2 ~ 10	平坦	一部	4	1	4	-	葺、砂	自然	土師器 (埴輪、甗、灰、埴輪、瓦、刀子、甗)	9世紀後半	
1346	P10e 7	N - 6° W	方 形	2.72 × 2.55	0 ~ 5	平坦	一部	-	1	-	-	葺 1	自然	土師器	9世紀	
1348	O10 8	N - 0°	長方形	[3.10] × [2.60]	-	平坦	[全周]	-	-	-	-	[葺 1]	-	-	-	平安時代
1349	P10c 3	N - 5° E	方 形	4.14 × 3.84	0 ~ 12	平坦	全周	4	1	-	1	葺 1	自然	土師器 (甗)、須臾器 (埴輪)	8世紀後半	
1350	P12f 4	N - 88° E	[方 形]	[2.60] × [2.40]	-	平坦	-	-	-	-	-	[葺 1]	-	-	-	10世紀後半
1351	P12g 1	N - 4° W	[長方形]	3.62 × (2.80)	0 ~ 6	平坦	一部	2	1	8	-	葺 1	自然	土師器 (埴輪、小皿)、刀子、鉄劍	10世紀以降	
1352	P12g 1	N - 9° E	方 形	3.96 × 3.76	10 ~ 12	平坦	全周	2	1	11	-	葺 1	人為	土師器 (皿、甗)、須臾器 (甗)、灰函、須臾器 (灰函)、埴輪、瓦、刀子、須臾器	9世紀後半	
1353	P12e 1	N - 2° E	[方 形]	4.94 × (1.88)	4 ~ 13	平坦	[全周]	2	1	2	-	-	自然	土師器 (甗)、須臾器 (埴輪)	9世紀前半	
1354	P12a 2	N - 16° W	[長方形]	3.55 × (3.50)	-	平坦	-	4	-	-	-	[葺 1]	-	土師器 (埴輪、甗)	10世紀	
1355	P11f 0	N - 6° W	長方形	5.40 × 4.86	15 ~ 45	平坦	全周	-	2	-	-	葺 1	人為	土師器 (甗)、須臾器 (須臾器、高甗、甑、須臾器、灰函、須臾器、埴輪、瓦、刀子、須臾器)	10世紀中葉	
1355	P12g 1	N - 2° E	長方形	4.26 × 3.76	4 ~ 20	平坦	金属	4	1	3	-	葺 1	人為	土師器 (甗)、須臾器 (埴輪)	9世紀前半	
1357	P11 0	N - 98° E	[長方形]	[3.20] × [2.30]	-	平坦	一部	1	-	2	-	[葺 1]	-	土師器 (小皿)	10世紀後半	
1358	P11a 9	N - 80° E	長方形	3.82 × 3.20	10 ~ 20	平坦	一部	-	1	8	-	葺 1	人為	土師器 (小皿、鉢、甗)、須臾器 (甗)、灰函、須臾器、埴輪、瓦、刀子	10世紀後半	
1359	P11b 9	N - 83° E	方 形	2.70 × 2.70	6 ~ 8	平坦	一部	4	1	-	-	葺 1	自然	土師器 (埴輪、小皿)、灰石	10世紀後半	
1360	P11 9	N - 83° E	[長方形]	[3.70] × [3.00]	-	平坦	-	-	-	2	-	[葺 1]	-	土師器 (埴輪、甗)	10世紀	
1361	P12g 9	N - 10° W	[方 形]	[6.60] × [6.25]	0 ~ 10	平坦	一部	4	1	2	-	葺 1	自然	土師器 (甗)、須臾器 (埴輪、甗)	9世紀前半	
1362	P12e 8	N - 4° E	長方形	4.52 × 4.00	4 ~ 14	平坦	金属	4	1	2	-	葺 1	自然	土師器 (甗)、須臾器 (埴輪)	8世紀後半	
1363	P12e 9	N - 23° W	[長方形]	[6.65] × [3.45]	-	平坦	-	-	-	13	-	葺 1	-	土師器 (埴輪、甗)	10世紀前半	
1364	P12d 6	N - 3° E	方 形	3.30 × 3.30	10 ~ 20	平坦	全周	-	1	-	-	葺 1	自然	土師器 (埴輪、甗)	8世紀前半	
1365	P12c 5	N - 6° E	方 形	2.82 × 2.68	8 ~ 20	平坦	全周	-	-	-	-	葺 1	自然	土師器 (甗)、須臾器 (埴輪、甗)	8世紀後半	
1367	P12c 7	N - 4° W	方 形	3.68 × 3.34	12 ~ 15	平坦	一部	3	-	-	-	葺 1	自然	土師器 (甗)、須臾器 (埴輪)、刀子	8世紀後半	
1368	P12c 7	N - 14° E	方 形	3.00 × 2.90	12 ~ 16	平坦	全周	-	1	-	-	葺 1	人為	土師器 (甗)、須臾器 (埴輪)	9世紀	
1369	O12 15	N - 63° E	[方 形]	3.40 × (2.50)	8	平坦	-	2	-	-	-	葺 1	自然	土師器 (埴輪、甗)、灰函、須臾器 (甗)	10世紀前半	
1370	O12 15	N - 1° W	方 形	6.38 × 5.96	33 ~ 50	平坦	金属	4	1	1	-	葺 1	自然	土師器 (甗)、須臾器 (埴輪、甗、甑、鉢)	8世紀後半	
1371	P12d 9	N - 13° E	[方 形]	[3.26] × 3.12	0 ~ 10	平坦	一部	4	1	-	-	葺 1	自然	土師器 (甗)、須臾器 (埴輪)、須臾器 (埴輪)	8世紀前半	
1372	P12d 9	N - 3° W	方 形	3.60 × 3.60	2 ~ 18	平坦	金属	3	1	-	-	葺 1	自然	土師器 (甗、鉢)、須臾器 (埴輪、甗)	8世紀前半	
1373	O12b 7	N - 1° E	方 形	3.44 × 3.20	14 ~ 20	平坦	-	3	-	-	-	葺 1	人為	土師器 (甗)、須臾器 (埴輪、甗)	8世紀後半	
1374	O12 17	N - 1° W	方 形	3.92 × 3.82	28 ~ 43	平坦	金属	-	-	-	-	葺 1	自然	土師器 (甗)、須臾器 (埴輪、甗)、埴輪、刀子	8世紀後半	
1375	O12 10	N - 0°	方 形	5.18 × 4.90	12 ~ 24	平坦	金属	4	1	-	-	葺 1	自然	土師器 (甗)、須臾器 (埴輪、甗)	8世紀後半	
1376	O12 18	N - 0°	長方形	3.40 × 2.72	22 ~ 42	平坦	一部	4	-	-	-	葺 1	自然	須臾器 (埴輪、甗)、刀子	8世紀中葉	
1377	O12b 0	N - 70° E	方 形	3.50 × 3.20	22 ~ 30	平坦	全周	-	1	3	-	葺、土	人為	土師器 (埴輪、甗)	10世紀前半	
1379	P13b 1	N - 82° E	長方形	4.14 × 3.26	5	平坦	-	-	1	-	-	葺 1	自然	土師器 (埴輪、甗)、鉄劍	10世紀前半	
1381	O12 19	N - 82° E	長方形	3.75 × 2.92	3 ~ 6	平坦	一部	-	-	3	-	葺 1	自然	土師器 (小皿、甗)	10世紀以降	
1382	O12 10	N - 113° W	長方形	3.78 × 2.96	3 ~ 6	平坦	一部	2	-	-	-	葺 1	自然	土師器 (小皿、甗)	10世紀以降	
1390	O10 12	N - 3° W	方 形	3.26 × 2.96	6 ~ 10	平坦	全周	1	-	-	-	葺 1	自然	須臾器 (埴輪、甗、甑)	9世紀前半	
1391	P10b 3	N - 5° W	方 形	3.96 × 3.88	-	平坦	[全周]	3	1	-	-	-	-	-	-	8世紀

表4 掘立柱建物跡一覽表

番号	位置	桁行方向	桁×梁 (間)	規模 (m)	面積 (㎡)	桁行柱間 (m)	梁行柱間 (m)	柱 穴 (cm)				出土遺物	備考 (時期)	
								構造	柱穴	平面形	柱径(軸) 縦径(軸)			深さ
90	Q10c0	N-86°-E	4×2	8.40 × 4.22	35.45	2.10	2.1	竪柱	8	隅丸長方形	70~108 62~(72)	38~66	土師器片, 須惠器片	9世紀
91	O1215	N-1°-W	[3×1]	7.20 × (2.40)	(17.20)	2.40	2.4	竪柱	6	円形・楕円形	103~127 82~110	30~70	土師器(甕), 須惠器(坏・甕)	9世紀前半
92	P10b5	N-90°	2×2	4.60 × 4.45	20.47	2.20	2.2	竪柱	8	円形・楕円形	53~68 45~60	11~27	土師器片, 須惠器片	中世
93	O1218	N-2°-E	4×3	7.65 × 5.25	40.16	1.80	1.80, 1.50	竪柱	14	隅丸方形	100~128 94~115	54~92	土師器(甕), 須惠器(甕), 須惠器(坏・甕), 鉄釘(鉄釘), 釘	9世紀前半
94	O10j2	N-2°-W	3×3	6.60 × 5.20	34.32	2.10	1.80	竪柱	15	隅丸方形	80~121 77~107	20~65	土師器(坏), 須惠器(甕)	9世紀中頃
95	O13j5	N-15°-W	4×2	8.77 × 4.25	37.27	2.40, 1.80	2.40, 1.80	竪柱	15	円形	70~113 65~106	23~60	土師器(小皿・坏・甕), 釘	10世紀前半
96	P13a2	N-75°-E	2×2	5.85 × 5.00	29.25	2.50, 3.30	2.5	竪柱	9	円形・隅丸方形	68~115 67~105	20~50	土師器(小皿・坏・甕)	10世紀後半
97	P12c6	N-0°	2×2	3.84 × 3.60	13.82	1.80	1.8	竪柱	8	円形・隅丸方形・隅丸長方形	62~80 45~52	22~40	土師器(坏)	8世紀前半
98	P12a0	N-4°-E	2×2	5.50 × 5.39	29.66	2.70	2.7	竪柱	9	円形・隅丸方形・隅丸長方形	45~100 40~95	50~78	須惠器(坏・甕)	8世紀中葉
99	P12c9	N-2°-E	3×2	7.70 × 5.26	40.5	2.40	2.4	竪柱	10	隅丸方形・隅丸長方形	93~130 70~105	19~44	須惠器(坏・甕・鉢)	8世紀中葉
111	O1312	N-78°-E	3×2	7.52 × 4.96	37.29	2.50	2.5	竪柱	10	円形・隅丸方形・隅丸長方形	48~90 45~78	30~57	鈍鋸, 刀子	10世紀前半
112	P13b1	N-74°-E	2×2	4.51 × 4.21	18.98	1.80, 2.40	1.80, 2.40	竪柱	9	円形・隅丸方形	62~163 70~94	30~38	土師器(坏)	10世紀前半
113	O12h5	N-3°-W	[2×2]	(5.30) × 3.93	(20.83)	2.50	2.2	竪柱	7	円形・楕円形	56~105 53~78	20~58	須惠器(坏)	8世紀中葉
114	P13a3	N-75°-E	2×2	5.60 × 5.00	28.00	2.50, 3.10	2.5	竪柱	9	円形・隅丸方形	67~97 63~90	18~60	土師器(碗), 管状土器	10世紀前半
115	P12c5	N-4°-W	[3×1]	7.30 × (2.65)	(19.34)	2.40, 2.10	2.4	竪柱	6	隅丸方形・隅丸長方形	100~132 94~105	28~58	須惠器(坏・甕・鉢)	9世紀前半
116	P12b6	N-4°-E	[2×1]	4.57 × (2.68)	(11.56)	2.40	2.4	竪柱	5	円形・楕円形・隅丸長方形	63~133 55~90	20~50	土師器(甕), 八咫鏡	8世紀前半
117	O12h0	N-5°-E	[3×2]	(5.85) × 5.50	(32.18)	2.10	2.7	竪柱	9	隅丸方形	109~133 103~125	50~93	須惠器(坏・甕・甕), 鉄釘	8世紀中葉
131	P12b8	N-75°-E	4×2	9.10 × 5.00 (距) 10.9 × 8.60	45.5 93.74	2.40	2.4	竪柱 三組設	27	円形	45~90 40~80	30~68	土師器(坏・碗・甕), 鉄釘	10世紀前半

表5 大形整穴状遺構一覽表

番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m) (長径 × 短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 (時期)
4	P10g5	N-28°-E	楕円形	3.54 × 3.16	65	外傾	平坦	人為	土師器(坏・甕・甕), 須惠器(坏・甕)	8世紀前半
5	P12i3	N-64°-W	円形	3.18 × 2.97	85	外傾	凹凸	人為	土師器(坏・甕・甕)	10世紀後半
6	P14a2	N-13°-W	円形	3.65 × 3.37	177	横斜	風状	人為	土師器(坏・甕・甕・甕), 須惠器(横鉢s), 鉄釘, 刀子	10世紀前半
7	P13d0	N-35°-W	円形	2.40 × 2.33	66	横斜	平坦	人為	土師器(坏・甕), 須惠器(坏・短頸甕), 鉢	8世紀前半

表6 方形整穴状遺構一覽表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長径 × 短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 (時期)
22	O11h3	N-15°-W	長方形	2.50 × 2.13	20~32	外傾	平坦	人為	青磁片, 鉄滓	中世前半
23	O11g1	N-4°-W	[方形]	3.21 × (1.72)	38~58	垂直	平坦	人為	棒状鉄製品, 釘s, 鉄滓	中世
24	O11j1	N-79°-E	方形	2.42 × 2.26	32~44	垂直	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 鉄滓, 炭化物	中世



表7 井戸跡一覽表

番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m) (長径 × 短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 (時期)
34	P11g3	N-58°-E	楕円形	[2.50] × [1.94]	[390]	外傾	[平坦]	人為	土師器 (筒・円筒形土師), 須惠器 (坏), 瓦輪等 (瓦板, 瓦葺)	10世紀前半
35	P10d6	N-76°-W	楕円形	1.56 × 1.17	[180]	外傾	[平坦]	人為		中世
36	P11f9	-	円形	2.80 × (1.91)	[248]	外傾	[平坦]	人為	土師器片 (輪), 須惠器片, 埴輪, 鉄洋	10世紀後半

表8 道路跡一覽表

番号	位置	方向	形状	規模 (m)			深さ	硬化面	覆土	出土遺物	備考 (時期)
				線延長 (17.53)	幅	溝深					
2	O10h4~O10j1	北~西	L字状		2.00~3.20	-	10~25	平坦	自然	常滑 (大甕), 管状土師, 鉄洋	中世
8	Q11c6~Q11b8	西~東	直線状	(10.00)	1.50~1.90	-	10	平坦	自然	陶器 (鉢・中皿), 刀子	近世以降
10	P10g4~P10g0	西~東	直線状	(48.00)	2.70~3.20	-	5~10	平坦	自然	土師質土師 (小皿), 鉄洋	中世

表9 溝跡一覽表

溝番号	位置	方向	形状	規模 (m)			壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 (時期)	
				線延長	上幅	下幅						
70	Q10b2~P13e5	西~東	直線状	(122.87)	0.16~1.40	0.08~0.48	7~42	外傾	U字状	自然	土師器片, 須惠器片	
71	Q11a9~P12i7	南西~北東	直線状	(32.52)	0.52~1.62	0.19~0.50	12~39	緩斜	U字状	自然	土師器片, 須惠器片	
72	O13i6~P15e7	北~南	直線状	(24.85)	0.42~0.70	0.14~0.42	18~30	緩斜	U字状	自然	土師器片, 須惠器片	
74	O13i7~P13e7	北~南	直線状	(24.85)	0.51~0.58	0.20~0.46	18~34	外傾	U字状	自然	土師器片, 須惠器片	
75	Q11b8~P12j4	西~東	直線状	(23.70)	0.32~0.48	0.12~0.22	22~90	外傾	U字状	自然	土師器片, 須惠器片	
76	Q11c7~P13e0	南西~北東	直線状	(90.00)	2.70~5.60	0.80~1.10	1.3~2.2	外傾	平坦	自然	土師器 (坏・甕), 須惠器 (平鉢), 須惠器 (長頸瓶)	8世紀
77	O10h9~O11h4	西~東	直線状	(25.00)	0.70~1.10	0.40~0.75	15~40	外傾	平坦	人為	土師器片	8世紀
78	O10i1~O10i3	西~東	直線状	(7.20)	0.38~1.11	0.13~0.68	11~	緩斜	U字状	自然	土師器片, 須惠器片	
79	P13b2~P13e0	南西~北東	直線状	(38.32)	0.50~1.53	0.18~0.44	80~88	外傾	U字状	自然	土師器片, 須惠器片	

表10 土坑一覽表

番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m) (長径 × 短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 (時期)
1100	P10j6	N-49°-E	楕円形	1.42 × 1.30	29	外傾	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	墓塚
1101	P10h6	-	円形	0.9	53~63	外傾	凹凸	人為	土師器 (坏・輪)	10世紀前半
1102	P10h7	N-29°-W	楕円形	1.18 × 1.13	10	緩斜	皿状	人為	土師器片, 須惠器片	
1103	Q10c9	N-3°-W	隅丸長方形	2.25 × 1.51	16~24	外傾	平坦	人為	須惠器 (長頸瓶・甕)	9世紀後半
1104	P10e0	N-17°-W	円形	0.82 × 0.78	58	外傾	皿状	人為	土師器 (坏・輪)	10世紀前半
1105	P11e1	N-85°-E	不整形	1.00 × 0.86	19	外傾	平坦	人為	土師器 (坏・筒・円筒形土師)	10世紀前半
1108	P10b9	-	円形	0.37 × 0.37	40	外傾	皿状	人為	土師器片	
1109	P11b4	N-20°-E	不定形	1.76 × 1.21	8~16	外傾	凹凸	人為	須惠器 (甕), 土馬	
1110	P11a4	N-30°-W	長方形	1.64 × 1.09	39	外傾	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	墓塚
1111	P10h8	N-8°-W	長方形	4.95 × 0.64	3~9	緩斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	
1112	P10f3	N-82°-E	[楕円形]	[1.96] × [1.06]	28~35	外傾	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	墓塚
1113	P10g3	N-3°-W	円形	1.05 × 1.01	45	外傾	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	墓塚
1114	P10g2	N-4°-W	[円形]	1.05 × (0.61)	39	外傾	平坦	人為		墓塚

番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m) (長径 × 短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 (時期)
1115	P10f3	N-77°-E	円形	1.24 × 1.16	58	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	墓域 ⊕
1116	P10g3	N-14°-W	楕円形	[2.06] × 1.23	37	-	平坦	-		墓域 ⊕
1117	P10g3	N-89°-W	楕丸長方形	1.00 × 0.74	52	外傾	平坦	-	土師器片, 須恵器片	墓域 ⊕
1118	P11a3	N-88°-W	楕円形	[0.98] × 0.76	16	外傾	平坦	人為		
1119	P11a3	N-1°-E	楕円形	0.85 × [0.54]	18	緩斜	蓋状	人為		
1121	P11b3	N-88°-E	不定形	0.79 × 0.47	19	外傾	平坦	人為	土師器片	墓域 ⊕
1122	O11g4	N-23°-W	楕丸方形	[1.02] × 0.75	19	外傾	平坦	人為		墓域 ⊕
1123	O11g4	N-33°-W	楕円形	1.17 × 0.95	19	外傾	平坦	自然		墓域 ⊕
1124	O11h2	N-84°-W	楕円形	(1.33) × 1.05	15	外傾	平坦	人為		墓域 ⊕
1125	O11h3	N-17°-E	楕円形	1.12 × (0.54)	14	外傾	平坦	人為		墓域 ⊕
1126	O11g3	N-13°-E	長楕円形	1.52 × 0.64	9	外傾	平坦	人為		墓域 ⊕
1127	O11h1	N-12°-W	楕円形	1.07 × 0.77	12	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	墓域 ⊕
1128	O11h2	N-27°-W	長方形	1.50 × 1.00	6	外傾	平坦	-		墓域 ⊕
1129	P10c7	N-3°-W	不定形	1.54 × 1.54	6~29	外傾	凹凸	人為	土師器片, 須恵器片	墓域 ⊕
1130	P10c7	N-77°-E	長方形	1.85 × 1.24	10	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	墓域 ⊕
1131	P10d7	N-11°-W	楕丸長方形	2.27 × 1.61	8	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	墓域 ⊕
1132	P10d8	N-74°-E	長方形	1.21 × 1.00	19	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	墓域 ⊕
1133	P10d9	N-2°-E	楕円形	1.58 × 1.27	22	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	墓域 ⊕
1134	P10d8	N-78°-E	楕円形	1.02 × 0.76	17	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	墓域 ⊕
1135	P10c8	N-18°-W	楕丸長方形	1.95 × 1.41	12	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	墓域 ⊕
1136	P10b7	N-12°-W	長方形	1.50 × 0.95	44	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	墓域 ⊕
1137	P10c6	N-18°-W	楕丸方形	1.87 × 1.66	15	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	墓域 ⊕
1138	P10c6	N-13°-W	楕丸長方形	1.79 × 1.22	15	外傾	平坦	人為	土師器片, 鉄滓	墓域 ⊕
1140	P10a3	N-4°-E	長方形	[4.88] × 0.80	16~32	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	
1141	O10j4	N-83°-E	長楕円形	3.48 × 0.42	8	緩斜	蓋状	自然		
1142	P10c6	-	[円形]	0.95 × [0.90]	10	外傾	凹凸	人為		墓域 ⊕
1143	P10c7	N-61°-E	楕円形	1.38 × 0.68	12	緩斜	凹凸	人為		
1144	P11c3	-	円形	1.26	50~65	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	墓域 ⊕
1145	P11c2	-	円形	1.45	57	垂直	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	墓域 ⊕
1146	P11d2	-	円形	1.03	18	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	墓域 ⊕
1147	P11d2	N-38°-E	楕円形	1.60 × 1.46	54	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	墓域 ⊕
1148	P11d1	-	円形	1.17	63	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	墓域 ⊕
1149	P11e2	-	円形	1.02	13	緩斜	凹凸	人為	土師器片, 須恵器片	
1150	P12f4	N-14°-W	楕円形	2.56 × 2.22	7~11	外傾	平坦	人為		
1152	P12h4	N-88°-W	楕円形	1.54 × 1.24	6	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片, 陶器片	
1154	P12g1	-	[円形]	[1.11] × 0.97	12	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	
1155	P12j3	N-85°-E	楕丸長方形	1.97 × 0.81	20~31	外傾	平坦	人為		
1156	P11g9	N-84°-E	[楕円形]	[1.16] × 0.94	20	垂直	平坦	人為		
1157	P11g8	-	[円形]	[0.70]	30~40	外傾	凹凸	人為	土師器片, 須恵器片	
1158	P12f4	-	円形	0.67	19	外傾	平坦	人為		
1159	P12f4	-	円形	0.47	27	外傾	平坦	自然	土師器(陶)	10世紀後半
1160	P12e3	N-22°-W	[楕円形]	1.05 × [0.81]	5~11	外傾	凹凸	人為		
1161	P12e3	N-76°-W	[楕円形]	[0.85] × [0.53]	18	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	
1162	P12f3	N-40°-W	楕円形	0.72 × 0.60	35	外傾	凹凸	人為		
1163	P12f2	N-42°-E	楕円形	0.72 × 0.59	33	外傾	平坦	人為		
1164	P12e3	-	[円形]	[0.66]	22~38	外傾	平坦	人為		
1165	P12f4	N-16°-W	楕円形	0.54 × 0.46	16	外傾	平坦	人為	土師器片	

番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m) (長径 × 短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 (時期)
1166	P12g2	N-12°-E	[楕円形]	0.72 × [0.48]	18~24	外傾	凸凹	人為		
1167	Q11a0	N-19°-E	楕円形	2.00 × 1.96	29~40	外傾	平坦	人為		
1168	P11h9	N-88°-W	隅丸方形	0.79 × 0.71	18~26	外傾	凸凹	人為		
1169	Q11b0	N-60°-W	隅丸方形	1.31 × 0.71	38	外傾	平坦	人為		
1170	Q12a1	N-62°-E	隅丸方形	0.89 × 0.51	19	外傾	凸凹	人為		
1171	Q12a1	-	円形	0.7	17~22	緩斜	凸凹	自然		
1172	Q12a1	-	円形	0.78	14	外傾	平坦	人為		
1173	P12b8	N-88°-E	長方形	2.65 × 0.62	44	垂直	平坦	人為		
1174	P12i9	N-88°-E	長方形	1.59 × 0.70	40	垂直	平坦	人為		
1175	P12i9	N-88°-E	長方形	1.44 × 0.81	32	外傾	皿状	人為		
1178	P12e7	N-16°-W	隅丸方形	2.41 × 2.02	25	外傾	平坦	人為	土師器(柄・小皿), 須惠器(葉), 門	10世紀以降
1181	P12a0	-	円形	0.89 × 0.81	40~52	外傾	平坦	人為		
1182	O13j2	N-0°	長方形	1.48 × 1.06	17~22	外傾	平坦	人為	土師器片	
1183	P12b6	N-12°-E	長方形	6.33 × 1.20	24~34	外傾	平坦	人為		
1186	O12i8	N°-°-W	長方形	2.92 × 0.58	85	垂直	平坦	-		
1202	O13j6	N-79°-W	隅丸方形	2.56 × 1.34	24	外傾	平坦	人為	土師器(杯)	10世紀以降
1203	P13c5	N-46°-E	不定形	1.32 × 1.28	7~17	緩斜	皿状	自然	土師器(小皿・柄), 甕状土師	10世紀後半
1204	P13e4	N-35°-W	楕円形	1.24 × 0.95	10~40	垂直	凸凹	人為	土師器片, 須惠器片, 鉄鏃	
1205	P13d4	N-16°-W	[楕円形]	1.60 × [1.35]	23	外傾	皿状	人為	土師器片, 須惠器片	
1206	P13d4	N-26°-W	不整形	1.29 × 1.25	10~26	外傾	凸凹	人為	土師器(小皿・柄)	10世紀後半
1207	P13g4	N-68°-E	楕円形	0.80 × 0.63	23	外傾	平坦	人為		
1208	P13a4	N-64°-W	[楕円形]	1.64 × [1.43]	25	外傾	平坦	人為	土師器(柄)	10世紀後半
1209	P13f2	N-19°-W	楕円形	1.14 × 1.10	30	外傾	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	
1210	P13f3	-	円形	0.85	57	外傾	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	
1211	P13g3	N-32°-E	楕円形	0.60 × 0.37	57	外傾	平坦	人為	土師器片	
1212	P13g3	N-75°-E	-	0.94 × (0.38)	15	緩斜	皿状	人為	土師器片	
1213	P13g4	-	円形	0.73	34	外傾	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	
1214	P13f5	N-4°-W	隅丸方形	0.62 × 0.50	76	外傾	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	
1215	P13f5	N-85°-W	隅丸方形	0.73 × 0.53	65~83	外傾	凸凹	人為	土師器片, 須惠器片	
1216	P13f5	N-62°-E	不要楕円形	0.62 × 0.47	63	外傾	平坦	人為		
1217	P13f6	-	[円形]	0.77	63	外傾	凸凹	人為	土師器片, 須惠器片	
1218	P13f5	N-88°-W	隅丸方形	1.00 × 0.87	65	垂直	平坦	人為		
1219	P13f4	N-15°-W	[隅丸形]	(0.50) × 0.37	29	外傾	皿状	人為		
1220	O12h5	N-9°-W	不定形	1.47 × 0.77	15~43	外傾	凸凹	人為	小刀	
1221	P13g3	N-26°-E	隅丸方形	0.90 × 0.63	27	外傾	平坦	人為	土師器片	
1222	P13d5	N-68°-E	不要楕円形	1.35 × 0.72	14	外傾	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	
1223	P13d4	N-72°-W	楕円形	0.80 × 0.65	25	外傾	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	
1224	P13d4	N-46°-E	楕円形	1.55 × 1.25	33	外傾	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	
1226	O13i7	N-2°-E	楕円形	1.13 × 0.91	34	外傾	平坦	人為		
1227	P12d5	N-69°-W	楕円形	1.13 × 1.07	30	外傾	平坦	人為		
1228	P13c2	-	円形	1.12	39	外傾	平坦	人為		
1229	P13c1	N-9°-W	隅丸方形	1.20 × 1.00	70	外傾	平坦	人為	土師器片, 須惠器片, 陶器片	
1230	P11e1	N-35°-E	楕円形	0.95 × 0.75	13	外傾	平坦	人為		基壇*
1231	P11f1	-	[円形]	0.85 × [0.80]	15	緩斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	基壇*
1232	P11d1	-	円形	0.72	10	外傾	平坦	人為		基壇*
1233	P10d0	-	円形	1.04	24	外傾	平坦	人為		基壇*
1234	P11b2	N-81°-E	楕円形	(1.02) × 0.80	13	外傾	平坦	-		基壇*

番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m) (長径 × 短径)	深さ (cm)	断面	底面	蓋土	出土遺物	備考 (時期)
1235	P11b2	N-77°-E	[楕円形]	(1.35) × 0.93	0~24	外傾	平坦	人為		墓塚*
1236	P11b3	N-13°-W	長楕円形	1.40 × 0.74	10	外傾	平坦	人為		墓塚*
1237	P11a2	N-11°-W	楕円形	1.06 × 0.95	43~56	外傾	凸凹	人為	土師器片	墓塚*
1238	O11j3	N-1°-E	隅丸方形	0.94 × 0.86	25	外傾	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	墓塚*
1239	P10e9	N-39°-W	楕円形	0.94 × 0.87	19	外傾	平坦	人為		
1240	P10e0	N-53°-W	[楕円形]	1.33 × [0.82]	10	外傾	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	
1241	P10h0	-	円形	1.26	20	外傾	平坦	人為	土師器片	墓塚*
1242	P10h0	N-3°-E	楕円形	1.20 × 0.96	20	外傾	平坦	人為	土師器片	墓塚*
1243	P11b2	N-7°-E	楕円形	0.92 × 0.55	14	外傾	平坦	人為	土師器片	
1244	P10i8	N-71°-W	楕円形	1.00 × 0.87	18	外傾	平坦	人為		墓塚*
1245	P10i8	N-67°-E	[楕円形]	1.03 × (0.57)	25	垂直	平坦	人為		墓塚*
1246	P10i8	N-3°-E	楕円形	0.91 × 0.77	17	外傾	平坦	人為	土師器 (坏)	11~12世紀
1247	P10i7	N-20°-E	楕円形	1.16 × 0.87	25	織斜	皿状	-		
1248	O11j3	N-86°-E	楕円形	1.39 × 0.72	35	外傾	平坦	人為		墓塚*
1249	P10i7	N-25°-E	楕円形	0.72 × 0.66	24	外傾	平坦	人為	須惠器片	
1285	P10i9	-	円形	0.53	32	外傾	平坦	人為		
1286	P10j9	N-82°-E	楕円形	0.91 × 0.73	15~26	織斜	凹凸	人為	土師器片, 須惠器片	
1287	P10h7	N-59°-W	楕円形	0.67 × 0.48	20	外傾	平坦	-		
1288	O11i2	-	円形	0.44	13	外傾	平坦	-	土師器 (坏)	11~12世紀
1289	O11j4	N-4°-W	[隅丸形]	1.17 × 1.06	25	外傾	平坦	人為	土師器片	墓塚*
1290	P11a1	N-2°-E	[長方形]	(1.71) × 0.53	6	織斜	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	
1291	P11a1	N-86°-E	隅丸方形	1.20 × 0.87	30	織斜	凹凸	人為		
1292	P11a1	N-12°-W	長方形	3.51 × 0.85	10	外傾	平坦	人為		
1293	O10j0	N-83°-W	[隅丸形]	1.09 × 0.83	10~15	外傾	平坦	人為		墓塚*
1294	O10i0	N-9°-E	長方形	1.60 × 0.80	5~14	外傾	平坦	人為	須惠器片	墓塚*
1295	O10h0	N-80°-W	長方形	1.93 × 0.90	26	外傾	平坦	人為	土師器片, 須惠器片	墓塚*
1296	O11i1	N-29°-E	長方形	1.32 × 0.92	16	外傾	平坦	人為		
1297	Q10d5	-	円形	1.06	14	外傾	平坦	人為		墓塚*
1298	P10b0	N-16°-W	楕円形	(1.76) × 1.33	8	織斜	平坦	人為	土師器片	墓塚*
1299	P11c1	N-34°-E	楕円形	(1.18) × 0.93	5	織斜	皿状	人為	土師器片, 須惠器片	墓塚*
1300	P10b0	N-3°-E	楕円形	1.29 × (0.94)	18	織斜	凹凸	人為	土師器片, 須惠器片	墓塚*
1301	P10b0	N-12°-W	[楕円形]	0.89 × [0.47]	20	織斜	凹凸	人為		墓塚*
1302	P10b0	N-22°-W	[楕円形]	0.98 × [0.60]	12	織斜	凹凸	人為		墓塚*
1303	P13a6	N-5°-E	隅丸方形	0.88 × 0.83	40	外傾	平坦	人為	土師器片	
1304	P13b6	-	円形	0.6	38	織斜	皿状	人為	土師器片, 須惠器片	
1305	O13j3	-	円形	0.74	43	外傾	皿状	人為	土師器片	
1306	P13a4	N-73°-E	[隅丸形]	1.07 × (0.76)	35~51	外傾	凸凹	人為	土師器片, 須惠器片	
1307	P12a8	N-46°-E	不整形	0.97 × 0.88	15	外傾	皿状	人為		
1308	P12a0	N-35°-E	円形	0.80 × 0.66	68	外傾	平坦	人為		
1309	P12b8	N-4°-E	円形	0.56 × 0.52	36	外傾	皿状	人為		
1310	P12b8	N-5°-E	楕円形	0.80 × 0.66	50	外傾	皿状	人為		
1311	P12a7	N-30°-W	楕円形	0.92 × 0.86	33	外傾	皿状	人為		
1312	P12c8	N-11°-E	楕円形	0.96 × 0.81	30	外傾	皿状	人為		
1313	P11g8	N-8°-W	円形	0.51 × 0.48	46	外傾	平坦	自然		
1314	P11h8	N-26°-W	楕円形	0.88 × 0.51	45	外傾	皿状	不明		
1315	O10i5	N-79°-W	楕円形	0.72 × 0.55	46	外傾	平坦	不明		

## 第4節 まとめ

### 1 はじめに

当遺跡の調査は、平成7年4月から平成12年3月までの5年間にわたって実施され、確認された遺構数は竪穴住居跡1,831軒、掘立柱建物跡121棟、土坑1260基など、膨大な数にのぼる。これまでの調査結果から、当遺跡は古墳時代前期から平安時代にかけての集落跡を中心とする複合遺跡であることが判明しており、当遺跡の北側に隣接する熊の山古墳群や関の台古墳群、律令期における常陸国河内郡嶋名郷との関連が指摘されている。

今回報告したのは当遺跡の南端に位置する調査10区の遺構と遺物であり、主な内訳は竪穴住居跡112軒（古墳時代後期23軒、奈良・平安時代89軒）、掘立柱建物跡18棟（奈良・平安時代17棟、中世1棟）、方形竪穴状遺構3基、大形竪穴状遺構（円形有段遺構）4基、井戸跡3基などである。

当調査区は、他の調査区のように古墳時代前期や中期の遺構が検出されておらず、さらに付け加えると、他の調査区で採取されている縄文土器片や弥生土器片もほとんど確認されていない。したがって、当遺跡の南端部は眼下に東谷田川を見下ろすという良好な立地条件にもかかわらず、古墳時代後期以降に開拓された後発的な区域といえる。また、律令期における集落の中心はこれまで遺跡の北部や西部と考えられてきたが、当調査区においても各時期ごとに大形住居跡1軒とそれに伴う掘立柱建物跡が確認されており、金付着灰砂陶器碗や銅製帯金具などの出土と相まって、当遺跡の南部にも有力者層の存在が窺われるところである。

このような調査10区の様相を踏まえながら、これまで報告されている熊の山遺跡全体の様相について若干の考察を加え、まとめたい。

### 2 熊の山遺跡の土器の変遷

熊の山遺跡から出土した土器の概要及び器種については、既に各遺構の項で述べており、ここでは、出土した土器を18期に分類し、その変遷を把握して、当遺跡の動向を知る基礎とした。

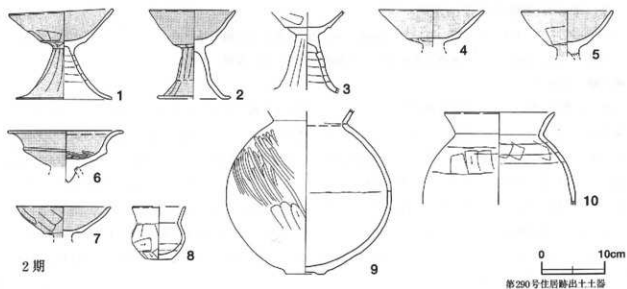
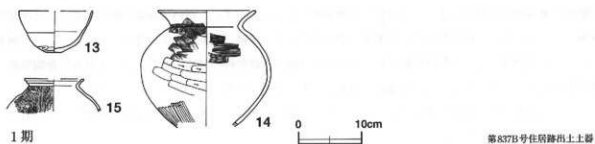
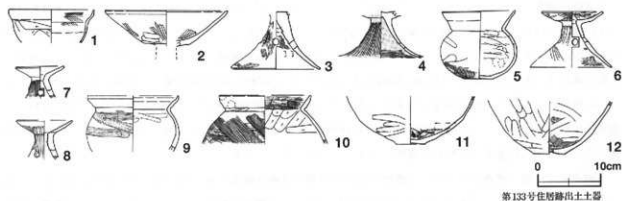
#### 第1期（第285図）

熊の山遺跡の集落としての出現期であり、第133・837B号住居跡の土器が該当する。高坏は2・3のような東海系のものや4のように裾部が大きくラップ状に開く濃尾系のもが見られる。器台は脚部が高い小形器台が主体であり、受け部は直線的に開く。この器種は13のような小形丸底増とセットになると思われるが、当遺跡からの小形丸底増の出土は少ない。壺は球形を呈し、頸部でくの字状に屈曲し、口縁部が外傾するものが主体である。体部外面をハケ目調整、内面をヘラナデによって調整するものがほとんどであり、なかには11・12のようにハケ目調整後にナデやヘラナデが施されるものや、10のように口縁部内面にハケ目調整が施されるものも認められる。また、15のような「S字壺」D類<sup>1)</sup>、該当住居以外では第152号住居跡から口縁部に刻み目を有する南武蔵系の壺が出土している。なお、甕は出土していない。

#### 第2期（第285図）

第1期とは時期が連続せず、第1期の集落が廃絶、ないし移転した後、時間的な空白が想定される。本期には第290号住居跡の土器が該当する。高坏は1・2のように坏部径と裾部径がほぼ同等で安定感があり、裾部がラップ状を呈するものであるが、前期のラップ状に開く高坏からの技術的系譜ではない。これらの土器の体部には赤彩が施されるものが多く<sup>2)</sup>、また、坏部に段を有する6のような高坏も少量ながら存在する。小形増は体部が算盤玉状を呈し、底部は8のように幅広い平底となる。この形態は古墳時代前期に系譜を求められるが、既に形骸化されており、出土量は少なく、本期以降消滅する。壺はやや縦長の球形を呈し、底部が突出

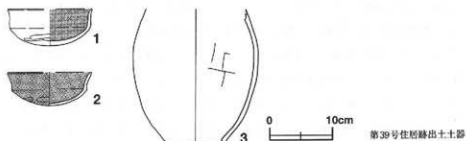
するものが主体であり（9）、調整技法はヘラ磨きとヘラ削りを併用するもの（9）やヘラナデが施されるもの（10）がある。



第285図 熊の山遺跡第1・2期の土器群

第3期（第286図）

第39号住居跡の土器が該当し、本期から甕を有するようになる。杯は丸底で、体部と口縁部の境に稜を有し、口縁部がわずかに外反するもの（1・2）で、いずれも赤彩されており、須恵器杯蓋を忠実に模倣したものと考えられる。甕は無底式で、変形を呈しており、口縁部は欠失しているが、外反するものと思われる（3）。

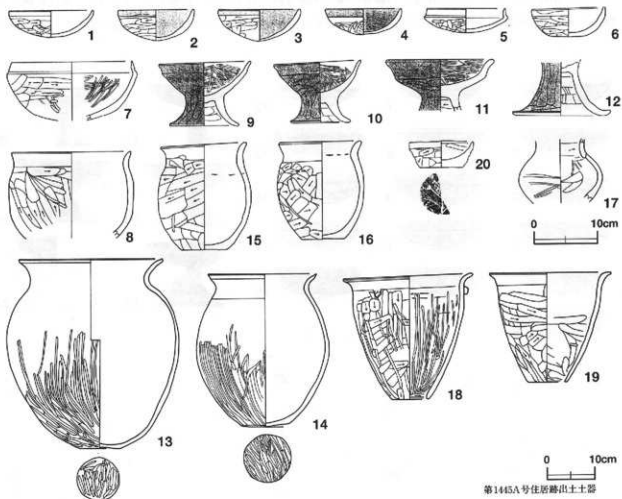


第286図 熊の山遺跡第3期の土器群

第39号住居跡出土土器

第4期（第287図）

集落が継続して形成されるようになる時期で、第1445A号住居跡の土器が該当する。杯は前の時期からの系譜を引く碗形で深みのあるもの（2～4）と、同じく碗形で体部の立ち上がりが緩く口径の広いもの（1）、及び須恵器模倣の杯（5）が混在するようになる。碗形には赤彩されたものが多く（2～4）、須恵器模倣の杯（5）は黒色処理されたものが主体である。須恵器模倣の杯はさらに杯身模倣と杯蓋模倣に分類され、該期の出土遺物全体の組成割合は碗形杯37%、杯身模倣杯19%、杯蓋模倣杯44%となり、杯蓋模倣の杯が主体となっている。技法は、体部外面にヘラ削りやヘラナデ、内面にナデや横ナデが施されるものを主体としている。



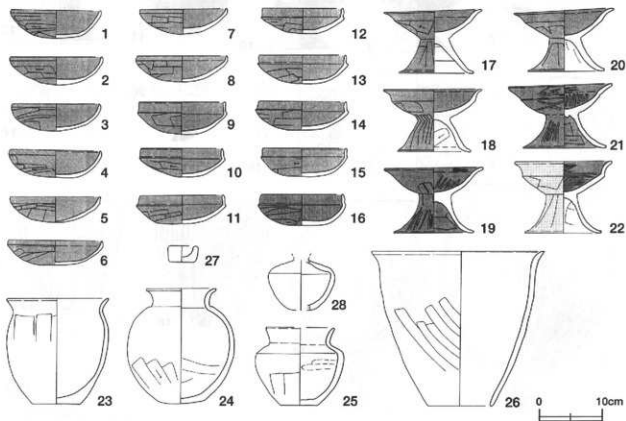
第287図 熊の山遺跡第4期の土器群

第1445A号住居跡出土土器

碗・鉢類は須恵器模倣の杯を大形にしたような、口縁部と体部の境に稜を有するもの(7)が多数を占める。技法は、体部外面は杯と同様ヘラ削りが施され、内面は放射状のヘラ磨きを主体とする。高杯は短脚化が進み、裾部がラッパ状に開く形態で、大形のもの(11・12)と小形のもの(9・10)の二法量に分かれる。技法は、杯部内面にヘラ磨きと黒色処理が施され、外面にはヘラ削りと赤彩が施される。甕はやや縦長の球形を呈し、体部下半にヘラ磨きが施されているもの(13・14)と、倒卵形を呈し、体部外面にヘラ削りが施されているもの(15・16)がある。甕は無底式で、体部と口縁部の境にくびれを持たず、体部からそのまま外反する砲弾型を呈するようになる。調整は、体部外面にヘラ削り、内面にヘラナデが施されるものが主体である(19)が、体部内面にヘラ磨きが施されるもの(18)もある。

第5期(第288・289図)

第281・718号住居跡の土器が該当する。本期は須恵器模倣形態の主体が杯蓋模倣から杯身模倣へと転換する時期であり、遺物全体の組成割合は碗形杯31%、杯身模倣杯46%、杯蓋模倣杯23%である。これらの杯のほとんどに黒色処理が施されており、その割合は97%を占める。計測値は、口径11.4~14.8cm、器高3.7~5.5cmであり、特に口径12.5~14.5cm、器高4.5~5.0cmに集中する。技法は、第4期同様、体部外面にヘラ削り、内面にナデや横ナデが施されたものが主流であるが、内面に放射状のヘラ磨きが施されたもの(39・43)も散見される。高杯は、大きな形態変化は認められず、杯部と脚部の器高がほぼ等しく、黒色処理されたものが主体となり、赤彩されたものはほとんど見られなくなる。碗・鉢類は形態がバラエティーに富み、細かな形態分類はここでは省略するが、いずれも体部と口縁部の境に明瞭な段を有する点が共通する(46・47)。甕は長胴化の傾向を示し、口縁端部の外方、あるいは上方へのつまみ出しが顕著となり、体部外面に施されたヘラ磨きが上

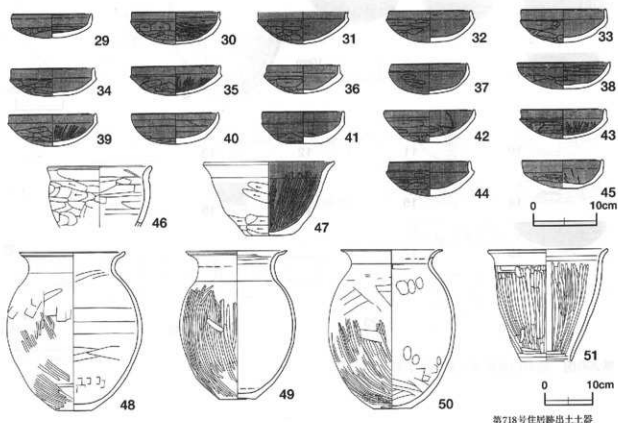


第288図 熊の山遺跡第5期の土器群(1)

第281号住居跡出土土器



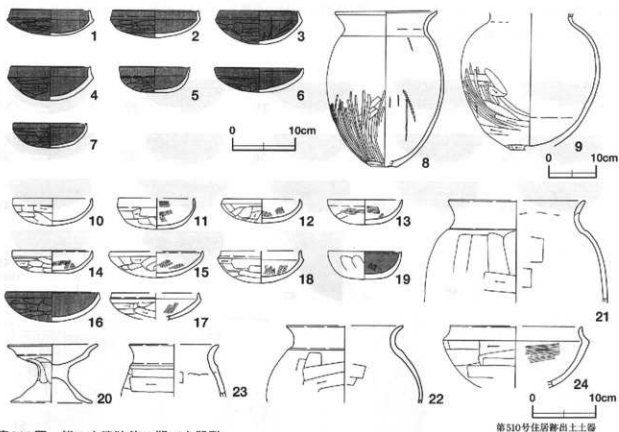
位にまで及ぶものも認められる(49・50)。甌は前期と同様の形態を示すが、体部がより直線的となる(26・51)。また、本期から須恵器が共存するようになる。



第289図 熊の山遺跡第5期の土器群(2)

#### 第6期(第290図)

第391・510号住居跡の土器が該当する。本期は大形化の傾向にあった杯が小形化、あるいは扁平化する時期である。杯全体の計測値は、口径10.9~14.8cm、器高3.4~5.4cmで、特に須恵器模倣杯は口径11.0~13.0cm、器高4.0~4.5cmに集中して小形化の傾向を示し、椀形杯は口径13.5~15.0cm、器高3.5~4.5cmに集中して扁平化の傾向を示している。また、黒色処理率は前期より減少するが、それでも73%と高い数値を示している。調整は第5期同様、体部外面にヘラ削り、内面に横ナデ・ナデ調整が施されているものが主流であり、放射状のヘラ磨きはほとんど見られなくなる。また、該当住居跡以外では、口縁端部内面に1条の沈線が巡る椀形杯も認められる。高杯は脚部がさらに外方に開き、杯部の口径と脚部の底径がほぼ等しくなってくる(20)。出土量は減少し、本期をもってほぼ消滅する。甌は前期に続いて長胴化の傾向にあり、体部上位にまで及んでいたヘラ磨きは、中位以下に限定されるようになる(8・9)。また、体部外面にヘラ削りが施される小振りな甌(23)も第4期から継続して認められる。甌は該当住居からは出土していないが、第4期の形態を継承しており、体部外面にヘラ磨きが施されるものの割合が増加する。また、本期から須恵器の共存事例が増加し、杯蓋・杯身・フラスコ形瓶・甌などの検出例が知られる。

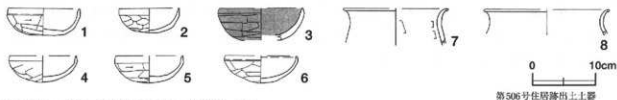


第290図 熊の山遺跡第6期の土器群

第510号住居跡出土土器

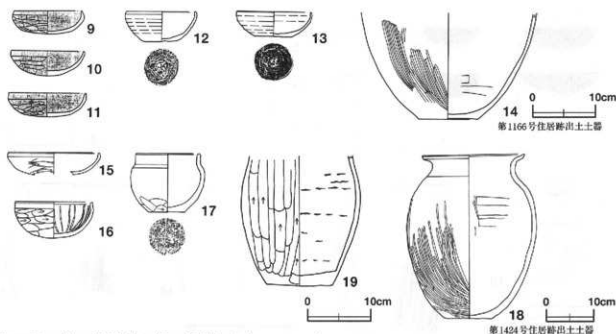
第7期 (第291・292図)

第506・1166・1424号住居跡の土器が該当する。大形の住居跡が減少し、集落の展開もやや停滞する時期である。杯は依然として須恵器模倣杯や碗形杯が通有となっているが、体部と口縁部の境の稜は不明瞭になり、分量の縮小化も明らかである。計測値は口径10.6～12.3cm、器高2.8～4.5cmであり、黒色処理が施される割合もほぼ半数まで減少する。さらに、本期には新たに半球形を呈する深みのある碗形杯が組成に加わり、放射状の暗文が施されたもの(16)も出現する。これは金属器内面の光沢を表現する技法と考えられ、新型杯の出現の背景には畿内の土器様式の影響を窺うことができるが<sup>3)</sup>、客体的な存在であり、主体とはなり得ない。碗・鉢類は出土数が減少して、分量も縮小するが、杯同様、有稜形態は保持する(17)。甕は第6期とほぼ同様に長胴化の傾向を示して、体部外面にヘラ磨きが施され、体部下半の膨らみが大きくなる、安定感のあるもの(14・18)と体部外面にヘラ削りが施されて、頸部のくびれの少ないもの(7・8・19)がある。また、須恵器杯は半球形で、杯蓋とも杯身とも判断しかねるもの(12・13)が出土しており、蓋と身が逆転する時期ともいえる。



第291図 熊の山遺跡第7期の土器群(1)

第506号住居跡出土土器



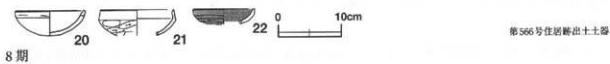
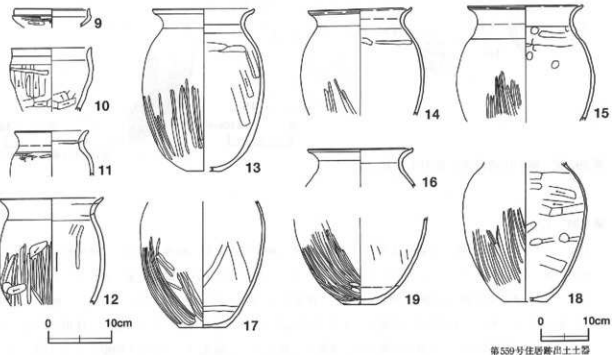
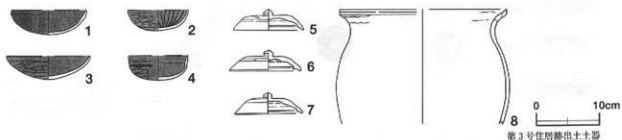
第292図 熊の山遺跡第7期の土器群(2)

#### 第8期(第293図)

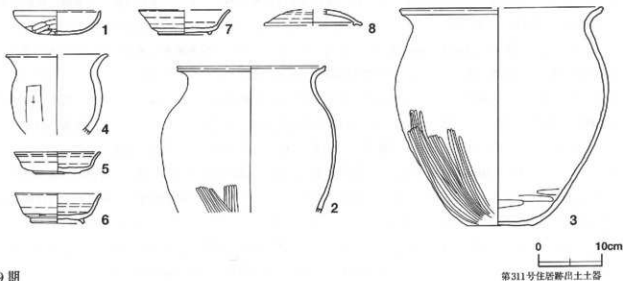
第3・559・566号住居跡の土器が該当する。杯は扁平な碗形と半球形の碗形が混在し、半球形のものは一層小形化が進む。半数近くのものにおお黒色処理されたものが残り、放射状の暗文が施されたものもわずかに見られる(2)。甕は引き続き長胴化の傾向を示し、体部下半の膨らみが大きくなるもの(13)の他に、肩がわずかに張るもの(18)や口縁端部に明瞭なつまみ上げが認められるもの(15)など、新たな様相をみることが出来る。また、体部外面にヘラ削りが施された小振りな甕はさらに頭部のくびれが不明瞭になる(10)。また、須恵器は杯身に受け部がなくなり、代わって杯蓋にかえりが付くようになる(5~7)。

#### 第9期(第293・294図)

再び、遺構数が増加する時期であり、第311・615号住居跡の土器が該当する。常陸における須恵器生産が開始されて間もない時期であり、土師器と須恵器の割合はほぼ同等である。また、本期以降、当遺跡に供給される須恵器は、甕類の一部を除いてほとんどが雲母を含む新治産のものである。土師器杯は碗形を呈するもの(1・11・12)と底部と口縁部の境に稜をもつもの(9・10)があり、黒色処理が施されたものも多く認められ、第8期までの特徴を残している。須恵器杯は扁平な丸底のもの(13・14)と平底(5)のものがあ、いずれも大・中・小に分量分化され、計測値は大形が口径15cm、中形12cm、小形10cmほどである。底部の調整には回転ヘラ削りと手持ちヘラ削りが認められ、口縁部内面に沈線が巡るものも見られる。須恵器蓋は退化したかえりを有し、天井部が高くなだらかに降下して口縁部に至るもの(8・16)と低く扁平なもの(15)が見られる。また、いずれも頂部には扁平なボタン状のつまみが付く。高台付杯は高台が低く、底部の外寄りに付くもので、高台径が大きい(6・7)。甕は土師器が主体であり、いわゆる「常総型甕」と呼ばれる口縁端部のつまみ上げ、体部下位のヘラ磨きを基本とし、肩が張る形態を示している(2・3)。須恵器甕は出土量が少ない上に破片が多く、全形を窺い知ることはできないが、体部外面に横位・斜位の平行叩きや同心円状の叩きが施されたものが主体である。甕も土師器が主体で、形態は前の時期から続く砲弾型を呈するものであり、須恵器製はほとんど見られない。

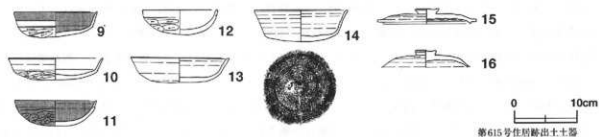


8期



9期

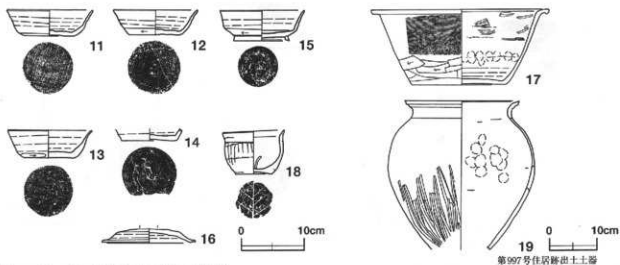
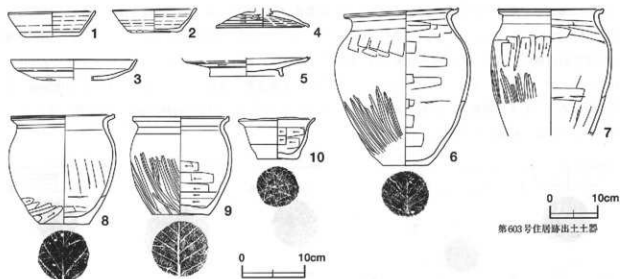
第293図 熊の山遺跡第8・9期の土器群



第294図 熊の山遺跡第9期の土器群

第10期 (295図)

掘立柱建物が増加し、官衙風の配置が見られるようになる時期で、第603・997号住居跡の土器が該当する。本期になると、土師器杯はほとんど見られなくなり、供膳具における須恵器への転換は急激といえる<sup>47</sup>。須恵器杯は平底だけとなり、体部が直線的に立ち上がり、大・小二つの法量となる。口径は、大形が14cm、小形が11cmほどであり、図示した杯はいずれも大形のものである(1・2・11~13)。調整は、体部下端に手持ち

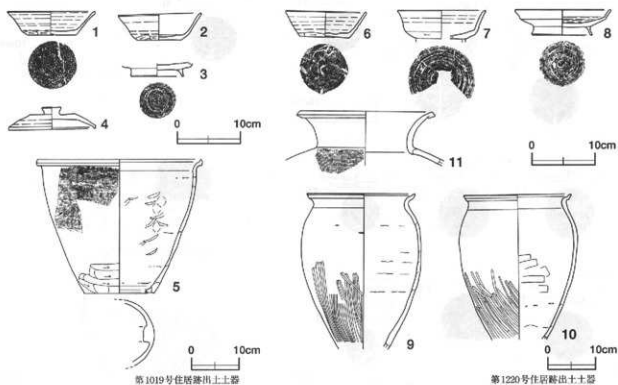


第295図 熊の山遺跡第10期の土器群

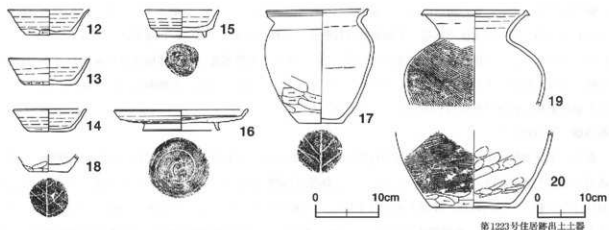
ヘラ削りが施されるものが主体となり、本期以降、この技法が定着する。須恵器高台付杯・蓋は、大・中・小の三法量が認められ、蓋はかえりが消滅し、口縁端部が屈曲し、短く垂下する形態となる(4)。また、この二器種は同様の法量分化を示していることから、セットになるものと思われる。甕は本期から器種構成に加わり、口径が20cm前後の大形で、高台が付くもの(5)と無台のもの(3)とがあり、後者は本期だけに見られる特異な形態である。土師器甕は前期に比べやや肩の張りが弱くなり、口縁部は大きく外方に開いて受け口状を呈する(6・7・19)。また、体部外面にヘラ削りが施される小振りな8のような甕も認められる。土師器甕は全ての時期を通じて安定して供給されるが、土師器甕は出土数が激減し、本期をもって器種構成から消滅する。須恵器甕は図示していないが、体部上位に最大径を持ち、肩が張る形態のものである。須恵器鉢は底部がなければ甕との区別が困難であるが、この段階では、鉢の方が器高は浅い。体部外面に横位・斜位の平行叩きが施され、口縁部で外側に屈曲し、水平面を持つものである(17)。

#### 第11期(第296・297図)

第1019・1220・1223号住居跡の土器が該当する。須恵器杯は、法量が口径13~14cm、底径9cm、器高3.5~4.5cmで、前期よりも底径が小さくなる。須恵器高台付杯・蓋は第10期同様、大・中・小の三法量に分化しており、蓋には天井部が平坦な笠形を呈するもの(4)も現れる。須恵器蓋は口径20cmほどの大形のもの(16)と、口径が15cmほどで深みのあるもの(8)がある。土師器甕は肩の張りが弱くなり、最大径も小さくなる(9・10)。体部外面にヘラ削りが施される小振りの甕も大形のものと同様の形態変化を示している(17)。須恵器甕は体部外面に横位・斜位の平行叩きが施され、口縁端部が下方に折り返されるもの(11)と上下につまみ出されるもの(19)がある。また、肩の張りが弱くなる点は、土師器甕と連動しているようである。須恵器甕・鉢類も口縁端部の形態や調整技法は甕と同様であり、甕の底部は中央部に円形、周囲に扇形の孔が開く5孔式で、図示した5も同じ形態と思われる。



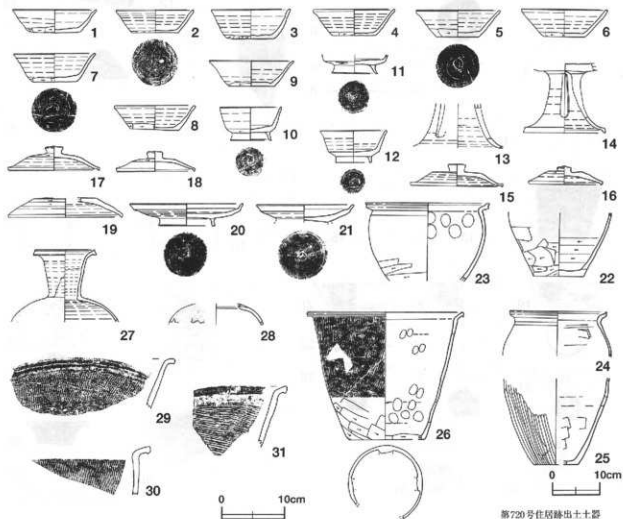
第296図 熊の山遺跡第11期の土器群(1)



第297図 熊の山遺跡第11期の土器群（2）

第12期（第298図）

本期から灰釉陶器が共伴するようになる時期で、第720号住居跡の土器が該当する。須恵器杯は口径14cm、底径8cm、器高5cmほどで第11期より底径が若干小さく、器高は反対に高くなり、体部下端の手持ちへラ削り

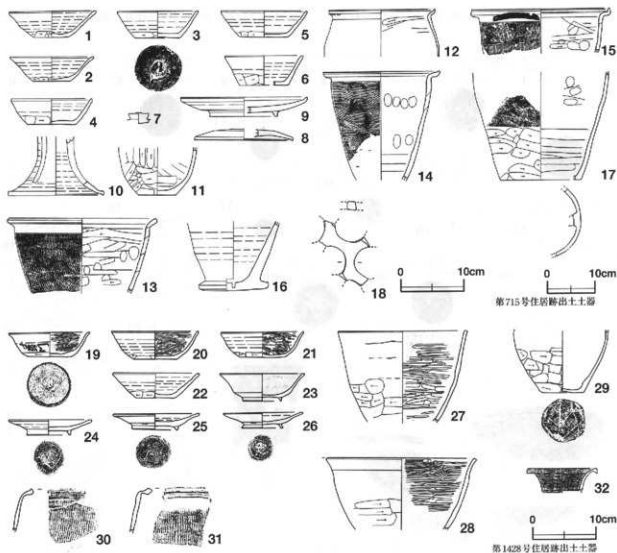


第298図 熊の山遺跡第12期の土器群

の幅が広くなる(5・8)傾向にある。須恵器高台付杯・蓋は大・中の2法量となり、蓋の天井部は笠形を呈するもの(15~19)が主体である。土師器甕は長胴化への移行が顕著であり、口縁端部は上方へつまみ上げられるようになり、やや間延びした印象を受ける(24)。また、須恵器甕・甔・鉢類は口縁端部のつまみ出しが明瞭になり、縦位の平行叩きが施されたものもみられるようになる(26)。灰釉陶器は長頸瓶が主体で、いずれも猿投産井ヶ谷78号窯式のものである(27・28)。

### 第13期(第299図)

新たに土師器杯、土師器・須恵器高台付皿が器種構成に加わる時期であり、第715・1428号住居跡の土器が該当する。土師器杯はログロ整形されるもので、体部は内彎気味に立ち上がり、口径と底径の差は小さい。内面にはヘラ磨き・黒色処理、体部下端には手持ちヘラ削り(20・21)、ないし回転ヘラ削り(19)が施され、前者が主体を占める<sup>5)</sup>。須恵器杯は口径13~14cm、底径6~7cm、器高4.5cmほどで、底径の縮小化がさらに進み、口縁端部が肥厚するものがある(1・2)。底部の調整は一方に一度だけヘラ削りが施されるものが多くなり、簡略化が認められる<sup>6)</sup>。須恵器高台付皿(24~26)や土師器高台付皿は出土量が少なく、客体的な存在である。土師器甕は第12期とはほぼ同様であり、須恵器甕・鉢・甔類は肩の張りがなくなり、上方へのつ



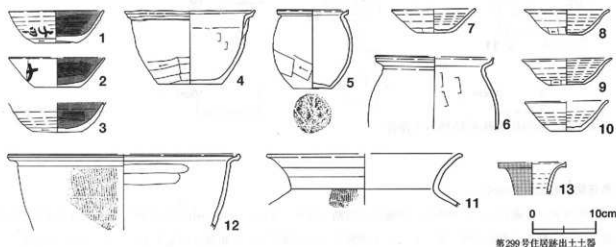
第299図 熊の山遺跡第13期の土器群



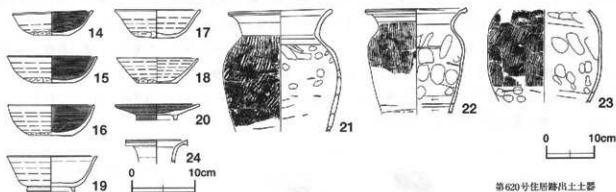
まみ上げが顕著なもの(15)が認められる。また、体部外面には縦位の平行叩きが施されるもの(15)や格子状の叩きが施されるもの(13)が多くなる。さらに、甔の底部は5孔式が維持されるが、孔は木の葉形を呈するものが多くなる(18)。灰釉陶器は長頸甔の他に高台付碗が相伴するようになり、猿投産黒甔14号窯式から黒甔90号窯式にかけてのものが見られる(32)。

#### 第14期(第300図)

供膳具における土師器の占める割合が増加し、須恵器の出土量を上回る時期で、第299・620号住居跡の土器が該当する。土師器杯は第13期とはほぼ同様であるが、体部の立ち上がりが前期よりもわずかに内彎するようになる(14~16)。須恵器杯はさらに底径が小さくなるもの(7~10)や体部がわずかに内彎するものなどが見られるようになり、焼成が悪く、灰黄色や橙色を呈するものが多くなる。甔・鉢類は依然として須恵器の比率が高く、口縁端部の上方向へのつまみ出しはさらに鋭くなり(12)、体部外面の叩きが省略されるものもみられる。灰釉陶器は前期と同様、猿投産黒甔90号窯式の長頸甔や高台付碗が主体である。



第299号住居跡出土土器



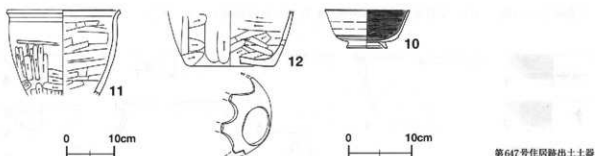
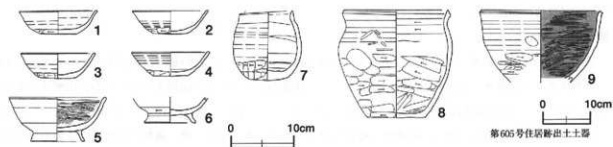
第620号住居跡出土土器

第300図 熊の山道跡第14期の土器群

#### 第15期(第301図)

供膳具から須恵器が消滅する時期であり、第605・647号住居跡の土器が該当する。供膳具は土師器杯と高台付碗が主体であり、高台付碗は体部が直線的に立ち上がるもの(10)と内彎して立ち上がるもの(5)がある。土師器甔は体部外面にヘラ削りが施され、口縁端部が上方につまみ上げられ、断面三角形を呈するようになる(8・11)。土師器甔は本期からみられるようになり、孔が木の葉形を呈する5孔式のものであり(12)、須恵

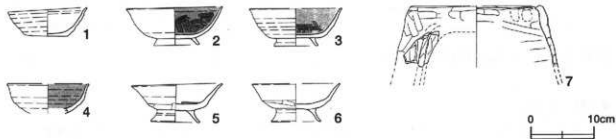
器からの技術的系譜を看取できる。なお、須恵器壺・甔は器種構成の中に残存するが、焼成の悪いものが多く、本期をもって消滅する。



第301図 熊の山遺跡第15期の土器群

#### 第16期 (第302・303図)

煮炊き具・貯蔵具からも須恵器が消滅する時期であり、第161・234・610号住居跡の土器が該当する。土師器杯はヘラ磨きや黒色処理が施されない未調整のものが多くなり、粗雑な印象を受け(1)、中には小皿との区別が付きにくいもの(20・21)もみられる。高台付碗は第15期と同様に体部内面にヘラ磨きと黒色処理が施され、前の時期と比べて高台が底部の内寄りに付く形態で、体部の影らみがより強調される(2・3・10~12)。また、本期から足高高台碗(5・6・22・23)や口径が10cm程度の小皿(16)が出現する。甔は前期からの系譜である口縁端部をつまみ上げるもの(17)と、新たに口縁端部を角張らせる形態のもの(25)が出現し、いずれも体部外面に輪痕み痕や指頭痕が残るなど、調整の雑なものが多い。また、当遺跡においてこれまでみられなかった置き甔が認められるようになる(7)。



第302図 熊の山遺跡第16期の土器群(1)